
Frosty Rain

A l l e n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F r o s t y R a i n

【Nコード】

N 8 1 1 1 V

【作者名】

A l l e n

【あらすじ】

2168年、未曾有の大災害、巨大隕石の飛来より15年。世界には、ルーン能力と呼ばれる異能が溢れていた。

能力を得た人や動物によって、まるで異世界のように混沌とした世界が、人の手により秩序を取り戻してからしばらく経ち——安定し始めたその場所で、一人の青年が己の道を歩き始める。

彼の名は、氷室涼二。死の世界の名を二つ名として持つ、最高位の能力者だった。

01-0:プロローグ

『生きる事は罪を重ねる事なのだ』——そう、誰かが言った。
何かの映画の一シーンで聞いたのかもしれないし、小説に書かれた
一文だったのかもしれない。

けれどそれは、決して作り話などではない。
全て事実であるからこそ、この世界は呪われたように救われないの
だ。

幸せを追い求めれば、誰かの幸せを奪う事になる。

何かを救おうとすれば、何かを切り捨てなければならなくなる。

だからこそ、赦せないのだ。

ただ、奪われてしまった。相手が何を護るつもりだったのかは知
らない。

その行為が、多くの人間を救う為だったのかもしれない。

けれど、赦せないのだ。

正義であろうと悪であろうと、奪われたものは戻りはしない。

故に、その行為が何であろうと関係ない。

ここから先、選り取る道が悉く悪と断じられようとも——決して、それを違える事は無い。

未来永劫、あの存在を赦しはしない。

故に——これは、罪科の物語だ。

悪と断じられようと、その先に待つものが破滅であろうと……この罪を抱えて、進み続ける。

*
*
*
*
*

ゆらゆらと、光が揺れる。

苔生し、緑に包まれたコンクリートの箱。

そこに映る網目状の輝きが、僅かに遮られる。

——水没都市、東京。

十五年前、全世界を未曾有の大災害が襲った。

難を逃れたのは世界中でもごく僅かな国々のみ。特に先進国では、大きな被害を免れたのは日本のみだった。

しかしその日本とて無傷とは行かず、唐突な海面上昇によって関東圏はほぼ水没してしまっていたのだ。

——たった一つの、隕石の影響で。

（たった一つ……か）

虚空を見上げ、一人の青年が胸中で一人ごちる。

黒いロングコート、青紫色のマフラー。秋口にしてはあまりにも重装備過ぎる装いだ、彼に暑がるような様子は欠片として存在していなかった。

彼は水没した都市——その水面を歩きながら、マフラーに隠した口元に小さく笑みを浮かべる。

そんな表情を見せつけるかのように、青みがかった黒髪が、ビルの谷間を吹き抜ける風に煽られた。

と——僅かに、水面が揺れる。

「……追いついてきたか、ガラム」

青年が視線を横に向ければ、その方向にある沈んだ瓦礫の上に、一つの影が生まれていた。

人にあらざるその姿は、黄金の毛並みを持つ狼。

しかしながら瞳に知性の光を宿すその獣は、青年へと視線を向けて小さく首を傾げて見せた。

そんな動作に、青年は小さく苦笑を漏らす。

「十五年前の事を考えていただけた。ここを通ると、いつも考えてしまってたな」

『……』

狼が、僅かに咎めるような視線を向ける。

そんな感情が分かっってしまう事に対して、青年は再び小さな苦笑を浮かべていた。

「分かってるよ。俺にとっても、アンタにとっても……笑い話じゃ、済まないからな」

——それはきっと、今を生きる全ての人間にとっての事だろう。胸中にそう浮かべ、青年は息を吐き出す。

あの隕石は、全てを変えてしまった。世界も、生態系も、そして人

々も。

それを最も近くで見てしまったからこそ、青年にはそれを笑い飛ばす事は出来なかった。

大切なものを、失ってしまったからこそ。

（否——）

——『失った』ではない。『奪われた』だ。

凍りついた心の中に、復讐の炎が揺れ踊る。

奪っていったのが、もしもただの災害だったのならば、まだ諦めもついただろう。

けれど事実は違う。現実はそうではない。

故に、彼にはそれが赦せなかった。

故に、彼は己の道を歩み出したのだ。

狼の視線が、青年を射抜く。

その視線を受け、彼は嘆息しながらもその感情を鎮めて行った。

「……悪い。少し、感情的になり過ぎ——」

言葉を告げようとした、その刹那。

二対四本の視線が、同時に進んできた道の方向——その先へと向けられる。

何かが見える訳でもなく、ただ沈んだビルと、反射する光の網があるだけだ。

けれど。

「……ガラム、先に行っていてくれ」
『……』

まるで、『大丈夫なのか？』とでも言いたげな様子で、狼は青年へと向けて首を傾げる。

その視線を受け止めながら、彼は小さく苦笑を漏らしていた。

「どうやら、俺にお客さんみたいだ。アンタは先に行つて、あいつと一緒に待機していてくれ。俺も後から追いつく」

『……』

「心配するな。ここは俺の領域だ……最悪でも、簡単に逃げられる」

青年の言葉を受け、しばし逡巡した様子を見せつつも、狼はコクリとその首を縦に振る。

そして、金の毛並みを持つ獣は強く瓦礫を蹴り、ビルの壁を駆け上って姿を消していった。

その姿を見送る事も無く、青年は静かに振り返り、そして小さく呟く。

「……I、L」
イサ ラグズ

その言葉と共に、僅かな光がコートの隙間から漏れ出した。

纏うコートが無ければ、彼の両肩が光を放った瞬間を確認する事が出来ただろう。

けれどその光には目もくれず、彼は懷から取り出した黒いバイザーを顔面に装着する。

そして右のこめかみの辺りにあるスイッチを押せば、バイザーの紅いラインが光を放つ。

彼の目には、周囲の光景が今まで以上に鮮明な映像となって映し出されていた。

——瞬間、バイザーに警告の文字と上向きの矢印が映る。

「はあああああああッ！」

そして次の瞬間、八本の剣が上空から彼へと向けて射出された。けれど青年は避ける素振りも見せず、その右手を上の方へ向ける。

空を裂き、岩を容易く貫くその鋭い切っ先。

少々小柄な青年の肉体など容易く食い破るその刃——しかし次の瞬間、それらは凍りついたかのように空中に静止していた。

そしてそれとほぼ同時、青年の正面に一人の少女が降り立つ。

彼女は青年の真上に静止した剣と同じ形状の一振りを彼に対して突きつけ、金色のツインテールを揺らしつつ大きく言い放つ。

「見つけましたよ、ニサルヘイム《氷獄》！」

「ユグドラシル……それも、ムスベルヘイムの連中か。一体どんな了見で、民間人に襲い掛かってきた訳だ？」

「ふざけないで下さい、裏切り者が！」

その叫びと共に、青年の頭上にあつた剣たちが碎け散る。
そしてその粒子はすぐさま少女の背後へと収束し、そこで再び剣として形成された。

八つの刃はまるで翼の如く四つずつ広がり、青年を正面から威嚇する。

「貴方のせいで、お姉様が……！ 貴方を捕らえ、連れ戻してやる！」

「……俺は一応、正式な手順を踏んで抜けてきたんだがな」

「黙れ……ッ！ 貴方の……貴様の所為でええええええ！」

少女は、青年へ向かつて跳躍する。九つの刃は、その鋭利な切っ先全てを彼へと向け、その身体を引き裂こうと迫る――

「――止まれ」

しかし、彼がそう呟いた瞬間――少女の体は、空中に縫い止められたかのように静止していた。

目を見開く彼女へと、青年は更に左の掌を向ける。

「沈め」

そして次の言葉が放たれると同時に、足元にある水面が波打ち、巨大な掌となって少女の体を掴み取った。
その衝撃に、彼女は目を見開く。

「これは、L……ごぼっ!？」
ラグズ

「俺の事を知ってるんだったら……せめて、対策ぐらいはして挑んでくるんだったな。悪いが、牙を向けられて容赦するつもりは無い」

水の掌は、少女の体を水面の下へ引き込もうと沈み始める――
刹那。

「――K!」
カン
「っ!」

上空から響いた声に、青年は舌打ちと共に後方へと跳躍する。
そしてそれとほぼ同時、彼が先ほどまで立っていた場所に、巨大な炎の弾丸が撃ち込まれた。
爆裂する弾丸と立ち昇る水蒸気に、後方へと着水した青年は、先ほどまでとは違い油断無く構える。
視線の先は、立ち昇る水蒸気によって覆い尽くされている……けれど、そこに在る確かな気配は、彼を警戒させるに足るだけの力を持っていたのだ。

――そして、蒸気が晴れる。
そこに立っていたのは、真紅の髪をなびかせる一人の少女だった。
その姿を見つめ、青年はマフラーの下で小さく笑みを浮かべる。

「……やはりお前か、レーヴァテイン《災いの枝》」
「っ、ニヴルヘイム《氷獄》……」

レーヴァテイン《災いの枝》と呼ばれた少女は、青年の姿を見つめて口惜しそうに顔を俯かせる。

伏せられた黒曜の瞳は、長い真紅の髪によって覆い隠されていた。十五年前の大災害以来、人にはある特殊な力が備わると同時、それに伴う肉体の変化が起こっていたのだ。

彼女の持つ真紅の髪も、そして青年の持つ青紫の瞳も――

剣の翼を持つ少女を抱えたレーヴァテイン《災いの枝》は、伏せていた顔を上げて真っ直ぐと青年の瞳を見つめる。

と……その腕の中にいた少女が、僅かに身じろぎした。

「おねえ、さま……」

「……意識があるなら帰還しなさい、ヴァルキユリア《戦乙女》。彼は、貴方に太刀打ちできるような存在じゃない」

「う……」

瓦礫の上に降ろされた少女――ヴァルキユリア《戦乙女》は、若干不満げな表情を浮かべながらも、レーヴァテイン《災いの枝》の言葉に従い後方へと退避して行く。

そしてその姿を追撃せずに見つめ、青年は小さく嘆息を漏らした。

「部下の教育がなってないな、《災いの枝》^{レーヴァテイン}」

「……私は、貴方のように上手く教える事は出来ないから……隊長」
「俺は退職したんだ。今はお前が隊長だろう、^{ひおり}緋織……いや、《災いの枝》^{レーヴァテイン}」

「涼二、私は……ッ！」

叫ぼうとした《災いの枝》^{レーヴァテイン}——緋織に対し、彼はバイザーとマフラーの下で小さく苦笑を浮かべていた。
《氷獄》^{ニサルヘイム}——涼二は、緋織の言葉を手で制し、そして彼女へと向けて声を上げる。

「戻って欲しい、と言われても俺には無理だ。俺はもう、お前達の敵になったんだからな」

「どうして……！」

「どうして、か」

涼二は、小さく苦笑する。

その表情を、必死に隠しながら。

——情を捨てきれない自分を、嘲笑いながら。

「理由はあるが道理は無い。そこに感情はあっても理性は無い。故に、説得しようとしても無駄だ、《災いの枝》^{レーヴァテイン}。力づくでなければ、俺は止まらないぞ」

「ッ……なら！^{ジユラ} J、^{カン} K、^{ティワズ} T！」

緋織の服の下、両脇腹と胸元の辺りが輝く。

彼女の周囲には炎が逆巻き、そしてその手の中には、一振りの長剣が姿を現した。

莫大な熱量を誇りながらも、本人にはまるで影響を与えない、その赤熱した炎の刃。

その熱を振り払うように剣を構え、感情を押し殺した表情で緋織は言い放つ。

「力づくで、貴方を連れ戻す！」

「それが正しい。が——」

涼二は、右手を横へと向ける。

水面から上がって来た大量の水は涼二の手の中で剣の形となり、そのまま凍て付いて氷の刃と化する。

それを構え、涼二はバイザーの下で小さく笑みを浮かべていた。

「状況判断が出来ていないな、緋織……もう一度、教育し直してやろう」

「ッ……涼二！」

どこか祈るような、泣きそうな声が響き渡る。その言葉に息を詰まらせつつも、涼二は己の心を押し殺し、駆けた。

歯を食いしばりつつも、炎の刃を構える緋織もまた、跳躍する。

そして黒と紅の影は、水没した都市の中、凍結と灼熱の衝撃を撒き散らした——

「はああああああッ！」

「ふ……ッ！」

裂帛の咆哮と、鋭い呼気。

それと共に放たれる真紅の火炎と純白の冷氣は、互いが互いの世界を喰い合うかのように周囲を蹂躪する。

凍結した周囲の水は炎によって即座に溶かされ、建物に張り付いていた植物達は燃え上がった次の瞬間には氷像と化していた。

しかしその中心地にいる二人に、ダメージを受けたような様子は欠片として存在しない。

二人は互いに互いの剣を弾き合い、同時に距離を開けた。

「大した火力だ。捕らえるつもりじゃなかったのか？」

「貴方なら……この程度、簡単に防げるだろう！」

言い放ち、緋織は刃を振るう。

それと共に放たれるのは、衝撃を纏う炎の奔流。

人体など容易く飲み込み、焼き尽くし、塵すらも残さないであろうその熱量。

それに対し、涼二はただ左の掌を向けただけだった。

が——それと共に、足元にあった膨大な量の水が、瀑布を逆再生するかのように巻き上げられる。

水が炎の渦を飲み込み、大量の水が一瞬で蒸発した事による大爆発すら更なる水の流れて飲み込んで、水流は天高く舞い上がる。

「思い切りがいいのは評価しよう。だが——」

上空に舞い上がった水が散り、水面へと雨のように降り注ぐ。

涼二はそれと共に、天へと向けて右手を掲げた。

その動作に、緋織ははっと目を見開く。

「水に溢れたこの場所は、俺の領域だ……相手の土俵で戦うなど、そう教えた筈だったが？」

「しま……ッ！」

「凍て付け——」
フロステイレイン
《氷雨》

涼二の右肩が、コートの下で強い輝きを放った。

そして次の瞬間、天から降り注ぐ水の雫に触れたものが、一斉に凍りつき始める。

ビルも、植物も、水面も……全てが凍て付き、周囲は一瞬にして氷の世界へと変貌してゆく。

——故に、
ニサルヘイム
《氷獄》。

「く、う……」

異界と化したこの場所で、それでも灼熱の炎を周囲に纏う事で何とか耐えていた緋織。

涼二は、その様子に容赦など見せず、彼女へとその刃の切っ先を向ける。

「ちゃんと、避けるよ？」

「——ッ！」

その声が響いた瞬間、緋織へ向けて巨大な氷の槌が振り下ろされた。

その一撃は凍て付いていた水面を砕き割り、周囲へと大量の水を巻き上げる。

間一髪躲した緋織も、その水までもを躲す事は出来なかった。

そして周囲の冷氣に、その身もまた凍て付き始める。

必死に剣の炎を纏って氷を溶かそうとしているが、その氷の侵食を止めるのが限度だった。

そんな彼女の姿を見据え、涼二は小さく嘆息を漏らす。

「お前は強いよ、緋織。ここ以外の場所で戦えば、俺も本気を出さざるを得ないほどにな。けれど、これが結果だ。

周囲の被害を考えれば、確かにここ以外に俺と戦えるような場所は無かっただろうが……まあ、しっかり準備をしなかったのがお前の敗因だ」

「くっ……涼二、どうして。私は、貴方と——」

「一緒に戦っていたかった、か？」

膝を着いた緋織は、近付いてきた涼二の姿を見上げる。

その首筋に覗く銀の鎖を見つめ、涼二は小さく嘆息していた。

「……俺も、お前の事は気に入っていた。けれど、お前を連れて行く事は出来なかったんだよ」

「どうして……？」

「お前は、あの場所以外での生き方を知らないからな……今の場所にいた方が、幸せだろうさ」

言って、涼二は踵を返す。

止めを刺さぬまま立ち去ろうとするその姿に、緋織は思わずその背中へと手を伸ばしていた。

「待て……待って、涼二！」

「……追ってくるな、緋織。そうすれば、俺はお前を殺さなくちゃならなくなる。先輩からの最後の餞別ぐらい、受けとっておけ」

涼二は力を解除しつつ言い放ち、そのまま真っ直ぐと水面を歩いて行った。

粉雪のように舞う冷氣は、白い霧となってその姿を覆い隠してゆく。消えてゆくその背中へと向けられていた掌は、ぱたりと地面に降ろされた。

「理由ぐらい……話してくれたって、いいじゃない」

凜と澄んでいた筈の表情が、くしゃりと歪む。

誰もいない、滅びた街の中——磨戸^{すりど}緋織は、それでもその慟哭の声を必死に抑え続けていた。

01-1：青年の日常

「……女々しいな、氷室涼二^{ひむろりょうじ}」

起き抜けの第一声に自身への皮肉と嘲笑を混ぜる。

そんな無意味な行為をする自分自身へと苦笑しながら、氷室涼二はゆっくりと身体を起こした。

あまり手入れはされていない、無造作に切られた黒い髪は、光の加減で僅かに青みを帯びる。

そしてそれを照らす窓の方へと、^{ひかり}彼はその青紫色の瞳を向けていた。

（……アレから数ヶ月、か）

昨晚に見た夢を、涼二は思い返す。

水没した都市、金色の狼、襲い掛かる《^{ヴァルキュリア}戦乙女》、そして——紅の少女。

炎を纏うその姿を脳裏に浮かべ、涼二は小さく苦笑を漏らす。

「元気にやってるのかどうか……ま、俺がいなくても上手くやるだろ」

強い光に細めていた視線は、明るさに慣れると共にゆっくりと広げられてゆく。

窓の外に見えるのはいくつもの建物——遠景に見えるクレーンは、建設中のマンションの物だ。

ここは、水没した関東圏の代わりに作られた人工島。

無論、まだまだ関東全域の避難住民を収容できるほど大きい訳ではないが、それでも現在の所、世界最大の人工島となっている。

この地へと移住を求める者はそれなりに多く、そのおかげで人口密度はかつての大都市東京すらも越えるほど。

結果、正式名称こそ新東京島だが、人々の間では『密都』などと呼ばれる事となっていた。

「……」

涼二の視線と思考は、そんなゆったりとした感覚から徐々に研ぎ澄まされてゆく。

その視界に入っているのは、窓の外、遠景に見える一際大きなビル。そこに刻まれた大樹の紋章を鋭く睨み、彼は小さく息を吐き出した。まるで、息を潜めて獲物を睨む肉食獣のように。

——『ユグドラシル』と言う名を持つ組織がある。

それは現在この日本で、大災害以前の政府と同じ働きをしている組織だ。

かつての大災害による被害は関東近辺に集中し、主要機関がそこに集中していた日本は、その当時機能が完全に麻痺した状態にあった。そして、更に追い打ちを掛けるかのように、特殊な才能を持った人間が次々と現れ、国内は混乱して行っただ。

そんな中設立されたのが、その『才能』を持つ者によって中核を成された組織、ユグドラシルだった。

才能の一つに、『求心力を高める力』と言うものがある。分かりやすく表現するならば、『カリスマ』だろう。その在り方は、混乱してゆく道を見失っていた人々にとって、替え難い光明となった筈だ。

そして、元々政府が持っていたあらゆる機関は統合され、その組織は新政府と呼べるものへと変貌してゆく。

そのような経緯を経て、最終的に出来上がったのが、今のユグドラシルだ。

「……下らない」

涼二は、そう吐き捨てる。

そこに込められた感情が並々ならぬ憎悪であると、分かる者ならば分かるだろう。

けれどその感情は誰にも読み取られる事無く、深々と吐き出した吐息の中に霧散した。

頭を掻き、涼二は嘆息する。

「朝飯でも作るか」

ベッドから降り、適当に着替えてから、正面にあるキッチンへと向かう。

涼二の住む部屋は小さなアパートだが、ここは総じて新築の多い密都に建つ建物。

彼が今住んでいるこの部屋は、半ばワンルームマンションのような機能性を持っていた。

しかし、既に慣れた涼二はそんな事は気にも留めず、フライパンに油を敷き、それを熱し始めながら冷蔵庫の中より材料を取り出してゆく。

（卵が安かったんだよね……まあ、あんまり置いておく訳にも行かんし、さっさと使っちゃおうか）

卵のパックを取り出し、ボウルを洗って中に割る。

——ガチャンと音が響き、勝手に部屋のドアが開いたのは、ちょうどそんな時の事だった。

涼二はその気配に眉根を寄せながらも、あまり警戒した様子は見せず嘆息する。

この部屋の鍵を持つ人間は、彼の他には殆どいない。そして、その僅かな例外は——

「おう、涼二、起きてるかー？」

「朝ごはんたかりに……もとい、食べに来たわよー」

「帰れバカ共」

部屋の中に入ってきたのは、一組の男女。

一人は赤と黒のジャケットを羽織り、大胆に胸元を開けたシャツを纏った茶髪の男——アウトローな雰囲気を出しつつも、どこか憎めない笑みを浮かべた青年。チョーカーと言うには物々しい首輪が印象的だ。

そしてもう一人は、赤茶色のショートヘアにこげ茶色の大きな瞳が映える少女——淡い暖色系の装いは、寒くなり始めた昨今でも明るさを失っていない。ただし、ウロボロスのブレスレットは合わないのではないか、と涼二は思う。

「双雅^{そうが}、桜花^{おうか}。お前らな、何で一々ここにたかりに来るんだ」

「いーじゃん、材料費は払ってるだろ？」

「おまけに、何か良い材料があったら持ち込んでるんだから。それに一人寂しく食べるより、皆で食べたほうが美味しいでしょ？」

上狼塚^{かみおいつか}双雅^{そうが}に、御津川^{みとがわ}桜花^{おうか}。

共に、涼二にとって『幼馴染』と呼べる人間だ。

そんな二人は涼二の威嚇をもともせず、片付けてあった大きめのテーブルを取り出してセッティングし始める。

物怖じしない二人の様子に嘆息し、涼二はトースターに突っ込む食パンの枚数を増やす事にした。

いくら卵を多く買ってあると言っても、こう毎日たかられてはすぐに消費してしまうだろう。

「つたく……」

長年の経験で、言っても無駄だと分かっている涼二は、深々と嘆息して二人への追及を切り上げた。

小さく肩を竦めつつ割る卵を三個に増やし、フライパンの中へと流し込む。

塩と胡椒で適当に味付けをしつつ、涼二は一度二人の方へと振り返った。

「パン乗せでいいか？」

「おうよ」

「涼二の料理なら何でもー」

「よし、グリーンピース増し増しで入れてやろう」

「やっぱ嘘、この外道！」

悲鳴を上げる桜花に苦笑し、とりあえずパッと茹でて使えそうな野菜を取り出してゆく。

とりあえず、ホウレンソウとブロッコリーを取り出しながらお湯を沸かしつつ、目玉焼きを作るフライパンに蓋をする。

「温野菜のサラダ、目玉焼きトースト……サラダに刻んだベーコンでも入れておくか。飲み物はどうする？」

「オレ牛乳」

「あたし紅茶ー」

「双雅、お前はまだでかくなるつもりか。俺への当て付けか」

「いや、お前がちっこいのは俺の所為じゃねえし？」

双雅の言葉に、涼二は思わず言葉を詰まらせる。

涼二の身長はギリギリ170cmに届かず、男性としては少々低めなのに対し、双雅の身長は190弱と言った所。

並ぶとその差が歴然となってしまうので、涼二はあまり双雅と並びたがらないのだ。

ちなみに、桜花も身長は160cm台なので、涼二と視線の高さは殆ど変わらない。

「まったく……まあいい。ほら、食器並べろ」

「うーい」

この部屋には、常にこの二人用の箸やマグカップが常備されていたりする。

今更と言えば今更なこの状況に、涼二は苦笑しつつも料理を進めて行った。

切った野菜を鍋の中に突っ込み、ちょうどいい感じに半熟に焼き上がった目玉焼きは三つに切り分け、一先ず皿の上に出しておく。

そしてトースターから出した食パンを並べ、余ったベーコンを乗せてから切り分けた目玉焼きを乗せる。

「後は味を調べて、と……よし、後は」

とりあえず完成した品をさらに乗せた涼二は、洗い物を流しの中に突っ込み、野菜が茹で上がるのを待った。

二つだけでは寂しいので、レタスとプチトマトを取り出して洗いつつ、彼は背後の二人へと問いかける。

「サラダのドレッシングはー？」

「和風ー」

「何言ってるのよ、胡麻ドレッシングでしょ」

「朝から高カロリーにずっと太るぞお、桜花あ」

「うっさいわね。あんたは縦に伸び過ぎなのよ！」

「……さっさと決めろよ」

じゃんけんを始める二人に嘆息しつつ、涼二は大きめの皿にレタスとプチトマトを並べてゆく。

そして茹で上がった野菜を冷ます頃には、二人の決着はついていた。6あいこの末、決定したのは和風ドレッシングである。

「朝っぱらから騒がしい連中だな、お前らは……隣に迷惑だから、あんまり騒ぐんじゃねえぞ？」

「はいはい、朝飯朝飯」

「ごめんなさーい」

「……桜花はまだいい。テメエはせめてポーズだけでも謝罪しろこのバカが」

料理を並べながら嘆息し、涼二もまた円形のテーブルに着く。そして飲み物を注ぎ、三人で同時に手をあわせ、頂きますと声を上げた。

未だに抜けない礼儀正しい習慣。共に孤児院で過ごしていた頃から

の癖に、涼二は小さく苦笑しつつ料理へと手を伸ばした。
その隣で、トーストに齧り付いていた桜花が顔を綻ばせる。

「んー、やっぱり涼二はお料理上手だねえ。こりゃ、あたしも負け
てられないわ」

「うむうむ。いい嫁さんになれるな、涼二は」

「殺すぞ双雅」

半眼と共に、涼二は近くに転がっていたテレビのリモコンを双雅
へと向けて投げつける。

しかし、相手はそれをあっさりと片手でキャッチし、テレビのスイ
ッチを入れた。

まるで堪えた様子の無い双雅に、涼二は嘆息交じりにテレビへと視
線を向ける。朝のニュース番組は、いつも変わり映えの無い内容ば
かりを放送していた。

と——そんなテレビを見ていた桜花が、突如として歓声を上げた。

「二人とも、あれあれ！」

「あん？」

「どうかしたのか、桜花？」

彼女が指差した方向へと、二人は視線を向ける。

テレビに映っているその画像は、最近密都に完成したばかりの大型
ショッピングモールの紹介だった。

ただでさえ土地面積が足りていないのに何をやっているんだ、と色
々言われていたが、結局『必要な品物が一箇所で揃えられる』と言

う利点から、多くの住民に受け入れられた次第である。

「……で、そのショッピングモールがどうかしたのか？」

「ほら、今日は二人とも暇でしょ？ あそこに遊びに行ってみようって事」

「あー、まあ暇って言えば暇だな。何か買いたいモンでもあんのかな？」

「別にー。ただ、久しぶりに三人で遊ぼうかなーって」

「遊ぶって……お前、一応まだスクール卒業してないだろ」

「今日は講義休みですー」

いー、と口を左右に広げながら言う桜花に、そんなものかと涼二は肩を竦めた。

そして一人であのショッピングモールの魅力をつらつらと語る桜花を他所に、彼は再びテレビの方へと視線を向けた。

ニュースは変わって、今は有名な製薬企業である静崎製薬しずきせいやくの新製品に関する話へと移っていた。

あまり興味がある内容というわけでもなく、涼二はトーストを齧りながらぼんやりとそれを眺め——隣から放たれた甲高い声に、唐突に現実へと引き戻された。

「で、涼二！ そっちは暇なの？」

「ん、ああ……とりあえず、予定は入って——」

いない、とそう言おうとした瞬間だった。

まるで図ったかのようなタイミングで、携帯電話が着信音を鳴らし

始めたのだ。

若干マイナー気味な曲をアレンジした着信音に気付いた双雅が、近くにあった携帯電話を涼二へと投げ渡す。

軽く礼を言いつつ受け取った涼二は、そのディスプレイに表示されていた名前に思わず顔をしかめていた。

小さく嘆息しつつ、通話ボタンを押す。

「……もしも——」

『はいはい！ 今日元気にモーニングコール！ 朝8時42分38秒をお知らせしま』

——反射的に通話停止ボタンを押し、携帯電話を放り捨てる。

己の行動に頷きつつ、涼二はサラダの方へと箸を伸ばした。

「……えーと、涼二？」

「ん、何だ？」

「今の……あー、えーと、何でもない。とにかく、今日は暇なんですよ？」

「ああ、まあ——」

暇ならいいんだがな、と彼が呟こうとした瞬間だった。

再び、携帯電話が同じ着信音を響かせ始めたのだ。

涼二はしばし無視しようかと悩み、相手がその程度で諦めるような人間ではなかった事を思い出して、深々と嘆息する。

そんな疲れた表情のまま携帯電話へと手を伸ばし、再び通話ボタンを押して耳へと押し当てた。

「……何の用だ、スリス」

『酷いなあ、涼二。ボク傷付いちゃうじゃないか』

「お前の図太さは重々承知だ。で、何の用だ？」

『はいはい、せっかちだなあ』

電話越しに聞こえてくる嘆息の音に、涼二は思わず頬が引き攣るのを感じたが——それを、何とか抑える。

相手の事は良く分かっているのだ、相手のペースに引き込まれれば泥沼にはまるだけだと、彼はよく理解していた。

そして相手が引かからない事に気付くと、電話越しの相手——スリスは、小さく笑い声を漏らしてから声を上げる。

『じゃ、本題だよ涼二。ボクらに依頼が入った』

「……相手は？」

『いつものじゃないね。匿名希望さんだけど、一応の信頼は置けそうな相手だよ』

「もう調べたのか。ご苦労だったな」

『えっへー、褒めて褒めてー』

耳に届く声に対し、涼二は小さく嘆息を吐き出した。

この相手は、あまり調子に乗らせると後で面倒になる事が分かっている。

「……で、仕事って訳か」

『うん、そうだね。詳しい内容は後で連絡するから、涼二はいつもの準備をしてくれないかな?』

「了解した。それじゃあ、また後でな」

『あ、ちよつといい?』

「ん、どうした?」

呼び止める声に、涼二は思わず首を傾げた。ここまで来て止められるような用事があったのだろうか。

と、一つだけ思い当たる事があり、涼二は再び頬を引き攣らせていた。

そんな涼二の様子を知ってか知らずか、スリスは少し恥ずかしがるような声音——いや、むしろ甘えるようなそれで声を上げる。

『次こっち来る時までには新作のエロゲを——』

「じゃ、またな」

『あ、ちよつと——』

電話を切断し、更に電源を落とした上でバッテリーを抜く。

そこまでしてから一息ついて、涼二はようやく耳を澄ませていた二人の方へと視線を向ける。

最近の携帯電話は外に声が漏れないように設計されている為、そんな事をした所で無駄なのだが。

二人としてそれは分かっているのだろうが、そこは人の逃れられぬ性と言った所だろう。

——涼二は、小さく息を吐き出した。

「……済まんな、桜花。仕事が入った」

「えー……って言いたい所だけど、まあ仕方ないか」

「つーかよお、涼二。オマエ、仕事って何やってんだ？ ユグドラシルは辞めたんだろお？」

「ああ……」

双雅の言葉に、涼二は窓の外へと視線を向ける。

そこに見えるユグドラシルの建物へと視線を向け、感慨に耽る――
―振りをしてながら、彼は必死で言い訳を考えていた。

今やっている仕事は、堂々と公言できるようなものではないからだ。
しばし悩みつつも、二人に怪しまれない程度の時間で視線を戻し、
涼二は無難――だと思われる――内容を回答する。

「……まあ、探偵みたいなもんだな。探偵の手伝いって言うか」

「ほー、今時そういう時代錯誤な仕事してる奴もいるんだなあ」

「そりゃいるでしょ。サイバースルーフとか、ネットワーク・ディ
テクティブとか……色々、需要はあるでしょ？」

「へえ、そりゃ知らなかった」

「……とにかく、そんな感じだ。つー訳で、悪いが今日は付き合えない」

軽く頭を下げる涼二の言葉に、桜花は苦笑を浮かべながら手をパ
タパタと振って見せた。

そこに、あまり執着と呼べるようなものは存在しない。

色々と遠慮の無い性格の人物ではあるが、あまりしつこくない、こ
のクラッとした在り方が周囲に人気なのだ。

共にスクールに通っていた時代に、よく性別問わず人に囲まれてい

た姿を思い出し、涼二は小さく苦笑した。
そんな口元を見せないようにする為に顔を俯かせていたのだが、どうやら桜花はそれを謝罪であると受け取ったようだ。

「別にいいってば。また今度だって大丈夫だし。まあ、開店セールやってる内には行きたいけどね」

「ああ、それまでには必ず時間を開ける。約束するさ」

「おっけー、約束だよ。破ったら部屋の中に蛇五匹ぐらい解き放つてやるからね」

(……これが無ければなあ)

色々と惜しい女だ、と涼二は胸中で嘆息する。

愛嬌もあり容姿も整っているの、あまり彼女を知らない人間には非常に人気があるのだが――その実、桜花は無類の爬虫類好きなのだ。

特に蛇の類を好んでおり、彼女は部屋にいくつもの飼育ケースを並べて、日夜蛇のど真ん中で過ごしている。

おかげか、深く知れば知るほど、付き合える友人は極少なくなってゆくと言う状況である。

桜花は涼二の一つ下の十八歳であるが、未だに部屋まで上がり込む事が出来た人物は、涼二と双雅のたった二人だけだった。

そんな輝かしい経歴を思い出しながら嘆息し、涼二は適当に料理を口の中に放り込んで立ち上がる。

「あれ、もう行くの？」

「ああ。急ぎって訳でもないが、あんまりゆっくりもしてられないからな。お前らと一緒にいると、ずるずると長居しちゃう」

「褒められてんのか貶されてんのか……ま、頑張って来いよお」
「おう。洗い物は流しで水に浸けとけよ」

互いにサムズアップで応え、涼二と双雅は同時に笑みを浮かべた。
遠慮の必要ない相手、日常の風景。
けれど——涼二が踏み込むのは、こことは完全に乖離した世界だ。

（さて、行くか——）

——そして、氷室涼二は《氷獄》ニサルヘイムへと姿を変えた。

01-2: 非日常への入り口

家を失った人々に新たな居住地を与える目的で作られた密都。

だが、それでも人々が住みたがらない地域というものは往々にして存在しているものである。

中でも、その傾向が最も強いのは島の一角、発電所がある地域だ。

「今更どうなるって訳でもないだろうが……ま、それも人の性って奴か」

人通りの少ないこの地域を歩きつつ、涼二は小さくそう呟く。

独り言になってしまいが、周囲に人の姿は存在しない為、それほど問題は無い行為となっていた。

この地域に人気が無い理由は、今まさに稼働している発電所の存在が原因となっている。

とは言うものの、この発電所が周囲に何か悪影響を与えている訳でもなければ、突如として爆発するような物質を扱っている訳でもない。

ここにあるのはただの——と形容するには流石に無理があるが——火力発電所である。

ならば何故、この場所が敬遠されるのか。それは、その炎を発する為に使っている燃料の為だ。

「……隕石を燃料に、か。燃えてるんだし使えるんだろうが、人間の発想ってのはいつもいつも感心させられるな」

十五年前に起こった未曾有の大災害。

それは、巨大隕石の飛来に端を発するものだった。その直径数百キロにも及ぶ小惑星は、元々地球から遠く離れた場所を通過すると思われていた。

しかし、それは突如として進行方向を変え、地球に激突する軌道を取ってしまったのだ。

ただし、軌道を変えた時点では十分な距離があり、対応する為の準備期間は十分に取れるものだった。

軌道を逸らし、降り注ぐのは大気圏に突入した時点で燃え尽きる程度の細かな隕石のみ——そうなる、筈だった。

——かの隕石が、『卵』のようなものでなければ。

「……」

沈黙しつつ、涼二は横目に見える発電所を見上げる。

この発電所の中で使われているのは、その隕石の中に詰まっていた大量の液体——と言うより、半固体——だった。

地球からの迎撃によって表面を砕き割られた隕石は、その可燃性の中身を地球へと大量に降り注がせたのだ。

隕石は白い炎を上げながら地表へと降り注ぎ、特に『高いエネルギーを持つ物体へと向かって行く』という性質をこの上なく生かして、地表を火の海に変えてしまった。

南極もまた例外ではなく、その結果の海面上昇となっている。

その隕石の中身——ゼリーのように粘性のあるそれらは、今までの地球にあった物質とは異なる性質を持っていた。

それは即ち、酸素以外の何らかの要素と結合して燃焼するという性質だ。

ほんの十年前まで、それが何なのかは解明されていなかったのだが

——

「俺達と同じ、か。何なんだろうな、あの隕石は」

己の肩を見下ろし、涼二はそう一人ごちる。

服の下にあるはずの、己の体に刻まれた紋章を透視するかのように。

——ルーン能力、と一般に呼ばれている異能。それが、涼二の体には刻まれていた。

先天後天などは関係無しに、隕石の飛来より人々の間に現れ始めた謎の異能。

炎を熾し、氷を操り、風を巻き起こす。まるで、物語に謳われている魔法のような力。

異能に目覚めたものは、皆体の何処かにルーン文字と酷似した痣が浮かび上がる事から、そう呼ばれている。

その力の発現は、国内に大きな混乱を巻き起こした——いや、混乱程度で済んだのだからまだいい方なのだろう。

被害の大きかった国々では、未だに暴行や略奪が横行しているのだから。

今日では、日本はルーン能力の制御とその管理にほぼ成功している……一般的に見れば、だが。

ともあれ、その力の研究は進み、そしてかの隕石の仕組みも解明されたのだ。

調査によれば、あの隕石の炎は、ルーン能力の発動と同様のプロセスで炎を発しているのだと言う。

そして水の中でも一定の勢いで燃え続けるその性質は、エネルギー不足に悩まされる事になった世界で、化石燃料を使わないクリーンなエネルギーとして注目されるようになった、という次第である。

（不気味がるのも当然と言えば当然……多少、神経質に見えるけどな）

隣を歩く人の姿に、今度は声を出す事無く、涼二はそう胸中で呟く。

発電所で使われているのは、かつて世界を滅ぼしかけた物体。

日本ではその被害が少なかった——正確には、落ちてくる場所が一点に集中した事で迎撃し易くなった為に、かの隕石への偏見は薄い傾向にはある。

が、それでも不気味なものは不気味なのだろう。近くに家を構える

人間は、殆どいないと言っている。

「……ま、おかげでこっちはやり易いんだが」

涼二は小さく肩を竦めながら呟き、人目を確認してから近くにある建設途中のまま放棄されたビルの中へと入り、その一角にある鉄製の扉の鍵を開けた。

その先にあるのは小さな部屋。置いてあるのは精々、三つ並んだロッカーと小さな棚程度しかない。

涼二はキーホルダーに付いた二つ目の鍵を持ち、そのロッカーの一番右側の扉を開けた。

——中に入っているのは、黒いロングコートとバイザーだ。

「さて、と……聞こえるか、スリス」

『はいはい。装備を回収できたみたいだね、涼二』

持ち上げたそれらへと声をかければ、バイザーの耳が当たる部分から、涼二にとっては聞き慣れた人物の声が響き渡った。

彼は嘆息しつつポリウムをコントロールし、それを装着しながら声を上げる。

その手つきに澱みはなく、非常に手馴れている事は傍目からでも明らかであろう——傍目など存在しないが。

「それで、今回はどんな話なんだ？」

『よくぞ聞いてくれましたー』

何やら嬉しそうなスリスの声に、涼二は思わず顔を顰める。

このような場合、一度として厄介事にならなかった事が無かったのだ。

そういう場合に回されてくる仕事は、大抵――

『今回の仕事は、とある人物の誘拐だよ』

――このような、真っ当では無いモノになる訳だ。

そう胸中で呟き、涼二は小さく溜め息を吐き出す。尤も、真っ当な仕事など普段から殆ど行っていないのだが。

バイザーに映し出される映像に、周囲に人間の存在は無いと表示される。

普通に声を出しても問題ないだろうと判断し、近くの棚の上に腰掛けつつ涼二は声を上げた。

「また、随分と思い切った依頼だな。依頼主の事は調べたのか？」

『向こうに気付かれない程度にはね。ちよつと変だったけど……』

「変？」

『そ。別にライバル企業って訳でもなく、関係者とかそういう類の所でもない……深く調べるのは危険だし、詮索しすぎるのもマナー違反だから止めておいたけど、ちよつと気になるかな』

そこまで調べた時点でアウトだろう、と涼二は考えていたが、そ

れを口に出す事はなかった。

スリスは優秀なのだし、ボロを出すような真似はしていないだろうと判断した為である。

それに涼二としても、ある程度の情報を得ておかなければ安心は出来ない。

少なくとも、背中から撃たれる危険があるかどうか程度は知っておきたかったのだ。

小さく肩を竦め、涼二は続ける。

「それで、相手はどういう風に接触してきた訳だ？」

『それも結構不可解なんだけど……おっちゃんの方に手紙を渡してきてね』

「……受け取ったのか、思慮深いあいつが」

『まあ、それだったら信頼できる相手とすぐに信じてよかったんだけど、第一声が『筋肉で通じ合った』だったから』

「あー、うん。分かった」

頬を引き攣らせ、涼二はその話を切り上げる。

スリスも同意見だったのか、苦笑じみた笑い声を漏らしつつも会話を進めた。

『まあとにかく、相手はおっちゃんの正体を知っている程度には情報収集の能力がある。結構大きい相手だよ。その分、味方に出来れば心強いと思うけど』

「だから今回は素直に請け負った訳か……了解した。それじゃあ、仕事の内容を説明してくれ」

話を促しつつ、涼二は部屋についている格子付きの窓の方を見上げた。

日は既に高く上っている。もう少しで昼時と言った所だろう。

誘拐を行うと言うのなら、恐らくは夜が結構になるか———そこまで思考をめぐらせ、涼二はスリスの言葉を待った。

やがて、少しだけ何かを操作するような音が響いた後、スピーカーから声が発せられる。

『……標的は、静崎製薬の社長である静崎義之よしゆきの一人娘、静崎雨音あまね』

『社長の娘を誘拐……身代金でも要求するのか？』

『さあね。ボクらの仕事は、彼女の誘拐と保護までだ。その先の事は依頼主さんが担当するでしょ』

スリスの言葉に、涼二は小さく頷いた。

それだけでいいというのなら、話は単純だ。相手を誘拐し、適当に世話をしておけばいいだけである。

その後の事は依頼主の方から連絡が来るのであろうし、とりあえず悩むような理由は存在しない。

あまり首を突っ込み過ぎても、厄介事に巻き込まれるだけなのだから。

涼二は、小さく息を吐きだす。

「……了解した。それで、詳細な内容は？」

『決行は今夜十時四十五分。場所は静崎製薬新東京社。静崎雨音が会社に来るのは今日ぐらいだから、今日が一番のチャンスだね』

「会社に来る……？ 一体、何の目的で？」

『さあね？　ボクに分かったのは、彼女が来る事だけだよ。何らかの研究の為みたいだけど……流石に、トップシークレットクラスの内容はセキュリティが厳しいね。

一応こっちで調べておくけど……分かってる事は、そっちのモニターに送っとくね』

「ああ、助かる」

スリスの言葉と共に、涼二が装着するバイザーの視界の一部に資料が表示される。

決行時刻、会社の場所、侵入経路から始まり、警備員の巡回経路やシフト、終いにはターゲットのプロファイルまで付いている。

しかし――

「……標的の写真は無いのか？」

『あー、どうも、普段は家の方に引きこもってるみたいでね。しかも写真がデータ化された気配も無い。この時代、一体どんな風に生活してるのやら……指紋とかはあるんだけどなあ。一応、ハッキングはまだ続けてみるけど』

「ああ、気付かれない程度に頼む」

『ふふーん。ボクを誰だと思ってるのさ。涼二の率いるグループの情報担当だよん？』

「ああ、そうだったな」

スリスの言葉に、涼二は小さく笑みを浮かべる。

グループと言ってもたった三人だがな、と言う苦笑と、それでも十二分に在る実力への信頼を込めて。

これが氷室涼二の非日常であり、彼の生きる世界。

「さてと……それじゃあ、下見に行ってくるとするか」

『はいはい。何かあったら連絡してねー』

「ああ、了解した」

『よっし。それじゃ……』『ニヴルヘイム』、出動だよ！』

己の二つ名であり、そして己が率いるグループの名前であるその単語を耳にし、涼二はバイザーを外しながら笑みを浮かべた。

そして荷物を脇に抱え、外へと向けて歩き出す。

絶対の自信が込められたその歩みは、澱み無く目的地へと進んで行った。

＊
＊
＊
＊
＊

「さて、と」

スリスの指定した道を通り、その状態を確認しつつ、涼二は静岡製薬の建物を見上げていた。

計画都市らしさの見える、歩道が広く取られているその入り口。

外は若干マジックミラーらしい曇りのついたガラスで覆われているため、全体的に黒っぽく見えている。

バイザーの入ったコートを小脇に抱えつつ、涼二はゆっくりとそちらへ向けて歩いて行った。

(……ふむ?)

横目でちらりと中を覗き見て、涼二は胸中で疑問符を浮かべる。入り口に立っている警備員の、隙の無い佇まいが気になったのだ。

(ただの警備員にしちゃ、ちょっと心得がありすぎるんじゃないのか、こいつは?)

どこかの警備会社に頼んでるって言うより、個人的に雇ってるような奴か……?)

とりあえず、気取られない内に視線を外し、涼二は小さく息を吐きだした。

そのまま入り口の正面を横切り、真っ直ぐと歩き抜けて行く――警備員は、その姿に警戒した様子を浮かべるような事は無かった。とりあえず安堵し、涼二はそのまま左へと曲がって会社の建物の後ろへと回ってゆく。

（……しかし、警備に堅気じゃない人間を使ってるとはな）

スリスから受け取った資料の中に、この会社で行われている実験の資料が一部混じっていた。

研究されているのは、ルーン能力の出力を抑える薬について。ルーン能力は抑える事が非常に難しい為、刑務所などではかなり気を使っている。

その為、このような物が研究されているという事に関してはそこまです疑問と言う訳ではない。

だが――

（それと、社長の娘が繋がらない。一体どういう事だ？）

今回の侵入経路となる裏口の方へと歩いてゆく。

涼二の思考を占めているのは、件の標的に関しての事だ。

普段は家から出てこないと言うその娘を、わざわざ研究所であるこの会社に連れてくる理由とはなんなのだろうか、と。

（娘にその手の知識がある？ それとも、娘に強力な能力があって、それを抑える為か？）

疑問を反芻しながら、涼二は横目で裏口を確認する。
こちらは表よりも人数が少ないとはいえ、ちゃんと見張りは存在していた。

（依頼主が狙っているのは金か、それとも技術か……静崎雨音の処遇に関しては、その狙い次第って所だな。
まあ……あまり詮索するのも為にならんし、その辺りはあまり考えないようにしておくか）

思考を切り上げ、涼二はそのまま車道を渡って道路の反対側へと通り抜けた。

そのままぐるっと回っては、妙に疑われてしまう可能性もある為だ。
なので、多少遠回りしながら、警備員の目に背景の一部となるようにしつつ涼二は歩いてゆく。

そして再び横断歩道を渡って静崎製菓の横を進み、元いた場所へと戻って行った。

（……とりあえず、問題は無いな）

障害になりそうな物が存在しない事を確認した涼二は、夜まで待機する為、スリスが指定した待機場所へと進んで行こうと――

「……ん？」

——した瞬間、その目に会社の前に止まるリムジンの姿が目に入った。

昔ながらの黒い高級車に興味を引かれ、涼二はそちらの方へと振り返る。

車体の長いあの車は運転し辛くないのか……などと益体も無い事を考えつつ、涼二は小さく肩を竦めていた。

そして、もう一つ考えていた事は——

「しまったな、ターゲットがこの時間に現れるんだったら、ここで誘拐した方が——いや、それはリスクが高すぎるか」

確実に姿を見られる事と、警備の多い会社内へ進入する事。

どちらがリスクが高いかと聞かれれば、涼二としてはしばし悩まざるを得ない。が、スリスの腕を考えれば後者の方がいいと判断し、とりあえずターゲットの姿を確認しておこうと視線を向ける。

リムジンから現れる、一人の少女の姿を。

「え——」

青みがかった光沢を持つ真っ直ぐな黒髪。憂いを感じているかのように伏せられている青紫色の瞳。

その全身を包むのは、最早旧時代の遺物と言う認識すらある藍色の着物。

白い手袋を嵌めたその手で、エスコートする護衛らしき人物の手を

拒み、彼女はゆっくりと車から姿を現していた。

スリスから渡された資料の生年月日から考えれば、特徴は一致する。しかしそれでも、涼二はその驚愕を抑える事が出来ていなかった。何故なら――

「……姉、さん？」

――その姿は、かつて十五年前に喪った姉の姿に瓜二つだったからだ。

涼二を庇い命を落とした姉、氷室静奈と……まるで、生き写しであるかのように。

そんな彼女の視線が――涼二の瞳を、捉えた。

「――っ!？」

偶然、だろう。静崎雨音と思われる少女の視線は涼二の瞳からすぐさま外され、彼女は会社の中へと入ってゆく。

しかし、その姿が完全に消え去るまで、涼二は指一本として動かす事も出来ないまま、呆然とその場に立ち尽くしていたのだった。

01-3..潜入する黒い影

『さてと……それじゃ、作戦開始だよ』

スリスによって指定された経路を通り、一旦小さな路地の物陰に身を潜めていた涼二は、その言葉と共に立ち上がった。

時刻は午後十時四十四分。あと少しで、裏口の警備が交代する時間である。

彼の装着するバイザーの視界に映るのは、自分の現在位置と建物内
の見取り図。

そして、オレンジ色のマップの中で動く赤い点は警備員の動きだ。

（相変わらず、いい仕事をする）

完璧な調査内容に感嘆する。

尤も、口に出せば調子に乗るので、涼二は胸中でそう呟くのみに留

めたが。

小さく息を吐き出し、彼は視界に映る赤い点が動き出すのを静かに待つ。

そして、四十五分――

『OK、行って！』

「ああ」

スリスの言葉と共に、涼二は強く地を蹴った。

スリスは既に静崎製菓の警備コンピュータにクラッキングを行い、監視映像のループや一部機能の停止などの準備をしている。

そして今現在行っているのは、警備員詰め所に置かれている時計の時間をずらす事だ。

それにより、交代の時間になっても新しい警備の人間が現れず、通信機も何故か上手く作動しない事を不審に思った警備員は、詰め所の方へと一旦戻る。

『よしよし、いいタイミング！』

警備員が詰め所の方へと入っていった瞬間を狙い、涼二は建物内へと侵入する。

内部は白を基調とした病院のような内装となっている。

この装備では返って目立ってしまうか、と涼二は少々後悔を覚えていたが、最早そんな事を気にしている余裕は無い。

現在の警備員の位置関係を把握し、彼は静かにルーンを発動させた。

「―――I^{イサ}」

そして、その言葉と共にスライディング。

足元を凍結させた涼二は、文字通り滑るように廊下を進んで行った。小回りには欠けるが、これは足音を立てず労力も使わず移動する方法として、氷を操るI^{イサ}のルーン能力者からは愛用されている移動法である。

このフロア内で動いている赤い点は、全て涼二のいる場所から離れた位置に存在している。

一回部分にはセンサーの類は存在しておらず、監視映像もスリスが処理している為、涼二はほぼ自由に活動する事ができた。

バイザー上のマップには進むべき進行ルートが緑の線で表示されており、進む方向に迷う事は無い。

『涼二、進めば分かると思うけど、その方向に貨物用エレベーターがある』

「まさか、エレベーターを使うなどと言わないだろうな？」

『出来なくはないけど、でもそれよりは、涼二が自力で上った方が安全だよ。涼二が着いたら扉を開けるから、エレベーターの中からその上に登って』

「了解した」

スリスの言葉に従い、白い廊下を滑りながら進んでゆく。

巡回する警備員とは必ず角を二つ以上離すようにしながら慎重に進んで行くが、その動きに一切の澁みは存在していない。

その迷いの無さは、スリスへの信頼の現われ——故にスリスも、それに応えているのだ。

『涼二、ちょっとストップ』

「……」

スリスの言葉に従い、涼二は一度足を止める。

マップに映る赤い点、近くの通路を動くそれは、人間とはどこか異なる動きで道を進んでいるようだ。

直接その姿を見ることは出来ないが、そこに何がいるのか、二人にはすぐにその正体を察知する事が出来た。

「警備ロボットか」

『嫌だねえ、最新式だよ。ちょっと待ってて』

それと共に、カタカタとキーボードを叩く音がスピーカーから聞こえてくる。

スリスは空間投影型のデバイスを好まず、アナログなキーボードを使う傾向にあるので、時折こういったものが聞こえてくるのだ。

無論の事、外部から警備ロボットのシステムに侵入するなど、常人には不可能な芸当である。

だが、スリスに限っては、その『常人』の枠から大きく外れた場所に存在していると言えるだろう。

何故なら、スリスはルーン能力を使って電子機器やそのシステムに干渉しているからだ。

『H、A、Pと……』
ハガラス アンサズ パース

ハガラス Hは嵐を司るルーンであり、雷や風を操る、最も強力なルーン。
アンサズ Aは自身の脳の処理能力、特に情報処理や情報収集に長けたルーンである。

また、秘密を表すPパースのルーンは、隠された物事を探し当てる能力を使い手に与える。
故にスリスの前では、いかなる電子機器も鍵の開いた扉に等しいのだ。

『はいオッケ、ちょっと止まってもらったよ。今の内今の内』
「ああ、ありがとうな」

数秒間だけ動きを止めた警備ロボットが角から出てくる前に、涼二は通路を駆け抜ける。
その先にあるのは、先ほどスリスが告げてきた貨物用エレベータだ。再び地面に氷を作りながら滑りぬける涼二の視線の先で、エレベータは勝手にその扉を開けてゆく。
スリスの能力による干渉だろう。

「ナイスタイミング」
『勿論ですとも!』

涼二が滑り込むと同時に扉は閉まるが、しかしエレベータが動き

出す気配は無い。

誰かが操作した訳では無い為、今はただ待機している状態に過ぎない。

エレベータ内の監視カメラもしっかりとループしている為、涼二はそこまで来てようやく一息ついていた。

が——生憎と、潜入はまだ始まったばかりなのだ。

「上に移動する」

『了解、気をつけて』

エレベータ内にある手すりに足を乗せ、天井についている四角い蓋のような扉を開ける。

そこに両手を着いて体をエレベータの上へと持ち上げ、蓋を閉めつつ涼二は上を見上げた。

暗視、望遠機能のついたバイザーには、高層ビルの頂上部分までがしっかりと見えている。

『目的地は四十三階。マークをつけていると思うけど、見えるかな？』

「ああ」

涼二の視界には、標的となる場所が四角くズームアップして表示されている。

その位置を確認し、涼二は左手を頭上——このエレベータの続く最上階へと向けた。

コートの下で、左肩が光を放つ。

「―――^{ラグズ}L」

^{ラグズ}Lは水と靈感を司るルーンであり、水を発生させて自由自在に操る力を持っている。

涼二は発生した水を長くロープのように伸ばし、それを最上部にある鉄骨へと巻き付けた。

そして水を操り、その長さを制御すれば―――涼二の体は、勢いよく上空へと登ってゆく。

『戦闘向けの能力なのに、使おうだねえ』

「お前だって、^{ハガラス}Hは本来戦闘用だろう。お前みたいな奇特的な使い方をしている方が珍しい」

電気信号を操り、自らの身体を電子機器と接続するなどと言う誰も想定していないであろう能力の使い方は、細かな制御の可能なスリスだからこそ出来る芸当だ。

―――そこまで考え、涼二は思考を止める。

それ以上は、お互い不愉快な過去を思い出すことになるからだ。

バイザー内に映し出されたズーム画面と、通常の視界が徐々に重なってゆく。

目的の四十三階が近付き、涼二は水を縮める速度を落とした。

緩やかな速度へと変えつつ近場にあった梯子を掴み、涼二は目的の階へと到着する。

バイザーに表示されたマップに、近くを巡回する警備員の姿は無い。

『……気を付けてよ、涼二。正直、この階層のセキュリティは一階とは比べ物にならないよ』

「ああ、分かっている」

人の数は確かに少ないが、その分セキュリティは厚い。

けれど、それはスリスにとっての得意分野だ。人がいないのならば、涼二達の側としてはむしろ都合がいいとも言える。

それでも尚、スリスが気を付けるようにと言ったのは――

（……進行スピードを落とさなけりやならないほど、大量のセキュリティがあるって事か）

製薬会社のセキュリティとしてはあまりにも重すぎるそれに、涼二は流石に不自然さを感じて黙り込んだ。

ここにいる人物、静崎雨音とは一体何者なのか。

そこまでの嚴重な警備にするほど重要な人材なのか――今回の依頼の不透明さを含め、涼二は小さく息を吐く。

どうにした所で、ここまで来た以上引き返すことは出来ない。

涼二は小さく息を吐きだしつつ左手をエレベータの重厚なドアへと当て、水を使ってそれを無理やりに押し開けた。

そして――

「……」

見えてきた光景に、涼二は思わず沈黙する。

古くから使われてきたものではあるものの、その効果性だけは確かな赤外線センサーの山。

嚴重と言うにも限度があるだろう、と言うレベルのそれに、涼二は緊張を通り越して呆れの息を吐き出していた。

「……スリス」

『分かってるよ……ったく、コレ設計した奴は何考えてるんだ』

ぶつぶつと文句が聞こえてくるスピーカーに苦笑しつつ、涼二はゆっくと進んでゆく。

涼二が通るその一瞬のみ、センサーたちは機能を停止してゆく。無論、あまり怪しまれないようにする為、極力避ける為に涼二は地面を凍らせて伏せるように滑りながら移動しているのだが、それでもそれなりの数をやらねばならないようだ。

『あーもう、こっちには監視カメラに熱源センサーって。これ、件のお嬢様はどうやって移動してるのさ。』

いや、ボクは見取り図持ってるんだし、部屋の中だけで生活できるような設計してるのは知ってるけど』

「俺としては、この動かない警備の方が気になるんだがな」

バイザーに示された進行ルート上、そのゴール地点の直前に立ったまま動かない警備員のマークに、涼二は小さく声を上げる。それに対し、スリスはどこか疲れたような様子で返答した。

『監視カメラを乗っ取って確かめてみたけど、どうやらお嬢様の護衛みたいだね。二分間だけならこの階層を外部から切り離す事は出来るけど……やれるよね?』

「……了解した」

二分、と涼二は胸中で反芻する。

厳しい部分が無いと言えば嘘になるが——それでも、彼は小さく笑みを浮かべて頷いた。

「俺を誰だと思ってる、スリス」

『……にゅふふ。そりゃあもちろん、ボク等のリーダーである氷室涼二さ。期待してるよ、涼二』

センサーだらけの通路を通り超え、立ち上がりながら涼二は頷く。そしてそれと共に——スリスのルーン能力が、この階層を支配した。

瞬間、涼二は駆ける。

「——I、L」
イサ ラグズ

二つのルーンを起動し、前へ。

部屋の前に立つのは二人の護衛。若干広い空間となっているその場所、涼二はそちらへと向けて一直線に駆ける。

「むッ!？」

「何……!？」

警備の二人は涼二の姿に目を見開きながらも、しっかりと戦闘態勢を取っていた。

その姿に、涼二は思わず舌打ちを漏らす。

相手が素人ならばやり易かったのだが――

「そう、簡単には行かないか」

呟き、涼二は発した氷の杭を二人へと向けて放つ。

空を裂き、甲高い音を立てて迫る無数の弾丸――それに対し、右側の警備の男がその手を上げた。

エイワズアルジズ
「E、Z！」

エイワズ
Eはイチイの木を表す防御のルーンであり、アルジズ
Zは仲間を護る際に
使い手に力を与えるルーンだ。

その力によって広がるのは緑色の障壁――その力に弾かれ、涼二の放った弾丸は粉々に碎け散った。

そしてその隣をすり抜けるように、もう一人の男が駆け抜ける。

「^{ラド}R、^{ダガス}D」

^{ラド}Rは乗り物を表す加速のルーン、^{ダガス}Dは光を操り攻撃するルーンだ。その二つのルーンの起動と共に、警備の男は両手に光の剣を発生させ、高速で涼二へと迫る——それに対し、涼二は小さく笑みを浮かべた。

「悪くはない……が、相性が悪かったな」
「っ……!？」

瞬間、加速していた男の身体が急激に停止した。

その衝撃に男は目を見開き——そして、その体の周囲に螺旋を描くように一筋の水流が立ち昇る。

凍結と停止の^{イサ}I、水を操る^{ラクス}L。それが、涼二の力。
故に——

「お前達の力は、俺にとってはやり易すぎる」

涼二が左手を握り締めると共に、水流は一気に細められ、男の意識を締め落とした。

若干緩ませてから凍結させ、その身体を完全に拘束する。

（まず一人……）

かつて部下に力の使い方を教えていた頃を思い出し、涼二は小さく苦笑する。

この二人の警備は、攻撃と守りを二人一組でこなす事を役割としていたのだろう。

攻撃側を落とされては、あの二つの防御ルーンには攻撃の手立ては存在しない。

無論、銃などの武器での攻撃は可能だが――

「ふっ！」

両手に水を集め、剣の形を作り出す。

その剣は、振るうと同時に刃を一直線に警備員の方へと伸ばした。即座に反応した警備員は再び緑の障壁を発生させるが――

「甘い」

「な、ぐあ!？」

水の流れは唐突に逸れて上昇し、天井から跳ね返るような軌道を取って、男の頭を強く打ち据えた。

それと同時に緑の障壁は消失し、涼二の手の中にあった水の剣は先ほどと同じように相手を気絶させ、拘束する。

倒れた二人の兵の姿に、涼二は小さく息を吐き出していた。

「一枚の面しか防御できないのでは、L^{ラグズ}の攻撃を防ぐ事は難しい。

その変幻自在さが売りなのだから……まあ、もう聞こえてないだろうが」

そう呟いて嘆息する。かつて、教官として部下に能力の使い方を教えていた頃の癖が未だに残っているのだ。

と——それと同時に、涼二の目の前にあった扉が唐突に開いた。思わず身構えるが、何かが飛び出してくるような気配は無い。

「……スリス」

『あ、ゴメン。驚いた？』

「いや、いい。とりあえず、残り時間は？」

『あんまり無いね。これ以上は干渉がばれそうだから、制御を戻す。さっさと中に入って』

「ああ」

スリスの言葉に従い、涼二は部屋の中へと進入する。

そしてそれと同時に扉が閉まり——次の瞬間、この領域内からスリスの力の気配が消えた。

部屋中にまでセンサー系のセキュリティは存在しないはずと、とりあえず息を吐く。

「……どなた、ですか？」

「——っ！」

——そして、響き渡った鈴を鳴らすようなその声に、涼二は思

わず息を飲んでいた。

ビルの中だというのに和風の様相に揃えられた部屋の中、わざわざ作られた座敷の上に正座して佇む一人の少女。

青みのかかった長い黒髪、蒼紫色の瞳。そして、藍色の着物。

その姿は、正しく――

（……違う、そんな筈は無い。第一、年も違うだろう）

己の頭に浮かんだ考えを消し、涼二は一度、大きく息を吐き出した。

彼女が、かつて死んだ姉の筈が無い。見た目は似ていても、背格好が合わないのだから。

だから違うのだと、そう己の言い聞かせ――涼二はその少女、静崎雨音へと向かって声を上げた。

「静崎雨音、だな？」

「は、はい」

――驚いてはいるものの、怯えた様子は無い。

そんな姿に涼二は思わず疑問を抱きつつも話を続けた。

「これから俺に付いて来て貰う。反論は認めない、分かったか？」

「あら。分かりました」

「……」

「……」

あまりにもあっさりと頷かれた言葉に、思わず言葉を失う。
数秒間の沈黙の後、涼二はしばし虚空を見上げ、それから再び声を上げた。

「ええと、だな。意味、分かってるのか？」

「はい、貴方に付いて行けばよろしいのですよね？」

「いや、ええと……まあいいか」

『誘拐です』などと堂々と説明するのも憚られ、涼二は小さく嘆息しながら、部屋の窓の方へと進んでいった。

首を傾げながらも素直に付いて来る雨音の姿にしばし葛藤しつつ、その指先に小さな氷の刃を作り出す。

高層階だからだろう。嵌め殺しになってる窓を円形に切り取り、涼二は雨音へと向けて手を差し伸べる。

「掴まれ」

「え……」

「早くしろ」

「で、でも、私——」

雨音の様子に、涼二は思わず眉根を寄せる。

その様子は、今更誘拐されそうになっている事実に気付いたとか、涼二が窓から飛び降りようとしている事に恐怖を感じたとか、そういう事ともまた違う。

どこか、その手に触れる事を躊躇っているような、そんな風情だった。

潔癖症を疑うような風情だが、彼女も涼二も手袋をしているため、肌が触れ合うような事は無い。

それでも視線を右往左往させて迷う彼女に嘆息し、涼二はその手を握って引き寄せた。

「あ……っ」

「冷たいかもしれないが、しっかり捕まっている」

言いつつ、涼二はLのルーンを発動させた。
ラグズ

発生した水のロープが、抱き寄せた雨音の身体を縛り付けて固定する。

そしてもう一つの先端を、対岸にあるビルの屋上へと巻き付け――

――涼二は、静崎製菓のビルより飛び出した。

『涼二！ 到着地点は見えてるよね！？』

「ああ、大丈夫だ」

対岸にあるビルははまだ建設途中の建物だ。

昼間の内に侵入していた涼二は、その一室に衝撃吸収用のマットを敷いておいた。

無論、それだけで勢いを殺せる訳では無いが――

「水よ――」

全身を水の球体で包み込んでしまえば、問題は無い。

あるとすれば、唐突に水に包まれたおかげで、雨音が濡れかけている事ぐらいだろう。

予め説明しておくべきだったかと肩を竦め——涼二は、そのビルの一室へと突っ込んだ。

衝撃を殺すと同時に水が弾け、びしょ濡れの二人がその場に立つ。

「けほっ、けほっ……」

「……済まんな、大丈夫か？」

「あ、はい……心配して下さって、ありがとうございます」

柔らかい笑顔を向けられ、涼二は再び沈黙した。

誘拐された事やら、唐突に濡れかけた事やら……色々と怒られる要素はあれど、感謝されるような要素は無い筈だと言うのに。

水に濡れた為か寒さに震えている様子の彼女に小さく嘆息し、涼二は左腕を掲げた。

「集え」

「え……わあ」

二人の身体を濡らしていた水が、まるで無重力空間で浮き上がったかのように染み出し、宙に浮遊する。

それらは周囲を漂うと、弧を描きながら涼二の左手の中へと収束し——そして、消滅した。

身体を冷やす水分は無くなり、とりあえずの暖かさが身体を包む。
そしてそんな光景に感動したかのように、雨音は胸の前で手を組んで声を上げた。

「貴方様は、魔法使いなのですね」

「は……？ いや、ただのルーン能力だろう」

「ルーン、ですか？」

「……まさか、知らないのか？」

「はい、存じておりませんが」

今や小学生ですら知っている言葉を知らない、この少女。

からかっている様子も無く、ただただ純粹に目を輝かせながら聞いてくる彼女に、涼二は思わず頬を引き攣らせていた。

（――箱入りってレベルじゃねーぞ！？）

胸中の思いはこれである。

先ほどの態度は、狙っていたのでも何でもなく、単なる天然の結果である――今に至って、涼二はようやく理解していた。
頭痛を感じて嘆息し、唐突に積もってきた疲労に辟易しつつも、この場から離れなければならない事を思い出す。

「……とりあえず、付いて来い。色々説明してやるから」

「まあ」

「……今度は何だ？」

ポツと顔を赤らめて頬に手を当てる雨音に、何か嫌な予感を感じて涼二は尋ねる。

それに対し、返って来たのは――

「愛の逃避行、なのですね」

「……いや、もう何でもいいや」

緊迫の潜入から一転、何処までも緊張感の無いお嬢様を連れ、涼二は着地地点となったビルから出てゆく。

――逃走用のバイクは、ちょうどこの真下に置かれていた。

01-4::ニヴルヘイム

「最近の乗り物は凄いですね、水の上を走れるなんて」
「……いや、これは俺が特殊なだけだからな、どう見ても」

氷面スリップ防止加工をしたバイクで、涼二は海面を凍結させて作った氷の道の上を駆け抜けていた。

両脇は海面である為、下手をすればすぐに海へと落下してしまうが、その辺りは慣れたものである。

バイザーはそのまま風除けにし、纏っていたコートはやたら目立つ格好をしている雨音に預け、涼二は自分達が本拠地としている場所へと向かっていた。

（しかし……）

自分の腰に回された腕を見て、涼二は視線を細める。

何を考えているのか分からないほどに天然さを発揮する雨音は、それでも誰かに触れると言う行為だけは忌避しているようだったのだ。着物なのでバイクに横座りしか出来ず、しっかり掴まっているようにと説明したのだが、従順であるはずの彼女は何故かそれだけは中々聞き入れようとしなかった。一度乗せた後では、それほど気にせずやっているようではあったが。

（一体何なんだろうな、コイツは）

あまりにも嚴重なセキュリティに、ルーン能力を持った二人の護衛。

手練と言うほどではなかったが、それでも一般人相手なら比較にならぬほどの力を持った二人——アレを雇うには、それなりの金が必要となる。

それだけの価値がこの少女にあるのだろうか、と涼二はただただ疑問を反芻していた。

果たして彼女は何者なのか、と。

「……っと」

バイザーの暗視機能で道筋を確認し、やがて見えてきた水没都市へと向かう。

海面上昇により水没した東京——そこそが、涼二達が本拠地としている場所だった。

水没したビルとビルの合間を抜け、静謐なコンクリートの木々の間

にエンジン音を響かせてゆく。

消音設計とは言え、何も音が存在しない場所では、十分に響き渡ってしまふものなのだ。

無論、人がいる訳では無いので、それも大した問題では無いが。

やがて見えてきたビル——その壁に開いた穴へと、涼二は凍らせた道を繋いで内部へと入り込んだ。

浅く水の溜まった床に降り立ち、バイクを適当に停める。

「ここが目的地なのですか？」

「いや……もう少しだ。付いて来い」

「あら、そうでしたか」

何の疑問も抱かずに付いて来る雨音——その姿に、涼二の方が疑問を覚えつつも、目的地へと向かって歩き出す。

向かう先は、この建物の階段……その、下りの方面だ。そちらへと歩いてゆく涼二の姿に、雨音は首を傾げる。

「泳ぎの練習ですか？」

「皮肉じゃなくて素で言ってる所が恐ろしいな、お前……えーと、とにかく見れば分かる。L——」
ラグズ

嘆息しつつ、涼二は左肩に刻まれているルーンを発動させた。

そしてそれと同時に、階段を埋め尽くしていた大量の水が渦を巻き、それが奥へ奥へと押し出されてゆく。

すっかりと水の引いた階段——それを見て、雨音が感嘆の声を上

げた。

「凄いですね……ルーン能力、という魔法ですか？」

「いや、だから魔法ではないと……後で説明するから、ちょっと黙っててくれ」

「はい、楽しみにしておりますね」

すっかりとペースを崩されつつも、涼二は雨音を連れ立って階段を下りてゆく。

必要な道筋のみ水が押し退けられ、滝の裏側にでも入り込んだかのように続いてゆく通路。

そんな道を進み、海底と化した東京の道路へと足を踏み入れる。

「わぁ……綺麗ですね」

「……まあ、確かにな」

天に昇る満月の光が、海底まで僅かに差し込んでくる。

十五年放置されたこの場所は、汚れを海水に洗い流され、さらに海水浄化計画などの後押しもあり、すっかりと透き通った水を湛えている。

昼間だったら、透き通った海と泳ぐ魚達を見る事が出来ただろう。ともあれ、この場所で空を見上げていても意味は無い。小さく肩を竦め、涼二は再び歩き出した。

光があまり入ってこないこの場所は、夜では殆ど闇に包まれているが、バイザーを装着した涼二にはしっかりと見通す事が出来る。

彼は雨音の手を引き、この空気のトンネルと化した海底を進んで行

った。

——そして、一つの建物へと辿り着く。

「ここだ、入るぞ」

「はい」

開きっぱなしになった二重の自動ドアを潜り抜ければ、ロビーのようにも見える広い空間。

涼二はその右奥にある階段へと空気の道を繋ぎ、そちらへと向かって進んでゆく。

ここは、大災害の直前に完成した高級マンション。

涼二とスリス、そしてもう一人——たった三人だけのグループ、『ニヴルヘイム』はここを本拠地としていたのだ。

階段をいくつか登り、進んで行けば——そこは、今までの暗闇が嘘であったかのように明るく照らし出されていた。

「あら、電気が……」

「スリスの奴、わざわざ出迎えとはな」

本来ならばやる必要のない演出に、涼二は小さく苦笑を漏らす。

派手好きのスリスの事、わざわざ待ち構えていたのだろう。

まあ、雨音がいる以上はエレベータを使う必要があるのだし、電気を通す必要があったのは確かだが。

それにしても、廊下の照明全開はやりすぎだろう、と涼二は頭を掻きつつ廊下を進む。

と——エレベータホールとなっているその場所に、彼はある見知った姿を発見した。

そこにいたのは、金色の毛並みを持つ狼——

「ガルム！ もう戻ってきていたのか」

「わあ……綺麗なわんちゃんですね。ここで飼っているのですか」

『……知らない以上は仕方ないとは思うが、私をただの犬と思うのも中々豪胆な少女だな』

「……え？」

突如として響いた声に、雨音はきょとんと目を見開き、左右へと視線を巡らせた。

そんな様子に、涼二は思わず笑みを零す。

「今のはその狼だ、雨音」

「え……このわんちゃんが？」

『だから犬ではないと……いや、いい。元の姿に戻ろう——』^{エワズ} Eh』

嘆息が狼の口から漏れ、そしてそれと共に、その胸元に刻まれたルーンが輝く。^{エワズ}

Ehは、馬と変化を表すルーン。その力は、己の姿を獣へと変化させると言うもの。

つまり——

「これでよろしいかな、お嬢さん」

「あら……わんちゃんが人間に。最近の動物は変わってるんですね」
「……涼二よ」

「こういう奴なんだ、これは」

人間の姿になった狼——否、今まで狼へと変化していた人間であるガルムは、雨音の物言いに眉根を寄せて涼二へと視線を向ける。筋骨隆々とした偉丈夫であり、肥大した上半身の筋肉は惜しげもなく晒されている。

下半身はちゃんと黒いズボンを纏っていたが、その下にも大量の筋肉が詰まっている事は傍目からにも明らかだった。

短く刈り込んだ金髪に、彫りの深い精悍な顔つき。口周りを覆う髭も、その締まった顔つきをさらに印象深くする効果があった。

「やれやれ……私はガルム・グレイスフィン。元々人間で、ルーン能力で獣の姿へと変化してただけだ。

君に危害を与えるつもりは無いので、安心して貰いたい」

「はい、ガルム様ですね。私は静崎雨音と申します……以後、お見知り置きを」

「成程……中々に、肝の据わったお嬢さんだ」

「状況を理解していないだけだと思うがな」

感心した様子のガルムに、涼二は小さく嘆息を漏らす。

彼には、未だに彼女が自分の置かれた状況を理解しているのか、さっぱり分からなかったのだ。

どちらにしろ、大人しくしてくれているのであれば助かるのだし、無理に理解してもらっても必要もない……とは思っているのだが。

「それで、貴方は？」

「ん……ああ、そういえば名乗っていなかったか」

「涼二よ……お前は少し、女性の扱いを覚えたほうがいいぞ？」

「標的に対して何言ってるんだ……ったく。俺の名は氷室涼二だ。状況を理解してるのかは知らんが、しばらくは俺達と共に居て貰うぞ？」

「はい、涼二様」

従順すぎて何を考えているのかさっぱり分からない……と、涼二は胸中で呻く。

ニコニコとした笑顔で頷いてくる雨音に対してどう反応したものと悩みつつ、彼は一度息を吐き出してから声を上げた。

「……とりあえず、上に行くぞ。スリスを待たせると何を言い出すか」

「ふむ、そうだな。私も上着を取って来たい所だ」

「惜しげもなく見せびらかしといて何言ってるやがる」

ぺしんとガルの大胸筋をはたき、涼二は小さく嘆息する。

出会う前までは様々な格闘技で肉体を磨き、果てはボディービルダーまでやっていたと言うガラム。

その為、何かにつけて筋肉を見せびらかしたがるその性癖は、涼二も少々辟易するものであった。

基本的に害は無いので、あまり気にしないようにはしているのだが。
と――

『こら、その二人！ いい加減昇ってきてよ！ わざわざスタンバってるのに！』

「やっぱりやってやがったかこのバカは……仕方ない、行くぞ」

建物内の放送機器を使って声を上げたスリスに対して嘆息し――
――涼二は、ようやくエレベーターのボタンを押したのだった。

*
*
*
*
*

最上階より、三つ下の階。

その中途半端な場所に居を構えたのは、出来るだけ目立たない位置にしたかったと言うのがある。

この場所を発見した頃の事を思い出し、涼二は小さく苦笑を浮かべていた。

僅か数ヶ月でここが居住可能なレベルになったのは、偏に無駄と言うレベルのスリスによる努力があったからだろう。

この場所は、涼二、ガルム、スリスの三人が本拠地とする場所――

「――俺達、ニヴルヘイムの本拠地……の、一つだな」

「放棄可能な場所ではあるが……居心地はいいな」

「そうなのですか……」

目を輝かせる雨音に、涼二は見えないように肩を竦めていた。

誘拐してきた人物を連れ込んだ以上、解放した後はここを放棄しなくてはならないだろう。

けれど、それでも少し惜しいと思ってしまう程度には、ここは涼二たちにとって憩いの場所となっていたのだ。

そんな高層マンションの最上階付近、放棄され、誰にも使われなかった筈の部屋。

廊下の奥にあるその部屋へと続いていた暗闇は、一つ一つ点灯する電球によって払われて行く。

「……わざわざ演出しやがって、あのバカ」

嘆息しつつも、涼二は二人を連れてその部屋へと歩いてゆく。
そしてあと数メートルと言う位置まで近づいたその時、目的の部屋
の扉は勝手に開いた。
その様子を見た雨音が、ぽつりと眩く。

「ところで、何で銀が速いのでしょうか？」

「は……？」

「……クイックシルバーと言いたいのか？」

「いえ、ポルターガイストさんですか？」

「お前の思考回路が分からん……」

出会ってからわずか数時間ではあるが、涼二はこの少女の扱い方
を徐々に心得始めていた。

要するに、なるたけ話は聞き流すようにする、という事である。

生来の性質から、つつい突っ込んでしまうのだが。

と――開いた扉の奥から、唐突に声が響き渡った。

「はいはい！ お待ちしてたよ、静崎雨音ちゃん」

「あら、普通に声が……妖怪さんだったのですね」

「いやいやいや、人間だから。って言うかポルターガイストからど
うしてそこに飛んだのさ」

苦笑の混じる声と共に、ぱちんと指を鳴らす音が響き渡る。
そしてそれと共に、真っ暗だった部屋の中へ、順々に光が灯って行
った。

その奥にあるのは小さな机と、そこに乗っている複数のノートパソコン。

そして——そこに腰かける、一人の少女の姿だった。

だぼついたパーカーとジャージのズボンと言う何ともやる気のない格好をした小柄な少女は、赤の混じった明るいブラウンの髪と碧玉の瞳を持つ整った容姿に笑みを浮かべ、声を上げる。

「こんにちは、雨音さん。ボクは降霧スリス。ニヴルヘイムの情報担当だよ。よろしく」

「まあ、よろしくお願いしますスリス様」

「様って言うのはちよつとなあ……せめて『さん』ぐらいで」

「そうですか？ では、そのように……あら？」

深々と礼をしていた雨音は、そんなスリスの言葉に顔を上げ——
——小さく、眉根を寄せた。

スリスの視線、その若干外れた焦点に、彼女は違和感を感じていたのだ。

スリスが向けている視線は少しだけ外れた場所へと収束しており、正面からでは少し違和感を感じてしまう。

そんな疑問の表情に気付き、スリスは小さく苦笑を浮かべて見せた。

「あはは。おかしいって気づかれちゃうか」

「え、ええ……その、もしかして——」

「うん、ボクは目が見えてないよ」

冗談めかして、スリスは笑う。

その言葉は決して軽い物ではなく——けれど、まるで血液型の話でもするかのようにあっさりと、スリスはその言葉を告げていた。しかし、そんな言葉に、雨音は再び首を傾げる。

「でも……私の事を、しっかりと見てるように思えますけど」
「ああ、それはあれだ」

言って、バイザーを外していた涼二が部屋の中へと入ってゆき、スリスの横顔を示す。

正確には、その眼の下に張られた逆三角形のシールを。
まだ若干薄暗い為にあまり見えなかったのか、雨音は部屋の中に入ってきて、スリスに少し近づいて観察した。

「……ただの、貼物に見えますけれど？」

「あー。これね、警察とかが調査用に使うシール型カメラなんだ。
ボクはHのルーンで電気や電波を操って、ハガラスこれの映像を脳で直接見
てるのさ。だからまあ、視線の焦点が合わないのは勘弁して欲しい
かな」

「成程……凄いですね、ルーン能力と言う魔法は」

そんな雨音の言葉に、ぴくりとスリスの頬が引き攣った。

二人のそんな様子に対し、涼二は小さく嘆息を漏らす。

——どうやら、スリスは二人の会話音声までは拾っていないかったらしい。

「えーと……涼二？」

「スリス、お前説明してやれ」

「えー！？ ちょっと、こんな異世界に飛ばされてきたレベルの世間知らずだったなんて、ボク知らないよ！？」

「何だその訳の分からん例えは……」

スリスの言葉に嘆息しつつ、涼二は適当なソファに座る。

部屋の奥のほうでは、ガルムがその上半身にワイシャツを纏っている所だった。

何かにつけて上着を破る彼は、いくつも上着を常備していたりするのだが——閑話休題。

呻きながら頭を掻いていたスリスは、ふと思い出したように顔を上げ、雨音へ——否、全員へと向かって言い放った。

「って言うか、そもそも雨音ちゃんもルーン能力は持ってる筈ですよ。記録では能力を持ってるっている風に書かれてたよ？」

雨音ちゃんも、何か特殊な力持ってるんじゃないの？」

「何……？」

「力、ですか」

そんなスリスの言葉に、ソファへと身体を沈ませていた涼二が身体を起き上がらせる。

対し、雨音は少々悩むような仕草と共に周囲を見回し——花瓶に差してあった一輪の薔薇の方へと視線を向けた。
そして、彼女は静かに声を上げる。

「……確かに、あります。けど……皆さんのように、美しくて綺麗な力ではありません」

「種類は同じはずだろう……何故そうも己の力を卑下しているのだ、雨音君？」

「この力は……おぞましい力だから、です」

眩き、雨音は視線を向けていた花瓶へと近付いた。

そして、その白い手袋を外し、白魚のように華奢な指を一輪の花へと触れさせる——その、刹那。

「……！」

「これは……っ！」

愕然とした様子で涼二は立ち上がり、ガラムも驚きの声を上げる。雨音が触れた、その手の中で……その花は、唐突に瑞々しさを失い、枯れ落ちてしまったのだ。

まるで、命を喰らい尽くされたかのように——

「……私の力は、素肌で触れたものの命を吸い取ってしまう力です。貴方達のように綺麗な力では……ありません」

「……いや、同じだよ、雨音ちゃん。その力は多分だけど、Sの逆位置の力だ」
ソウイル

スリスの言い放った言葉に納得を抱きつつ、涼二は同時に戦慄を

覚えていた。

雨音を連れ去ってからここに至るまで、肌が触れ合ってしまうような場面はいくつもあった。

彼女は、ずっと直接触れないように気をつけていたのだろう。

もしも、彼女に害意があったならば――

「ッ……迂闊だった、か」

ソウイル
Sとは、太陽と生命を表すルーン。

癒しの力という、ルーンの中でも最も優しい力を持つが……逆位置と呼ばれる効果を反転させたルーンでは、相手の力を奪ってしまうライフドレイン能力と化す。

下調べが足りなかった――ここにいる三人、全員がそれを痛感していた。

最も気にしているのはスリスだろう。が、それでも彼女は、無理矢理己を納得させるように頷くと、手袋を嵌める雨音へと向かって声を上げた。

「でも、おかしい……ソウイルSに逆位置は存在しない筈なのに。どこに痣があるの？」

「痣、ですか？」

「そうそう。ある筈だよ。ルーン能力を持ってるなら、皆何処かしらに痣を持ってる筈だから」

「いえ、あの……心当たりがありません。傷痕のようなものならありますけど……」

——そしてその言葉に、三人は今度こそ絶句していた。
信じられない、といった三人分の視線を受け、雨音はうろたえながら胸元に手を寄せる。

「え、ええと……どうかしましたか？」

「ちょ……ちよっと、見せてもらっていい？ 隣の部屋でやるから」

「あ、はい。分かりました」

雨音に直接触れないように気をつけながら、スリスは雨音の背中を押して隣の部屋へと向かってゆく。
その二人の姿を見送り、ドアの閉まる音が響き渡った後、涼二とガラムは二人してその硬直した視線をぶつけ合った。

「——始祖ルーン」

どちらが呟いた言葉だったかは、二人にも判別が付けられなかった。

ただ、そこには——深い畏怖のようなものが、込められていたのだ。

01-5: ルーン能力

「お待たせー」

「……スリス」

響いた声に、涼二は隣の部屋から戻ってきたスリスへと視線を向ける。

彼女はどこか疲れた様子で肩を落とし、近くにあったソファへと倒れるように身体を沈めた。

そしてその後ろから、静々と、少しだけ顔を赤らめた雨音が続く。

「触ったら一発アウトの人のチェックをするのって、ホント神経使うよ……」

「普通の服装だったらまだしも、着物だからな……腕とかでもない限り、俺達が見るわけにもいかんだろう」

「まあ確かに、おへその上辺りだったけどさあ……あ、雨音ちゃん

も適当に座っていいよ」

「はい、ありがとうございます」

寝転がったまま足をパタパタと揺らしつつスリスが言い放った言葉に、雨音は小さく微笑みながら近場の椅子へと腰掛けた。

その洗練された立ち振る舞いに、涼二は小さく肩を竦める――椅子よりも座敷が似合うな、などと思ってしまったのだ。

今はそんな事を気にしている場合では無いが。

「さて……それで、どうだったんだ？」

「……最悪な事に、大当たりだよ」

「そうか……」

スリスの言葉を受け、ガルムが口元に手を当てて沈黙する。

涼二も、また同じように沈痛な表情を浮かべていた。

自分達が、不用意に危険な領域へと足を踏み入ってしまった事に、今更ながら気づかされたのだ。

そんな事実にも、スリスは落ち込んだ声音で声を上げる。

「……ゴメン、二人とも。ボクがしっかり調べなかったから――」

「いや、スリス。君に責任は無いと私は思うぞ？」

「ああ。データ化された資料だったら、お前が見逃す筈がない……依頼主の方はこれを知っていたのかどうか、つてのは気になる所だな」

「ええと……ごめんなさい、私のせいで……」

「あ、いや。雨音ちゃんは何も悪くないよ。能力を持ってしまうの

は、どうした所で偶然なんだから」

雨音の言葉に苦笑し、スリスは身体を起こした。
焦点の合わぬ瞳を向け、その細い肩を竦める。

「『能力を持たなければ良かった』なんて、ここにいる人間は誰も
が考えた事があるさ。けど、こればかりはどうしようもない。だ
から、これからどうするか考えた方が建設的だよ」

「……だな。落ち込んでたお前が言うのもどうかとは思うが」
「ぶー、涼二のいけずー」

唇を尖らせるスリスに苦笑しつつ、涼二はその佇まいを直した。
そして右側に座るスリス、左側に座るガラム、正面に座る雨音へと
順々に視線を巡らせて行く。

「さて……始祖ルーンの所有者って言うんなら、説明しといった方が
いいと思うんだが」

「そうだねえ。それに、ちょっとおかしいと思わない、二人とも？」
「うむ。本来、始祖ルーンにもSにも逆位置は存在しない筈だから
な」

「そう……ボクが見た限りでも、雨音ちゃんのルーンは逆位置には
なっていないかった」

その言葉に、三人の視線が雨音の方へと集中する。
その集中砲火を受け、若干恥ずかしそうに身をよじる彼女に対し、

涼二は冷静に視線を細めていた。

ルーン能力の知識を持たない始祖ルーンの持ち主。明らかに、能力に関する知識を与えられずに育てられてきた形跡があるという事だ。

——どうにも、きな臭い。涼二は、そう胸中で呟く。

得体の知れないの依頼主も、あの静崎製薬と言う会社も。

何か厄介な出来事に巻き込まれているような——そんな気配を感じ、涼二は思わず己の腕を擦っていた。

「え、えと……どういう、事なんでしょう？」

知識のない雨音は、事態を掴めず首を傾げる。

そんな様子に三人は視線を見合わせ、共に小さく肩を竦めた。とりあえず、説明する必要があるだろう、と。

「そうだね……じゃ、ルーン能力から説明しようか」

「あ、はい」

苦笑交じりの表情で、スリスが真っ先に声を上げる。

その言葉に対して素直に頷いてくる雨音に満足しつつ、スリスは続けた。

「もう何度か、ボク達の力は見ているから分かんと思うけど……ルーン能力って言うのは、ボク達の操っている、本来人には有らざる

力の事。

涼二が何も無い所から水や氷を出したり、ガラムのおっちゃんに狼に変身したり……これの事を、ルーン能力って呼ぶ。言っておくけど、魔法じゃないよ？」

「成程、そうだったのですか……」

その『そうだったのですか』は前の言葉に対してか、後ろの言葉に対してか。

そんな益体もない事を考えつつ、涼二は小さく嘆息する。

とりあえず魔法ではないという事で納得はしてくれたみたいだが、果たして全て理解してもらえるのだろうか、と。

「で、この能力には二十四の種類があつて、一人に対して最大で三つまで刻まれるんだ。

例えば、ボクならばH、A、P」
ハガラスアンサズパース

言つて、スリスは己の手の甲を示す。

その両手の甲に刻まれた文字——直線で描かれた記号の痣こそが、彼女のルーン能力を表すものだった。

左手の甲にあるのが、嵐と雹を表す破壊のルーン、H。ハガラスそして、右手の甲にあるのが秘密を表す探索のルーン、P。パースだ。

「ちなみにもう一つは背中にあるけど、今見せろつて言うのはちょっと勘弁ね。で、雨音ちゃんのおへその辺りにも、同じようなものが刻まれていたでしょ？」

「あ、はい……でも、私のはこんな浮かび上がったようなものじゃ

なくて、傷痕みたいな溝になってましたけど……」

「そう、それが始祖ルーンって言う特別なルーンの証なんだけど……とりあえず、それは後で説明するね」

今問題となっている始祖ルーンだが、ルーン能力に関する基礎知識がなければ理解しづらい話と言える。

それゆえの後回しだろう、と納得しつつ、涼二は小さく肩を竦めながらスリスに続いた。

「ルーン能力には強さのレベルが存在する。弱い方から順に、ヒューマン人外級、フリークス巨人級、ディスター災害級、そして神話級だ。

これには、刻まれたルーンの大きさと、その使い手の持つ魂の強さによって変化する……まあ、能力の使い方や組み合わせの上手さでも変化するがな」

「魂……ですか？」

「正確には、魂の放つ光……一般には『プラーナ』と呼ばれる力だ。刻まれたルーンが大きく、そしてこのプラーナの量が大きいほど強力な力を持つとされる」

「霊的次元の観測なんて、ルーン能力が広まってからようやく進歩したんだけどねえ」

死んだ人間の体重が、死ぬ前より僅かに軽くなるという話がある。僅か21グラムの変化であり、そもそもその話自体も眉唾ではあるが——仮に21グラムと言う質量がエネルギーに変換されるとしたら、どれほどの物になるだろうか。

それは、誰もがまともに取り合う事の無い研究だった……あの、巨大な隕石が飛来するまでは。

「君も、流石に隕石の話は知っているだろう」

「あ、はい……それは、流石に」

「あの隕石は可燃性であった……しかし、現代の科学ではそれがどのような仕組みで燃焼しているのかの判別がつけられなかったのだ。物理学的な燃焼とは違う。しかし、確かに熱を発している。

国内が落ちていくからずっと研究が続けられてきたが、その正体を掴む事は中々上手く行かなかった……あの隕石の放つエネルギーの波動が、ルーン能力者の放つ輝きと同じものであると発見されるまではね」

言いつつ、ガルムはその腕に刻まれたルーンを発光させた。

まるでそのルーンは溝であり、体の内側で光り輝くものが漏れ出しているかのように。

これこそがプラーナと呼ばれるエネルギーであり、ルーン能力者が放つ力の原動力となるものだ。

「以来、プラーナの観測技術は爆発的に高まった……あの隕石による発電も、そのおかげだろう」

「そのような背景があったのですか……では、ガルム様達は、先程の位階で言うほどの程度の力を持っているのです?」

雨音のその疑問、当然と言えば当然なその言葉に、三人は目を見合わせて小さく苦笑を浮かべていた。
そんな様子に、雨音は首を傾げる。

「あの、もしかして聞いてはならない事だったのでしょか……？」
「いや、まあ……戦う相手には隠しておくべき事だが、別に言ったからどうこうなるってモノでもない。ただ——」

「ボクたち……みんな、ファーブラ神話級だからね」

「まあ……！」

両手を口に当てて驚きを表現する雨音に、涼二は小さく苦笑じみた笑みを浮かべる。

驚くのも無理はない事ではあるが、彼女がその驚き方をするのは少々滑稽な事だ。

何故なら——

「言っておくが、お前もファーブラ神話級だぞ？」

「え？ 私が、ですか？」

「ああ。現在確認されている始祖ルーン保持者は、全てファーブラ神話級の力を持っている。能力を発動せずにアレだけの力を使ってるんなら、十分にそれだけの力があるだろうさ」

涼二は先程の光景を思い出す。

現実味の無い、一瞬で枯れ落ちてゆく花の姿を。

ルーン能力の使い手だからこそ分かる感覚ではあるが、雨音はあの時能力を発動していなかった。

つまり、彼女は常時展開されている微弱な能力のみでアレだけの力を発揮したのだ。

(いや——)

それは、いくら始祖ルーンの持ち主だったと言っても不自然である。

それは最早、強力を通り越して制御不能と言うレベルではないか——考え込もうとした瞬間、スリスの抗議するような視線が突き刺さり、涼二は小さく肩を竦めて視線を戻した。

「……まあ、一般に知られているルーン能力に関してはこんな所だ。そして、ここからがお前に関する話になる」

「先程から話に上がっている、その始祖ルーンと言う力の事ですね？」

「ああ。お前の持っているそれ……痣ではなく、直接刻まれた傷痕のように残るそれは、全てのルーンの元になったものとされている」

涼二の言葉を聞き、雨音はそっと自分の腹の辺りを手で触れる。それは、無意識の動作だっただろう。その下に刻まれているSのルーンは、本来人を助ける力を持つ筈なのだが——どうして、逆位置の存在しない始祖ルーンがそんな事になっているのか。

「始祖ルーンに関しては未だに謎が多い。そもそもルーン能力自体、能力発動のプロセスは明らかになってきてはいるものの、どうして生まれたのか、どうやって生まれたのかは分かっていない」

「……そんな力を、皆さん使ってらっしゃるのですか？」

「まー、便利には変わりないからねえ。ボクなんて、能力使わないと何も見えないし」

肩を竦め、スリスはそう呟く。

軽く流せるような内容ではなかったが、本人が気にしない以上は気にしない、と言うのが涼二やガルの出している結論だった。

雨音の方は少々挙動不審気味に視線を右往左往させていたが、二人が何を言わないのを見て、黙っている事に決めたようだ。

小さく嘆息し、涼二は続ける。

「とにかく、一つだけ言える事は、この能力が15年前の大災害の日の後から発生した事。そしてその日、始祖ルーンの使い手が生まれた事だ」

「はぁ……詳しいんですね」

「まあ、な」

話を拒むように、涼二は視線を逸らす。

彼にとって触れられたくない事柄の一つ――スリスでそんな空気に慣れていたのか、雨音はそれに関して追及してくる事は無かった。コホン、と一度咳払いをし、涼二は視線を戻す。

「始祖ルーンの使い手は非常に貴重であり、しかもその能力は他の能力者の追隨を許さない。

ユグドラシルまでもが、何が何でも手に入れようとしているような貴重な存在だ……まず、お前は自分自身がそういう存在である事を理解し、自覚しろ」

「は、はい」

「そして、そういう存在を誘拐してきた事が、どれぐらいリスクの

高い行為であるか……俺達が気にしているのは、そういう事だ」

その言葉に、雨音ははっと目を見開く。

とりあえず理解して貰えたかと、涼二は小さく息を吐き――

「……私、誘拐されていたのですね」
『今更そこかッ!?!』

――スリスと同時に、半ば絶叫のようなツツコミを叫んでいた。
吹き出すのをこらえている様子のガルムを尻目に、スリスが目を輝かせながら声を上げる。

「やばいよ涼二、この子真正だ!」

「何でお前はやたらと嬉しそうな顔してるんだ!?! あと雨音、お前は今までの話で何を聞いていた!?!」

「魔法じゃない、と……」

「誤認識を直せただけかッ!」

頭を掻き耄り、思わず地団太を踏む。

今までの話が無駄だったのか、と叫び声を上げようとし――

「後は、ルーン能力の詳細や仕組み、プラーナに関して、それと始祖ルーン……」

「そっちを先に言え……」

——きちんと全て理解していたと言う事を告げられ、涼二はがつくりと倒れるようにソファへと体を戻していた。

ぎしりとスプリングが悲鳴を上げるが、お構い無しである。

彼は、ここに来てようやく彼女がどういう性格なのかを掴んでいた。要するに、色々とズレているのだ。

深い溜め息を吐き出し、このまま眠ってしまおうかと思うほどに感じる疲労感を何とかしつつ、涼二は半ば呻くような声を上げる。

「……とりあえず、お前さんは世界的に見ても重要人物って事だ。

扱いが非常に難しい。ただの人質で済むとは到底思えん」

「そうですね……今なら、涼二様のお言葉も理解できます」

「ああ、だから、とりあえずはまた調査だ……今日はもう休んでいいが、明日になったら頼むぞ、スリス」

「はい」

調べるべき事はいくらでもあるだろう。

眠気が登ってくる頭の中、しかし涼二の思考の芯は何処までも鋭利に冷え切っていた。

ユグドラシルに協力している製薬企業が、始祖ルーン所持者の存在をひた隠しにしていた事。

その始祖ルーンの持ち主の能力が、何故か逆位置による能力発動を常時展開していると言う事。

そして、これらの事実関係を、今回の以来を持ち掛けてきた人物が知っていたのかどうかと言う事。

情報が足りない——それが、今の涼二の偽らざる感想だった。

かつて喪った姉の姿に良く似たこの少女——彼女に隠された秘密とは、一体何なのか。

無論、涼二も深入りは避けるべきであるという事は分かっている。けれど、完全に無関係でいられると思うほど、涼二もおめでたい性格をしている訳ではないのだ。

「——っ」

僅かに、頭痛を感じる。

寝室の方へと歩いてゆく雨音とスリスの姿を見送り、涼二は静かに天を仰いでいた。

危険を抱えてしまったのは、事実。けれどこれは——

「チャンス、かもしれぬな」

「……！」

「ふ……その様子では、お前もそう考えていたか」

深いバリトンの効いた声に、涼二は方目だけを開いて肩を竦める。ガルの言葉は、何処までも凶星だった。それ故に、これは一つのチャンスであるとも言える。

始祖ルーンの持ち主を利用す機会など、そうそう存在はしない。故に、彼女は切り札となりえる。

「……ま、今後の展開次第か。とりあえず、今日はもう遅い。そろそろ休もうぜ？」

「ああ、そうだな」

靴を脱ぎ、ソファの上に寝転がる。

隣の部屋辺りを使ってもよいのだが、流石にもう面倒だったのだ。

コートを己の上にかけて、瞳を閉じ——涼二は一度だけ、雨音の姿を夢想する。

その姿は——かつて、あの大災害の日に殺された姉と、何処までも重なっていた。

01-6: 失ったものへの想い

高級マンションの最上階——ここには、広いスパのような施設が備えられていた。

無論、管理する人間はいない為、正式に稼動している訳ではない。だが、水泳用のプールだけはその役目を果たしていた。

尤も、水道管もガス管も働いていない為、ここに水を満たす方法は一つしかないのだが。

「^{ラグズ}L、っと」

涼二の左肩、そこに刻まれたルーンが蒼い輝きを放ち、それと共に生まれた大量の水が広いプールを一気に満たした。

彼の力ならば水温も50℃までならば調節できる為、大体35℃程度の温度で生成している。

満たされた頃には、競泳用プールと同じ程度の温度になっているこ

とだろう。

そんな滝のような水の流れをぼんやりと眺めつつ、涼二は準備運動を開始する。

そんな背中へと向けて、背後から近付いた彼は声をかけた。

「精が出るな、涼二」

「ガラム……まあ、鍛錬を欠かす訳には行かないだろ」

「お前も熱心なものだ、感心するよ」

そんな言葉に苦笑を浮かべ、涼二は声の方へと振り返る。

そこには、涼二と同じように水着姿になったガラムの姿——盛り上がった大胸筋や見事に割れた腹筋、丸太のような大腿筋など、耐性がなければ眩暈を覚えそうな筋肉の塊ではあるが、涼二も慣れたものだろう。

「そういうアンタだって、トレーニングは欠かさないだろ？ まあ、アンタのやってるトレーニングと、俺がやってるのは随分とタイプが違うが」

「うむ。お前もやってみるか？」

「勘弁してくれ、俺は筋肉ダルマになるつもりは無い」

アキレス腱を伸ばしつつ手をヒラヒラと振り、涼二は苦笑する。ガラムはボディビルダーをやっていた性質上、筋肥大を起こすようなトレーニングをするのが基本だ。

純粹にパワーとタフネスが高まる為、狼への変身という能力を持つガラムにとっては、バランスよりもパワーを求めた方が効率的とな

る。

対し、涼二のルーン能力は遠距離型であり、積極的に近付いて戦闘するような理由は存在しない。

無論、様々な格闘技を修めるガルムの教えもあり、涼二は接近戦が出来ないという訳ではないのだが――どちらかと言えば、受け流して攻撃するような戦闘パターンを好む。

その為、必要以上のパワーを求める事無く、バランスのいいトレーニングを行っているのだ。

「さてと……んじゃ、行くか」

キャップとゴーグルを着け、涼二は水の中へと飛び込んだ。

そうして泳ぎ出すと共に、彼は水を操って自分に対して負荷となるように流れを作り始める。

これは能力の制御訓練と体力作りを同時に行うと言う名目で始めたものだったのだが、これが中々に難易度の高いものだったのだ。

どちらかが疎かになるような事があれば、すぐにガルムからの叱責が飛んで来る。

故に、涼二はひたすら集中してこの訓練を行っていた。

そんな彼の様子をじっと見つめつつ、ガルムは持ってきていたダンベルを持ち上げる。

（大した向上心だ……この出所が復讐心でなければ、どれほど良い青年になっていた事か）

惜しいと、ガルムは心からそう思う。

氷室涼二と言う青年は、人を惹き付ける魅力も、そして己の才能に奢らず仲間と共に切磋琢磨するだけの真摯さも持っている。

しかしその思いの大部分は、己の大切なものを奪ったユグドラシルへの復讐心に埋め尽くされているのだ。

尤も――

「人の事は言えんが、な」

眩き、ガルムは小さく苦笑する。

このニヴルヘイムと言うグループは、そういう集まりなのだ。混乱し、荒廃した日本に秩序をもたらす組織、ユグドラシル。

その平和をもたらす為に行われてきた行為は、最終的に言えば正義だったのだろう。

理性では理解できる。だが、感情では納得できない。

涼二も、ガルムも、スリスも――それが、赦せなかったのだ。

『――ならば俺は、悪となろう』

あの日、涼二はそう言った。

何の因果か出会った、同じ怒りを抱える二人に対して。

『確かに、世界は平和になったのかもしれない。少数の犠牲があったおかげで、今こうやって平和を享受出来ているのだろう。』

けれど、俺はその平和を赦す訳には行かない。俺の、俺達の大切な

ものを犠牲にした上での平和など、認めない』

一致した。一致してしまった。

何処までも深い怒りと憎しみ——その感情に、ガラムとスリスは共感してしまったのだ。

故に、彼らは共に歩み始めた。向かう先の決まった、破滅の道筋を。

『人は俺達を憎むだろう。俺達の選択を愚かと嘲笑うだろう——俺達を知る人間ならば、俺達を止めようとするだろう。

けれど、そんな言葉に意味は無い。俺達に在るのは、ただ奪われたと言う事実だけだ』

氷室涼二は、姉を。

ガラム・グレイスフィーンは、妻子を。

降霧スリスは、全ての光を。

ただ、奪われたのだ。本当に救い無く、慈悲も無く——奪われてしまったのだ。

だからこそ、相手が無残に殺さなくては気が済まない。

『余計な人間を狙う必要は無い。だが、余計にならないのだったらいくらでも犠牲にしよう。

悪と罵られようとも、外道と断じられようとも、決して止まりはしない。

全てを奪い、そして果てるまで……共に、歩もう』

ガラムは、あの時差し伸べられた手を思い出す。

アレが無ければ、一体どうなっていたのだろうか……そう思わずには、いられなかったのだ。

彼は思わず苦笑し——ふと感じた気配に、視線を背後へと向けた。

「やつほー、おっちゃん。今日もマッスルだねえ」

「ははは、スリスか。今日は早起きだな」

「雨音ちゃんに起こされちゃったからねー。涼二は今日も頑張ってるみたいで、感心感心」

うんうんと頷くスリスの視線は、やはり焦点の合わないもの。

視力を完全に失っている彼女には、本来見えない光景——それを、愛おしそうに眺めてる。

殆ど乾いているプールサイドに腰を下ろした彼女の視線には、本来無いはずの色が存在していた。

「見ているだけでも楽しそうだな、スリス」

「うん、楽しいよ。涼二が頑張ってる姿、ボクは好きだから」

「それを言うなら、どんな姿でも、ではないのか？」

「あはは、それもそうだねえ」

——降霧スリスは、己を助け出してくれた氷室涼二に強く依存している。

それは最早、恋や愛といった感情を通り越して、『信仰』と言ってもいいほどに。

ユグドラシルで実験体として利用され、家族も居らず光すらも奪わ

れたスリスにとっては、涼二の存在だけが全てだったのだ。
故に、彼女は常に涼二から目を離す事は無い。

あらゆる電子システムに干渉し、常に涼二の周囲を警備している。
本当なら、この場所に来る事無く、いつもの部屋からでも監視することは出来ただろう。

「……そのあたりは、人間らしさも残っていると言う事か」

「んー？ おっちゃん、何か言った？」

「いいや、何でも無いさ。ところで、食事の方は大丈夫かな？」

「うん、自動調理器に方には電気を流しといたし、すぐにでも使える筈だよ」

水やガスは外から持ち込んだものではあるが、電力だけはその限りではない。

スリスが配線などを弄り、そのHのルーンハガラスによって電力を制御しているのだ。

人知を超えた緻密さと制御力ではあるが、Aアンサズのルーンを持つ神話級能力者の名は伊達ではない。

「ふむ……それでは、朝は遠泳程度で十分か。ある程度したら戻るとしよう。ところで、あのお嬢さんはどうしたのだ？」

「雨音ちゃん？ あの子なら、ルーン能力の制御に関する本を貸してあげたところだよ。常時展開あの威力だと、普通の制御程度じゃどうにもならないかもしれないけど……」

「確かに、焼け石に水だったとしても、やらぬよりはマシだろうな」

二人は涼二の姿を見つめつつ、あの時見た雨音の力を思い出す。
触れただけで命を枯れ果てさせる、神話級フェアブラからしても異様としか思えない能力の強度。

「あれで意図して能力を発動したら、常時エナジードレインとかになりそうで怖いよ」

「ふむ……いくら始祖ルーンの持ち主とはいえ、やはりあの威力は不自然だな。逆位置という点では言うまでもないが」

「そうだね……一応、思いつく限りの事は調べておく。これは勘だけど……すごく、厄介な事になりそうな気がするんだ」

彼女に、視線を鋭くするなどの、目を使った感情表現というものは存在しない。

けれどその声は、見えない何かを警戒するように鋭く変質していた。

（涼二の敵になったら、という事か——）

ガルムは、小さく苦笑する。

涼二の事を案ずるその姿だけは、どこにでもいるごく普通の少女に思えたのだ。

こんな時でしかそんな姿を見る事ができないのは残念ではあるが、それでも彼は願わざるを得ない。

自分達が幸せを望む事など、間違っているとは分かっているのに――

「さて、つと。それじゃ、ボクは一度戻ってるよ」

「うむ。私も、涼二が運動を終えたら行こう」

「はいはい」

一転、普段通りの明るい表情でスリスはプールを去ってゆく。

その姿も、年齢相応だと見る事ができるだろう。けれど、それはどこか取り繕ったもののようにも思える。

涼二に言わせてみれば、『普通を目指して斜め上に吹っ飛んでいった』という事だったが。

「やれやれ……私に、父親役は無理という事か」

ガラムは視線を戻し——ここにはいない相手に対し、小さく呟いていた。

* * * *

「あんな、スリス……」

「いいじゃん、遊んでいこうよ。暇なんだったら」

そう言うスリスの目の前にあるのは、四人プレイ用の家庭用ゲーム機である。

食事を終え、戻ろうとしていた涼二を引き止めたのは、とにかく暇そうにしているスリスのそんな言葉だったのだ。

壁にある超大画面のテレビ、そこに映っている映像は、かなり有名な四人同時対戦可能の大乱闘ゲームである。

どうやらスリスは暇さえあればこれをやっていたらしく、腕はかなりのものだったりする。

「ったく、一回だけだぞ」

「よっしゃー！」

ひたすら引きとめようとしてくるその言葉に嘆息し、涼二は諦めて腰を下ろした。

恐らく一回で済む事は有り得ないだろうが、適当に何度か相手をしてやれば満足するだろう、と。

「って言うか、お前もやるのか？」

「あ、はい。誘われましたので」

「……出来るのか？」

「説明書を読みました。あ、ちょっとした小技も、一通りスリスさんに教えて頂きましたよ」

ニコニコと笑う雨音に毒気を抜かれ、涼二は小さく肩を竦める。どうやら、何だかんだで彼女も随分と楽しんでいるようだった。ちなみに、最後の一人であるガルムもしっかりと参加するらしい。が――

「……おっちゃん、付き合ってくれるのは嬉しいんだけど、スクワットやりながらプレイするの止めてくれない？」

「むう」

上下運動を繰り返すその姿にうんざりとした様子を見せるスリスに、涼二は小さく苦笑する。

まあ、無理もない反応ではあるのだが。

「さて、とにかくやるよー」

「はいはい」

やる気に満ち溢れたスリスは、さっさと自分の使うキャラクター

を選んでしまう。

彼女の場合、その気になればコントローラーを握らずにゲームをプレイできるのだが、対戦ゲームの時は対等な立場でプレイするのがポリシーのようだ。

ともあれ、涼二も適当にキャラクターを選んでゆく。

炎の剣を使うキャラクターに、一瞬懐かしさを覚えたが、スリスが不機嫌そうな顔をしたので止めることにし、涼二はそれと同じような動きをするキャラクターを選択した。

スリスは電撃を使う小型のキャラクター、ガルムは大型のモンスター、そして雨音は魔法を駆使して戦う姫となっている。

「よし、じゃあスタート！」

スリスがステージセレクトでランダムを選び、ゲームが開始される。

とりあえず全員暗黙の了解として、ゲームに慣れるまでは雨音を狙わないと言う事で一致していた。

ゲームでは、普段の練習によって腕を高めたスリス、卓越した反射神経を持つ涼二が先行、防御などを得意とするガルムがそれに続く形となっている。

とりあえずある程度戦い、このまま最初の戦いは雨音を無視した形で戦い、最後に残ったプレイヤーが実戦代わりに付き合うような形になる——と、思われたのだが。

「分かりました！」

「うおっ!？」

唐突に歓声を上げた雨音に、涼二は思わず肩を跳ねさせる。
その隙にスリスから攻撃を受けそうになるが、それは何とかガードして凌いだ。

何事かと思い、雨音の操作するキャラクターを探そうとして――次の瞬間、涼二のキャラクターは画面外へと吹き飛ばされていた。

「は？」

「え？」

涼二とスリスの呆然とした声が重なる。

何の事はない、ガードした涼二のキャラクターを投げ技で上に飛ばし、空中で二回コンボを決めただけだ。

が――高威力の範囲が極端に小さい空中技を見事に当てるのは、非常に難しい事である。

そんな二人の様子に堅実なガラムが距離を取る中、雨音はスリスのキャラクターに接近して投げのモーションに入る。

「つまり……空戦エネルギーです！」

「何一つ関係ないっ!？」

「ふむ。反射神経、リズム感覚、どれを取っても一級品だ……格闘技を覚えれば大成するだろう」

「おっちゃんも冷静に分析しないでっ!？」

そんなツツコミを入れている間にも、スリスのキャラクターは空の彼方へと吹き飛ばされる。

その後、雨音のキャラクターは一機たりとも削られる事なく、三人をしっかりと殲滅したのだった。

予想外の敗北に、スリスがぐったりと地面に転がる。

「こ、こんなはずは……」

「舐めてたお前が悪い……つってもまあ、俺も舐めてたんだが。お前、こういうのやった事あったのか？」

「いえ、今日が初めてです」

「初めてでこれって……」

どんよりと黒い雲を背負っているスリスに苦笑しつつも、涼二は雨音の意外な才能に驚愕を隠せずにいた。

どうやら雨音は、思っていた以上に頭や要領がいいようだ。

「しかし凄いな、雨音君。このような才能があったとは」

「ふふ、ありがとうございますガラム様。でも、これはきっと、とっても楽しいから頑張れるんだと思いますよ」

雨音の解答は、通じているようでやはりどこかがズレている。

けれど、純粹に現状を楽しんでいるその笑顔に、涼二は思わず息を飲んでいた。

「私はずっと一人で、友達もいませんでした……日によって変わる家庭教師の方と勉強して、自分で本を読んで、適度に運動をして……そんな生活だけを送って参りました。

ですから、本当に嬉しいんです。同じ目線で、一緒に遊んでくださる方がいるのが……だから、ありがとうございます」

何処までも純粹に、晴れやかな笑顔で、雨音はそう口にする。

その言葉に三人は視線を合わせ——同時に、笑顔を零していた。やはり彼女は憎めない存在だと、そんな風に再確認しながら。

* * * *

元々の道筋とは少々違う場所、人気の少ない場所を通して新東京へと戻ってきた涼二は、能力使用による疲労を癒す為に目に付いた

公園のベンチで腰掛けていた。

と言いつつも、海を渡る程度の能力使用で、彼がそれほど疲労を感じるような事は無い。

精々、軽いジョギングを行った程度の体力しか消費していなかった。

「……静崎雨音、か」

虚空を見上げ、その脳裏に思い浮かべるのは、しばし預かる事となった少女の姿。

そして、そんな彼女とあらゆる特徴が似通っている涼二の姉——氷室静奈の姿だった。

長い黒髪と、青紫色の瞳。少々世間知らずな所も、明るく優しい笑顔も、全てが似通っていた。

「……いや」

涼二は小さく苦笑する。

全て、というには少々語弊があるのだ。姉が持っていたルーンは、雨音のようなSのルーンソウイルではない。

それよりも、もっと自分に似て、しかももっと強力な力。

姉が僅かだが見せてくれたその力を思い起こし、涼二は小さく息を吐き出していた。

——そう、違うのだ。だから、静崎雨音が姉である筈が無い。

（そもそも、年齢も合わないしな……）

資料によれば、雨音の年齢は十六歳。

彼女は一応、十五年前の大災害は経験している。つまり、その時に存命だった涼二の姉が、彼女であるという筈が無いのだ。

そう、だから——あの日、無残に殺された姉が、戻ってくる事など有り得ない。

「ッ……！」

奪われ、失われたのだ。あの優しい笑顔は、永遠に。

赦せない。一体姉さんが何をしたと言うのだ——そんな怒りの感情ばかりが、涼二の思考を支配していた。

身を焦がすような怒りはその意識を静かに焼き、そしてそれと共に氷のように冷たく鋭いものへと変化させてゆく。

瞳が向かう先は、遥か彼方に見えるユグドラシルのビル——そこにいるであろう、ある男に対して。

と——次の瞬間、どこか苦笑のようなものの混じった声が涼二の背中へとかけられた。

「昼間から随分と猛っているようだね、涼二君」

「む……路野沢さん？」

涼二が振り返った先に立っていたのは、スーツを着込んだ一人の

男性。

無造作に切つてある黒い髪に黒い瞳、薄っすらと浮かべられている笑顔。

二十台半ばほどに見えるその姿は、どこか印象と言うものに乏しく、見てもすぐに忘れ去られてしまうような外見をしていた。

彼はユグドラシルに所属する構成員であり——そしてそんな身でありながら、ニヴルヘイムというグループを発足させた張本人。つまり彼は組織の裏切り者……普段、涼二達に依頼を持ち込んでくる人物なのだ。

今回に限っては、彼以外からの依頼となっていたのだが——

「中々、大変そうな仕事を請け負ったようだね」

「……お見通しですか」

思わず、涼二は苦笑する。

いつの間にかあらゆる物事を見破っている。彼は、そういう人物なのだ。

そして言葉巧みに近寄り、誘惑して来る——涼二達は、彼が決して善人と呼べる人物ではないと言う事は初めから理解していた。けれど、三人はそれを承知で利用されているのだ。

手段や方法、そして己の身の安全すらも問わない。それが、彼らの覚悟だった。

路野沢は小さく笑みを浮かべながら涼二の方へと近づき、許可を取ってからその隣へと腰を降ろした。

「今回の仕事、君はどう思うかな？」

「どう……とは？」

「今は少々眼を曇らせてしまっているようだが、それでも君は本質を見抜く眼を持っているだろう。」

冷静に考えるまでも無く、君はいくつかの疑問を抱いている筈だ……違うかい？」

「……」

その言葉は、耳を通して頭の中に浸透するように広がってゆく。そしてそれと共に、猛り狂っていた涼二の怒りも、またゆっくりと静まっていった。

そんな己の状態に驚きつつも、涼二は声を上げる。

「静崎雨音は、始祖ルーンの持ち主。だが、始祖ルーンに逆位置と言うものは存在しない筈」

「そう。それは、君も良く知っている事だ」

「……そして、彼女の体に刻まれていたルーンも、逆位置の記号にはなっていないかった」

「しかし、その力はまさしく逆位置のもの。それは、何故か？」

「路野沢さん——静崎製薬ってのは、本当にただの製薬企業なんですか？」

あのビルに潜入した時から、涼二はいくつかの疑問を抱いていた。いくら社長の一人娘で、始祖ルーンの持ち主だからと言って……あの警備の嚴重さは異常だ。

そして、それほど嚴重な警備をしなくてはならない相手を、態々リスクを冒して会社まで連れてくる理由は？

それらの疑問は口に出されること無く――けれど、路野沢はそれら全てを理解しているかのように、口元に笑みを浮かべていた。

「あの企業が研究している内容は、確かに周囲に発表している通りの事だ。しかし、それだけではない」

「……と、言うത്？」

「もうスリス君が掴んでいるとは思うが……あそこは、人工ルーンやルーン強化の研究を行っているのだよ」

「……！」

路野沢の言葉に、涼二は目を見開く。

どちらも、多くの期間で研究されている事柄ではある。

ルーン能力を持たない人間に対し、人工的にルーン能力を与える事が出来るかどうか。

そして、能力の位階を上げる為、ルーンの出力強化を行えるかどうか――そういう研究だ。

危険を伴うのは確かだが、決して禁止されている研究と言う訳ではない……が。

「あの、始祖ルーンの逆位置と言う特異な能力は、人の手によって作り上げられたものだ？」

「可能性は高いのではないかな？ 元々、自然に発生するものではないのだから、人によって手を加えられたと考えるのが自然だ」

「……」

自然物でないのならば人工物である――その言葉は、涼二にと

っても確かに納得できるものだった。

具体的な方法や、それを行った理由などは想像できないが、あの会社が何らかの実験を行っている事は予想できる。

ならば――

「依頼主の知りたい事は、その実験……？」

「さて。僕では深い部分までは調べられないからね。ここから先は、スリス君に調べて貰うといいだろう」

「……はい、ありがとうございます」

既に十分深い所まで調べられているのではないかと涼二は胸中で呟いたが、それを実際に態度に出す事は無くそう声を上げる。

しかし路野沢は、そんな内心すらも見透かしているような笑みを浮かべ――その視線に、涼二は居心地悪そうに身を振った。

涼二の様子に、路野沢は苦笑を見せる。

「ああ、そうだと涼二君」

「はい、何ですか？」

「前回の仕事の報酬を君の口座に振り込んでおいたから、確認しておいてくれ」

「あ……はい、分かりました」

この周辺の地図を脳内に描き、どの辺りに銀行があつたかを思い返す。

二十代に達しない若者が持つにはあまりにも大きすぎる金額が入っているのだが、あり過ぎて困ると言うものでもない。

口座に入っている金額を思い返しつつ、涼二は路野沢へと向けて頭を下げた。

「いつも、ありがとうございます」

「いやいや。君達のように優秀な者達には、あの程度の金額では少な過ぎるくらいだ。あまり感謝されては申し訳なくなってしまおうよ」

「……はい」

外見からは分かり辛いのが、路野沢は決して善良な人間と言う訳ではない——否、涼二たちと同じ、悪と断じられる人間だろう。それを分かっているからこそ、涼二は決して警戒心を解かぬまま頷いていた。

そして路野沢もまた、その態度に対し笑みを浮かべながら頷き、立ち上がる。

「では涼二君、次の仕事の時にでも」

「はい、分かりました」

「では」

軽く手を上げ、路野沢は踵を返して去ってゆく。

その背中を見詰め——涼二は、深々と息を吐き出す。

「……どうにも、距離が掴みづらいんだよな、あの人は」

それが路野沢と言う男のやり口だと分かっているからこそ、涼二は苦い表情を浮かべていた。

01-7: 謎と異変

「……ふむふむ」

高級マンシヨンの一室。

カーテンが閉められ、若干薄暗い室内——そこには、何台ものコンピュータが並べられ、その画面を輝かせていた。

そんな大量のコンピュータの前に座りつつ、スリスは小さく声を漏らす。

その画面上では、いくつものウィンドウが目まぐるしく変化している。

ハガラス
Hの電気信号による端末操作、そしてAの^{アンサズ}情報処理能力によるマルチタスク。

それらの力を操る事でスリスは入力機器に触れる事無く、そのルーンの力のみでコンピュータを操作し、ハッキングを続けていた。

（面倒な事してくれるなあ、これ……ダミーファイルに、しかもアクセスしたら自動で検知するシステムかあ）

胸中ではそう呟くものの、そんな数多の仕掛けを難なく躲し、スリスは情報の探索を続けてゆく。

感覚のみで様々な情報を処理できるスリスには、使える端末さえあればどのような情報であれ見る事は容易い。

例えそれが、大企業が機密として抱えるような情報だったとしても。意識を枝葉のように伸ばし、光のように走らせ、スリスはありとあらゆる情報を取得して行った。

（根こそぎ行ってるけど、それでも情報が少ない……やっぱり警戒されてるかなあ、セキュリティもかなり厳しくなってるし）

痕跡は残していない為、侵入経路はバレていない。

リスク回避を意識しているスリスは、いくら能力が優れていると分かっているけど、入念に安全策を練った上で侵入を行っているのだ。

そうやっていくつもの情報を手に入れてゆくが、その大半は表側——静崎製薬本来の仕事に関する内容ばかり。

その中で情報が暗号文化されている気配も無く、スリスはただ、何重にも張り巡らされたトラップを掻い潜りながら情報を探していた。

「これも違う、かあ」

治療用の薬を始めとして、サプリメントの類——そして、開発

していると宣伝しているルーン能力抑制の薬。

通常の企業ならば生命線とも呼べる情報の束ではあるが、簡単に手に入る以上はそれよりも隠したいものがあると言う事だろう。

スリスは、さらに意識を集中させる。発動している三つのルーン、その内のPの力が、隠された秘密を悉く暴き立てるのだ。

「ん……これは？」

と——そんな情報の波の中から、スリスは一つの文章を取り出した。

何やら、報告書のような内容の文章。消し忘れたファイルと言った風情のものだ。

或いは、書き終わって提出する直前の文章か。

「……いや、どっちでもいいかな。一応、断片とは言え欲しかった情報だし」

外部ネットワークに繋がっていないコンピュータの中へと放り込み、そのデータを再生する。

そこに書かれていたのは——ルーン能力の強化に関する研究の報告だった。

そんな内容に対し、スリスは思わず息を飲む。

「ルーンの強化実験……一応各国の主要研究機関が行ってる内容だけど……まさか、一企業がそんな事をしてるなんて」

今現在人々が持っているルーン能力は、皆後天的に備わった力が多い。

無論、十五年の月日が過ぎ、先天的にルーン能力を持って生まれてくる人間も増えたが――どちらにした所で、その力は予め定められた限界を超える事は無い。

ルーンの大きさと、プラナーナの量。それだけは、訓練で変わるようなものでは無いからだ。

故に、ルーン能力は才能に大きく左右される力であると言える。

また、強力なルーン能力者の数は、かなり少ない。

能力者のうちの大半は人間級ヒューマンと人外級フリークス。それらに数は劣るが、巨人級ティターンもそれなりに見る事が出来る。

けれど、災害級ディザスターからは極端に数が減り、全体の5%ほど。
神話級フェアファラに至っては、さらにその十分の一ほどの数しか存在しない。

その為、高位の能力者の価値は非常に高いのだ。

だからこそ、ルーン能力者を強化する実験と言うのは何処でも行われるものとなっているのである。

「ルーン強化、それに人工ルーンの実験まで……一企業に許可が出るはず無い」

情報が何処で削除されているかを調べ、スリスはそこから削除されたデータを復元してゆく。

現れるデータは、先ほどと同じくルーンの強化実験についての報告、さらには人工ルーンの実験に関する報告だ。

ルーン強化と同じく、様々な期間で研究されている人工ルーン。

ルーン能力を持たない人間に人の手でルーンを刻み、能力を発言させる事を目的とした実験。

しかし、ルーン能力の発動の仕組みは解明されているものの、発動後どのように現象へと変換しているのかのプロセスは殆ど明らかになっていない。

だからこそ、この実験は難しいとされているのだが――

「おいおいおい、これは……」

スリスは、そこに記されていた情報に対し、思わず口元を引き攣らせていた。

そこには、各国の研究機関――その中でも、最も進んでいるユグドラシルですら掴めているか分からないような情報がいくつも転がっていたのだ。

曰く――通常のルーンは全て始祖ルーンと繋がっており、霊体より発せられたプラーナは始祖ルーンへと送られ、そこで干渉力へと変換されて戻ってくる。

その処理の際にルーンの発光現象が起こり、ルーンと始祖ルーンの接続を確認する事が可能。

その為、始祖ルーンの解析する事で、人工ルーンも始祖ルーンとの接続を可能にすれば――

「……依頼主さんは、これを欲しがってたって所かな」

渴いた喉を鳴らし、スリスは呻くように声を上げる。

どうしてこの企業はここまで研究が進んでいるのか——それは、考えるまでも無い。

彼らは、始祖ルーンの持ち主である静崎雨音を抱えていたからだ。彼女の身体、彼女のルーンを調べる事により、彼らはその事実——かどうかはまだ微妙だが——を発見するに至った。

「収穫はあった、けど……もうちょっと調べた方が——」

そう呟き、スリスは再び端末へと集中しようとした、次の瞬間。唐突に部屋の扉がノックされ、そこから一人の少女が姿を現したのだ。

それは、今まさに調べていた人物である、静崎雨音。

「失礼します、スリスさん。そろそろお昼の時間ですよ」

「おー、ごめんごめん。すぐ行くねー」

雨音は世間知らずで天然な箱入りお嬢様だと思っていたスリスだったが、時折その認識を裏切られる事があった。

彼女は非常に要領がいいのだ。教えられれば、使った事の無い器具もすぐさまマスターしてしまう。

一度聞けば大半の事を覚えてしまう頭の良さは、あのガルムすらも唸らせるものがあった。

ただし、その注目する点が若干ずれているのは玉に瑕だが。

ともあれ、今回も一度で自動調理器の使い方を覚えた雨音が、昼食を用意してくれたのだ。

そんな彼女の姿に頷きつつ、スリスはハッキングを中断してコンピュータを外部から遮断、シャツダウンして席を立つ。

「それじゃ、行こっか」

「あ、その前にガラム様を呼ばなくては——」

「あー、うん。それはボクがやっとくから、雨音ちゃんは食事の準備の方をお願い」

「？ はい、分かりました」

苦笑いを浮かべつつ言ったスリスの言葉に、雨音は若干疑問を覚えていたようだったが、特に気にせず彼女は頷いて歩いてゆく。そんな背中を見送り、スリスは深々と嘆息を漏らす。

「……アレは、雨音ちゃんにはちよつと刺激が強いからなあ」

苦笑いと共に、スリスは雨音が向かったのとは別の方向へと歩く。向かう先は、この階層にある部屋の一つ。

そこは、外から様々な品物が持ち込まれている部屋となっていた。その持ち込まれている品とは——

「おっちゃーん、お昼——」

「ぬふううおおおおおおおおおおおおうッ！」

「……」

扉を開ける鳴り響いてきた雄叫びと、猛烈な汗の臭いに思わず挫けそうになりながら、スリスは深々と嘆息しつつ部屋の中へと入った。

鼻をつまみながら廊下の扉を開け——その奥にある部屋は、邪魔なものは撤去され、全面にマットが敷かれている。

周りに置かれているのは大量のトレーニング器具。

どれもこれも重量最大にして置かれているそれらは、スリスでは1mたりとも動かすことは出来ないような代物だ。

そして、その片隅——そこに、巨大な錘を背負ったまま懸垂をするガルの姿があった。

ぎしぎしと悲鳴だか歓喜なんだかの音を響かせる筋肉に、スリスは深々と嘆息を漏らす。

「おっちゃん！」

「ぬうううう……む、スリスか」

「そうですよ、スリスちゃんですよー、っと。おっちゃん、お昼ごはんが出来たってさ」

「ふむ、雨音君か？」

錘を床に置きつつ、ガラムが首を傾げる。

その重さによる衝撃で一瞬体が浮き上がるが、気のせいだったという事にしつつ、スリスは小さく肩を竦めた。

「あの子、結構頭がいいみたい。普通に勉強してたら、結構いい所まで行けたんじゃないかな」

「だが、半ば軟禁同然に扱われていた、か」

「うん……始祖ルーンの持ち主だったからって言っても、流石にち

よつと違和感があるかな」

始祖ルーンを隠したかったと言うなら、何もそこまでする必要はない。

学校に行けないなら行けないなりに、家庭教師でも何でもつけければいいのだから。

けれど、それにした所で、ルーン能力に関する知識が無いと言うのはどう考えても不自然である。

「……こういう表現は、悪いと思うけど」

「む？」

「雨音ちゃんは、飼こわれていた。そんな感じがするんだ」

「……ふむ」

言つて、スリスは一枚の書類をガルムへと差し出す。

タオルで汗を拭いつつそれを受け取ったガルムは——次の瞬間、その眼を見開いていた。

その書類に記されていたのは、『雨音』と言う少女の養子縁組に関する内容。

「……雨音君は、静崎義之の実娘ではなかった、という事か」

「そう。どんな経緯で彼女を見つけたのかは知らないけど、始祖ルーンに目をつけて連れてきたのは確かだろうね」

そしてその目的は間違いなく、始祖ルーンを研究する事による人

工ルーンの完成。

だとするならば、あの嚴重さも領ける——そう胸中で吐き捨てるように呟き、スリスは小さく嘆息した。

きつとそこには、親子の情は無い。ただの実験材料……ただ、それだけの存在として扱われてきたはずだ。

そんな憤りを吐き出す場所も無く、ガルムがシャツを纏う姿を、スリスはぼんやりと眺める。

「まだ、調べるべき事はいくつかある。詳細が分かったって訳じゃない。けど……」

「何か、思う事でもあるのか？」

「ん……まだ、予想でしかない。けど、あいつらは雨音ちゃんを人間として扱っていなかった……そんな風に思える」

——だから、赦せない。そんなスリスの言葉が発せられる事はなかったが、ガルムは彼女のそんな考えを僅かながらに察知して、小さく肩を竦めていた。

仲間達の事情は、互いに把握しているのだ。彼も、スリスの抱いている思いがどのようなものであるか、容易に想像する事ができたのだろう。

「ただの道具、実験材料……その為にルーンを弄って、制御不能なまでにして、まるでボクの目と同じように——」

「——スリス」

「あ……ご、ごめん」

「いや、君の言いたい事も分かる。私としても、そのような横暴を赦すつもりは無い」

服を着込んだガルの背中を追い、スリスは部屋の外へと歩き出す。

決して穏やかな心境と言う訳ではなかったが、彼女はガルの言葉によって多少の冷静さを取り戻していた。

そんな頭の中に、次にすべき事柄がいくつも浮かび上がってくる。そして、そんな気配を肌で感じ取ったのか、ガルムはくつくつと方を揺らしながら声を上げた。

「まず、研究資料。そして、彼女に施されている実験の詳細。そして、依頼者への問い合わせと言った所か」

「……今回の依頼者、かあ。何を考えてるんだかね」

「さて。少なくとも、今は味方であって欲しいものだがね」

見た目から何処までも肉体派に見えるガルムであるが、その実非常に思慮深く、知識も豊富である。

二手、三手と先を見据えるその様は、時にスリスと涼二の道標となっていた。

「今の彼女の状態が実験によるものであったとして、ならばどうすればその体質を治す事が出来るのか。

残念ながら、我々の技術力では到底不可能な事だ。故に、協力者が必要となる」

「……それが、今回の依頼者って事？」

「雨音君に情が湧いてしまっている今の君達ならば、その方が良いのではないか？」

「う……」

ガルムの台詞に、スリスは言葉を詰まらせる。

涼二が自分にとつての全てであると認識していた彼女にとっては、少々据わりの悪い事実だったのだ。

彼女は思わずぷいと視線を背けながらガルムを追い越し、そのまま雨音のいる部屋の方へと歩いてゆく。

「ふふふ」

「むー……」

手玉に取られている。筋肉の塊の癖に。その老獪さは何なんだ――と、スリスは胸中で叫ぶが、言えば余計にドツボにはまる事は分かりきっていた。

小さく嘆息し、辿り着いた部屋の扉を開ける――

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「……しかしまあ、随分と溜まってるな」

講座の中身の確認を行い、涼二は思わずそう呟いていた。

まだ二十歳にも満たない若者が持つには、桁が一つか二つ大きいと思われるこの額。

二、三年は遊び呆けても、まだまだ余るであろうそれに、涼二は小さく溜め息を吐き出す。

「どうせ使わないしな」

たまに欲しいものが出来れば買うが、そもそも物欲に乏しい彼にはそういったものが出来る事すら稀だ。

そして暮らしに関しても無駄な贅沢をするような性質は無く、あのアパートに落ち着いている。

——要するに、仕事が無い時は暇なのだ。

（さて、どうするかな）

指紋と静脈認証に用いた己の左手を見下ろし、そこに手袋を嵌め、金の使い方に関して思いを馳せる。

家具を新調するか——特に古くなったものも無い。

食事でもしに行くか——高級料理でも、そうそうなくなるような額ではない。

ゲームでも買うか——ゲームセンターにある筐体を丸ごと買ってもなお余る。しかも双雅が入り浸りそうだ。

「……ほんつとうに、どうするかな」

とりあえず当面の生活費は降ろしてきたので、しばらくは見る事もないだろう。

どうせ報酬が入る度に悩んでいる事でもあるのだ、今更気にしても仕方ない——と結論の先送りを行い、涼二はバイクに乗り込んだ。

「まあ、アレだ。双雅や桜花に飯でも奢ってやるか」

建設的な使い方とは言えないが、昨日のショッピングをキャンセルしてしまった負い目もある。

その分の埋め合わせをしてもバチは当たらないだろう、と涼二はバイクを動かす前に携帯電話を取り出した。

とりあえず電源を切りっ放しにしていた事を思い出し、ボタンを押して電源を入れる。

（さてと、どうやって誘うか——）

下手に出れば面倒な事を約束させられかねない——小さく肩を竦め、涼二は頭を悩ませる。

以前、悪ふざけで女装させられなかった事はまだ記憶に新しかった。微妙に冗談では無い。

ともあれ、会話を脳内でシミュレートしながら、通話履歴を呼び出す——その、瞬間。

「っと」

唐突に手の中の電話が震え、涼二は思わず携帯を取り落としかけていた。

何とかそれを掴み、画面を見れば——そこに映し出されていたのは、スリスの名前。

何か起こったのだろうかと思いを傾げ、涼二は通話ボタンを押した。

「もしもし。どうした、スリ——」

『涼二！ 雨音ちゃんが倒れた！』

「は……な、何ッ!？」

今度は違う意味で携帯を取り落としかけつつも、涼二は話を聞くために強くスピーカーを耳に押し付ける。

一瞬、聞き間違えたのかと己の耳を疑うが、スリスの声はそんな甘

い幻想を認めはしなかった。

『速く、戻ってきて！』

「ッ……分かった」

——どうやら、埋め合わせはまたの機会になりそうだ。

舌打ちを交えながら通話を切り、涼二は来た道に戻るようにバイクを動かし始めたのだった。

01-8..少女の真実

「――ガラム、スリス、どうなってる!？」

「涼二!」

「……病人の前だ、静かにな」

バイクでもと来た道を後戻りし、拠点へと帰ってきた涼二は、すぐさまベッドのある部屋へと駆け込んでいた。

そこにある大きな寝台と、その両側に立つ二人。そして、ベッドでうなされる雨音の姿。

顔を上気させて呻き声を上げている彼女に、涼二は小さく舌打ちをしつつも部屋の中へと入ってゆく。

「スリス、これはどういう事なんだ？」

「……かなり厄介な状態だよ。ここまでは流石に予想できなかった」

タオルで雨音の汗を拭いつつ、スリスが声を上げる。

その顔に浮かんでいるのは、普段はあまり見る事の出来ない焦燥の様なものだった。

そしてそんな表情のまま、スリスはその視線を涼二の方へと向ける。

「雨音ちゃんの身体には、色々と厄介な実験が施されていたんだ」
「実験……？」

「人工ルーンの研究で、身体を調べられていた。それだけだったら……いや、それだけでも許せる事じゃないけど、まだどうにかできる範囲だった。」

でも、彼女に施されていたのはそれだけじゃない」

言って、スリスは雨音の肌に直接触れぬよう気をつけながら、その身体へ己のプラーナを流し込む。

瞬間——

「っ、これは……！」

——その腹部にある始祖ルーンを取り囲むように無数の光のラインが現れ、雨音の全身を覆っていった。

時に曲線を、時に鋭角を描きながら広がるそのラインは、整然と並べられた記号のように見える。

「一体……？」

「人工ルーン研究で用いられた、プラーナの回路だろう。彼女はこ

れによってルーンの力を反転させられていた。NOT回路のようなものだ」

「人の手で、ルーンの効果を逆転させていた……」

思わず、涼二はそう呻く。

予想できていた事ではあるし、他に可能性が考えられなかったのは事実だ。

しかし、改めて聞くと現実味の無い事ではある。が、これを見た以上はそうも言っていられないだろう。

舌打ちをし、涼二はその光のラインへとじっと目を凝らす。

「ん……？」

そして、ふと気付いた。

薄いパジャマの上からでも見える光のライン——その一部が、途切れている事に。

細い糸で描かれているようなもので、注意して見なければ気付かなかったが、素肌の部分に浮かび上がっているラインの一部が途切れていた。

「……まさか」

「気付いた、涼二？　これだよ、問題だったのは」

「プラーナのラインが途切れた所為で、力の循環不良を起こしているようだ。どうやら、全体にも強化人間としての処理が施されているようだが……そちらよりも、やはりこのラインが問題らしい」

強化人間――体内のプラナ循環効率を高め、運動性能を強化した人間の事だが、涼二はその言葉に思わず目を見開いていた。強化人間を作り出すには非合法的な処置が必要であり、基本的に一般に知られた技術では無いからだ。

生来の障害などはプラナの循環不良によって起こっている為、その治療に技術の一部が用いられる事があるが、それ以外は表に出て来る事は無い。

「……一体、どれだけひた隠しにされていたんだ？」

「ボクでも発見するのにこれだけ時間がかかったんだ……嚴重にも程があるよ」

「ちっ……どちらにしろ、一般の研究所程度じゃ処置のしようが無いか」

強化人間の調整にはそれ専用の器具が必要となる。

始祖ルーンの持ち主であり神話級能力者の雨音には、循環量強化によるプラナの枯渇と言う事態は起こらないだろうが、それでも調整が無ければ長くは持たないだろう

「く……ッ！」

「落ち着け、涼二。迷った所で、我々に取れる選択はそう多くはないぞ」

「選択？ 『他人任せにする』の間違いだろ」

「確かに。だが、我々には彼女を救えないのは事実だ」

何処までも正論なガルの言葉に、涼二は唇を噛む。
自分達の持つ技術や能力では、雨音の身体を治す事はできない。
故に、技術を持つ何者かに彼女を預けるしかないのだ。

「可能性として考えられるのは三つだ。一つ、路野沢氏に協力を要請し、ユグドラシルの施設で彼女の調整を行う」

「却下だ。人工ルーンの技術と、始祖ルーン保持者を奴らに渡す訳には行かない。そんな事をすれば――」

「他の始祖ルーンの持ち主も同じく犠牲になってしまうかもしれない、か」

ユグドラシルには何人かの始祖ルーン保持者が存在している。

この研究成果を渡してしまえば、ユグドラシルは確実に彼らを実験対象として扱うだろう。

ルーン能力者を量産される可能性がある事も痛い、涼二にとってはそれ以外の問題も存在している。

かつての部下、思い入れを持っているあの少女もまた――

「ッ……二つ目は何だ、ガルム」

「ふむ。二つ、今回の依頼主に接触する事」

「あの人たちの目的は、この技術だと思う……なら、これを盗み出して彼らに提供すれば、雨音ちゃんの調整機具を用意できるかもしれない」

かぶり振って問いかけ、それに対し戻ってきた答えに、涼二は再び沈黙する。

先程よりマシだとは思われる。が――

「確実性に欠けるな、時間もかかり過ぎる……それにそもそも、そういったところで信用できるのか？」

「依頼主としては誠実だ。ただ、それ以上は私にも分からん」

つまり、技術に目が眩まないとも限らないと言う事だ。

被害の拡大は防げるが、それでも雨音に危害が及ばないとも限らない。

それに、雨音に処置を行えるだけの器具を揃えるまで、彼女が持たない可能性の方が高いだろう。

「……それで、三つ目は？」

「彼女を、静崎製薬に返す事だ。彼女は貴重な実験材料として扱われている……少なくとも、確実に調整は行われるだろう」

ガルムのその言葉に息を飲み――だが、納得出来るその答えに、涼二は抗議の声を飲み込んだ。

分かっているのだ。選択肢など存在していない事は。

「……返した後に奪還する、か？」

「技術と共に彼女を奪い返すのが理想形だろう」

「そう……だな」

「だがな、涼二よ」

小さく、だが重い声が響き渡る。

涼二はその言葉に籠った気迫に息を飲み、ガルムの方へと視線を向けた。

ガルムの強い視線と、その瞳の奥にある深い知性の煌めきに、縫い止められたように涼二は言葉を失う。

「我らの目的は、あくまでもユグドラシルに対する復讐。彼女を救う事がそれに繋がるとは、私には到底思えんのだが？」

「それは……」

「ただの感情論で、我々全員を危険に晒すつもりか」

「ちよっと、おっちゃん！」

「いや、いい……黙っている、スリス」

「涼二……!？」

ガルムの言葉を咎めるように、スリスが叫び声を上げる―――が、涼二はそれを手で遮った。

そしてガルムの目をまっすぐと見上げ、声を上げる。

「……確かに、お前の言う通りだ、ガルム。俺は、この女に対して執着している。復讐には関係ないものだろう」

「ならば、彼女を救う必要は無い筈だ。依頼主の指示に従っているだけでいい。それ以上のリスクを背負う理由は無いはずだろう？」

「ああ、正論だよ。アンタは間違っていない」

肯定。

ガルムの言葉に対し、涼二は言葉を詰まらせる事も無くそう言い放った。

その言葉に、スリスは体を震わせるが、かろうじて吐き出そうとした言葉を抑える。

そんな様子に胸中で苦笑を漏らし——涼二は、声を上げた。

「だがな、ガルム。アンタは、それで後悔しないのか？」

「む……？」

「俺は言っただ、ガルム。このまま見逃す事もできる。そうすれば、誰もが平穩に暮らす事が出来る。」

それでも、その選択をしてしまえば必ず後悔すると。俺はもう、後悔する選択をしないと——アンタも、それに同調した筈だ」

鋭い視線。強い意志。

ただただ強固な意志を込め——涼二は、ガルムへと向かって言い放った。

「答えろ、ガルム。アンタは、雨音を見捨てて後悔しないのか」

「……」

その言葉に、ガルムは沈黙する。

小さく肩を震わせているのは、怒りか、それとも——

「ふ、ふふふ……」

「……おい、ガルム」

「ははははははは！ やはり、期待通りの言葉を返してくれるな、涼二よ」

「……趣味の悪い試し方をするなよ、アンタは」

互いに、相好を崩す。

きょんとした表情を浮かべているスリスを尻目に、涼二は小さく苦笑を漏らしていた。

だが、ガルの言葉のおかげで決心する事が出来たのも事実であり、涼二はその事に対しても苦笑する。

（だが、これで決まりだ）

視線は、雨音の方へと。

ある筈のない姉の面影を見つめ、涼二は小さく頷く。

「……それに、回復系の^{ソウイル}S、しかも始祖ルーンの持ち主だ。味方に引き込みたい所だろう？」

「ふむ……確かなな。生傷の絶えぬお前には必要な力か」

「その為には、この逆転した状態の力を何とかしないとねえ」

ようやく調子を取り戻したスリスが、からかうような口調でガラムに同調する。

そんな言葉に肩を竦めつつも、涼二は二人の方へと視線を戻した。無茶な戦いをしている自覚がない訳ではない。

「さてと、それで方針は？」

「うむ。彼女を一度、静崎製薬の方へと戻すのは決定だ。ただし、我々だけでそれを行う訳には行かん」

「依頼主の方に連絡だね？ それだったら、ボクに任せて！ 向こうで繋いで来るから！」

走って出て行くスリスの背中を見送り、涼二とガラムは顔を見合わせて苦笑する。

彼女の姿からは、雨音を助けたいと言う思いが強く伝わって来ていた。

三人が三人とも、すっかりと彼女に情を持っていた事が、どこことなく滑稽に思えたのだ。

ひとしきり笑い——涼二は、声を上げる。

「さてと……それじゃあ、準備するか」

「うむ。まずは、依頼主を見極めねばな」

そこに含まれる色は、決して悲壮なモノなどではなかった。

* * * *

『……貴方達の事を侮っていたつもりはありませんでしたが、まさかこの回線をつきとめて連絡してくるとは』

「それはつまり、甘く見ていたという事だろう」

コートを纏い、バイザーを装着した涼二——《氷獄》ニヴルヘイムは、画面に映った引き攣り気味の少女の顔に向けてそう言い放つ。

鉄森シア。ユグドラシルに協力する鉄森グループの若き経営者。

そんな人物が依頼主であった事に若干の驚きを覚えつつも、バイザーによって表情を隠しながら、涼二は声を上げる。

「こちらの状況に関してはそちらに送った筈だが……このまま人質が死んでしまえば、そちらの目的が果たせなくなるのではないか？」

『……そう、ですわね』

手元に資料があるのだろう、シアは画面の下を覗き込み、そこで何か紙を捲るような仕草を見せる。

そこにあるのは、スリスが送った資料に間違いない筈だ。

既に読んであったのだろう、軽く流すように読むと、彼女は深々と嘆息して見せた。

『……成程、確かに厄介ですわね。とは言え、普通ならばその程度無視してでも進める所ですが、始祖ルーン保持者となつてはそうも行きません。しかも、Sとは^{ソウイル}』

「何か、特別扱いするような理由でも？」

『ええ、シングルルーンでS^{ソウイル}を持つ神話級能力者は過去に一人だけ例がありますが……その人物は、死んだ直後の人間ならばどのような状態でも蘇生させたと聞きますわ。それだけの力を手放すのは惜しい』

その言葉に、涼二はバイザーの下で視線を細める。

涼二から見ても常識外れなほど強大な能力。確かに、喉から手が出るほどに欲しいだろう。

あまり信用する訳には行かないが、とりあえずの味方として使う事は出来るだろう——そう結論付け、涼二は声を上げる。

「では、静崎雨音の処置に関して、協力して貰えるという事でかまわないか？」

『ふむ……そうですね。貴方達から受け取った資料は、データ化された一部のものだけ。わたくし達が望む情報までは至っていない。ならば、彼女を交換条件として利用するのでしょうか。』

彼女の奪還は——』

「俺達の仕事、という訳か」

『ええ、作戦の時間は追ってそちらに送りますので』

とりあえずは望み通りの状況を創り上げる事に成功し、涼二は小さく息を吐き出す。

しかし、重要となるのはこれから。まだ気を抜く訳には行かず、涼二は再び意識を研ぎ澄ませる。

この後は直接敵との戦闘になる可能性が高いのだ。油断していれば、どのような目に遭うか分かったものではない。

『——会長、そろそろ』

『ええ、こちらもあり悠長にはしてられませんわね。それでは、ニヴルヘイムの皆さん。ごきげんよ——』

「……？」

画面に映るシアの表情が、一瞬固まる。

涼二は訝しげに眉根を寄せ、彼女が視線を向けている方向へと振り返る——そこにあったのは、画面をじっと見据えるガルムの姿だった。

そしてさらにガルムの視線を追えば、彼が見ていたのは画面内に映っている巨漢の執事らしい男。

その男もまた、ガルムと視線を合わせ——

「『ふんッ！』」

——同時に、纏っていた服を盛り上がる筋肉で破き散らした。

「……って、何してんだアンタ達はッ!？」

「ふふ……やはり、あの時見た貴方の筋肉は伊達ではなかったようだな」

『貴方こそ。私の目に狂いは無かったらしい』

共にサイドチェストのポーズを決めながら語り合う二人——と言
うより、二つの筋肉の塊に対し、涼二とスリスは思わず画面から
遠ざかる。

ポーズを移行し、ダブル・バイセップス・フロントのポーズで語り
合う二人は、その様子に気付いていないようだったが。

(……って言うか、こんなモノまざまざと見せ付けられて、あの
お嬢様は大丈夫なのか?)

他人事ながら、見ていて若干気持ち悪くなってくる筋肉二人に辟
易しつつ、涼二は画面の中を覗き込む。

あまりのショックに気絶して、対応が遅れてしまったら問題がある
——しかし、そんな思惑は外れる事となった。

『嗚呼、何て大きく盛り上がった大胸筋……バルク、カット、どれ
を取っても素晴らしいですわ! やはり、わたくしの見立てに間違
いはありませんでした!』

「涼二、あの人筋肉フェチ——」

「言うな、分かってるから」

うっとり筋肉に見惚れているシアの様子に頬を引き攣らせつつ、スリスの姿を画面外へと押し出してゆく。

別に見られた所で問題があるわけでもないのだが、涼二としては正直あんまり同類と思われたくなかったのだ。

（って言うかあのお嬢様、まさかガルムがいるから俺達を選んだんじゃないだろうな……？）

乾いた笑いと共に胸中で思考を吐き出すが、あまり冗談になっていないような気がして、涼二は思わず閉口していた。

そうだとしたら、色々と考えていたのが馬鹿らしくなってくるような事実ではあるが。

しかし、『ニヴルヘイム』の正体を突き止めただけでも十分な情報収集能力だ。

恐らく路野沢に接触したのだろうが、そこに辿り着くだけでもかなりのものである。

やはり、規模としては大きい所だ。

「……スリス」

「ん、調べとくんだね？ どうしてユグドラシルの協力者なのに、その敵対者であるボクの力を頼ったのか」

「ああ。どうやら、腹に一物抱えてそうだ」

言って、涼二は小さく笑みを浮かべる。
もしかしたら、大きな協力者となってくれるかもしれない、と――

「……大丈夫か？」

「は、はい……」

バイクの後ろに乗った雨音に声をかけ、涼二はその解答の弱々しさにバイザーの下で視線を細める。

隣を駆ける狼姿のガルムもまた、どこか心配そうな視線を雨音へと向けていた。

着物や手袋越しに伝わってくる体温は非常に高く、見るまでもなく不調である事は分かりきっている。

（調整不足——調整の前に連れ去ってしまったのが、そもそもの原因か）

胸中で呟き、涼二は小さく嘆息した。

あの日、雨音があの会社に来たのは、体の調整を行う為だったのだろう。

しかし、それが完全に行われる前に、涼二達は彼女を連れ去ってしまった。

今のこの状態は、下調べの不足から発してしまった事と言えるだろう。

（とは言え、スリスを非難するつもりは無いがな）

ただひたすら責任を感じていた様子のスリス——彼女は、自分の調査不足を自覚していたのだろう。

けれど、データ化されていない資料が多く存在した上、残されていたデータもかなり巧妙に隠されていたのだ。

たとえば神話級能力者のスリスと言えど、それを調べ上げるのは至難の技と言える。

故に、涼二はそれを咎めるつもりは無かった。

まだ挽回の余地はある。雨音を取り戻す事は十分に可能だ。

そこまで考え、涼二は小さく苦笑を漏らした。

（取り戻す、か）

元々自分達が攫って来た側だと言うのに、随分な言い草だ——と。

しかしそれと同時に、そんな言葉が自然に出てくるほどに雨音へ入れ込んでしまっているのだと、涼二は自覚していた。

自分達の目的を考えれば、愚かな気の迷いともいえるかもしれない。けれども――

（もう、後悔はしたくない）

『あの時こうしていれば』と言う後悔がいくつもあった。

真に復讐すべき相手が誰かも知らず、そんな人間の下でただ力を振るい続けてきた。

氷室涼二は、己の身を引き裂きたいとすら思うほどの後悔を積み重ねてきたのだ。

――故に、もう後悔する選択肢を選ばないと決めた。

そしてそれは、仲間達にとっても同じ事。

『――聞こえる、涼二？』

「ああ、大丈夫だ」

『よっし。それじゃあ、ナビゲートはしっかり表示されてると思うけど……その目標地点に設定されている所が交渉の場所。』

そして、その前の緑の点で印されたポイントが、依頼主から指定された合流ポイントだ』

涼二の装着するバイザーの片隅に表示されていたマップが、スリスの声と共に少々拡大する。

そこに描かれているマップには、スリスの言う通り二つのポイントと、現在涼二がいる場所のマークが表示されていた。

あまり遠くはない位置だが、発電所近くであるためか、人の気配は

殆ど無い。

「……流石は大手のグループか。集めてるのも結構なレベルのようだな」

『それでも、ファーフラ神話級はいないみたいだけどね。一番強いのもディザスター災害級の能力者みたいだよ』

「仕事が速いな、お前は」

スリスの言葉に、涼二は小さく嘆息する。

どうやら、早速ハッキングして情報を引き出していたらしい。

シアに知ればどんな言葉が出てくるか分からないが、ガラム——の筋肉——を見せたら許して貰えるのではないか、とどこか乾いた笑みを浮かべて涼二は視線をマップから離れた。

『で、おっちゃんの方なんだけど』

『うむ、何だ？』

『おっちゃんは、涼二とは別行動。正直な所、静崎製菓の事はまだ調べ切れてる訳じゃないんだ。一体どんな隠し玉を持ってるか分からないから、隠れて待機だよ』

『ふむ、成程な。何かあれば、私がサポートに入ると言う訳か……了解した。涼二、背中任せてもらおう』

「ああ、頼む」

獣の姿でもつけられるようなインカムなど良く探してきたものだ、と脇を眺めながら涼二は肩を疎める。

肉体派でありながら知識も深いガラムは、突発的な事態にも対処し

やすい為、控えに回る事が多い。
能力は純粹な近接戦闘型ではあるが、その冷静な判断力は涼二も常に頼りにしていた。

「さてと——」

涼二はガラムに視線を向けつつ、バイクにブレーキをかけ始める。その視線を受けたガラムは小さく頷き、涼二とは反対にさらに加速して道を駆け抜けていった。

姿は一瞬で見えなくなってしまったが、バイザーの画面内では彼が何処にいるのかを一目で確認する事ができる。

どうやら、交渉を行う場所付近で隠れるつもりのようなだ。

その動きが止まったのを確認し、涼二は雨音を支えながらバイクを降りる。

「……歩けるか？」

「は、はい……済みません、ご迷惑をおかけして……」

「迷惑をかけているのはこちらの方だろう。少しは自分の立場を自覚しろ」

「あ……ふふ、そうでしたね」

顔色が悪いながらも、雨音は小さく笑みを零す。

そんな様子に嘆息し——涼二は、雨音の身体を抱え上げた。
突然浮き上がった身体に、雨音は目を白黒させて声を上げる。

「りよ、涼二様!？」

「本当ならば動くのも辛いんだろうに……変に遠慮をするな」

「で、ですが……」

「俺は手が塞がっていても戦闘に支障は無い。いいから、黙って運ばれろ」

「……はい」

視線を逸らしつつ涼二は声を上げ……そんな不器用な仕草に、雨音はきよとんと目を見開き、そして小さく笑みを零した。

そして彼女は、涼二の体に触れぬよう気をつけながら、そっと彼のコートを掴む。

バイザーの下、涼二は小さく目を見開き——そして、小さく苦笑した。

「さて……」

雨音の身体を抱えたまま、涼二は周囲へと意識を集中して歩き出す。

コートの下に隠れて外からでは見えはしないが、その左肩に刻まれたLの^{ラクス}ルーンは、僅かに輝きを放っていた。

周囲に変化は無い——それは、彼が空气中に能力で干渉した水分を散らしているに過ぎない為だ。

殺傷能力は皆無だが、周囲に存在する物体を把握する事が可能となる、Lの^{ラクス}能力者が良く用いる使用方法である。

尤も、奇襲に備えるような必要があるかどうかと問われれば、涼二としても答え辛い事はあるのだが。

（この密着している状態では、下手な攻撃は出来ないだろうしな）

荒い息を繰り返す雨音を見下ろしつつも、僅かな水で周囲の状況を探ってゆく。

涼二の能力による検索限界範囲は、およそ半径100mほど。

徐々に広がってゆくその範囲に――涼二は、複数の気配を捉えた。

「これは……集合地点の辺りか」

どうやら、シアの手の者が既に待機しているらしい。

とりあえず待たされる心配が無い事に安堵し、涼二はそちらへと向けて進んでゆく。

真っ直ぐな道の先――そこに停まっていたのは、一台の黒いワゴン車と、その傍らに立つ黒いスーツの男だった。

彼は涼二たちの姿に気が付くと、警戒した様子を見せながらも声を上げる。

「……ニヴルヘイムの方ですか？」

「ああ。約束通り、保護対象を連れてきた」

この暗い中、サングラスを掛けている理由があるのかどうかと首を傾げかけ、涼二はふと思いついてその動作を抑えた。

男の掛けているサングラスは、涼二の持つバイザーと同じような働きを持っているのだろう。

涼二は彼と、そして車の中の気配へと注意を向けつつ声を上げる。

「こちらは、そちらの指示に従うよう依頼を受けている。ただし、俺達が請けた仕事は、あくまでも彼女を送り届ける事だけだ。

そして、己の身の安全を優先する……問題は無いな？」

「ええ、そのように。では、参りましょう」

その言葉と共に、車の中から同じような格好をした男たちが現れ、先程の男と涼二を——と言うより雨音を——護衛するように囲みながら歩き出す。

若干の落ち着かなさを覚えながらも、涼二は黙ってそれに追従し始めた。

『……涼二、今話した人が災害級能力者だ。ディザスターけど、戦闘向けじゃないね。思考強化……どうやら、交渉役として連れてきたみたいだ』

スリスの言葉を受け、涼二は声に出さずに頷く。

先程の話を聞く限りでは、ここにいる能力者で他にいるのは巨人級ティターンという事だろう。

あまり強力な戦闘系能力者を連れて来なかったのは、涼二とガルムに期待しているという事か。

(……面倒だな)

涼二は、そう胸中で呟く。

無論何が相手でも負けるつもりは無いが、相手の得体が知れない以上、あまり油断は出来ない為だ。

何をしでかさ分らない——例え絶対的な力を持つ神話級能力者ファーストと言えど、その力を宿す肉体は人間の物だ。

決して不死身と言う訳ではない以上、油断をする訳には行かない。かつて部下に教え続けてきた事を思い起こし、涼二は気を引き締める。

『涼二、指定の場所に着くよ』

「……」

スリスの言葉を聞き、涼二は能力を使って周囲を探る。

すると、あまり苦勞する事も無く、交渉相手と思われる気配を察知する事が出来た。

人間が三人——そのうち一人は、ジュラルミンケースのような物を手に持っている。

鉄森シアが望んだのは、静崎製薬が雨音を使って実験したその研究成果。

それが、そこに収められているのだろう。

——涼二は、視線を細める。

（人数が少なすぎる……人数の指定をしたのか？）

静崎製薬ならば、雨音が今どのような状況にあるか、その想像が

っている筈だ。

強化人間の調整には専用の装置が必要——けれど、それでも応急処置が必要となる可能性も十分にある筈だ。

しかも、戦闘になる可能性も考慮しなければならぬと言うのに。

「……ガラム」

『潜んでいる人間はいない。正真正銘、三人のみのようだな』

『依頼人からの指定は時間と交換材料のみ。人数がいてもボクらが何とかできると思ってたみたいだね。』

あるいは、ボクらの戦闘能力を測るつもりだったのか……そっちも微妙だけど、正直ここで人数を揃えて来ないの思惑も分からない。気を付けて、涼二』

「ああ」

スリスの言葉に頷き、雨音の体を抱え直しながら涼二は沈黙する。鉄森シアの思惑は恐らく二つ。もしも相手が力押しできたのならば、涼二とガラムの力で殲滅させ、ニヴルヘイムの力を測る事。

相手の実力も同時に測り、可能ならばそのまま乗り込み、研究資料と機具を奪取する事だろう。

相手が素直に応じるのならばそれで良し、研究成果を受け取り、その後雨音の調整の準備が済み次第、雨音を奪取すると言った所か。

『……スリス、スナイパーの可能性は？』

『無いね。対策の為に木々の多い自然公園を指定したんだし、射線が通るような建物は、既に依頼主さんが押さえてるよ。場所が奪取された気配も無い』

耳に響くガラムとスリスの言葉に、涼二はその視線を細める。素直に応じるつもりか、それとも腕の立つ少数人数か。

だが、どちらにしる――

（――直接戦闘なら負けはしない。そしてどのような結果でも、必ずこいつは取り戻す）

戦うための、覚悟を決める。

その細く鋭い氷の刃のような戦意を保ちつつ、涼二たちは自然公園の中へと足を踏み入れた。

僅かな風が木の葉を揺らす、そんなざわめきのような音だけが響き渡る中、足音を忍ばせる男たちはゆっくりとその場所を進んでゆく。その木々の間――暗視機能の付いたバイザーに映る視界に三人の姿を確認し、涼二は静かに目を細めた。

立っていたのは、研究者と思われる白衣の男が一人。

そして、その人物を護衛するかのように、二人のスーツの男が控えていた。

（……能力者、だな）

二人が――威嚇のつもりか――纏っているプラーナの強さから、そう判断する。

そして彼らも、そんな事を考えていた涼二の姿を見て、じっと体を強張らせていた。

今の涼二は、プラーナの力を抑えている状態ではない。その為、そ

の放出量の差を見せ付けられる形となってしまうたのだ。
能力者の位階は、伊達で付けられている訳ではない。

最上位たる神話級は、文字通り神話に名を残すほどの力という意味で名付けられているのだ。

「――静崎製薬の方ですね」

涼二達の側にいた男――例の災害級能力者の男が、そう口にする。
ディザスター

それに対し、白衣の男がぴくりと肩を震わせ、声を上げた。

「あ、ああ……その通りだ。そこにいるのは雨音様だな？ 要求の物はここにある！」

「ふむ。では、それをこちらに」

「ッ……！」

あくまで冷静に、スーツの男はそう口にする。

それに対して相手は憤ったような様子を見せるが――その仕草に、涼二はどこか違和感を覚えていた。

何かが引つかかる、と。

涼二がじっと相手を観察しているその間、周りに控えていた男達がケースを回収し、中身の確認を始める。

そんな中、涼二はただじっと相手側の戦闘要員を見据えていた。少しでも戦うそぶりを見せれば、その刹那の内に凍て付かせる――そんな意志を込めて、相手を見つめているのだ。

「……ふむ、確かに。では、静崎雨音さんはお返ししましょう」
(一時的に、な)

胸中でそう呟き、苦笑する。

そして涼二は雨音をそっと地面へと降ろし、一步、二歩と離れた。
地面に座る雨音の視線——それを受け、涼二は小さく頷く。
必ず迎えに行くと、その意志を込めて。

熱に浮かされた雨音は、ぼんやりとしながらもそれを受けて頷き——

「——コード、《死喰いの女王》エリユーズニル」

——その全身に、輝く光のラインが浮かび上がった。

白衣の男の声が響くと同時、雨音の瞳からは意志の光が失われ、丹田の辺りにある始祖ルーンが輝き始める。

「ソウイルS——」
「ッ……!!」

戦慄と共に、涼二は後方へと強く跳躍した。

プラーナを全身へと行き渡らせ、可能な限り身体能力を強化し、遠くへ——

——刹那、満ち溢れていたプラーナが全て喰らい尽くされていた。

「が……ッ!？」

力が抜け、着地に失敗し、地面に叩き付けられる。

けれど、涼二はまだマシな方だった。状況を理解できていなかった黒服の男たちは、一瞬でプラーナを喰らい尽くされ、ミイラのように干からび、そして存在を分解されて消滅してゆく。

「これ、が……ッ」

隠し玉と言う訳か———そう言おうとしたが、ファーブラ神話級の莫大なプラーナすらも瞬く間に失われてゆく中、涼二は意識を保つ事すらも精一杯だった。

その霞む視界の中、全身に光のラインを浮かび上がらせる雨音が、立ち上がってゆっくりとその足を踏み出す。

(拙い———!)

この状況では、逃げられない。

始祖ルーンの力に対抗する方法など、殆ど存在しないのだ。もつれた足で逃げた所で、この力の効果範囲が一体何処まで存在しているのかも分からない。

(アレを、使うしか……)

失われてゆく力の中、奥の手とも言える力を使う事を決意し――
――涼二の体は、唐突に襟首を引っ張られ、休息に枯れ果てて行く自然公園から離れていた。

その速度に目を見開きつつも、目に入った黄金の毛並みに納得して涼二は頷く。

「ガルム……」

『大丈夫か、涼二？』

「ッ……あんまり、大丈夫じゃないかもな。魂までは行かなかったが、プラーナの大半を奪い取られた……全力で戦闘した後みたいな気分だ」

力の入らぬ四肢で何とかガルムの毛を掴みつつも、涼二は呻くように声を上げる。

余剰分であるプラーナは失われ、能力を使うにもかなりの消耗を強いられる事となるこの状況。

始祖ルーンに対抗する方法を持つにもかかわらず、一瞬躊躇ってしまった己自身に自嘲を浮かべ、涼二は深々と息を吐き出した。

「まさか、マインドコントロールまで受けてたとはな……流石に、予想外だろ」

『……休んでいろ、涼二。私が拠点まで連れてゆく』

「ああ……頼ん、だ——」

眩き、涼二は目を閉じる。

黄金に輝く毛並みの上——涼二の持つその黒い髪が若干伸びている事に気付いている者は、ガラムただ一人だけだった。

01-10：失敗と挽回

——声が、響く。

狂乱と悲鳴。そして、苦痛に喚く声。

涼二は、誰よりもこの音が何であるかを知っていた。

そして、誰よりもどのような光景が広がっているかを知らなかった。それでもその光景が見えているのは、ただの想像の産物でしかないと言う事なのだろう。

「痛い、痛いよ……暗いよ、何も見えない……お姉ちゃん、助けて……！」

「すぐに病院に連れて行くから！　ちょっとだけ、ちょっとだけ我慢して……！」

俯瞰する視界から見えるのは、二人の子供の姿。

一人は両目から血を流し、泣き叫ぶ小さな少年。そしてもう一人は、

その少年を背負って必死に走っている少女だった。

周囲に広がるのは巨大な火災——空から降る炎の雨によって、二人の住んでいた場所は火の海と化していた。

それでも、少女は走る。自分を庇って死んだ両親の遺志を、無駄にしないために。

「待ってて、もうすぐ……」

目が潰れ、見えていなかった光景。

だからこれは、実際にあったものとは異なっているだろう。

けれど、それでも分かる——助かる筈が無い。病院も焼け落ち、両目を潰された少年を救う場所など存在しない。

（夢……）

涼二は、小さくそう呟いた。

宙に浮かぶ己の意識、俯瞰する視点で見下ろす、かつて訪れた破滅の日。

15年前の、大災害。

その日、少年と少女は死ぬ筈だったのだ。

しかし、それは炎によるものではなく——

「ふむ……こんな所にいた訳か」

「え、あ……た、助けてください！ 弟が、弟が怪我をして！」

二人の前に、一人の男が現れる。

灰色の髪をオールバックにし、それと同じ色の長いコートを纏った大柄な男。

彼は、小さな少女の嘆願を無視し、静かにその手を掲げた。

「―――J」
ジュラ

その小さな声と共に現れたのは、長大な槍。
無数のルーン文字が刻まれたそれは空を斬り、真っ直ぐと少女に向けて突きつけられた。

「赦せとは言わぬ。存分に恨めば良い。だが、その命とそのルーンはここに置いて行け、《死の女王^{ニザルヘル}》」
「ッ……！」

槍が突き出される、その刹那。

少女の二つの瞳―――その奥に、青白い輝きが灯った。

「H、Th！」
ハガラス スリサズ

その叫びと共に、彼女の周囲を取り囲むように巨大な竜巻が現れた。

そしてそれと同時に、男の足元から伸びた氷の茨がその全身に巻き付き、彼の体を拘束する。

少女は風に乗って上空へと駆け上り、そのまま逃げる為に勢い良く飛んで行く。

——その、刹那。

「——え」

——投げ放たれた槍が、少女の体に突き刺さっていた。

彼女は目を見開き、喉奥から血を溢れさせ、それでも何とか風を操りながら地面へと墜落してゆく。

(ツツ……!)

その光景を、燃え滾る憎悪を隠そうともせず、けれど声も出せぬほどに怒り狂いながら、涼二はただただ目に焼き付けるかのように見つめ続けていた——

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ッ、う……」

「涼二！ 気がついた!？」

寝起きに響いた声に頭を抱えようとし——涼二は、体の動きが酷く鈍い事に気がついた。

震える手を見つめ、己が一体どうなってしまったのかを思い出し、そしてようやく覗き込んでいたスリスへと視線を向ける。

彼女の顔は、普段の飄々とした様子は何処へやら、泣きそうなほどに歪んでいた。

そんな表情をぼんやりとした頭のまま見詰めつつも、涼二は隣に立つガラムへと声を上げる。

「……あの後、どうなった？」

「研究資料、雨音君、どちらも静崎製薬によって回収された。それより大丈夫か、涼二？」

「ああ……何とかな」

プラーナを大量に削り取られた涼二の身体はかなりの疲労を訴えているが、それでも動ける程度には回復している。

手を握り、開き——そして、涼二はゆっくりとその身体を起き上がらせた。

いつもの拠点である高級マンションの一室、寝室として使っている部屋の大きなベッド。

深く息を吐いた涼二は、その視線を二人の方へと向けた。

「俺はどれぐらい寝ていた？」

「……大体、四時間ぐらい。依頼主の方にも連絡は入れてあるけど

……」

「……分かった」

頷き、涼二は目を閉じる。

己の中にあるプラーナの総量を確かめ、そして静かに嘆息を漏らした。

普段は溢れんばかりに感じ取れるその力も、今ではかなり減少してしまっている。

「30%って所か……始祖ルーン持ちと戦うには結構キツイ状況だな」

「……涼二。この状況でも、戦うつもりか？」

部屋の片隅に立ち、鋭い視線で声を発するガルムに、涼二は小さく肩を竦めた。

確かに、状況は芳しいとは言えない——いや、むしろかなり悪い状況だろう。

しかし、例えそうだとしても、涼二の心の内は既に決まっていた。

「あの時言った通りだよ、ガルム」

「……」

「俺は後悔したくない。ここで退けば、俺は確実に後悔するだろう」

確かに、無視すると言う選択肢が無い訳ではない。

けれど、そうしてしまえば、雨音を救い出す事は出来なくなってしまうだろう。

そんな後悔はしたくないと、涼二は視線に強い覚悟を込める。

「姉さんに似てるからとか、そんな理由じゃない。あいつを見捨てる選択肢は、俺が俺を許せないんだ」

「……ふ。やはり、お前はそう言うか」

ガルムは、小さく笑う。初めから分かっていたと、そう言うように。

その瞳には、涼二と同じような戦う覚悟が秘められていた。

そんな色に対して涼二は小さく笑う。どうやら、彼もまた最初から選択してしまっていたようだ。

そして、隣に並ぶスリスも小さく頷く。

「そもそも、ボク達の情報を持ってる雨音ちゃんを敵に渡す訳には行かない。喋りはしないと思うけど、それでも……ちゃんと連れ戻さないかね」

「ああ、そうだな」

笑みを浮かべ、涼二は立ち上がる。

若干ふらつく足を叱咤し、真っ直ぐと。

その身体に蓄積した疲労はかなりのものだが、それでも彼が折れる事は無い。

大きく背筋を伸ばし、涼二は二人へと向けて声を上げる。

「スリス、依頼主の方に連絡を入れてくれ。それと、静崎製薬の現在の状態に関して調査を」

「了解だよ、涼二」

「ガラム、霊石の貯蔵はどれぐらいあった？」

「それほど量は無かったと思うが……まあ、お前が一度全力で戦闘できる程度には回復させられるだろう」

プラーナの結晶体である霊石は、砕き割って吸収する事で、少量ながらプラーナを回復する事が出来る。

しかしかなりの高級品であり、小さな欠片でも数十万と言う高値がつくような品物だ。

それを複数持つて、しかも湯水のように使うような真似をするような者は存在しない——普通ならば。

涼二達がそれを所持しているのは、今まで戦ってきた相手から奪ったものがいくつか存在している為だ。

ちなみに、普通に買おうとすると足がついてしまうので、正規ルートでの購入は行っていない。

尤も、大きな欠片を用いたとしても、涼二のプラーナ総量から考えるとごく一部しか回復できないのだが。

（それでも、無いよりはマシだ）

胸中で呟き、小さく笑みを浮かべる。

あの時の雨音は、キーワードによるマインドコントロールを受けていた。

つまり彼女を助け出すには、必然的に彼女と戦わざるを得なくなるという事だ。

しかし、彼女は始祖ルーンを持つ能力者、普通に戦うだけでは再びプラーナ吸収の餌食となる事だろう。

（……俺達でも、始祖ルーンに対抗するための方法はたった一つだけしかない。その為には、一瞬でいいから全力を出せる状況でなければ）

涼二は、胸中で小さく呟く。

三人の中で、始祖ルーンの力に対抗するだけの力を持っているのは涼二のみ。

故に、雨音と戦うのは彼となるだろう。

「……作戦が必要になるな。ガラム、頼めるか？ 俺はプラーナの

補給に行ってくる」

「ああ、了解した。では……三十分後に、スリスの部屋でという事にしておこう」

「うん、分かった。ボクも、色々と調べとくよ」

「頼む。それじゃあ、一旦解散だ」

三人は頷き、それぞれの目的となる部屋へと向かって行く。

二人の背中を見送り、涼二は倉庫代わりに使っている部屋へと向かって行った。

*
*
*
*
*

(……結局、プラーナは半分程度が限界か)

とりあえず動き回るのには困らない程度の力を回復し、涼二は廊下を歩く。

その身に宿すプラーナの総量は、普段のおよそ半分と言った所。周囲を一瞬で凍てつかせるような大規模な使い方は自粛せねばならない量だ。

己の身に刻まれたルーンたちを意識し、涼二は静かに目を瞑る。

「……よし」

——確信を得て、小さく頷く。

全ての力を問題無く発動出来る事に安堵し、涼二はスリスの部屋の扉を開けた。

若干薄暗く、その中にぼんやりと浮かび上がる数多くのディスプレイ。

めまぐるしく変化するウィンドウの中には、主に静崎製薬社内の見取り図のようなものが多く見受けられた。

そんな画面たちの前で話し合っていたスリスとガルムの二人は、涼二の気配に気づいて振り返る。

「涼二、もう大丈夫なの？」

「ああ……と言っても、とりあえずだけどな」

戦闘行動に支障はないが、それでも全力を出せるかと聞かれれば微妙な所だ。

それでも、勝算はある。ならば、それを最大限に生かす方法を取ればよいだけ——涼二は、頷きながらガラムへと視線を向けた。それを受け、彼もまた小さく頷く。

「さて……今回の事に関して、依頼人の見解だが——」
『——こちらは、これ以上のリスクを冒す事は危険、と判断しました』

ディスプレイの一つに映った画面、そこに映る一人の少女が声を上げる。

どうやら、既に話を交わしていたらしい。鉄森シアに対して首を傾げ、涼二は声を上げる。

「いやに諦めがいいんだな」

『いいえ、諦めてはおりませんわ。ですが……』

「生憎と、鉄森グループの手勢に、始祖ルーン保持者に対抗しうる能力者は存在しないそうだ」

「ああ……まあ、そりゃそうだな」

横から響いたガラムの言葉に、涼二は小さく肩を竦めた。

ある意味、当然と言えば当然だ。神話級フェアブラすら珍しいのに、その上を行く始祖ルーン保持者への対抗手段などそうそうありはしない。そして、彼女の手が届く範囲にいる可能性は——

『故に、彼らとの直接戦闘はあなた方にお任せいたしますわ』
「まあ、初めから増援は期待してなかったし、それに関しちゃ問題ない」

嘆息交じりに額へと手を当て、そして涼二は今更ながら素顔を晒してしまった事に気が付いたが、相手も顔を出しているのだからあまり差は無い。

涼二は、既にこの相手の事を警戒に値する人物と認めていた。簡単に手放してくれるとも思えず、そして雨音の事もある為、協力はしなければならぬ。

——最終的には、スリスの調査次第となってしまうだろう。

『わたくし達が協力できるのは、あなた方の撤退……そして、奪取したデータによる、静崎雨音の調整です』

「……つまり、今後も協力体勢を結びたいと？」

内心、涼二は舌打ちする。

協力とは名ばかり——これは人質を取られているのと同じ状況なのだ。

雨音は、その体質を完全に元に戻さない限り、調整無しでは生きてゆく事が出来ない。

雨音の命を盾に協力させられる関係——そういったものも有り得るのだ。

警戒の度合いを高め、涼二は視線を細める。が、そんな表情に対し、シアは少しだけ口元を綻ばせた。

『協力というより、共闘でしょうか。わたくしは、あなた方と対等な関係で臨みたいと思っておりますわ』

「……何？」

涼二は、思わず眉根を寄せる。

ガラムも意外だったのか、同じように訝しげな表情を浮かべていた。確実に優位を取れるこの状況で、彼女は何故その立ち位置を放棄したのか、と。

「どういうつもりだ？」

『人の感性を持っている者相手には、人として対応した方が良いでしょう——そう考えただけですわ』

その言葉に涼二は顔を顰め、対してガラムは感心したように目を見開いた。

シアは、涼二達が雨音に対して情を抱いていた事に気付き、同じように対等な関係を築こうとしているのだ。

利用し、利用される関係では、信頼と言うものが発生する事はない。だが、対等な関係としてならば、『感謝』というおまけが付いてくる事があるのだ。

それを見抜いているから、彼女は対等な関係を望んだ——優位な立場を捨ててまで。

「……厄介な手合いだな、アンタは」

『褒め言葉として受け取っておきますわ』

「まったく……了解した。静崎雨音の奪還はこちらに任せて貰おう。

正直、増援があったとしても邪魔なだけだ」

ディザスター
「災害級ぐらいなら欲しい所だけど、それ未満だと流石に邪魔になるからねえ」

涼二の言葉に、肩を竦めながらスリスが同意する。

ディザスター
戦闘向けではないスリスだとしても、災害級能力者程度ならば赤子の手を捻るようなものだ。

下手な増員は息を合わせる事も難しい為、返って邪魔にしかならないだろう。

「さて、では作戦だが……まあ、相手もこちらが来る事を予測している以上は、潜入してもそれほど意味は無いだろう」

「ふむ……」

ガルムの言葉に、涼二は小さく呟きつつ口元へと手を当てる。

警戒されているのだから、雨音だけを連れ去ると言う訳にも行かないと言うのは確かだ。

連れ去る前に、再びあの能力を発動してしまうだろう。

「故に、今回は正攻法だ。正面で盛大に暴れ、注目を集めている間に、まずはセキュリティの中枢を押さえる」

「ここだね。25階……ここをボクが担当するって事だね？」

「その通り。そこで建物全体のシステムを掌握する——そうすれば、涼二が目的の場所まで辿り着けるだろう」

「……そこで、雨音を確保か」

普段ならば、スリスが出る必要は無いだろう。

しかし、内部からでなければ手に入らないデータ、そして——誰にも見せる訳にはいかない能力というものが存在している以上、彼女が出撃した方が確実だ。

「その正面で暴れるのはお前がやるって訳か？」

「ふふ……迷い込んできた金色の毛並みを持つ刻印獣ルーンクリーチャーが、運悪く建物の前で暴れるだけだ」

ルーンクリーチャー
刻印獣というのは、ルーン能力を持って凶暴化した動物の事だ。

時折人知を超えた力を発するものも存在し、非常に恐れられている存在でもある。

倒して報奨金が出るほどなのだから、その危険性が窺えるであろう。そんなモノが暴れれば、当然ながら騒ぎになり、戦える者は前へと出て来る事だろう。

「その混乱の間に俺達が侵入する、か……単純だが、分かりやすいな」

「だが、その分雨音君の警護は厳しくなるだろう。お前にかかっているぞ、涼二」

「……分かってる、何とかするさ」

ガルの胸板を拳で叩き、涼二は笑う。

そこにあるのは、決して悲壮な覚悟ではなかった。

「やるぞ。必ず勝つ」

「勿論！」

「ふふ……」

そして——ニヴルヘイムは、本格的に動き出したのだった。

01-11：血染めの狼

緑の光に包まれた周囲が、緩やかに揺れる。

半ば沈んだ意識のまま、雨音はぼんやりと周囲の光景を見つめていた。

衣服は奪われ、淡い緑色の液体に満たされた容器の中、その意識は覚醒と喪失を繰り返す。

そしてその長い髪は、水の力で広がり緩やかに漂っていた。

（スリスさん、ガルム様……）

その中で僅かに残った意識は、連れ去られた時の事——あの三人と共に話をし、食事をし、ゲームをした時の事を思い返していた。僅かな、本当に短い時間だったけれど、確かに穏やかで楽しかった記憶。

そして——

（涼二、様……）

冷淡で、けれども仲間達の前では優しく穏やかな表情を見せていた青年。

彼の姿を思い出し、雨音はまどろむ意識の中で静かに目を閉じていた。

その姿を、出来るだけ明確に思い返す為に。

（私も、仲間になれたら……同じような表情を、向けて頂けたのでしょうか？）

益体もない思考に、しかし苦笑するほどの意識の余裕も存在しないまま、雨音はぼんやりと思考を続ける。

自分に対し、どこか切なそうな視線を向けていた彼。一体何を考えていたのか、僅かな付き合いしかない雨音には分からない。

けれど、それを無視する事は、彼女には決して出来なかった。

（貴方は何を考え、そして何を望んでいたのですか？）

分からない。

雨音は、分からない事はいつも諦めながら過ごしてきた。

知りたいと思ったとしても、それを知る為の方法がなかったから。だからいつも諦めていたのだ。『無駄だから』と、『意味が無いか

ら』と。
けれど――

（知りたい……）

――何故彼は、自分の姿を見た時に驚いた表情をしていたのか。
――何故彼は、誘拐してきた自分に対し、ああも色々話をしてくれたのか。

――何故彼は、皆でゲームをして遊んだ時、ああやって笑顔を向けてくれたのか。

そう、雨音は思ってしまう。

知りたいと。氷室涼二と言う青年の事を知りたいと。

そう、思ってしまったのだ。

（けれど――もう、会えませんよね）

彼の事を殺そうとしてしまった。その事実が、雨音の心を苛んでいたのだ。

僅かに動く手で、彼女は己のルーンをそっと撫でる。

涼二が人を癒す力だと言っていたこのルーン――けれど、雨音にはこれが呪いのように思えてならなかった。

仲良くなってくれた人々とも触れ合う事ができない、そんな呪いなのだ。

(……だから、来ないで)

——警報が鳴り響いたのは、そんな瞬間だった。

＊
＊
＊
＊
＊

「さてと、準備完了かな」

スリスの小さな声が路地裏に響く。

涼二、スリス、ガルの三人——強大な力を持つ神話級能力者が集合する。

そんな周囲の様子を見据え、涼二は声を上げた。

「それじゃあ、手筈どおりにか」

「うむ。陽動は任せてくれ」

いつも通りのコートとバイザーを装備した涼二と、それと全く同じ服装をしたスリス。

二人は互いの装備を確認し、そして涼二のLの力を利用して、隣に立っている雑居ビルの屋上へと登って行った。

そんな二人の姿を見送り、ガルムは小さく息を吐き出す。

その格好は普段と変わらず、何処にでもあるようなスーツ姿。けれど——彼にとって、変装など元々無意味なものなのだ。

「Eh、T、R」
エフズ テイワズ ラド

ガルの太い両腕と胸元にあるルーンが輝きを放つ。

その輝きと共にガルの全身は頭髮と同じ黄金の毛に包まれ——

『———』
イラスト・ベステイア
《血染めの狼》

その姿は、巨大な人狼へと変化していた。

馬と変化を表す獣化のルーン、Eh。エフズ戦いと勝利を表す身体強化の

ルーン、T。^{ティフズ}そして乗り物や騎乗を表す加速のルーン、R。^{ラド}
それによって生み出されるのはただ強く、ただ速い獣——純粹な
強さのみを追い求めた、ガルム・グレイスフィーンのルーン能力。

『さて……では、往くとしよう』

そして——ガルムは、強く地を蹴った。
勢い良く上空へと跳躍した巨体はゆったりと滞空し、そして静崎製
薬ビルの真正面に着地する。

その巨体は獣化に伴い重さも格段に上昇している為、着地の衝撃だ
けでビルの前にある広場の地面が砕け散る。

轟音を響かせる巨体に、警備員達もすぐさま気付いて反応した。

「な……刻印獣！？^{ルーンクリーチャー} 何でこんな所に！？」

「このッ！」

入り口の両側に立っていた警備員、その左側にいた男が、ガルム
へと向かって拳銃を発砲する。

小型ながら十分な威力を持つ銃は、正確にガルムの身体を撃ち抜こ
うとし——

（止まって見える……）

けれど、R^{ラド}のルーンを発動したガルムには、銃の弾丸などその程

度のものでしかない。

弾丸を躲しつつ接近したガラムは、鋭く伸びた鉤爪で、男の身体を容赦なく薙ぎ払った。

鋼すら抉る五条の一閃は、警備員の身体を容赦なく細切れにし、周囲へと撒き散らす。

一瞬で血に染まる周囲と、ガラムの胸元。その獰猛な視線は、すぐさまもう一人の方へと向けられた。

「ひ……ッ！ お、応援だ！ 応援を寄越せ！ ビルの前でバケモノが暴れてる！」

（……そうだ、それでいい）

出来るだけ騒ぎを起こし、腕の立つ人間をこちらに集める事がガラムの目的だ。

故に、応援と呼ばれる前に倒してしまっただけは意味がない。

その為、彼へと手を下すのは若干遅らせていた。が——彼は、もう用済みだ。

元々、ガラムは殺人を好むような人間ではない。

出来る限りは殺さないようにするし、殺すにしても一瞬で殺す事を心がけている。

しかし、それは必要な場合のみに限った話だ。

ここでは、己が人間である事を気付かれてはならない。故に、獣として振舞う必要があるのだ。

目的の為ならば己の意思すらも黙殺する。ただひたすら、機械のように己が目的を果たす。

それが、ガラム・グレイスフィーンと言う男だ。

——例え、悪と断じられようと。

涼二の言葉が、ガルムの脳裏に蘇る。

それに対して口元に小さな笑みを浮かべ、ガルムはその爪を振り下ろした。

「——E、Z！」
エイワズアルジズ

——刹那、現れた緑の障壁が、ガルムの鋭い爪を受け止めていた。

小さく目を細めながら距離を取れば、ビルの中から現れたのは警備員を引き連れた一人の男。

（……防御系のルーン能力者か）

涼二から聞いた報告を思い出し、ガルムは納得しつつ低く構える。そしてそれとほぼ同時、男の背後に構えていた警備員達が、一斉に銃を構えた。

それと共に、ガルムは全身にプラーナを行き渡らせる。弾丸が発射される直前——ガルムは、強く跳躍した。

「なッ!？」

そのままビルの側面へと飛びつき、爪を突き立てる事でその側面

を駆け抜ける。

目指す先は、正面にいる警備員の集団。

プラーナを放出——光を纏う爪が、彼らの中心へと振り下ろされる。

「散開！」

『遅い……！』

小さく、聞こえないように呟く。

そしてその刹那、振り下ろされた爪が避けようとした人々の身を引き裂き、迸った衝撃波が残った人間を吹き飛ばす。

ルーン能力者の男はかろうじて防いでいたが、その直後に横殴りに回転して叩き付けられたガルの蹴りが、その障壁を紙切れか何かのように引き裂いていた。

——そして、反転。

『オオオオオオッ！』

一直線に突き出された手刀——その鋭い爪の先端が、男の胸を容赦なく貫いた。

「が、ふ………！」

『………』

血を吐き出す男の顔を、残った左手で掴む。

そして、ガルムはその首を折り、職務を全うした男の命を終わらせた。

男の体を地面に落とし、そしてガルムは再び跳躍する。

その体を貫こうとしていた弾丸は空を貫き、そしてそれを放った警備員は、上空から振り下ろされた踵落として砕け散った。

そして、左右に向けて振り払われた両腕が、その横にいた男二人を裂く。

黄金に紅を纏わせ、ガルムは構えた。

——まだ、敵の気配はしている。

『強いプラーナの気配……ふむ。ディザスター災害級ほどの能力者がいるか。これは、多少は楽しませて貰えそうだ』

小さく嗤い、ガルムはその気配が到着するのを待ちながら、周囲を取り囲む警備員たちへと躍りかかった。

加速した手刀の一撃が警備員をその装備ごと両断し、直後に跳躍して弾丸を躲す。

追い縋るように乱射される弾丸を次々と躲しながら、ガルムは近くに立っていた街灯の柱を切断し、それを近くにいた敵へと向けて蹴り飛ばした。

「うわあッ!？」

男たちはそれをかろうじて躲すも、巻き込まれた事で次々と転倒

してゆく。

ガラムはその街灯を追うように駆け抜け、それを掴み取る。巨大な街灯を片手で持ち上げたガラムは、それを用いて警備員たちを横から薙ぎ払った。

「ご——」

「げあアッ!？」

その一撃の重さは、高速で走る電車に撥ねられる以上の衝撃となる。

人体など容易く砕け散るその一撃——しかしガラムは、背筋を懸け上がる悪寒に、すぐさまその街灯を手放していた。

そして代わりに繰り出された鋭い爪が、上空から振り下ろされた光の刃を受け止める。

そこにいたのは、手刀から光剣を伸ばす一人の男。

「よくも、誠治を……!」

「裕樹! その化け物を押さえている!」

現れたのは、二人のルーン能力者だった。

ガラムに接近している光剣の男は、高速で駆け抜けながらその剣で攻撃を繰り出してきている。

（涼二が言っていたもう一人の能力者か——）

胸中で呟き、ガルムも駆ける。

相手が持っていたルーンはDとR。ダガス ラド加速型軽戦士系の使い方をして
いる能力者。

確かに、加速は単純で強力なルーン能力である。

が――

（――それ以上の加速を持つ者には、意味が無い）

プラーナをRのルーンに集中、それと共にガルムは強く地を蹴つ
た。

刹那の内に肉薄し、その速さに男は目を見開く。

突き出される爪――しかし、男もまた消耗を度外視して加速した
のか、その一撃に光の剣を合わせ、受け流して見せた。

（ほう……）

内心で、ガルムは感嘆の息を吐き出す。

あの土壇場でこれだけの反応を見せたのだ、どうやら能力だけと言
う訳ではなく、しっかりと剣を扱う訓練を受けているようだ。

男は下段から振り上げるようにガルムへと向けて一閃を繰り出す。
ガルムがその一撃を左の爪で受け止めつつ蹴りを放てば、男はその
一撃を後ろに跳躍しながら剣で受け、衝撃を殺しながら距離を取っ
た。

一撃でも喰らえば死へと直結すると言うのに、中々に上手いものだ、
とガルムは感心しつつ駆けようとし――

「^{スリサズ}Th！」
『ぬ……！？』

地面から伸びた茨が、ガルムの体を縛り付けていた。
氷の巨人を表す妨害のルーン、^{スリサズ}Th。その力は、確かにガルムの動きを止めていた。

（^{ディザスター}あちらが災害級か！）

位階は一つ劣るとは言え、非常に強大な力を持つ能力者。
力任せに破る事も出来るが、いかなガルムとは言えども若干のタイムラグは存在する。
そして――

「^{カン}K！ 燃え尽きろッ！」

男の掲げた手の上に発生する、巨大な火球。

炎と始まりを表す火炎のルーン、^{カン}K。いかなガルムとは言え、正面から喰らえば無傷では済まない。

故に――

『ウウオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアッ！！』

「――っ!?!」

「ひッ!?!」

極大の殺気と力を込め、ガルムは雄叫びを放っていた。

びりびりと震える空気は物理的な圧力すら伴って周囲へと叩きつけられ、知覚にあったガラスにヒビすら走らせる。

気当たり、というものが存在する。強い殺気や威圧のこもった視線を受けると、人はどうしても萎縮してしまうものだ。

獣の威嚇は特にそれが強いと言えるだろう。

無論、訓練されている人間が相手では、動きを止められたとしても一瞬のみ。

けれど、ガルムにとっては一瞬だとしても十分すぎる時間となる。

『ガアアアアアアアアアッ!』

「こ、このオ!」

ガルムへと向けて、男の炎が放たれる。

けれどその一瞬前に、ガルムは茨による拘束を抜け出していた。

強い踏み込みと共に景色を置き去りにし、爆発する炎すらも推進力へと変えて、その爪は一直線に男の首を刎ね飛ばす!

悲鳴を上げる暇すらなく絶命した男からは視線を外し、炎の先――未だ状況を理解していないであろう光剣の男へと向けてガルムは駆ける。

炎を吹き散らし、ただ前へ。

「なっ、貴様ッ!」

男もガルの姿に気付き、光の剣を発生させるが——遅い。その時点で、ガルムは既にその爪を振り上げている所だったのだ。そしてこの体勢では、受け流すと言う選択を取る事は出来ない。結果——

「がッ!？」

振り下ろされた一撃に、男は地面へと叩き伏せられていた。動く事もできない状態なのか、荒い息で痛みに喘ぐ男を、ガルムは静かに見据える。

「どう、して……こんな……」

『——ただの、エゴだ』

「な——」

人の言葉を解した事に驚愕したのだろう、男が目を見開く。けれど、それが彼の最期の反応だった。振り下ろされた爪は正確に男の首を切り裂き、その胴から分離させる。

血を吹き出して倒れた男の痛いから視線を外し、ガルムは静かに視線を上げた。

『……後は、お前達の出番だ。頑張ってくれ、二人とも』

そう呟く狼の姿——けれど、その口元はどこか笑っているような形に変化していた。

01-12：電光の侵入者

「派手にやってるみたいだな」

「うん。ボクらも頑張らないとね」

涼二の言葉に、スリスは小さく頷く。

ビルの上から見えているのは、人狼へと変身したガラムが、その身体能力を遺憾なく発揮して大暴れしている光景である。

あまりにも速く、あまりにも強く、そしてあまりにも荒々しいその戦い方に、スリスは小さく肩を竦めた。

「しかし、張り切ってるなあ」

「確かに。随分とやる気だな、あいつも」

「まあ、それに関しちゃ僕たちも人の事は言えないけどね」

互いに笑い合い、そして二人はビルの方へと視線を向ける。

真夜中のそこは、窓から漏れる光以外に照らし出されるものは無い。尤も、バイザーを掛けた涼二と、暗視カメラからの映像を直接電気信号で見ているスリスには、暗闇など何の意味も無いものではあったが。

「……さて、スリス」

「うん、もういいと思うよ」

正面入り口の状況を覗き込みながら、スリスはそう口にする。

そこには既に大量の屍と、それでもガルの侵入を阻もうとする警備員達の激戦が展開されていた。

圧倒的な差にもかかわらず逃げない辺りは、しっかりと金を受け取ってやっているプロの仕事というイメージがある。

また、内部で動いている警備員——彼らもまた、入り口の方へと集中してきている為、内側の警備はかなり手薄な状態になっていた。

つまり、今ならば容易く侵入する事も可能と言う事だ。

とはいえ、この状況では、最早戦闘は避けられない。

無理矢理制御室まで突入してビル全体の制御を奪い取り、その後涼二が目的の場所まで行く必要があるのだ。

決して油断する事は出来ないし、失敗も許されない。

——けれど。

「……涼二」

「ん、どうした？」

スリスは、じっとビルを睨む涼二へと囁きかける。
その傍らに、まるで支えるかのように寄り添いながら。

「必ず、成功するよ。だから、自信を持って」

「……！ ああ、必ずだ」

スリスの言葉に、涼二は口元に小さく笑みを浮かべる。
その腕に抱き寄せられる事に僅かな満足を得て、スリスもまた笑みを浮かべていた。

そして、涼二の手の中に水の塊が発生する。
彼の視線は真っ直ぐと、向かうべき場所へと向けられていた。

「涼二、見えてるよね？」

「ああ、目標地点は分かってる。その先のシミュレートもばっちりだ」

「けど、ボクがここに参加している以上は、突発的な状況には対応しづらいから注意してよ？」

「分かってる。お前も頼むぞ？ 俺が本気で戦うには、お前の協力が必要不可欠なんだからな」
「うん、勿論だよ」

そういつて、スリスは嬉しそうに笑う。
頼りにされている事が何よりも嬉しいと、そう言うかのように。

けれどそれを口に出す事は無く、彼女は強く涼二の体にしがみついた。

そしてしっかり掴まっている事を確認し、涼二はその手の水をビルの屋上へと向けて伸ばす。

屋上の手すりに巻きついた水がしっかりと体重を支えられる事を確認し――二人は、視線を合わせて頷き合う。

「行くぞ」

「うん！」

そして、二人は勢い良く空中へと身を投げた。

水のロープは二人の体重をしっかりと支え、加速しながら真っ直ぐにビルへと突っ込んで行く。

涼二のバイザーにはその突入すべき場所がしっかりと表示されており、二人の身体は一直線に目的地へと到達した。

例え強化ガラスだったとしても、涼二の力に貫けないはずが無い。水の弾丸によって無数の穴を空けられた窓ガラスは、その蹴りの一撃によって見事に破壊された。

ビルの中で着地に成功した二人は、すぐさまその廊下を走り出す。流石に人目に付かないようにと言う訳には行かず、少なくともはいるものの、警備員は確かに存在していた。

けれど――

「H、A――――」
ハガラスアンサズ
ジャミング
《妨害電波》！

スリスがルーンを発動させる。

放たれるのは、警備員達の連絡危機を妨害する為の強力な電波だ。涼二達の姿を見て仲間へと応援を呼ぼうとしていた警備員は、ノイズしか発しない通信機に目を見開く。

そんな様子を見つめながら笑みを浮かべ、スリスは声を上げた。

「涼二、ここはボクがやるよ。涼二はプラーナを温存してて」

「ああ、頼む。けど、無茶するなよ？」

「大丈夫、涼二ほど無茶はしないから」

それに関してはお互い様だと彼女は笑い、涼二は小さく肩を竦める。

そんな様子にスリスは再び笑みを浮かべ——その周囲に、雷光が迸った。

彼女の向かう先に存在するのは、武器を向けて威嚇している数人の警備員達。

「《インドラの矢》！」
サギタ・インドラ

彼女の周囲を待っていた雷は、その言葉と共に幾条もの閃光となつて虚空を貫いた。

放たれた光は避ける暇も与えず彼らに突き刺さり、その身体に強力な電圧を叩き込んだ。

痺れて倒れる彼らの横を走り抜け、スリスは小さく笑う。

「運が良ければ死なないよ」

「やれやれ」

電流を抑えているから死にはしないだろうが、その身体にかかった負荷は並々ならぬものだ。

決して、そのまま起き上がれるようなものではない。

下手をすれば障害を残しかねないものだが、スリスには全く罪の意識と言ったものは存在しなかった。

彼女は通常の教育を受ける事無く、ただただ実験体として生かされてきた存在だ。

解放され、一般的な知識を身につけた今となっても、その倫理観は常人と遥かに乖離したものとなっている。

「……」

けれど、涼二にもそれを咎める意思は存在していなかった。

スリスは何を聞かされたとしても自分自身に付いて来る——その確信があったから。

そして、スリスもまた、それに違わぬ強い意思を持っていた。

「よっ、ほっと……うん。涼二、ここからは別行動だよ」

「ああ、俺は上に向かう。お前は、セキュリティルームの制圧を頼んだぞ？」

「任せて。それじゃあ——」

「——幸運を」

互いに拳を突き合わせ、二人は別々の方向へと走り出す。

スリスはセキュリティルームの方面へ、そして涼二はエレベーターの縦穴の中に潜み、雨音がいる場所が判明するまで身を隠すのだ。掛けてゆく涼二の背中を感じ取りつつ、スリスはセキュリティルームの方へと駆けて行く。

「さーて、と」

涼二と同じバイザーを装備するスリスには、このフロア内の正確な情報を読み取る事ができた。ともあれ、頭の中にその情報を正確に再現する事が出来るスリスには、このフロアのマップなど直接ゲーム内に入り込むタイプのゲームと変わらない。

無論、直接目で見ている訳ではなく、能力を使った視認に過ぎないのだが。

しかし、そこには正確な地図と立体映像、そして警備員達の動きを正確に把握していた。

「ほいっと」

スリスのそんな軽い声と共に放たれた電撃は、壁に反射して軌道を変えると、その先から向かってきていた警備員の身体を打ち据える。

神話級能力者のスリスならば、もっと高い出力で能力を放つ事が出来る。

それこそ、天から落ちる雷をそのまま再現する事だって可能なのだ。けれど、彼女はそれをしない。Aアンサズを持つ彼女は、人を倒す最低限の

威力を心得ているのだ。

あまり手加減をする事は無いが。

敵を殲滅した事を確認したスリスは、マップ内で付近を動く相手がいない事を確認すると、近くにあった防火扉の制御盤へと手を触れた。

ハガラスアンサズバース フルミーナ・クラツカー
「H、A、P———《電光の侵入者》」

そしてスリスは、Aの力によって作り出した分割思考^{マルチタスク}を、制御盤を通して社内ネットワークへと侵入させる。

（とりあえず、防火扉が下りてきてもらっては困るから、その部分をシャットアウトする事として……）

さらに、セキュリティルームの扉にかかった電子錠を解除する。その部分の制御は内部からの操作権限を切り離し、さらにある程度のセキュリティシステムを解除。

本来ならば気付かれないように慎重に行う操作だが、今回は気付かれてでも無理矢理止めればそれでいい。

無論の事、泡を食ったオペレーターたちはスリスの操作を妨害しようとしてくるが———

（ボクの侵入を止めたきゃ、スーパーコンピュータでも持ってくるんだね）

胸中で呟き、スリスは小さく笑う。

この階層のあらゆるセキュリティを支配し、ようやくその手を離れたスリスは、目の前にある扉を前に少々考え込んでいた。

（どうしようかな……待ち受けてるんだよね、確実に）

スリスはカメラを支配して、内部の状況を既に把握している。

罵声を上げながらキーボードを叩いていた彼らは、今でも制御を取り戻そうと躍起になっている所だろう。

けれど頭が回る人物なら、スリスが次にセキュリティルームそのものを制圧しようとする事が分かる筈だ。

そしてスリスの能力は、室内ではかなり使いづらい威力を持っている。
る。

持っているルーンの中で戦闘に用いる事の出来るものはHのみ。ハガラス

そしてその力は、全てのルーンの中で最も高い破壊力を持つとされている。

下手に使えば、セキュリティルームの機械を破損させてしまうのだ。

「……しようがない。ちょっと疲れるけど、アレで行くか」

嘆息し、スリスは再び能力を発動しつつ、微弱な電気を周囲へと向けて流してゆく。

そしてそれと共に、スリスはセキュリティルームの扉を開いた。

同時——多くの銃口が、スリスへと向けられる。

それを受けて、スリスは両手を挙げながら口元に笑みを浮かべた。

銃口を向ける男の内、一人が声を上げて威嚇する。

「何者だ、何の為にこんな事をする!？」

「そりゃ勿論、囚われのお姫様を助ける為だよ」

当然だ、という風にスリスは肩を竦め、断言する。

無数の銃口を向けられたこの状況——下手をすれば一瞬で命を失うというのに、彼女の言葉には何処までも余裕が満ち溢れていた。そんな様子のまま、スリスは続ける。

「君達だって分かってるんだろう？ この会社が、非人道的な実験を行ってるって事ぐらい」

「っ……」

その言葉に、数人がぴくりと肩を震わせる。

やはり、この会社が雨音に対して行ってきた実験を知っている者がいる。

そして、知りながらそれを見て見ぬ振りをして来たと言う事も。

嘲笑うように、スリスは笑みを浮かべた。

「酷いよねえ。何も知らない子供を連れてきて、小さい頃からずっと実験台に利用してきたんだろう？」

可哀想だよ、雨音ちゃん。何も教えられず、ずっと軟禁されて利

用され続けてきた……何とも思わないのかな？」

「ッ、五月蠅い！」

「ああ、自分は知っているだけで無関係だからって事？ まさかそんな訳ないだろう？ 誰も助けてあげなかったのなら、同罪に決まってるじゃないか」

スリスは嗤う。何も知らない人間を食い物にして、利用してきた愚か者達を。

光を奪ったあの研究者と同じ、この外道達を——降霧スリスという少女は、決して許しはしない。

「彼女が助けを求めているなかったとでも思ってるの？ ただの道具とでも思ってたわけ？
それとも、給料貰ってやってるんだから、文句は言えないって？
そんなの言い訳に過ぎないって——」

——刹那、大きく響く乾いた音と共に、スリスの身体が揺れた。
赤い飛沫が、宙を舞う。

「黙れ、化物！ これはなあ、お前達なんかには邪魔されていい実験じゃないんだよ！」

「お、おい！」

引き金を引いたのは、部屋の端に立っていた一人の男。
彼は傾ぐスリスの身体へ向け、さらに二度、三度と繰り返し弾丸

を放った。

狂ったような笑みを浮かべる男は、次々とまくし立てながら倒れた彼女へと銃を向ける。

「この実験が成功すれば、様々な場所から仕事が舞い込む！ 分かるか、こんなモノ見逃せるはずがないんだよ！

どうせ何もしなきゃ勝手に死んでたか、ユグドラシルに吸収されてたガキなんだ、だから俺達が有効活用——」

「ああ。つまり、ボクを怒らせたって訳だ」

——そして次の瞬間、男の両足は背後から放たれた風の刃によって切断されていた。

「ぎっ、あああああああああああああッ！？」

絶叫と同時、男の思考を混乱が支配する。

確かに、スリスは入り口の場所で倒れていた筈だと言うのに——

「残るは君だけなんだけど……遺言はあるかなあ？」

「な、何で……！？」

彼女は、背後からゆっくりと歩いて来る所だったのだ。

いつの間にか入り口付近で血の海に倒れていた身体は消え、そして周囲のオペレーターたちは全て絶命し、スリスは無傷のまま逃げる

事もできない男へと近寄ってゆく。
その口元に浮かぶのは、凄惨な笑み。

「人を動かしてるのって、結局は電気の信号なんだよね。あらゆる情報も、脳が神経使って処理している以上、何らかの電気信号に変換されて体の中を駆け巡ってる訳だ」

「なっ!？」

——男は、利益に意識を取られがちな人物ではあったが、それでも深い知識を持つ人間だった。

故に、スリスの言おうとしている事が理解できてしまったのだ。それが、常識的に考えてありえない力であるという事も。

そんな事が出来るこの少女は、一体何者なのか——そんな言葉が、恐怖と共に男の思考を支配する。

「だから、さ。その電気信号を弄ってあげれば、幻を見せる事だって可能だと思わない？」

「ば、かな……そんな事、出来る訳——」

「それが出来るんだよ。君達みたいな下衆の所為で、さ」

スリスは嗤う。その笑みの中に、特大の憎悪を込めて。

両目から光を奪ったユグドラシルと同じ、この外道共へと——ただただ、純粋な殺意を向ける。

「どうして……そんな簡単に、人の幸せが奪えるのかなあ。幸せじ

やなくても、せめて不幸じゃない状態ぐらいには放っておいて欲しいのにさ」

「ひ、い……」

「結局、自分が良ければそれでいいんだよねえ……だから」

声が、低く絞られる。

その全身が纏う雷光と風——怒りの中でも、その嵐のルーンを完全に制御しながら、スリスは囁う。

「ボクも、自己満足させて貰うよ」

「ぎっ、があああああああああああ！？」

そして——男は、雷光の中で神経に極限の痛みを流されたまま、風の渦の中で寸断され尽くして行った。

01-13 死の氷獄

「――ふッ！」

「ぐあっ!？」

鋭い呼気と共に、涼二は駆ける。

その手の中にはコンバットナイフが一つ――袖の中から取り出したそれを、涼二は前方にいた警備員へと向けて投擲した。

真っ直ぐに飛んだナイフは男の手に突き刺さり、彼が持っていた拳銃を地面へと叩き落す。

そしてその隙に、涼二は一瞬で男の懐へと肉薄していた。

「な……!？」

突如として目の前に現れたその姿に驚き、男の身体が硬直する。そしてその隙を、涼二は見逃さなかった。上向きに放たれた掌底が、

目を見開いたまま硬直している男の顎を打ち据える。

一撃で意識を消し飛ばされた男は、そのまま力なく仰向けに倒れて行った。

ナイフを回収し、涼二は再び前進する。

流石に、足が付きそうな品物を残して行く訳にはいかないのだ。

（予想外に足止めを喰らったな……こっちに何かあるのか？）

貨物用エレベーターへと向かう途中に受けた妨害に、涼二は小さく目を細める。

この階層のマップへと視線を向け、そこにある反応には特におかしい部分はなく、涼二は首を傾げていた。

マップ内で警備員として表示されているマークは、彼らの持っている通信機などの反応を用いて位置を割り出している。

その為、そういった装備を持たない人間は表示されないのだが――

「……プラーナの気配」

涼二は、小さく呟く。

離れていても分かる、強力なプラーナの波動。

意図的にある程度放出していなければ、こんな風に感じ取る事は出来ないだろう。

そしてこの密度は、間違いなく災害級以上の力がある。
ディザスター

（誘ってる、って訳か）

胸中で小さく呟き、涼二は静かに意識を集中させた。

感じ取る事が出来るプラーナは、非常に強力なもの。集中さえすれば、何処にいるか程度は把握する事が可能だ。

しかし――

（確実に畏だな。だが、それにあえて乗るかどうか――）

もしも、雨音と見せかけての別の能力者だったとしたら――それはそれで問題ない、と言えるが。

ディザスター

災害級がいたとしても、涼二の実力ならばそれほど苦もなく倒せるだろう。

フアーフラ

そして、雨音以外に神話級能力者がいる可能性は限りなく低い。

（方向からして……この巨大な会議ホールの辺りか。戦闘を想定してるな、これは）

プラーナを感じる方向と強度から考え、涼二はそう判断する。

コンサートホールのようにすら見える会議ホール。席や机が多く動きづらくは感じるが、それでも能力を使うならばこれぐらいの広さがなければならぬだろう。

――涼二が能力を使うならば。

（雨音の能力は場所の広さなど関係ない。むしろ、狭い場所の方が

逃げ場がなくて有利な筈だ。なのに、こうやって誘っていると言う事は……)

可能性としては二つ。

一つは罠であり、強い能力者の力を使って迎撃しようとしているか。もう一つは、雨音の戦闘テストをしようとしているか、と言った所だろう。

小さく息を吐き出し――涼二は、声を上げた。

「……スリス、聞こえるか」

『ん、何？ まだデータを引き出してる途中だから、この周辺のシステムを落とすのにはしばらくかかるけど』

「あいつと会って来る」

『え……？ ちょ、ちょっと涼二！？』

通信を切り、涼二は歩き出す。

だが、それを遮るかのように、耳元でスリスの声が叫びを挙げた。

『ちょっと涼二！ せめて映像記録が残らないようにしなきゃいけないんだから！ その力は記録に残す訳にはいかないでしょ！？』

「分かってるさ。だから、最初は気付かれない程度に抑えておく。使えるようになったら連絡をくれ」

『どうしてそこまで……！』

焦ったような声が響き、涼二は小さく苦笑を漏らした。

それは決して、バカにしているといったモノではない。
むしろこれは、自分自身に呆れていた為に出た吐息だった。

「どうにも、な。理由は無いんだ。けど、あえて言うなら――」
『……言うなら?』

「あいつの能力に対する感情を、正面からぶち破ってやりたい」

強すぎる能力に対し恐怖を覚えると言うことは、高い能力を持つ能力者にはそれほど珍しい事ではない。

物心つく前から実験体として扱われてきたスリスはともかく、涼二やガルムにも覚えのある事ではあった。

さらに、能力に目覚めた時には既に成人していたガルムと違い、まだ幼かった涼二はその恐怖を良く知っている。

人に触れられない――そんな恐怖を抱える雨音とは少し違うだろうが、それでも涼二は彼女の感覚を多少なりとも理解する事が出来ていたのだ。

「自分の力に怯えてんじゃねーよって、教えてやろうと思ってな」
『でも、それだったら準備が終わってからも……』

「それとも、俺が負けるとでも思ってるのか?」

『む……あーもう、分かったよ。涼二が負ける訳がない!』

半ば自棄の混じった声に、涼二は小さく苦笑を漏らす。

けれど、そこには何処までも強い信頼が込められていた。

そんな彼女に対し、涼二は胸中で感謝の言葉を発する。

そしてその足は、感じるプラーナの波動の方へと向かって歩き出し

ていた。

「――」

小さく、口の中で囁くように声を上げる。

室内にもかかわらず感じる風に小さな笑みを浮かべつつ、涼二は真直ぐにその方向へと向かっていた。

進行する通路には警備員の姿は見当たらない。

彼の耳に聞こえてくるのは、正面入り口で暴れていると思われるガラムの戦闘音程度だ。

けれど、感じるプラーナの波動は徐々に強くなってゆく――巨人ティターン

級程度ならば、目の前で戦っている時に感じるレベルの密度だろう。

それだけの力を放出しても問題ないのは、やはり神話級ファープラのみとなつてしまう。

ならば――

「……いるんだろう、雨音」

僅かに伸びた髪に触れつつ、涼二は会議ホールの扉を開ける。

防音しよの為二重になっている扉を抜ければ――装着するバイ

ザーの視界に、壇上に立つ雨音の姿を発見した。

感情なく、ぼんやりと見開かれているその瞳に、涼二は静かに視線を細める。

マインドコントロール。強化人間に施される処理の一つではあるが、その実非常に制御が難しく、あまり実用的ではないとされている。

それは、ルーン能力に精神的な要素が大きく影響すると言う事実か

ら発せられているのだが――

「きちんと能力は発動していた。随分と進んだ研究をしているようだな、静崎義之」

『私としても自慢な物だね。どうかな、我が作品は素晴らしいだろう？』

響いたのは、スピーカーから発せられた声。

その声の主が何処にいるのかは分からないが、どうやらホール内の声は聞こえているらしい。

雨音の父親、静崎義之の言葉に対し、涼二は小さく息を吐き出した。

「随分と誇らしげなこって。まあ、勝手にしてくれとしか言いようがないな……ただし、俺の知らない所で、彼女を巻き込まずにだ」

『ほう……？ 随分と面白い事を言うものだな、氷室涼二君』

「……！」

その言葉に、涼二はぴくりと眉を跳ねさせた。

そんな様子に気付いているのかいないのか、義之の声は続ける。

『ユグドラシル最強の実働部隊、《ムスペルヘイム》の前隊長。神話級のルーン能力者であり、突如として組織から謎の脱退を遂げた高位能力者……それが君だったね、《氷獄》^{ニヴルヘイム}』

「……こいつから聞いて、そこから独自に調べた訳か」

雨音の方へと視線を向け、涼二は小さく嘆息を漏らした。

彼女は相変わらさずぼーっとしたまま、胡乱な視線で前方を見つめ続けていただけだ。

そこに意識の気配を感じる事は出来ないが――僅かに、放たれるプラーナが揺らいでいるように感じる。

それが一体どんな意味なのかは、涼二には分からなかったが。しかしそんな気配には気付かず、義之は続ける。

『さて……ところでなのだが、一つ取引をしないかな、ニヴルヘイム《氷獄》』

「取引？」

『そう。我々に鞍替えしないか、と言う話だよ』

「何だと？」

バイザーの下で視線を細め、涼二は僅かに荒れた声を上げた。

姿は見せず、声だけの存在。涼二はゆっくりと前に進み出つつ、相手の言葉を待つ。

――小さく囁くように、スリスへと声をかけてから。

『今の依頼主よりも高い金を出そう。君達ほど強力な能力者の集団は何にも代えがたいほどの価値がある。私としても、君達のような実力者は是非とも手に入れたいのだよ。』

君達は、いわゆる傭兵のような存在だ。この戦いも商売でやっているに過ぎない。

ならば、今以上に収入がある方に付くのは道理ではないのかな？』

「……フン」

成程、納得はできる——そう、涼二は小さく胸中で呟いた。
ニヴルヘイムは、金さえ受け取ればどのような仕事でも行う非合法なグループだ。

より高い金を払ってくる方に付くのは理に適っている事である。
が——静崎義之は、一つだけ読み違えた。

「残念ながら、見当違いだな」

『何？ 何が見当違いだ？』

「俺は金を受け取ったからやってるんじゃないんだよ。俺がやりた
いからやっている……納得し、後悔しない為に戦う。」

そこに道理やら何やらは存在しない。俺達はただ、感情のままに動
くだけだ。お前ごときには、俺達は使えない」

故に、従えようとしたところで無駄なのだ。

彼らを理解し、いかに行動の理由を与えるかという事——それが、
ニヴルヘイムを動かすという事だ。

そして——

「こいつを、こんな風に利用している事が俺には気に食わん。故に、
俺達がお前に従う事はありえない。」

分かったか、静崎義之。俺達は、俺達がやりたいからコイツを連れ
戻しに来たんだ」

『……そうか、残念だよ。ならば——死ね』

刹那、雨音の足元が爆ぜた。

思わずそう錯覚するほどの強い踏み込みと共に、雨音は涼二へと向けて肉薄する。

腰溜めに構えられた拳が高速で迫り——涼二は、突き出された拳を掴みながら雨音の足を払い、彼女の体を投げ飛ばした。

「……役に立つもんだな、ガルム」

あらゆる格闘技を修めたガルムの技の一つ、合気道による受け流し。

小さく息を吐き出しつつ振り返れば、雨音がちょうど着地した所だった。

背中から落とすつもりだったのだが、彼女は器用に空中で体を振り、上手く着地したようだ。

感情の浮かばぬ彼女——その唇が、小さく動く。

「——S」
ソウイル

「……ッ！」

その声に対し、咄嗟に身構える。

僅かな風が虚空を舞い、周囲のプラーナが雨音へと向けて急速に集まり始めた。

そう、涼二のプラーナも——

「——H」
ハガラス

——刹那、涼二はそう声を上げた。

それと共に、涼二の周囲に強い風が逆巻き始める。

雨音の持つ吸収の力はその風に遮られ、涼二まで届く事無く吹き散らされた。

『ほう、もう一つルーンを隠し持っていた訳か……だが、そんなものでは我が作品の力を防ぎ切れんよ』

「……」

答えず、涼二は意識を集中させる。

再び突進してくる雨音。跳躍して踏み潰すように蹴りつけてきたその一撃を後方へと跳躍して躲し、涼二はホルルの壇上へと立った。そしてそれを追うように、雨音は一直線に突進する。

「L！」
ラグズ

涼二の右手に水が集い、周囲へと向けて網のように展開される。

頼りなく見えるが、力任せに引き千切るにはガラムほどの力が無ければ難しいこの水の網——しかし雨音は、触れただけでそれを消滅させてしまっていた。

僅かに乱れるプラーナの波動。触れれば一撃で吸いつくされ、絶命するであろうその拳が、涼二へと向けて真っ直ぐに突き出される。

「風よ……！」

小さな戦慄と共に笑みを浮かべ、涼二は風を使ってその拳を絡め取る。

僅かに逸らし、それと反対の方向へ跳躍しながら、雨音の足元へと氷を走らせた。

一瞬で消滅させられる訳では無いのだろう。足を滑らせて、雨音の身体が転倒する。

（しかし、厄介だなこりゃ……）

胸中で呻き、涼二は再び油断無く構えた。

身体能力は高いものの、決して対応できないほどのレベルではない。問題なのは相手に触れる事が出来ない事と、あまり強くない能力ならば吸収し、無効化してしまうという事。

さらに、周囲には常にプラーナを吸収する領域が存在している事だ。風による護りを張っていたとしても、その領域にいる限り、徐々にプラーナを吸収されてしまう。

「ったく！　おい、意識は無いのか!？」

「……」

無言のまま、再度突進してくる雨音。

その体を発生させた風で押し返しつつ、涼二はさらに叫び声を上げる。

「力に負けてんじゃない！ お前は、それで満足なのか！？」

『無駄だ、君の言葉は聞こえていないよ』

「っ……」

響く声。しかし僅かに、だが確実にプラーナの波動が揺らぐ。

先ほどから感じていた僅かな違和感——その正体に気付き、涼二は小さく笑みを浮かべた。

以前相対した時、あの公園の時よりも、明らかに吸収の力が低い。僅かながらだが、力を抑えているのだ。

表情はなく、意志の感じられない瞳——けれども、彼女の口が、僅かに開いた。

「っ、う……し、て……きて、しまっ……です、か」

父親の耳には届かないであろう、本の僅かな声。

逆巻く風に掻き消されてしまうほど弱いそれを、涼二は決して聞き逃さなかった。

浮かべる笑みは、ただただ歓喜のそれ。

「お前こそ、どうしてだ？ 諦めてるような事口にしながら、どう

してそんな風に意識を保っていられる？」

「わ、たし……」

『何……！？』

風の膜を潜り抜け、雨音はその手を勢い良く突き出してくる。
それをギリギリで躲しながら、プラーナを削り取られつつも、涼二は笑みと共に続けた。

「楽しかったからだろう、諦め切れなかったからだろう！ だってら、何て言えはいいかぐらい分かってるだろうが！」
「ッ……！」

表情に変化の無かった雨音が、その目を大きく見開く。
輝きを失っていたはずの瞳には、涙の雫が揺れていた。
力を削り取られ、肩で息をしつつも——涼二は、言葉を止めない。

「さあ、言ってみろ——雨音！」
「涼、二……様……私、を……」
『くっ……殺せ、雨音！』

響く声。しかしそれにも踏みとどまり、初めて名前を呼ばれた雨音は——その言葉を、告げる。

「私を、助けて……！」
「——心得た」

涼二は、ただ不敵に笑う。
そしてその耳元に、一つの言葉が届けられた。

『準備できたよ、涼二。敵は君の真上だ……やっちゃって!』
「ああ!」

叫び、涼二はバイザーを筆り取る。
その瞳の中に不敵な色を宿らせて。
体の中に残るプラーナを昂ぶらせ、その身に宿す刻印へと意識を集
中させる。

『このッ、殺せと言っているだろう、雨音!』
「ッ、あ、ああ……っ!」

叫び声と共に、雨音の身体が動き出す。
大きく広げられた掌は、真っ直ぐと素顔を曝した涼二の顔面へと向
かい――

スリサズ
「――Th!」

――地面から伸びた氷の茨によって、その動きを止められてい
た。
腕を、足を、そして身体を拘束された雨音は、手を伸ばしたその姿
勢のまま驚愕に目を見開いている。
そしてその驚愕は、もう一人の人間にも伝わっていた。

『バカな……何だ、何だそれは！？　なぜ、四つもルーンを持っている！？』

人が持つルーンは最大で三つ。それは、この世界に生きる人間にとっての常識だ。

それ以上の数を持つ者は今日まで生まれてきておらず、どれだけ強力な能力者の中にも四つのルーンを持つ者は存在しない。
——けれど。

『それに……何だ、その姿は！？』

「……^{ラグズ}Lが表すのは、水と靈感……そして、『女性』だ。おかげで、^{ラグズ}Lのルーンを持つ男ってのは皆中性的な容姿をしてる訳だが」

長く伸びた黒髪、丸みを帯びた輪郭。

その青紫に輝く両の瞳に二つのルーンを宿し、女性の姿へと変貌した涼二は、その口元に皮肉気な笑みを浮かべていた。

「まあ、そのルーンがあったおかげで、俺はこの姉さんのルーンを受け取る事が出来た。そう……氷室静奈の持っていた、^{ハガラス スリサズ}HとThの始祖ルーンをな」

15年前の大災害の日、涼二と静奈は死ぬはずだった。
ある男の槍によって腹部を貫かれた静奈も、両目が潰れて助けられる人間も失った涼二も、その結末を免れ得ぬはずだった。

けれども、そこに一人の男が現れたのだ。

路野沢一樹^{かずき}——彼は瀕死の二人を回収し、既に手遅れとなっていた静奈の、その瞳を涼二へと移植した。

どうして死なせてくれなかったのかと、そう叫んだ時があった。けれども、同時に感謝もしていたのだ。今の涼二は、それを深く理解している。

路野沢は善人ではない。利用する為に生かされた事も、涼二は十分に理解している。

けれど、それでも——姉と一つになる事が出来た今を、涼二は感謝していた。

「I、L、H、Th——」
イサ ラグズ ハガラズ スリサズ

雨音から距離を取り、涼二は全てのルーンを発動させる。

雨が降り、周囲は凍て付き、嵐が逆巻き、氷の茨が地面を覆う。

そう、それは正に死の氷獄^{ニザルヘイム}。

死の女王が支配する、氷に包まれた滅びの世界。

「終わりだ、静崎義之。お前の築いたものは、全て俺が貰い受ける！」

スピーカーは凍りつき、既に彼の言葉は響かない。

けれど、その断末魔を聞き逃すつもりはなかった。

涼二は、腕を振り上げる。伸びた茨が天井へと突き刺さり、そこを伝いながら水と嵐が竜巻のように駆け上った。

凍結の竜巻は天井を突き破り、その先にあった監視室を蹂躪する――

「――消えろ」

パチン、と涼二が指を鳴らすと共に――周囲に満ちていた地獄のような嵐は、一瞬で消え去っていた。

しかし凍結した周囲が戻る訳ではなく、僅かに生き残った証明の輝きを氷の表面が反射している。

そんな中、落下してくる物体が一つだけ存在していた。

その大きな氷の塊は、ホールに落ちると共に、その中身ごと粉々に砕け散る。

大きく息を吐き出し、乱れた長髪を整え、涼二は小さく笑みを浮かべた。

「あばよ、雨音は頂いて行くぜ」

コントロールが切れたのだろう。ぐったりと意識を失っている雨音に近付き、その皮膚に直接触れぬようにしながら抱き上げた。

寒さのせいかわ、顔色はあまりよくない。けれど、その顔には確かな笑みが浮かべられていた。

そんな表情に満足し、涼二は小さく頷く。

「さて、さっさとずらかるとするか」

プラーナも残り少ない。

けれど、ここにいつまでも立っている訳にも行かず、涼二は元来た道に戻るように歩き始めた。

凍りついた棺のような会議ホールを、置き去りにして。

01-14 :: エピローグ (前書き)

次回連載は9／10からとなります。

冷たい雨が降り注ぐ。

涼二は、冬に振る雨と言うものがあまり好きではなかった。

静謐な雨音や、強く吹きすさぶ風などは気に入っているが、この冷たい雨だけは気に入る事ができない。

自分が緩慢なる死へと向かっていた、あの日の事を思い出してしまうから。

——小さく、苦笑。

「静崎製菓で、大事故。違法な実験を行っていた事も明るみに……か。違法な実験ってのも、詳細は開かされていないのにねえ」

「その辺りは、あのお嬢さんが手を回してくれたのだろう。我々の影が見えず、やりやすいだろう」

テレビに映る映像を眺め、スリスとガラムはそう口にする。
そんな二人の様子と、若干複雑そうな表情を浮かべている雨音の表情に、涼二は小さく肩を竦めた。

（いくらあんなのつつつても、そうそう割り切れるもんじゃねえか）

長く伸びたままの髪を指で梳き、視線を再び窓の外へと向ける。
そんな涼二は、未だに女性の姿——姉である氷室静奈と同じ、つまりここにいる雨音に似通った姿へと変化したままだった。

と言っても、この身体は完全に女性のものと言う訳ではないのだが

——

「それにしても驚きました。涼二様が女性の方だったなんて」

「違うわッ！俺は男だよ、能力の関係でこうなってるだけであつて！」

「まあまあ。どっから見ても美人なんだし」

「嬉かないってんだよ……それにそもそも、完全に女の身体って訳じゃないだろ」

涼二はLの^{ラゲズ}ルーンを媒介に姉の持っていたルーンを使うことで、その姿が姉のものに近付いているに過ぎない。

男性としての要素が残っている以上、完全な女性へと変化できる訳ではないのだ。

結果、中途半端に両方の要素が残り、両性具有という状態になっている。

しかし外見からそれが分かる訳でもなく、むしろ女性的な要素——

――主に胸――の自己主張は激しい為、分かっていたとしても女性にしか見えないのが現実だ。
そんな己の状況に嘆息するしかない涼二に、スリスはサムズアップしながら声を上げる。

「ボクは全然オッケーだよ！　ドンと来いふたな」
「やかましい」

そんな事をのたまうスリスの額へと氷のつぶてを投げつけ、涼二は嘆息交じりに視線を戻した。
そして、きょんとした表情を浮かべている雨音へとその顔を向ける。

「……とりあえず、お前の身の安全は確保する事ができた」
「は、はい」

「その長年にわたって続けられてきた強化処理を完全に消し去る事はできないが、少なくとも無理が生じない程度に抑える事は可能だ。元々、オーバードライブスト気味だったからな」

涼二が口にしたのは雨音の現状だ。

静崎製薬にて雨音を奪還した涼二達は、そのまま鉄森グループが準備した車で逃走、途中で分かれて一度拠点へと戻ってきた次第である。

雨音は会社の方で調整を受けていたため、しばらくは調整無しでも問題は無いようだ。
さしあたっての問題は、彼女の処遇である。

「まあとにかく、あのお嬢様との約束も取り付けた。協力関係も築けたし、お前の調整に関しては全く問題ない」

強いて言うならば、一々鉄森の所有する機器の所まで赴かなければならない所か――と、涼二は胸中で嘆息する。

一応調整は一ヶ月に一回程度でも問題は無いので、どうしてもなる話ではあるのだが。

「あ、そういえば涼二」

「どうした？」

「鉄森の屋敷で厄介になるのもいいって、路野沢さんが言ってたよ？」

「……何？」

スリスの言葉に、涼二は眉根を寄せながら首を傾げる。

いつの間に連絡を取っていたのかと言う事も気にはなっていたが、その言葉の意味の方にまずは疑問を持っていたのだ。

そんな涼二の表情に対し、スリスは小さく苦笑しつつ声を上げる。

「どうも、あの人にボク達の事を教えたのは路野沢さんみたい。まあ、楽な生活できるのは助かるんだけどね。

一応、考えといった方がいいんじゃない？」

「ふむ……」

他人と関わる事はリスクが高いが、それと比べてもお釣りが来るほどのメリットはある。

しかし即決すると言う訳にも行かず、涼二はガルムの方へと視線を向けた。

どう判断すべきか。そんな疑問の視線に対し、ガルムは少々思考するような様子を見せる。

そしてしばし沈黙し――彼は、その顔を上げた。

「……私としては、どちらとも言えないな。どちらにもそれ相応のメリットとデメリットはある。だが――」

「だが？」

「この選び方は、雨音君の選択次第だと私は思っているよ」

「え……わ、私ですか？」

慌てたような声音で目を見開き、雨音は視線を若干揺らす。

そんな彼女の様子に三人は苦笑を漏らし、そしてそのままガルムは続けた。

「そう難しい質問ではない。この先、君がどうしたいのか……そういう話だ」

「私が……？」

「一つは、鉄森グループに保護される事。君の身柄の安全は確保して貰っているし、それを破ったらどうなるかぐらいは向こうも分かっているだろう。」

安全に、かつ平穏な日々を送る事が出来るはずだ」

指を一本立て、ガラムはそう口にする。

確かに安全で、ニヴルヘイムの面々もこれまでと変わらない日々を送る事が出来る選択肢。

変わることにいえば、精々依頼人に鉄森グループが増えると言った事程度だろう。

これまでとあまり変わるような要素は存在しない。

それを考え、そして理解した上で、雨音は先を促した。

「では、他には？」

「ふむ。もう一つは……君が、我々と共に来るかどうかと言う選択肢だ」

「おい、ガラム!？」

咎めるように、涼二は声を上げる。

血なまぐさく未来の無い世界に彼女を引き込む事、そして何かに復讐しようと言う訳でもない彼女の運命を捻じ曲げてしまう事――それらを押し付ける事などできない。

けれど、それに対する反論は意外なところから上がった。

「んー、ボクは反対しないけど」

「スリス！」

「怒らないでよ。雨音ちゃんは別に戦闘に出すって訳じゃないでしょ？ 正体や存在を知られる事も無いし、それにルーンの正逆を何とかできれば、涼二の怪我の心配が多少は薄れるんだから」

「う……」

無茶をする事で心配をかけている自覚はある——思わず、涼二は言葉を詰まらせていた。

雨音の力は、Sの神話級能力だ。ソウイルファープラ即ち、どのような傷でもたちどころに癒してしまう強大な治癒能力。

それがあれば、確かに怪我の心配は多少なりとも薄れるだろう。

身を案じてくれている言葉には反論する事が出来ず、さらに納得してしまった事で、涼二の反論の言葉は口から出る前に消滅していた。

「それにだな、涼二よ」

「……まだ何かあるのか？」

ガルムの言葉に対し、涼二は胡乱な目線で声を上げる。

そんな様子に対して苦笑を漏らしつつ、ガルムは声を上げた。

「鉄森のお嬢さんは信頼できるかもしれないが、その周りの人間までも一様に信じる訳にはいかんだろう？」

「……他の人間が暴走して、こいつを利用するかもしれない？」

「可能性は無いとは言えん。それは、お前も望む所ではない筈だ」

反論できず、涼二は再び沈黙する。

しかしそれでも今まで安穏と生きてきた少女を殺し合いの世界に引き込むのは気が引け、涼二は呻き声を上げながら仰け反り、頭を抱えた。

と——そこに、最後の声がかかる。

「涼二様」

「……何だ？」

「お心遣い、有難く存じます。ですが私は、折角できたお友達とお別れしたくは無いのです」

「だが……！」

そっと、雨音は唇の前に指を立てる。

落ち着きのある美貌に僅かな笑みを浮かべ——その姿に、涼二は思わず息を飲んでいた。

見た目と言う点ではどちらもかなり似通っており、姉妹と言われても納得できるような姿だったのだが。

「無粋な事は仰らないくださいませ、涼二様。今の私にとって、大切なものは貴方がたしかいないのです。

いえ、初めて出来た大切なものと言っても過言ではありません。ですから、私は貴方がたの事を知りたい」

「……幻滅するぞ？」

「それは私の決める事です」

強い想い。思わず息を飲むほどの意志の強さに、涼二は圧倒されていた。

長い間戦ってきた涼二すら飲み込むほどの意志力——包容力、とでもいうべきもの。

それを纏いながら、雨音は笑う。

「皆さんが何を思い、何を信じて戦っているのか。私は、それを知りません……ですから、皆さんにどうしろなどと偉そうな事は言えません。」

ですから、私に皆さんの事を教えてください。大切な人達だから、皆さんの事を知りたい」

「っ……」

それは、純粹な好意。

共に、家族に向けられる感情に、涼二だけでなく他の二人も飲み込まれていた。

——ガラムだけは、僅かに嬉しそうな笑みを浮かべていたが。

「だから、皆さんの事をちゃんと知れるまで……私を、連れて行っては頂けませんか？」

雨音は、そう締めくくる。

圧倒されるほど暖かく、優しいその視線。

その気配は、まるで世界を包む柔らかな雨の音のように。

それを受けて——スリスは、楽しそうに笑い声を上げた。

「……だってさ、涼二。ちなみに、ボクは賛成だよ？」

「お前な……」

「ボクも、雨音ちゃんの事が知りたい。データで見ただけじゃ、人の事なんて何も分からないんだ。だから、知りたい……それって、いい事だよな？」

言外に、『知らないまま突き放すのはいい事なのか』という意味を感じ、涼二はぴくりと頬を引き攣らせる。

滅多な事では反論してこないスリスの言葉への驚愕と共に、涼二はその言葉に思わず頷きそうになっていた。

そして、同じく意味を感じ取ったガルムが、笑いをこらえるような表情を浮かべながら声を上げる。

「涼二よ、巻き込みたくないと言う思いも、決して間違っていると言う訳ではない。しかし、彼女も己の行為に責任を持てぬわけではあるまい」

「……それは」

雨音は、己の行いの尻拭いを誰かに求めるような人間ではない。

世間知らずで天然ではあるが、勤勉で努力を惜しまない——故に、己の発言には責任を持つだろう。

それが分かってしまうからこそ、涼二の揺らぎはさらに大きくなった。

姉によく似た姿を持つ彼女を巻き込みたくない——その思いは、いまだに強い。

けれど、同時にそんな彼女と共に居たいと言う感情もあったのだ。

「……それに、ですけど」

「まだ、何かあるのか？」

「ええ。涼二様は忘れてしまっているかもしれませんが、私は人を殺してしまったのですよ？」

その言葉に、涼二は大きく目を見開く。

思い起こすのは、あの交渉の日。マインドコントロールを受けた雨音が、その力を使って人々のプラーナを喰らい尽くしてしまった時の事だ。

あれは、決して彼女の意志によるものではない。

けれど――

「例え故意でなかったとしても、私が原因となってしまった事は事実。何もせず、安穏と平和な生活を送る事は、私には出来ません」

「だが、償いになる訳ではないんだぞ？」

「存じております。ですから、これはただの自己満足です」

少し悲しそうな表情で、雨音は笑う――その顔に、涼二は深々と溜息を吐きだした。

「……分かった」

「涼二様！」

「ただし、危険な場所には連れて行かんし、嫌だと思ったらさっさと出て行くように。ったく……」

ぶつぶつと文句を言いつつ、涼二はソファに深く体を沈め、その後頭部を背もたれへと乗せる。頭痛を覚えて額を抑える手は、やがて力なく椅子の上へと落とされた。

未だに、体は元に戻らない。

プラーナが完全に回復し切るまで、元の姿に戻る事が出来ないのだ。けれど、多少は穏やかな気分でいられるのは、この姿に精神が引き摺られている為か。

（……現金な奴だな、俺も）

三人に見えないように、口元に自嘲を浮かべる。

目の端に僅かに映る外の景色。冷たい雨の降り注ぐコンクリートの木々。

堪らなく嫌いだったはずのそれが――今日だけは、少しだけ心地よく感じられた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ガラス張りの天井に、冷たい雨が降り注ぐ。

広い部屋にはその静謐な音が響き渡り——そんな中、一人の男が机に向かい、黙々とペンを動かしていた。

短めに刈り込まれた灰色の髪に、黄金の瞳。その額には、傷痕のような紋様が刻まれている。

そんな男は、ふと顔を上げ、ある方向へと視線を向けた。

——瞬間、静謐さを引き裂くように、一つの声が響き渡る。

「おや、どうかしたのかな《グングニル必滅の槍》？」

「……このような時まで、その名で呼ばずとも良いだろう、一樹」

「おっと、済まないね槍悟。ネツツつい癖になってしまったようだ」

おどけて笑う路野沢に、槍悟と呼ばれた男性は小さく笑みを浮かべる。

そこにあるのは、信頼の籠った感情だ。

そんな笑みを受けて、路野沢もまた小さく笑う。

「それで、どうかしたのかな？」

「何、強いプラーナの気配を感じただけだ。随分と強力な能力者が力を使っているようだな」

「君がそう評するほどか……世界は広いものだね」

飄々と、路野沢は笑う。

その中の不穏な気配に気付きつつ——いや、そんなモノすらも飲み込みつつ、檜悟は不敵な笑みを浮かべた。

「ああ、実に楽しめそうだ。いずれ相見えるような事があればよいのだがな」

「望むのなら、いずれ叶うさ。それが——」

「——宿命と言うものだから、か？」

「おや、言われてしまったね」

「元々、それは私の台詞だろう」

クスクスと笑う路野沢に、檜悟は笑みを浮かべたまま肩を竦めて見せた。

決して刺々しい空気は無い。二人の間にも、信頼の籠った言葉同士が交わされている。

だと言うのに——二人の強大な気配は、常に互いを食い尽くそうとするかのようにせめぎ合っている

その間にある感情は、何と表現すればよいものか。それは、誰にも分らない——当人達すらも。

そしてそんな空気の中、檜悟は小さく笑いながら声を上げる。

「だが、君もそう言うのなら、そうなのだろう。是非、楽しみにさせてもらおうでしょうか」

「ははは、光栄だね。きっと、気に入ると思うよ」

二人は笑う。

ユグドラシルと呼ばれる組織を取りまとめる、二人の人間。
その言葉の中にあったのは、どこかあまり合わない渴望のような感情。

それらを込めて、大神おおがみ槍悟は小さく笑う。

「――楽しませて貰おう。いずれ、な」

――雨音は、いつまでも静謐な音を響かせ続けていた。

ルーン能力について&読者の皆様への募集

ども、Allenです。

とりあえずFrosty Rain第一話を読んで頂き、ありがとうございます。
うございます。

まだ読まずにとりあえずここから見てみたという方もいらっしゃるかもしれませんが、キャラクター紹介と言うわけではないので、話を読んでみたほうが分かりやすいかと思います。

今作は、このように一話を大体10万文字程度にまとめ、それを連続更新すると言う形をとっていきます。

しばらくは充電期間となり、次回の更新は9／10を予定しておりますので、しばしお待ち下さい。

また、その間に、読者の皆様にお願いがあります。

作中で登場するルーン能力に関して、組み合わせで能力を作るのに一人では限界を感じています。

なので、ここで能力を募集したいと思います。

ルーン能力は、1〜3のルーンを組み合わせる事で考えております。
また、

《エンチャント》

能力同士を組み合わせる事。

二つ以上のルーンを同時に発動し、単一の発動では得られなかったような効果を発生させる。

緋織がJで創り上げた剣からKの炎を^{カン}発していたのがこの効果。
掛け算のように制御が難しくなっていてゆき、使用には熟練が必要。

《ファンクシヨン》

《エンチャント》によって術者が作り上げたものなど、術者固有の能力使用法を指す。

名称を決める事で一つの能力として固定する事が可能で、作り上げた能力は名称を宣言する事で発動可能。

涼二の《氷雨》^{フロステイレイン}、ガルムの《血染めの狼》^{イラトス・ベステイア}等がこれに当たる。

等のように、それぞれのキャラクターを代表するような能力を作り上げています。

読者の皆様には、三つのルーンを組み合わせる能力を考えて頂きました。

戦闘向けだけではなく、料理人が持っているような能力など、様々な場面を想定しております。

作中に登場するルーンと、主な効果は下記の24となります。

モブ敵の能力として使用する場合がありますので、活躍させたい時にはそのようにご連絡下さい。

これらの募集は、感想にてお待ちしております。

それでは、よろしくお願いします。

F
フェオ

家畜と富を表す努力のルーン。

努力することにより、所持者の持つ才能の開花が約束される。

U
ウルズ

野牛と勇気を表す強化のルーン。

肉体、精神をバランスよく強化できる。

Th
スリサズ

氷の巨人を表す妨害ルーン。

茨を操り、相手の動きや攻撃を妨害できる。

A
アンサズ

アンサズ神を表す解析のルーン。

自分自身の情報処理能力、情報収集能力を高められる。

R
ラド

乗り物や騎乗を表す加速のルーン。

自分自身を加速、高速移動を可能にする。

K カン

炎や始まりを表す火炎のルーン。

炎を操り攻撃する事が出来る。

G ゲーボ

贈り物や出逢いを表す友好のルーン。

持っている者は人に好かれやすくなる。

W ウイン

喜びや愛情を表す補助のルーン。

自身や他者の精神コンディションを改善する。

H ハガラズ

嵐や雹、災害を表す破壊のルーン。

風、雹、雷を操る事が出来る。

N ナウシズ

欠乏や忍耐を表す精神強化ルーン。

自分自身の精神力を強化する事が出来る。

I イサ

氷や凍結、停止を表す氷結のルーン。

氷を操ったり、物の動きを遅くしたりする事が出来る。

J ジュラ

刃、収穫を表す創造のルーン。

一年以内に起こる成功を予見する、または刃のある武器を作り出す事ができる。

E エイワズ

イチイの木を表す防御のルーン。
障壁を発生させたり、植物を操ったりする事が出来る。

P パース

賭博や秘密を表す探索のルーン。
相手の隠している事を察知する事が出来る。

Z アルジズ

保護を表す協力のルーン。
仲間を護るときに己の力を強化する事が出来る。

S ソウイル

太陽や生命力を現す治癒のルーン。
自分や他人の傷を癒す事が出来る。

T ティワズ

戦いと勝利を表す身体強化のルーン。
自分自身の身体能力を強化する事が出来る。

B ベルカナ

成長や白樺を表す発展のルーン。
成長や学習の速度を早くする事が出来る。

Eh エワズ

馬と変化を表す獣化のルーン。
自分自身の姿を獣へと変化させる事が出来る。

M マンナズ

人間を表す協調のルーン。

人に指示を出す際の最適解を求める事が出来る。

L ラグズ

水や靈感を表す水流のルーン。

水を操る、或いは鋭い感覚を得る事が出来る。

Ng イング

豊穡や完成を表す成功のルーン。

植物や人間を成長させる事が出来る。

O オセル

遺産や領土を表す大地のルーン。

土を操る、或いは限定空間内でさまざまな現象を引き起こす事が出来る。

D ダガス

日や光を表す光輝のルーン。

光を操る事の出来る。

・ルーン能力者は、1〜3個のルーンを所持している。

・それぞれ、シングルルーン、クロスルーン、トライルーンと呼ばれる。
れる。

・一部の能力には、効果の反転した逆位置のルーンと呼ばれるものも存在する。

・また、能力の強さに応じてレベル分けされている。下から順に、
ヒューマン人間級、フリークス人外級、テイターン巨人級、ディザスター災害級、フェアブラ神話級。

02-1:プロローグ

無数の書棚が立ち並ぶ空間。

若干薄暗く広大なその部屋は、時折立っている柱に支えられた、巨大な図書館のような場所。

しかし、書棚に並んでいるのは本だけではなく、大量のバインダーに納められた書類の束だった。

——そんな空間に、涼やかな声が響く。

「——正面入り口の前で暴れていた刻印獣は、ルーンクリーチャー他の事件でも時折目撃されているものですが、その例はごく稀で情報はあまりありません」

「……うん、そうだね。僕も、それに関しては殆ど記憶していないかな」

無数の書棚に囲まれた部屋の奥。

そこに、二人の人物の姿があった。

一人は、設置されている机に広げられた資料を読む銀の髪の青年。その長い髪をうなじの辺りで一括りにしている彼は、眼鏡の位置を直しながら声を上げる。

「それで、内部の状況に関しては……これだね」

「はい。どうやら、静崎製薬で行われていた実験資料は念入りに破棄されてしまったようです」

「ふむ……耐火金庫の中身まで、か。こちらは人為的だけど、やつた者の正体は掴めず……随分と手馴れてるなあ」

そんな青年の声に答えているのは、紫がかった長い髪をもつ一人の少女。

ゆったりとウェーブを描くその髪を揺らし、彼女は温和そうな笑みを浮かべつつ声を上げる。

「事実関係に関しては、その報告書に書かれている内容で全部です……と言う事で、お疲れ様、悠君」

「うん、ありがとう怜。さてと、次の資料は——」

「今日はこれで全部だよ。全く、いつも仕事しっぱなしなんだから。今は報告書も来てないんだし、休憩にしよう？」

「あ、あはは……うん、分かったよ」

腰に手を当て、たしなめるように言う少女——伊藤怜。

それに対し、青年——詩樹悠は、相好を崩しながら眼鏡を外し、

大きく背筋を伸ばして凝った身体をほぐしていた。

ユグドラシルには、ルーン能力者に関する様々な事件が飛び込んでくる。

能力者をただの人間が抑えるのは難しい。それ故に、ユグドラシルには治安維持部隊と呼べるものが存在しているのだ。

これには様々な部隊が存在し、警察と共に動いて事件の捜査を行う《フギン》、機動部隊として警察に協力する《フレキ》。そして、ルーン能力を使った凶悪犯罪を鎮圧する目的で作られた、最強の戦闘部隊である《ムスベルヘイム》などが存在している。

そして、そういった部隊からもたらされる報告は、全てこの図書館――中央情報室《ミーミル》に集められているのだ。

「さて。それじゃ、私はお茶を淹れてくるね」

「うん、いつもありがとう怜。怜のお茶は美味しいから、楽しみだよ」

「ふふ。いつもそう言ってくれるから、私も作り甲斐があるよ。それじゃ、ちょっと待っててね」

悠の言葉に嬉しそうに頷き、怜は書棚の向こうへと姿を消して行く――観葉植物の向こう側に彼女の姿が消えて行ったちょうどその時、やってきた職員が悠に対して声をかけた。

「室長、よろしいですか？」

「あ、うん。何ですか？」

室長——すなわちこの情報室のトップである悠は、そんな職員
の言葉に首を傾げる。

周囲の書棚の整理を行っている他の職員達は、そんな二人の様子に
聞き耳を立てている様子ではあったが、それには気付かない振りを
しつつ、悠は彼に続きを促した。

新人で、若干緊張した様子のある彼は、直立不動の姿勢のまま声を
上げる。

「は、ムスperlヘイムの隊長殿がお見えです」

「^{ひおり}緋織が？ ああ……今回の件が耳に入ったのか。うん、通してい
いよ」

「了解しました！」

——成程、今の緊張は僕と緋織二人分のものか、と胸中で納得
し苦笑しながら、悠は去ってゆく職員の背中を見送る。

とりあえず机の上に広げられた資料を纏め、適当に積み重ねてから
机の脇へと置いておく。

そんな事を続けられた紙の束が山のように積み重ねられていたが、
日を置かずに怜の手によって片付けられる事となるだろう。

若干申し訳なく感じながらも、見えてきた紅の髪に悠は思考を切り
替える。

磨戸^{すゐし}緋織——最強の実働部隊たる、ムスperlヘイムの現隊長。

そしてその脇に緊張した様子で立つ、金髪のツインテールを揺らす
少女に、悠は小さく笑顔を浮かべていた。

「やあ、いらっしやい《^{レーヴァテイン}災いの枝》。本日はどのようなご用件で？」
「《^{シグルドリーヴァ}口伝詩人》……いいえ、悠。堅苦しいのは無しで」

「あはは、ごめんごめん」

からかいの言葉をたしなめられ、悠は小さく苦笑を漏らす。

とはいえ、隣でガチガチに固まっていた少女の緊張をほぐす程度の効果はあったようで、きょとんと目を見開いている彼女へと悠は声を上げた。

「君は初めて見る顔だけど、確か緋織の補佐官に選ばれた子だったかな？」

「は、はい！わきり うい 把桐羽衣と申します！ コードネームは《戦乙女》ヴァルキユリアです！」

「うん、僕は詩樹悠。コードネームは《口伝詩人》シングルドリーヴァだよ。さ、立ち話もなんだから二人とも座って」

笑みを浮かべ、悠は二人へと椅子を勧める。

実力主義のユグドラシルでは、悠や緋織のように若手ながら高い位に就いている者も少なくはない。

それ故に、悠もこういった話というのは既に慣れたものであった。椅子を引き寄せ座った二人に満足し、悠は声を上げる。

「さて……改めて、今日はどんな用件で？」

「……フアーブラ ルーシクリーチャー 神話級の刻印獣が確認されたと聞いたから、その情報を確認に」

「成程」

若干目を逸らしながら言う緋織に、悠は小さく苦笑を漏らしていた。

そういう名目[・]で来た、という事なのだろう——彼女自身の目的は別にある。

そしてそれを理解しているからこそ、悠はあえてその言葉通りに声を上げた。

「恐らく、犬の類だね。刻印ルーンは恐らくTとR^{ティワズラド}。人狼の形態を取っていたらしいから、もしかしたらMもあるかもしれない^{マンナズ}」

「……人間が、その姿になっていた可能性は？」

「Eh^{エワズ}の力でかい？ そうだね……可能性が皆無とは言えない。けれど、人と獣の間を保つのは非常に難しい……それは、君も分かっているよね？」

「でも、相手は神話級^{フアーブラ}。常識は通用しないと思った方がいい」

「ふむ、一理あるね」

緋織の言葉に、悠は肩を竦めながら頷く。

そんな応酬に居心地悪そうにしている羽衣の姿を視界の端に捉えながら、悠は緋織の瞳へと視線を向けた。

彼女は、何らかの確信を得ている——いや、得た確信を誰かに肯定して貰いたいのだ。

それに気付いているからこそ、悠は表には出さないようにしながら胸中で嘆息する。

と——

「あ……緋織ちゃんだけじゃなかったんだ。失敗しちゃったなあ」

そこに、一度離れていた怜がお盆とティーセットを持って現れた。お盆の上に置かれているのは三つのティーカップ。悠と自分自身、そして緋織のものだ。

あまりにも準備が良すぎるその状態に、緋織は大きく目を見開く。

「怜……私が来る事、予想してたの？」

「そりゃあね。IとL、^{イサラグズ}それに神話級。^{フアーブラ}こんな報告を聞いて、緋織ちゃんが飛んで来ない筈がないから」

「べ、別に私は、そんな……」

無然とした表情で唇を尖らせる緋織に、怜はクスクスと笑みを漏らしている。

そんな彼女に対して緋織は口を開こうとするが——抗議の声は、意外な所から上がった。

「そんな事はありません！」

「羽衣……!？」

「神話級が相手となれば、必然的に私達が動く必要があります!ですから、危険な能力者の力を知るためにここに来たのです! あんな男の事なんて……!」

「はい、落ち着いて」

ぱんぱん、と悠は軽く手を叩く。それと共に羽衣ははっと目を見開き、顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

そんな様子に小さく苦笑しつつも、悠は怜の方へと視線を向ける。

「あんまりからかっちゃダメだよ、怜」

「あはは……ゴメンね、二人とも」

苦笑交じりの表情を浮かべつつ、怜は手に持ったお盆を机の上に置いた。

そして、裏返していたカップを戻し、その中へとティーポットから紅茶を注いでゆく。

それと共に広がる僅かな林檎の香りが、周囲へと漂っていた。

「はい、お詫びの印にどうぞ」

「え、あの、えっと……」

「私は伊藤怜。コードネームは《アウレア・ポーマ植物園》。悠君……ここにいます、ミール室長の補佐官です。よろしくね、羽衣ちゃん」

「は、はい！」

緊張した様子の羽衣に苦笑しつつ、怜は紅茶とお茶請けのクッキーを机に置く。

ただし、それはあくまでも三人分——自分の分は、そこには無かった。

それを見咎めた緋織が、申し訳なさそうな様子で声を上げる。

「怜、私の分はいいから……」

「私はいいの。後で、悠君と二人っきりで休憩するから……ね？」

「あはは……うん。まあ、そういう訳だから、遠慮しないでいいよ」
「……分かった。私も、怜のアップルティーは好きだから」

照れたように笑う悠の様子に、緋織も小さく笑みを零す。

そんな様子をニコニコとした笑顔で見つめる怜と、相変わらず緊張した様子の羽衣。

三人の様子を観察し、悠は胸中で小さく嘆息を漏らした。

(……やっぱり、気にするなって言う方が無理だね)

相変わらず落ち着かない様子の緋織。

彼女は才能を見出されて以来、ずっとある一人の男とパートナーを組んで戦ってきた。

緋織は、彼の事を心の底から信頼していたと言っても過言では無いだろう。

けれど、彼——氷室涼二^{ひむろりょうじ}は、突如としてその姿を消してしまった。緋織は、何も告げずに去ってしまった涼二の事を恨んでいる。けれど、彼の事を信じようとするその感情を抑える事は出来ていなかった。

「……今回の事件で神話級の出力を以って使われたのは、HとTh^{ハガラス スリサズ}、そしてSのルーンだ^{ソウイル}」

「え？」

「さっきの反応、建物内で起こった方の事件についても知っているんだろう？」

建物内で使われた形跡のあるルーンは、I^{イサ}、L^{ラグズ}、H^{ハガラス スリサズ}、Th^{ソウイル}、Sの五

つ。少なくとも二人以上の能力者が動いている」

そこまで告げてから紅茶に口をつけ、悠は小さく息を吐く。

悠は少しだけ口を湿らせてから、目を見開く緋織へと向けて続けた。

「IとLは、イサ ラグズそれほどの出力で使われた訳じゃない……内部にいた能力者に関しては、ハガラズ スリサズ ソウイル フアーブラHとThとSを操る神話級能力者として捜査されているよ」

「……そう」

安心したように、けれどどこか残念そうな様子も漂わせ、緋織はそう呟く。

ティーカップの陰に苦笑を隠しつつ、悠は彼女の様子を静かに観察していた。

涼二が加担していなかった事に安堵しつつも、彼の行方を掴む事が出来なかった事を残念がっている。

そんな様子を外面から感じ取り、悠はここにはいなかったの友人に対して文句の一つでも言いたい気分になっていた。
吐き出された溜め息が、空気に溶ける。

「まあ、詳しい情報に関しては、もう少ししたら書架に並ぶ予定だから……それまではこのぐらゐの情報で勘弁して」

「……うん、分かった。ありがとう、悠」

「どういたしまして。訓練の方、頑張ってね」

「ん、そっちも、あんまり根を詰めすぎないように」

——君にだけは言われたくないなあ、などと胸中で呟き。

紅茶とお茶請けはきっちりと消費してから席を立つ緋織の姿を、悠は表情を変えぬまま見送っていた。

そんな彼女の姿が見えなくなるのを待ち、悠はようやく息を吐き出す。

「お疲れ様、悠君」

「あはは……嘘は苦手じゃないけど嫌いだなあ」

微笑む怜の表情に癒されながらも、悠は苦笑交じりに呟いた。

自分は緋織に嘘を付いている——先ほどの話の中には、多くの嘘が含まれていたのだ。

何故なら詩樹悠は、氷室涼二がこの組織から離反した理由を全て知っているから。

そして、彼がずっと隠し続けてきた奥の手までも知っているのだから。

「しかしまあ……罪作りの奴だよねえ、涼二も」

「悠君がそれを言うかな？」

「え？」

「何でもないよ」

クスクスと笑いながら、怜はティーセットを片付け始める。

そして、そんな様子をぼんやりと眺めていた悠へと向け、彼女は声を上げた。

「ねえ、悠君」

「ん、何？」

「どうして涼二君は、私達にだけ全部を話して行ったのかな？」

そんな彼女の言葉に、悠は虚空を見上げ――小さく、苦笑を漏らす。

彼が思い起こすのは、かつて友人がこの組織を去った前の日の話。氷室涼二は、全てを話して行った。抱いている強い憎しみも、その眼に宿した強い力も、全て。

悠と怜、そのたった二人だけに全てを話して、彼は去って行ったのだ。

彼の目的を考えれば、正気とは思えない。それは決して悟られてはならぬものであり、そしてそれまでは決して悟られる事の無かった筈の話なのだ。

けれど、彼は全てを話してくれた。それを、悠は嬉しいと思う。

「……涼二は、分かっていたからだよ」

「分かっていたからって……一体、何を？」

「僕達なら、例えその話を聞いたとしてもこの組織から離れようとしないうって、ね」

そう言って、悠はかつての彼の話を思い返す。

十五年前の大災害を経験した人間ならば、その話は十分に同情出来るものであったし、彼の憎しみを多少なりとも感じ取る事は出来た。これを聞いたのが緋織だったならば、彼女は間違いなく涼二につい

て行こうとしていただろう。
けれど、それでも悠は決して付いて行こうとはしなかったのだ。

「僕は、この組織から抜ける事はできないからね。そもそも、僕はこの仕事に誇りを持っているんだから……と言ってもまあ、この誇りだって、涼二のおかげで得られたようなものだけだ」

「……そして私は、そんな悠君から離れようとは思わないから……だから涼二君は、私達に？」

「僕はそうだと思う。それだけ、僕の誇りを理解してくれていたんだって思うと……少し、嬉しいんだ」

悠は微笑む。親友と呼んでも過言では無い、あの青年の事を思い返して。

その表情に含まれていたのは、友情と親愛と、そして闘争心だった。

「だからこそ、涼二の秘密は護る。けれど、それ以上はしない。もしも直接対決するような事になったら、決して手加減はしないって決めてるんだ」

「……ずるいなあ、男の子って」

ポツリと呟かれた怜の言葉に、悠はきょとんと目を見開く。

そして、冗談ではなく本気で拗ねている様子の表情を浮かべている彼女に驚き、あたふたと慌てた声を上げ始めた。

「え、いや、ずるいって？　僕とあいつは友達だし、それは怜だっ

て同じじゃないか」

「そんな何も言わずに通じ合っちゃってるの、ずるいと思っちゃうんだよ。きつと、涼二君だって同じ事考えてるんだろうし」

「そ、それは……」

あながち否定できない事に頬を引き攣らせ、どう言い訳したものかと悠はひたすら言葉を探る。

彼の持つルーンによる強靱な精神も類稀な記憶力も、この時ばかりは役に立ってくれなかった。

そうして必死に悩んでいるうちに――ふと、怜がクスクスと笑みを漏らしている事に気づく。

そこまで来て、悠はようやく自分がからかわれていた事に気が付いた。

「れ、怜ってば……」

「ふふ、ゴメンね悠君。でも、羨ましいって思ってるのはホントなんだよ？」

「あ、あはは」

笑顔を絶やさない怜は、それでもそんな笑顔の奥にどこか油断な無いらしいような色を秘め。

叶わないなあ、などと思いつながらも、そんな笑顔に惹かれている自分がいることを悠は自覚していた。

そして、彼はそんな話題の中心となった親友の事を思い返す。

「……今、あいつは何をしてるのかな？」

「分からないけど……でも」

「でも？」

「またいつか、昔みたいに笑い合えたらいいなって……緋織ちゃんも私達も、あの子も一緒に……ね？」

「……そうだね」

頷き、悠は虚空を見上げる。

彼は、今何処にいるのか――

（……意外と、近くにいるのかもしれないな）

そんな事を考え――悠は、小さく笑みを零していた。

02-2: ショッピングモール

「人がいっぱいですね……」

「まあ、この人工島はかなり人口密度が高いからなあ」

隣に雨音^{あまね}を連れ立って歩きつつ、ようやく男の姿に戻れた涼二は彼女の言葉に対してそう口にする。

高い秋空の下、二人は新しく出来たショッピングモールへと向かっていた。

若干寒くなってきたている為、涼二は普段とは別のダウンのコート、雨音も着物の上に淡い青の羽織を纏っている。

そんな格好の彼女がかなりの注目を集めていたが、その辺りは当の昔に諦めている。

気にしない振りをしつつ、涼二は人との接触を気にする雨音へと向けて声を上げた。

「一応、能力の切り替えは出来るようになったんだろう？　そこま

で人との接触を気にする必要はないと思うが」

「そうですが……癖のようなもので」

「……そうだな。まあ、仕方ないか」

前回の事件から、涼二達は鉄森グループの下で厄介になっている。スリスが持ち帰った資料によって雨音の研究に使われていた機材も明らかとなり、今では静岡製薬でなくとも彼女の調整を行えるようになっていた——が、流石に短時間で完全に元に戻す事は出来なかった。

今現在では能力が二分化されているような状況で、自由に切り替えをする事も可能だが、どちらの出力も半分程度まで落ちてしまっているのだ。

しかし、とりあえずは相手の命を吸ってしまわずに済むようになったにもかかわらず、雨音は相変わらず人との接触を避ける傾向にある。

（……まあ、触れられるのを避けようとはしなくなったし、多少は進歩してるんだろうけどな）

喜び勇んでスキンシップを取っていたスリスの姿を思い出し、涼二は小さく肩を竦めた。

流石にあれば遠慮が無さ過ぎる——とは思っているのだが、アレのおかげで雨音の苦手意識が薄れていると考えるとあまり文句も言えない。

ガルのほうも、雨音の才能を見て以来、彼女に護身術を覚えさせたがっているようであったが——

「ところで、涼二様？」

「ん、何だ？」

「今日はどうして私を誘ってくださったのでしょうか？」

「あれ、説明してなかったっけか？」

首を傾げながら問いかけてくる雨音に、涼二もまた首を傾げていた。

そして虚空を見上げながら己の記憶を検索し——出てくる際に、『買い物に行くぞ』としか告げなかった事を思い出す。

あまりにも適当すぎる己の物言いに、涼二は口元を引き攣らせていた。

「あー、うん。お前の日用品を買おうと思ってな」

「日用品、ですか？」

「ああ。鉄森に頼めば揃えてくれるとは思うが、やっぱり自分で使うものは自分で選びたいだろ？」

「成程……お心遣いありがとうございます、涼二様。気が利かない様で利くのですね」

「……言うようになったな、お前も」

半眼で言うが、雨音はきょとんと首を傾げるのみ。

どうやら素で言っていたらしいその言葉に、涼二は見えないように顔を逸らしながら嘆息していた。

持ち前の要領の良さを発揮して、真綿が水を吸うように知識を吸収している雨音ではあるが、この天然ぶりだけは相変わらずだったのだ。

とりあえず涼二も慣れてきてはいたので、あまり気にしないようにする事としたが。

「……まあとにかく、そういう訳で、お前を新しく出来たショッピングモールに連れて行こうと思ったわけだ」

「テレビで見ました。大きなお店なんですよね？」

「ああ。まあ、元から行く予定があったからな。そのついでみたいなものだ」

見えてきた巨大な商業施設を見上げつつ、涼二はそう口にする。縦も横も奥行きも、かなりの大きさを持つこの建物。これだけの敷地面積となれば、周辺住民から文句が出てくるのも納得できる規模ではあった。

今となってはすっかり受け入れられている次第ではあるのだが。

特に近場のカフェやコンビニは、以前よりもかなり客足が増えている事だろう。

人通りの多い周囲へと視線を走らせながら、涼二は目的の人物達の姿を探し始めた。

「さてと、あいつらは……」

「あいつら？」

「ああ、俺の幼馴染二人なんだが……流石に女の日用品なんて俺には分からないからな。さらに、普通の生活様式とまるっきり異なってるスリスも参考にならないし。」

だから、その辺り任せられる奴に来て貰おうかと思ってたんだ」

まあ、女は一人だけだが——と、涼二はそんな事を胸中で口にする。

そうやって頭の中で自己完結しているから必要な情報を告げられないのだと言う事には、今のところ気付いていなかった。

流石に簡単な人探し程度に能力を使う気にはなれず、涼二は辺りをきよろきよろと見回しながら目的の姿を探す。

メールを見て確認すれば、集合場所は正面入り口前の時計台の前と書いてあったのだが——

「いよお、涼二。また別嬪さん連れてるじゃねえか」

「つと——気付いてたんならさっさと声をかけろよな、双雅^{そらが}」

背後から小突かれ、涼二は軽く後頭部を抑えながらも振り返る。そこに立っていた上狼塚^{かみおいつか}双雅の姿を見上げつつ、涼二は小さく肩を竦めた。

いつも通りの髪型ではあるが、流石に寒いのか、胸元を開けるような真似はしていない。

その代わり、普段のピアスに加えてイヤカフスまで装着していたり、着ているジャケットにやたら鎖の装飾があったりと、相変わらずの装飾過多である。

涼二は一応接触の直前に気配を掴んでいたのですが、それほど驚きはしなかったが、雨音はその姿を見上げて目を見開いていた。

「大きな方なんですネ……涼二様、この方が？」

「ああ、コイツが俺の幼馴染で——」

「女性の方には見えませんが……」

「オイ涼二。テメエ、一体どんな説明してやがった」

双雅の言葉のトーンが下がり、半眼で睨むように涼二の姿を見下ろす。

涼二もまた雨音の言葉に頬を引き攣らせ、慌てて声を上げた。

「違う違う、俺が言ったのはもう一人の方だ！ コイツはおまけ、付き添い！」

「あ……そうでしたか。申し訳ありません、おまけ様？」

「……涼二、ちょっと後で話がある」

「こいつの言動の責任を俺に求められても困るっての……」

深々と嘆息し、涼二は横目で雨音の様子を観察する。

きょとんと首を傾げている彼女の様子からは、決して悪意や悪戯心のようなものは感じ取れない。

即ち、彼女は完全に素で先ほどの発言をしているのだ。

「分かってはいたんだがな……雨音、コイツは上狼塚双雅って言うんだ。俺の幼馴染の一人だよ」

「あら……度々済みませんでした、上狼塚様。私は静崎^{しやまざき}雨音と申します」

「お、おう。苗字も長げえし、涼二の事は名前で呼んでるんだろ？ だったら、俺の事も双雅で構わねえよ」

「はい、分かりました双雅様」

「……様付けってむず痒いな」

背中に手を突っ込んで掻き始める双雅の様子に、涼二は隠れて苦笑する。

自分自身にも覚えのある感覚ではあるが、その辺りは我慢して貰う事とするしかないだろう——いや、頼めばさん付けでも許してもらえるのだが。

ともあれ、彼女がやたらと丁寧なのは今に始まった事ではない。

とりあえず、完全に説明不足であったことを理解した涼二は、説明の為に口を開こうとし——

「ああああああああああああっ!？」

——周囲に響いた素っ頓狂な叫び声に、思わずそれを中断していた。

三人がその声の方へと視線を向ければ、そこに立っていたのは赤いピーコートを纏った茶髪の少女。

こげ茶色の丸い瞳の眦を大きく吊り上げた彼女は、涼二達の方へとその指を向けて更なる叫びを上げる。

「アンタ達、何やってんのよ!？」

「え、いや、何って……?」

「女の子ナンパして! しかも和服美人! どっちの趣味だ!」

「どっちかって言うとな涼二じゃねえの?」

「擦り付ける気かテメェ!？」

涼二は咄嗟に双雅の胸倉を掴み上げようとするが、彼はさっと身

体を反らしてそれを躲す。

話の中心になっていゝる雨音はといへば、何を言われているのか分からない様子できょとんと首を傾げている。

ナンパと言ふ言葉の意味が分からなかったのだろう、と救いになっているのかいないのか分からない考えを胸中で吐き出し涼二は声を上げた。

「おっか桜花、話を聞け」

「五文字以内」

「俺は保護者」

「ちっ、漢字含めて五文字か……」

舌打ちする桜花に涼二は半眼を向けるが、生憎と彼女に堪えた様子は無かった。

どうやら、半分ぐらい分かつていて先ほどの台詞を言い放っていたようだ。

「涼二様、こちらの方が？」

「ああ、コイツは御津川桜花。みとがわ双雅と同じく、俺の幼馴染だ」

「ま、よろしくねー……で、涼二。この子は一体何なの？ っていうか、様付けって何よ？」

「あー……」

後者に関しては雨音の癖としか説明のしようが無かったが、前者に関しては少々悩みどころではある。

雨音の境遇を正直に話す訳にも行かず、しかして下手な情報を出せ

ば怪しまれるだけ。

そもそも、涼二と雨音には基本的に何ら接点と呼ばれるものは存在せず、ニヴルヘイムを除いた涼二の交友関係を把握している二人には下手な誤魔化しも通用しない。

と――

「桜花様ですね。私は、静崎雨音と申します」

「え？ あ、はい。よろしくお願ひします……」

何やら釣られて敬語になっている桜花に、涼二は小さく苦笑を漏らしていた。

どうやら、雨音の様子に毒気を抜かれてしまったらしい。こういう時には、彼女の悪意の無さは役に立つ。

「今は涼二様の下でお世話になっておりますので、何か御用がありましたら涼二様の方に――」

「涼二、ちょっと話があるわ」

「OK、分かった。だから袖の中から顔出してるその物騒な生物は仕舞え」

咄嗟に逃げようとした涼二の肩を桜花が掴む。

そんな彼女のコートの袖口からは、白い蛇が顔を出して涼二へと向けて牙を剥いていた。

シャーという威嚇音、そしてその鋭い牙を恐々と見つめつつ、涼二は咄嗟に弁解の言葉を口にする。

「とりあえず、お前が思ってるような事はない。俺の家にそいつを泊めてる訳じゃない」

「ほほう、じゃあどういいう事だ？ 着物着せて様付けで呼ばせてるくせに？」

「それはソイツが最初っからそうだったんだ！」

底冷えするような笑顔で蛇をちらつかせる桜花に、半ば絶叫するように涼二は声を上げた。

桜花の持つルーンは^{ゲーボ}G、^{エワズ}Eh、^{マンナズ}M。

^{フリックス}能力の強度は精々人外級であり、しかも^{エワズ}Ehと^{マンナズ}Mが効果を打ち消し合っている為に獣化する事は出来ないが、その代わり動物に好かれやすいと言う性質を持っている。

その力を使って、彼女は蛇を自由自在に操っているのだ。

「この間探偵の手伝いみたいな仕事してるって言っただろ。そいつは、そこで預かる事になったんだよ。

そいつを預かってるのも、その事務所みたいな場所だ。それで、その日用品が無かったから買いに来たってだけだ！」

「……そうなの？」

「はい、大体そのような感じかと」

「ちっ、何だつまんねえ」

「双雅、テメエは後でぶっ飛ばす」

ガムを噛みながら舌打ちをしていた双雅へと悪態を飛ばし、涼二は深々と嘆息する。

一応納得したのか、桜花はその手を離して袖の中へと蛇を仕舞って

行った。

涼二としても双雅としても、肌に直接蛇を纏わり付かせているのは理解し難い性癖ではあるのだが。

「ハア、そういう事ね……ええと、雨音ちゃんだったかしら？」

「はい、桜花様」

「様は勘弁して欲しいなあ……桜花ちゃんとか桜花さんとか、そういうのじゃダメ？」

「いえ、構いません。それでは、桜花さんで」

「うん、それならそれで」

満足した様子で桜花は頷く。

彼女の視線は足元から頭の先までじつくりと雨音を観察し——むむむ、と小さく呟いた。

「コーディネートは難しそうね……完全に和風イメージが染み付いてるわ」

「あー、まあ服はこっちの方で何とかする予定ではあるんだが。流石に着物を買うのは手間が掛かる」

「そりゃ、ここで着物が買えるとはあたしだって思っていないわよ。」

けど、部屋着とか簡単な外出時の服とか、あるでしょ？」

「あー……雨音、ちょっと」

「はい」

桜花の言葉に、涼二は軽く視線をそらしつつ雨音の事を呼び寄せた。

そして、二人に気付かれぬように声を絞って小さく囁き掛ける。

「いいか、雨音。決して、ルーンを見せるんじゃないぞ？」

「はい、私のルーンは貴重なものだからですね？」

「ああ、確実に騒ぎになるからな。着物を脱ぐ事があっても、せめて一人でやってくれ。試着室にあいつを入れるな」

「心得ております、涼二様」

頷いた雨音に満足し、涼二もまた彼女へと向けて頷き返す。

聞き分けの良さは相変わらず——だが、持ち前の天然で口を滑らせないかどうかは涼二としても若干不安な所だった。

小さく嘆息し、涼二は目の前の建物を見上げる。

オープンしたばかりの大型ショッピングモール。

個々を経営しているのは他でもない、現在涼二達が雇われている鉄森グループだ。

様々な分野に事業展開をしている彼のグループは、まだ年若いながらも腕は確かな会長、鉄森シアによって運営されている。

現在涼二達の直接の上司となっている彼女とは、友好的な関係を築けていると言っても過言では無いだろう。

彼女は身内に対して甘いと言う涼二の性質を一目で理解し、自分達をその『身内』という範囲内に含めてしまおうとしているのだ。

それだけの眼力を持つ相手と対等な立場を築けるのは、涼二達としても利点が大きい。

故に、涼二達——即ちニヴルヘイムも、彼女との共闘関係を認めると言う選択を取ったのだ。

「しかしまあ、このショッピングモールも鉄森グループのだったとはな」

「優待券と言うか、商品券貰っちゃいましたね。これ、どうしましょう？」

「まあ、何か適当に買えばいいだろうさ。それに、欲しいものがあったらなんでも言ってくれていい。どうせ、金なんていくらでも余ってるんだからな」

「それは……」

「遠慮するな。どうせ、お前は金持っていないだろ」

そうでした、と口元に手を当てる雨音に苦笑し、涼二は再び視線をショッピングモールの方へと向ける。

ニヴルヘイムとして稼いだ金はいくらでもあるので、雨音の買い物に費やす程度ならばどうと言う事は無いのだ。

とは言え、前回ショッピングモールに行けず、さらに何度も——女性の方になってしまっていた為——約束を断ってしまった涼二は、幼馴染二人に一品ずつ奢らされる約束となっている。

財布の中に入れられる金は有限なので、途中で金を引き出してこない限りはそこまで余裕があると言う訳でもなかった。

遠慮など到底存在しないであろう二人の様子を思い出し、涼二は静かに嘆息を漏らす。

と——

「ほら涼二、アンタいつまでボーっとしてるのよ！」

「色々見るんだろオ、時間なくなっちゃうぞ？」

「っと、悪い」

物思いに耽ってしまっていた事を自覚し、苦笑交じりに視線を戻す。

そんな涼二の視線の先には、悪戯っぽい笑みを浮かべた双雅と桜花の姿があった。

これ以上奢らされる数を増やされてもたまらないと、涼二は雨音を促して歩き出す。

日常の象徴たる二人——そこに、非日常であった雨音を出逢わせてしまう事に若干の躊躇いはあった。

けれど、雨音には非日常に染まりきって欲しくないと——涼二は、そう思っていたのだ。

思い入れと言ってしまうえばそこまでであるし、姉と似ているからと言われれば否定は出来ないだろう。

けれどもそれは、紛れもなく涼二自身の願いであった。

「で、まずはどこを見るんだ？」

「洗面器具とかかな。今までは簡易の物を使ってたけど、ちゃんと自分用のものが欲しいだろ？」

「はい、お心遣いありがとうございます」

「あんまり畏まらなくていいわよ。涼二の友達なんですよ？　だったら、あたしたちも友達！」

四人で連れ立って歩き出す。

そんな中で、桜花の言葉に目を見開きながら驚き、そして嬉しそうに顔を綻ばせた雨音を見て——涼二は、小さく微笑んでいた。

やはり、彼女にはまだ経験が足りない。

ずっと一人きりで、実験体として扱われてきた頃とは違うのだ。そして、そういった事を教えるのに、桜花以上に適した人物はいない

と涼二は思っている。

だからこそ、涼二は彼女を連れてきた事を後悔しないと――そう、決心する。

「さて……今日は楽しむとするか」

寒くなり始めた日々。

秋晴れの空には、嫌いな冷たい雨を降り注がせようと言う気配は存在していなかった。

02-3..見かけた影は

「涼二、俺はアクセの店見てくるぜえ」

「おう、買うんだったら領収書貰って来いよ」

「値段だけだったらレシートでもいいだろ。ま、了解だ」

後ろ手に手を振りながら去ってゆく双雅の背中を見送り、涼二は小さく肩を竦める。

高そうなものを買われそうだからと言う事ではなく、単純に何処までも予想通りだったからだ。

指輪やペンダントやピアスと、双雅はああいったシルバーアクセサリーの類を好んで身につけている。

物々しいデザインの首輪と相まって、似合っていることは確かなのだが――

「あいつ、あれ以上チャラくなってどうするつもりなんだろうな」

「さあ？ チャラさの世界選手権にでも出場するんじゃないの？」
「まあ。頑張って優勝しないといけませんね」

間に立つ雨音の言動に涼二と桜花は視線を合わせ——別に双雅の事だからどうでもいいか、と訂正せずに聞き流した。

双雅も雨音に対しては手が出せないであろうと言うのが、二人の共通見解だ。

見るからに不良、アウトローと言う雰囲気的双雅は、その見た目の通りに不良の間ではそれなりに名の知れた存在である。

喧嘩っ早く、常にふらふらと様々な場所をねぐらにして暮らしており、普段何処にいるかは涼二や桜花でも把握し切れてはいない。

二人は彼が不良グループのリーダー的な事をやっていると言う話を聞いていたが、そちらの事情に巻き込まれた事はほとんど無かった。稀に、双雅へのお礼参りとしてやって来た不良を三人で叩きのめすような事もあったが、そういう時にはきっちりと謝罪してくるのが双雅という男である。

筋を通す所は筋を通す。暴力的な事情には決して堅気を巻き込まない。

それが、上狼塚双雅と言う男のポリシーだ。

(……まあ、俺に関しちゃそうでもないか)

時折喧嘩の戦力として駆り出された事を思い出し、涼二は小さく嘆息した。

双雅は相手が堅気の人間かそうでないかというのが空気で分かるらしく——ムスペルヘイムにいた時点で堅気ではないが——涼二

が相手の時は、そう言った遠慮というものは存在していなかった。それほど迷惑していると言う訳でもなく、基本的にされるがままの涼二ではあったが。

「さて。洗面器具もパジャマや部屋着も買ったし……次、何処行く？」

「家電の類は揃ってるからな……多少趣味の物でも見ていいんじゃないか？」

「そうねー。で、雨音ちゃんの趣味って？」

その辺りは涼二もあまり知らなかったので、二人の視線が雨音の方へと向けられる。

そんな二人分の視線を受けた雨音は特にうろたえたような様子もなく、頬に手を当てながらたおやかに声を上げた。

「好んで行っていたようなものは、あまり……ですが、スリスさんに頂いた本を読むのとか、一緒にゲームをしたりするのは楽しかったです」

「へえ、読書にゲームね。じゃ、とりあえず本屋からかしら……ところで涼二、スリスって誰？」

「同僚だ同僚。本屋なら上の階だ、とっとと行くぞ」

「あ、双雅にメール打っとくわ」

携帯を取り出してボタンを押し始める桜花に、涼二は小さく肩を竦める。

空間投影ディスプレイ型や音声認識型、さらに視線思考追尾型など

様々なタイプが出ているというのに、知り合いはどれもこれもアナログなボタン式を使っているのだ。

（ああ、そういや――）

雨音に携帯を買ってやるべきだろうか、と涼二はぼんやりと思考する。

尤も、雨音が一人で行動するような事はしばらく無いだろうから、あまり慌てる必要も無いのだが。

基本的に、彼女はスリスかガラムと共に行動する事になるだろう。戦闘方ではない為、基本的には後方で待機する事になる――ならば、スリスと共に後方支援が常か。

涼二がそんな事を考えている間に、桜花の連絡は終了していた。

「ほら、何ボーっとしてるのよ。行くわよ二人とも」

「はい、楽しみです」

「おー」

嬉しそうに笑う雨音と、気のない声を上げる涼二。

対照的な二人は、桜花の後に続いて建物内を登るエスカレーターへと乗り込んだ。

上の階層の床の影からは、徐々に『天林堂』という有名書店の看板が現れる。

大型ショッピングモールの十二階――ここは、広大なフロアの大半が一つの本屋と言う、書痴には堪らない場所となっているのだ。全域を埋める事は出来なかったのか、一応一部はCDショップとな

っているが。

データ書籍が台頭する時代となった今日でも、紙媒体の書物が役目を終えた訳ではない。

データ特有の扱い辛さや読み難さは依然として存在しており、また保存と言う点でも紙媒体の方が優れている。

その為、このような大型書店には、未だに客足が途切れるような気配は存在しないのだ。

「わあ……沢山ありますね」

「そりゃね。多分、ここは密都最大の書店だろうし」

「多すぎて探し辛いつてのもあるがな……ま、そこはあの端末で調べればいいんだが」

要所要所に立ち並ぶ情報端末は、この書店に置かれている本を検索する為の装置である。

著者や発行年数、題名など様々な条件で検索できる機械であるが、この書店の規模から考えると若干数が足りない。

常に人が前に立っており、使うには並ばなくてはならないような状況が続いていた。

そんな様子に、桜花は呆れたように肩を竦める。

「少しは自分の足で探せばいいのにねえ」

「言ってやるなよ。何処にどんな本が並んでるのか分からなけりゃ、探すのだけで一時間は掛かるぞ」

「ま、そうだけどさ……っと。それで、雨音ちゃんはどんな本が欲しいの？」

「あ、はい。そうですね……」

雨音はキョロキョロと周囲を見渡し——特に思い当たるような物は無かったのか、諦めた様子で首を捻る。
その状態でしばし待ち、雨音はその視線を上げた。

「ルーン能力に関する本が、欲しいです」

「能力の本？ そりゃいっぱいあるだろうけど……雨音ちゃんって何のルーンを持ってるの？」

「ソウイルテイタインだ。巨人級だが、それなりの力はあるぞ」

雨音が何かを答える前に涼二がそう声を上げる。

始祖ルーンも神話級も、フアーブラ教えれば余計に騒がれるだけだからだ。
そんな涼二の言葉に雨音はきょとんと目を見開いていたが、納得したのかコクコクと首を縦に振る。

そして桜花は、そんな二人の様子には特に疑問を持たず、感心したように頷いた。

「へえ、ソウイルS単品とはね。雨音ちゃんらしくっていいんじゃない？」

「……はい、ありがとうございます」

桜花が口にしたのは単純な賞賛ではあるが、その言葉に対して雨音は若干複雑そうな表情を浮かべていた。

流石に能力が反転しており、その為に人を死なせてしまった事があるなどとは桜花も思わないだろう——ソウイルSとは、本来人を癒すだけの優しい力なのだ。

小さく嘆息し、涼二は桜花からは見えない位置で軽く雨音の背中を叩いた。

それに驚いたのか、雨音は目を見開いて涼二の方へと視線を向け、意図に気づいたのか嬉しそうに笑顔を浮かべる。

しかしそれには気付かない振りをしつつ、涼二は目的の本がある棚の方へと歩き出した。

「まあ、ルーン能力に関してだったら端末を使わんでもある程度場所なら分かるだろ」

「そうねー。結構な数あるだろうし、適当に見ながら探しましょうか」

店内の簡単な見取り図からどの辺りにルーンに関する本があるかを確かめ、三人はそちらへと向けて出発する。

途中、雑誌のコーナーや新刊のコーナーで足を止めつつも、彼らはルーン能力に関する書籍の棚へと辿り着いた。

あまり高すぎないように設計された本棚の中には、大量の書籍が所狭しと並んでいる。

それらを見上げて、『良し』と腰に手を当てながら呟いた桜花は、涼二達の方へと視線を向けた。

「で、雨音ちゃんはどれぐらい知識あるの？」

「……正直、殆ど無いな。一応基本は知ってるが、能力を使うのは全く無縁な生活をしてたらしい」

「ふうん……ちょっと訳ありみたいね。ま、何だっでもいいけど」

特に気にした様子も無く頷くと、桜花は本棚にかじりつくような様子で参考になりそうな本を探し始めた。

そんな彼女のさっぱりとした様子に小さく笑み、涼二もまた本を探し始める。

残された雨音は、二人の姿を見比べるようにきよきよと視線を動かし――そして、涼二の後ろに続くように本棚へと近づいて行った。

雨音は相変わらず相手に触れぬように気をつけながら服の裾を引っ張り、涼二へと向けて声を上げる。

「ええと、どのような本を探せばよいのでしょうか？」

「どのような、か。まあ、とりあえず桜花の方が基本に関する本を探してみるみたいだし、こっちは^{ソウイル}Sに関する専門書を探すつもりだ」

「^{ソウイル}Sの……」

まあ、流石に反転した^{ソウイル}Sに関しては資料なんて存在しないだろうがな――などと胸中で呟き、涼二は肩を竦めながらも探索を再開する。

この本棚にはそれぞれのルーンに関して解説書のようなものが存在しており、それぞれのルーンの成り立ちや効果に関して詳しく解説されている。

無論の事、^{ソウイル}Sもそのうちの一つだ。

「ふむ……これとか、これだな」

涼二が取りだしたのは、『ルーン能力の教本…^{ソウイル}S編』、『これで

あなたも一流能力者！ 太陽と命、人を癒す優しきルーン（S）
と題された二冊の本。

どちらも、全てのルーンに関して個別に刊行されている解説書だ。前者は硬派な書籍で、非常に詳しくその能力や前例などについて説明されている。

後者は前者程の詳しさは無いものの、イラストなどを交えて分かり易く説明されている本だ。

涼二としては、題名を交換した方が良いのではないかと思う所がある。

「とりあえず、見た感じでどちらがいい？」

「そうですね……」

ぱらぱらと頁をめくり、雨音は二つの本を見比べる。

とりあえず目が行っているのは、やはり図の多い後者の本のようだった。

その様子に、涼二は小さく苦笑を漏らす。

「あの、涼二様。どちらにも良く分からない単語が多いのですが……」

「ああ、そりゃあ仕方ないだろう。そっちに関しては、多分桜花が搜してくる本に説明されてるさ。で、どんなのが分からないって？」

「あ、はい。この単語とか……」

言って雨音が指差したのは、目次に書いてある『一般的なファンクション』と言う言葉だった。

それを見て、成程と涼二は胸中で頷く。

涼二たちが雨音に説明したのはあくまでも基本知識と言うレベルの話であり、こういった使い方に関する事は教えていなかったのだ。

「《ファンクション》って言うのは、簡単に言うと『必殺技』だな」「必殺、技？」

「要するに、能力の使い方をパターン化して、技と言う形で使うって事だ。例えば、俺が水のロープを使って飛びまわったりするのもそれに当たる」

《ファンクション》とは、あらかじめそういった技を決めておく事で、いざと言う時にその技を呼び出し易くする為の方法である。ルーンはそれぞれ操作の仕方やプラナーの量によって様々な効果を発揮し、その場に応じて使い分ける事は難しい。

故に、予めパターンを決めたものを型のように作り上げ、そこにプラナーを流し込む事で能力を発動させると言うプロセスで能力を発動させる事で、能力の使用を容易にしているのだ。

「自分の魂にあらかじめ使い方のプロセスを登録しておくんだ。後は、プラナーを注ぎ込みさえすれば発動できる。」

力さえ入れれば発動できるから、『関数』ファンクションなんて呼び名がついてるんだ」

「成程……ただ力を使うだけでは駄目なのですね」

「駄目、とは言わないがな。形骸化されちまうよりは、まっさらな状態で使った方が応用が利く場合もある。」

ただ、制御の難しい微妙なバランスで能力を使わなきゃならない場合は、これはかなり役に立つもんだ」

例えば、ガルムの《イラスト・ベステイア血染めの狼》。

人狼と言う人と獣の中間の姿を保つのは、普通に能力を使う上では非常に難しい。

そこで、ガルムはこれを《ファンクション》として登録する事で制御を簡単に行っているのだ。

尤も、それを創り上げるまでに数年の歳月を費やしたらしいが。

「で、これには二種類……《フォーミュラ・ファンクション》と《オリジナル・ファンクション》が存在する」

「それにはどのような差が？」

「前者は、ここに書かれてるような奴の事だ。即ち、能力の一般的な使い方……お前のSで言うなら、傷を癒すとか疲れを取るとか、そういった使い方の事だ」

涼二はあまり《フォーミュラ》に頼らず、自分の制御力頼みに能力を使う事が多い。

しかし、能力に関して初心者である雨音には、このように形にされている方が使い易いだろう。

「で、《オリジナル》ってのはその名の通り、自分で創り上げた《ファンクション》の事だ」

「自分で、創り上げる？」

「そうだ。お前はシングルルーンだから分かり辛いかもしれないが、能力ってのは一人一つと決まった訳じゃない。

だからこそ、他の能力と組み合わせで自分独自の使い方を編み出す

事が多いんだ」

じゃなきゃ、せっかくのルーンが無駄だからな、と小さく呟きながら涼二は続ける。

その脳裏に浮かんでいるのは、仲間達が能力を使っている時の姿だ。

「例えば、スリスが能力を使って電子機器を操る事。あれも、あいつが持つ複数のルーンで操ってる訳だ」

「個人差があるからこそ、自分自身で力を工夫しなければ一人前とは言えない——と、そういう事ですか？」

「ま、そうだな」

何を以って一人前と言うべきなのかは涼二にとっても分からなかったが、とりあえずは理解を得られたようなので、満足して頷いておく。

と——そんな所で、桜花が一冊の本を手に二人の方へと近付いてきた。

「ほら、雨音ちゃん。これなんか、一通りの基本が押さえられて手分かりやすいよ」

「あ……ありがとうございます、桜花さん」

「い、いやあ。そんな改まって礼を言われると照れるって言うか——」

「どうせ話題の本のコーナーで紹介されてた奴だろうしな」
「そこ、うっさい！」

眦を吊り上げて叫ぶ桜花に苦笑しつつ、涼二は軽く本の内容へと目を通した。

能力の使い方や基礎、プラーナの使い方に関しても詳しく載っている本、『能力使用の基礎・ランクアップを目指して』。

内容も図解などが多いため分かりやすく、初心者向けといったところだろう。

これならば問題は無いだろうと涼二は頷き、本を雨音へと手渡した。

「うん、いいと思うぞ。これなら雨音にも分かりやすいだろう」

「お、お墨付きも貰ったわね。はい、雨音ちゃん」

「はい。それじゃあ、この二冊を……」

先ほど涼二が持ってきた本の後者の方と、今桜花が持ってきた本。その二冊を持って、雨音は恐縮したような様子を浮かべながらもその声を上げる。

どうやら、分かりやすさを優先したらしい。

（まあ、初心者だしな。最初はそんな所か——）

「さて！ それじゃ、他にも見て回りましょうか！」

と——涼二の思考を遮るように、桜花の声が上がった。

その内容に、涼二は胡乱な視線を彼女の方へと向ける。

「あん？ まだ何か見るのか？」

「当たり前でしょ？ 日常的にずっと能力の訓練してる訳じゃないんだから、もうちょっと趣味に出来る本も探すべきでしょ？」

「あ、えっと……流石にそれは申し訳ありませんので……」

「いいのいいの、どうせ涼二の金なんだし」

「おい」

威嚇するように低い声が発せられるが、謳歌は怯んだ様子も無く雨音の背中を押して歩き出す。

「ほらほら、あっちの方に小説のコーナーとかあるよ。色々読んでみればいいじゃない！」

「え、あの、えっと……」

桜花によって連れ去られて行く雨音の姿を見つめ、涼二は深々と嘆息した。

あの様子は、どうやら本人にも何らかの買いたい本があると見た——そんな事を考えながら半眼を向けつつも、涼二も二人の背中を追うようにして歩き出す。

ああなると、しばらくは解放されない事を知っているのだ。

どの道戻った所で暇には変わらないので、涼二は諦めて付き合う事を決意する。

と——

「ん……？」

ふと視界に入った大柄な影に首を傾げ、涼二はそちらの方へと視線を向ける。

どこか記憶に引っかかるその姿——直接確認しても中々思い出す事ができず、涼二は思わず首を傾げていた。

角刈りの黒髪と、浅黒い肌。そして、服の上からでも分かる隆起した筋肉。

一目見て連想するのはガルムであるが、生憎と彼とは髪の色が全く違う。

「あれは……確か、鉄森の執事だったか？」

かつて通信を行った時、鉄森シアの背後にいた大柄な執事の姿を思い出す。

すぐに服を破き飛ばして筋肉の見せ合いになった為、精神衛生的に視界から外していた涼二ではあるが、その姿には少しだけ覚えがあった。

彼は何やら慌しい様子で携帯に向かって話しながら、涼二の姿に気付く事も無くエレベーターの方へと向かってゆく。

このショッピングモールは鉄森グループが経営している為、ここにおいてもおかしくはないのだが——

「……妙に慌ててたな。何かあったのか？」

「ちょっと涼二、何ボーっとしてるのよ！」

「つと……悪い、今行く」

大した事では無いだろう、と涼二は小さく嘆息し、声を上げる桜

花の方へと向かって歩いてゆく。

彼女が手に持っている爬虫類図鑑に対して若干の呆れを抱く頃には、涼二は既に先ほどの男の事を記憶の片隅に追いやっていた。

——それが、事件のきっかけとなる事にも気付かずに。

02-4::ニヴルヘイムの現状

買い物を終え、涼二と雨音の二人は桜花や双雅と別れ、新たな拠点となった場所へと向かっていた。

それなりの時間をかけた為か、十時に集まったにもかかわらず、今はもう夕方となってしまうている。

夕日に照らされた密都の街並みを歩きながら、涼二はぼんやりと周囲の景色を眺めていた。

「日が落ちるのも早くなってきたな……」

「そうですね。もう冬も近いでしょう」

少しだけ強く吹いた風に髪を押さえながら、涼二の言葉に雨音が同意する。

冷たさを孕む風は、しかしまだ肌に凍みるほどの強さは無く。

心地よい冷気は、室内で火照った身体に染み渡ってゆく。

「涼二様、それは私がお持ちいたしましょうか？」

「お前は自分の服を持ってるだろ。重い物は俺が持つ」

「しかし、私の買い物だった訳ですから……」

「いいから。女に荷物持たせて隣を歩くなんて、恥ずかしいだろうが」

桜花に聞かれれば『古風な考えだ』と笑われそうな内容だ、と涼二は胸中で小さく苦笑しつつ、何冊もの本や洗面器具などが入った袋を抱え直す。

その動作が重そうに見えたのか、雨音は気が気では無い様子を見せるが、気付かない振りをしつつ涼二は歩いていった。

雨音の方も、その男性を立てるといふ奥ゆかしい考え方からか、それ以上追求してくる事はなかったが。

彼女は小さく息を吐き出し――そして、穏やかな笑みを浮かべる。

「涼二様、今日は私の為に、ありがとうございます」

「気にするな。どうせ、必要な事だったしな」

照れたようにそっぽを向きながら、涼二はそう口にする。

そんな様子に、雨音はクスクスと小さな笑みを零していた。

彼女が笑みの中で思い返すのは、今日という日に体験した様々な出来事。

「……本当に、楽しかったです。初めて見るもの、初めて口にした

もの……どれもこれも、新鮮な体験でした」

「ったく、大げさだな……当たり前前のものばかりだろ？」

「私にとっては、それが当たり前ではありませんでしたから」

静かな声音に涼二は振り返る。

そこにあつた雨音の表情は——どこか寂しそうな、懐かしそうな笑顔だった。

いつも上品に笑う彼女の憂いの表情に、涼二は思わず息を詰まらせる。

「不幸は不幸であると自覚せよ……ガラム様には、そう諭されました。私は今まで、不幸と呼べる存在だったのでしょう」

「……まあ、な。確かにその通りだ」

雨音がこれまで受けてきた実験を思い返し、涼二は顔を顰めながらも頷く。

彼女が静崎義之よしゆきによって引き取られる前の経歴については、今のところ明らかにっていない。

けれど、スリスが手に入れてきた資料では、彼女は物心つく前から実験体として使われてきた事が分かっている。

幸い、始祖ルーンを持つ存在として出来るだけ長生きさせようと言う魂胆があつたのか、寿命に影響が出るような実験は行われていなかったのが唯一の救いと言った所だろう。

「ですが、今は幸せです」

「……雨音」

「当たり前前の幸せを、知る事が出来ました。沢山の本があって、探すのがとても楽しかったり、他愛もない事で笑う事が出来たり、初めて食べた食べ物がとても美味しかったり……」

「ハンバーガーなんて、大したモンじゃないだろ」

「それでも、ですよ」

口元に手を当て、雨音は上品に笑う。

先ほどとは違う、心の底から嬉しそうな笑顔——それに対してどこか安心している自分に、涼二は半ば呆れを覚えていた。

「……あんなので幸せになれるなら、安いもんだよ。お望みとあらばいくらでも連れて行ってやるさ。似たような店ならいくらでもあるからな」

周囲を示しつつ、涼二は苦笑交じりに告げる。

周囲にはハンバーガーの店を始め、牛丼やうどん、ドーナツの店など、様々なチェーン店が立ち並んでいる。

この辺りは食事関係の店が軒を連ねて値段競争を行っている為、それなりに安く食事が出来る事で有名だ。

そんな周囲の状況に気付いていなかったのか、雨音は改めて周囲へと視線を向け、その瞳を輝かせた。

視線を涼二のほうへと戻し、彼女は嬉しそうに声を上げる。

「本当ですか？」

「ああ、勿論。ま、ああいう食事は太り易いから、しっかりと運動してないとダメだがな」

「あら。それでは、ガラム様に運動をお教えいただきましょう」

本当に、心の底から楽しそうに雨音は笑う。

当たり前の事で悩めるのが、本当に嬉しいとでも言うかのように。それは涼二にとって、幼馴染の二人と共に過ごす時間と等しい事だ。非日常の世界を忘れ、僅かながらの平穏を得る事が出来る、あの場所と。

「やりたい事が沢山あります。知りたい事だって、山ほど。ですから――」

雨音は笑う。

あの時、出会った頃に浮かべていた、静謐な笑みとも違う。今の彼女の顔には、陽だまりのような穏やかさがあった。

「――助けてくださってありがとうございます、涼二様」
「……ったく」

涼二は、その言葉に思わず視線をそらす。

何処までも純粋な好意、感謝の念に、照れを抑える事が出来なかったからだ。

悪意を向けられる事に関しては慣れているが、好意を向けられる事は得意ではない――それが、涼二の特徴だった。

「改まって言うほどの事でもないっての……ほら、行くぞ。あんまり遅いと、スリスがまた五月蠅くなるからな」
「ふふ……はい、分かりました」

雨音は嬉しそうに笑う。

そんな表情を肩を竦めながら眺めつつ、涼二は新たな本拠地となった場所へと向けて歩いて行ったのだった。

* * * *

鉄森グループ本社ビル。

ユグドラシルの発足以降に企業を立ち上げ、瞬く間に成長した鉄森グループの本社は、この密都に存在している。

繁華街を通り越し、オフィス街の地域まで足を踏み入れ、真っ先に目に入る巨大なビルがその建物だ。

グループの会長鉄森シアの私的な護衛という形で雇われたニヴルヘイムの面々は、この会社内に半ば顔パスではいる事が出来る。求められればIDを提出する必要があるのだが。

「しかしまあ、結構な手腕だな」

強化ガラスによって外が見えるエレベーターから眼下を見下ろしつつ、社内の様子を思い浮かべて涼二はそう嘆息する。

社員は誰も彼も慌しく、しかし充実した表情で仕事をこなしていた。無論、それはどうした所で難しい――誰もがやりたい仕事に就けるとは限らないからだ。

しかし、この会社ではシアが直接面接を行い、それぞれの適正を見出した上で、その仕事の割り振りを行っている。

観察眼も優れているのだろう、その割り振りに過ちはほぼ存在せず、結果として非常に充実した職場となっているのだろう。

（一体、何のルーンを持っているんだか）

胸中でそう呟き、エレベーターで到着した会へと足を踏み入れる。と――ふと、涼二は違和感を覚えて足を止めた。

そして唐突に立ち止まった彼へと、後ろから付いて来ようとしていた雨音は首を傾げる。

「涼二様、どうかなさいましたか？」

「あ、いや……大した事じゃないんだ」

ここ数日、出入りする時には必ずあの筋肉質な執事の送り迎えがあったのだ。

しかし今日に限ってそれが存在していなかった為、それに対して涼二は若干の疑問を覚えていた。

尤も、昼間ショッピングモールで見かけたあの男が涼二の見間違えでなかったとしたら、特に不思議と言う事でもないのだが。

(……まあ、何か用事があったんだろ)

そろそろシアが戻ってきている時間であると言うのに姿を見せないのは気になったが、彼らの用事に口を出すつもりも無いので、涼二はその疑問を意識の隅へと追いやった。

そして立ち止まっていた足を進め、涼二はこの高い階層にあるフロアの一室へと向かってゆく。

そこは、鉄森グループによって雇われたニヴルヘイムの面々に宛がわれた部屋の内の一室。

その部屋では――

「む、戻ったか二人とも」

「おー、おかえりー」

あまりにも予想通りと言えば予想通りな姿の二人が、それぞれ趣味の活動を行っていた。

巨大なダンベルを交互に上げ下げしているガラムは相変わらず上半身裸であり、そしてスリスの方はといえばスティック状のスナック菓子を口に加えながら携帯ゲーム機を弄っている。

そんな二人の姿に呆れを交えた嘆息を吐き出しつつ、涼二は雨音を連れて部屋の中へと入ってゆく。

「ぶれないな、お前らは」

「えー、何さそれー」

「ったく……ほら、お前が頼んでたゲームソフトだ。ただし、エロゲは無しだからな」

「ええ!？」

半ば悲鳴のような声を上げるスリスに、涼二は頭を抱えつつ近くにあった椅子へと腰を下ろす。

そしてそれと同時に、跳ねるように起き上がってきたスリスが、袋の中身を確かめて講義の声を上げた。

「むー、ボクだけだと買いに行きづらいのに!」

「いや、お前一応18なんだから、買えない訳じゃないだろ。そもそも、友人やら雨音やらを連れてる時にそんなモノ買えるか」

確かにスリスは小柄であり、見方次第では雨音とそれほど変わらないか、下手をすればそれ以下の年齢にも見えかねない。

しかし偽造とはいえ身分証名称も存在しているので、決して買えない訳ではないのだ。

それでも行きたがらないのは、単なる出不精でしかない。

相変わらずな様子のスリスに嘆息し、涼二はその背を椅子の背もたれに預けた。

黒い革の高級なソファは、深く沈んで包み込むように涼二の体を受け止める。

と——同じように反対側の椅子に座った雨音が、きょとんと首を傾げて見せた。

「あの……」

「ん、何だ？」

「えろげ、って何でしょう？」

その言葉に、部屋の中にいた三人が沈黙する。

涼二、ガラム、スリスは互いに視線を合わせ——そして、それぞれがどのような方向性で話そうとしているかを察知した。

そして——

「興味あるなら一緒にやろう！」

「止める馬鹿。雨音に妙な知識を植えつけるな」

「えー、ある意味必要な知識だよ？」

「あんな無駄に歪められた知識なんぞ使い物になるか」

あんなものは使……
涼二の見解である。

基本的に、スリスの好むゲームはそういったシーンなどが存在する
必要が無い、即ち基本のストーリーやらキャラクターやらを重視す
るタイプのゲームなのだが、だからと言って複数人でやるようなゲ
ームではない。

どちらにしろ、世間知らずな雨音にとっては教育上よろしくない内
容であった。

「とにかく、アホな事言ってる暇があったら自分で買って一人でや
れ」

「ぶー、涼二のいけずー」

「……結局、何なんでしょう？」

「まあ、何と言うか……君は、基本的な保健の知識を身につけた方
がいいかもしれないな」

「はあ、良く分かりませんが……」

苦笑交じりのガルの言葉に雨音は首を傾げ、その二人の様子に
涼二は少しだけ安堵の吐息を吐き出していた。

雨音がしつこく追求してきた場合、どのように説明したものかと悩
んでいたのだ。

尤も、基本的に彼女がそんな風に食い下がるという行動を取る事は
ないのだが。

それはそれで問題があるかもしれない、などと胸中で呟き、涼二は
小さく苦笑する。

現在の所、ニヴルヘイムはこのように鉄森グループに協力するよ
うな形で保護されていた。

尤も、普段からこの建物に滞在しているのは涼二以外の三人だけで
はあるのだが。

とは言っても、ニヴルヘイムはあくまでも、依頼を受けて活動する傭兵のような存在。

普段から何かをする訳ではないので、普段は涼二も自宅で待機しているのだ。

以前使っていた建物より交通の便がいい為、涼二としてもやり易い所である。

雨音は、以前までの問題はほぼ解決されたといっても過言ではない。

スリスが静岡製薬から持ち出した大量の資料を基に、鉄森シアの主導で雨音の調整機具が製造され、それによって雨音は今まで受けていた強化処理を緩和する処理を受ける事となった。

しかし、長年かけて体に馴染まされていたプラナーのラインは完全に消し去るには至らず、能力は中途半端に半分ずつ残る、というような状態となっている。

このままゆっくりと戻していくという方針ではあるが、雨音としても人に触れられるようになった現状は非常に嬉しいもののようだ。

スリスは、以前よりも恵まれたネットワーク環境で、その手腕を存分に発揮している。

ライバル企業のネットワークにハッキングを欠け、バレないように機密情報をいくつも奪取しているのだ。

アンサズ
Aのルーン特有のファンクション、マルチタスク《並列思考》によって同時平行でエロゲをやっていたりもするが、生憎と仕事はしっかりとやっている為、誰も文句がつけられない状態だったりする。

そしてガラムは、その筋肉故にシアのお気に入りである為、時折ボディガードを努めているのだ。

(……あれ、何もしてないのって俺だけ?)

机の上に置いてあったスナック菓子をかじりつつ、若干の危機感を覚えて涼二は頬を引き攣らせる。

何もやっていないと言う点では雨音も同じではあるが、研究に協力している為役に立っていないと言う訳ではない。

（突っ込んでこない辺り、スリスは気付いてないのか……まあ、ガラムは気付いても何も言わんだろうが。

そもそも、俺達は依頼が無い限り動く必要が無い訳で。うん、俺は何もしなくてよし）

自堕落な自己完結をしつつ、涼二は窓の外へと目を向ける。

夕方から夜になり始める紫色の空は、雲ひとつ無く晴れ渡っていた。夕日に染まる雲が好きな涼二としては、若干惜しいと思う所ではあるのだが。

「……さてと、俺は戻るかね」

「あれ、泊まっていけないの？」

「理由も無いしな。あんまり家を空けとくと、バカ共が勝手に入り込んで荒らしそうだし」

今更ながら合鍵を渡した事を後悔しつつある涼二であったが、今更言った所で意味は無い。

スリスに対してヒラヒラと手を振りつつ、他の二人にも目配せをし、涼二はその場から立ち上がった。

特に何かやる事がある訳ではない。あの一人きりの部屋には何も無く、ただ孤独な空間が広がっているだけだ。
けれど――涼二は、孤独な空間を好む人間でもあった。
仲間達と過ごす時間を嫌っている訳ではない。けれど、一人で考える事が出来る時間と言うものを、涼二は非常に好んでいたのだ。

「さて、じゃあ何かあったら連絡してくれ」

「んー、了解」

「涼二様、また明日お会いしましょう」

「ああ、買って来た道具はしっかり使えよ」

雨音に声をかけ、ガルムには目配せをし、互いに苦笑交じりに頷いてから涼二は扉へと向けて歩き出す。
態々ここまで雨音を送る気になったのは何故だったか――そんな事を考え、ドアノブへと手を伸ばした、その瞬間。

あらしやま
「嵐山がいませんわッ!？」

「うお!？」

蹴り破るような勢いで開けられた扉から、涼二は咄嗟に手を離す。
しっかりと足跡が着いた扉の向こう、そこに立っていたのは現在のニヴルヘイムの雇い主である鉄森シア。

彼女は非常に慌てた様子で、涼二達へと向けて声を上げた。

「ニヴルヘイムに指令です！ 我が執事、嵐山果須かずを搜索なさい！」

半ば啞然としながらも――またしばらく自宅に帰る事が出来なくなつた現状に、涼二は深々と溜め息を漏らしていた。

02-5..失踪した男

「……まあ、アンタの命令なら従わざるを得ないんだが、せめて分かるように説明してくれないか」

帰宅を取り止め、取り乱すシアを落ち着かせながら椅子に座らせてから、涼二は嘆息交じりにそう呟いた。

目の前の少女——鉄森シア。金髪碧眼の彼女は、そのポニーテールに纏めた髪を揺らし、沈んだ表情を浮かべている。

年の頃はあまり変わらず——否、少し低いぐらいかもしれないと、涼二は目算をつけていた。

そんな少女がこのような巨大な会社を動かしている事には驚愕を禁じえなかったが、それでも取り乱している所を見ると歳相応にも思える、と涼二は小さく肩を竦める。

普段なら気付いていたであろう涼二の観察の目に、しかしシアは気付かぬままかぶり振って声を上げた。

「嵐山は……わたくしの使用人にして護衛です。本来なら、わたくしの命令が無い限りは片時も離れる事はありませんわ」

「それが、連絡しても応答が無いって事？」

「ええ。今朝から視察に行かせていたのですが、時間になっても戻って来ず……連絡も」

スリスの言葉に頷き、シアは顔を俯かせる。

そんな彼女の言葉を吟味しつつ、涼二はガラムの方へと視線を向けた。

彼も得た情報から考察しているようではあるが、まだ情報が足りない。

「……執事って、あの角刈りの男だったな。あいつなら、アンタのところのショッピングモールで見かけたぞ。視察ってのは、あのショッピングモールの事を言っているんだよね？」

「ええ、その通りですわ。現在までの経営状況のチェックに行かせていたのですが……」

「ふむ……スリス、ちょっと頼めるか？」

「ん、何ー？」

流石にスナック菓子を摘むのは止めたのか、ゲームをスリープモードにしたスリスが涼二の言葉に首を傾げる。

どちらにしろあまり気にしないような面子ばかりではあったが、一応分別はあったようだ。

小さく息を吐き出しつつも、涼二は彼女へと向かって声を上げる。

「俺が見たとき、あの男は何者かと電話をしていた。てっきり鉄森かと思っていたんだが、どうやら違うみたいだからな。通話記録をチェックしてくれ。流石に録音データは無いだろうが、電話番号から相手の事を割り出せるだろ」

「ん、了解。ちょっと待ってねー」

ノートパソコンを開いて早速ハッキングを始めるスリス。

そんな彼女からは視線を外し、涼二は小さく苦笑交じりの声を上げた。

「しかし、少し意外だな」

「はい？」

「アンタの事だよ。人を使うのには慣れてそうなイメージがあったんだが……側近とはいえ、一人いなくなっただけでここまで取り乱すとはな」

多少からかうようなニュアンスを込めて、涼二はそう口にする。
が——どうやら、彼女にとってはあまり冗談にならなかったようだ。

「当然ですわッ！」

「ぬおっ!？」

バン、と力強く机を叩き、シアは勢い良く立ち上がる。

その瞳に籠った気迫に、涼二は思わず顔を引き攣らせていた。
が、彼女はそんな涼二の様子に気付かぬまま、勢い良く声を上げる。

「あの素晴らしい筋肉を数時間とはいえ見る事が出来ないなんて、
わたくしにとっては耐えられません！」

「……そっちなよ」

「うむ、確かに素晴らしい筋肉だな」

「頼むからお前までボケに回らないでくれ」

得意げな表情で頷いているガラムへは半眼を向け、涼二は感じた
頭痛に頭を抱えた。

隣から雨音によって頭を撫でられていたが、とりあえずスルーし、
呆れを交えた表情をシアへと向ける。

若干威嚇じみた陰相になってしまっていたが、彼女は一步も引く事
無く続けた。

「いいですか、人間には筋肉は必要不可欠なものなのです！」

「そりゃ、自分の筋肉は要るけどな」

「わたくしの多忙な日々潤いを与えてくれる嵐山の筋肉……アレ
が無くなってしまったては、わたくしはどうすればよいと言うのです
か！」

「仕事しろよ」

一つ一つの確にツツコミを入れていくが、生憎とシアには全く堪
えた様子は無い。

涼二は深々と嘆息し、仲間に助け舟を求めようとして――援護し

てくれそうな人物がない事に絶望した。

そして涼二が両手で蹲るように頭を抱えている間にも、シアの欲望に満ちた主張は続く。

「ええ、確かにガルム様の筋肉も魅力的ですわ。嵐山のそれと引けを取らぬほどに完成された肉体美……嘗め回すように観察したいのは事実です」

「……頼むから嘗め回すようにとか言うな。仮にも女だろ、お前」
「ですが！」

どうやら全く聞こえていないらしい——と、涼二は小さく嘆息を漏らす。

感極まっているらしいシアはそんな涼二の様子に気付かず、芝居がかった様子のまま声を上げた。

「だからといって嵐山を失う訳には行きませんわ！ たった一つの上腕二頭筋ですよ！？」

「……いや、二つあるだろ上腕二頭筋。まあ、本人がいないんだったら意味ないが」

深々と嘆息。

しかし——と、疲労感に満ちた感覚の中でも、涼二はしっかりと思考を展開していた。

何だかんだとおかしな主従ではあるが、嵐山と言う男は実際にかなり優秀な執事なのだ。

主であるシアとの信頼関係も厚く、戦闘に関してもかなりの実力を

持っている。

だと言うのに、何の連絡も無く姿を消すと言うのはあまりにも不自然なのだ——そう、よほどの緊急事態でも無い限りは。

「……ガラム」

「うむ。流石に、万が一と言う事もあるからな」

窓の外を見れば、既に日が落ちて電灯の光無しでは見通す事の出来ない闇に包まれた状況だ。

搜索の為に外に出る事を考えてはいるが、この時間に当ても無く探し回るのは効率が良いとは言えない。

今日は室内で情報収集に努め、明日までに戻って来なかったのならば探しに出ると言うのが妥当な所だろう。

ただし——

（……このお嬢さんは納得しないだろうからなあ）

未だに熱弁を奮っているシアの様子を半眼で見つめつつ、涼二は小さく嘆息する。

普段の冷静な経営者である彼女ならば非効率的な命令をするような事はないだろうが、今の彼女にはそんな余裕があるとは思えない。仮にも巨大グループの経営者だと言うのに、こんな体たらくで大丈夫なのかと若干不安を覚える涼二ではあったが、普段の彼女の優秀さを考えると、この程度で揺らぐような会社でもないのだろうと納得する。

と——

「……涼二、これちょっと変だ」

「ん？ 何か分かったのか？」

スリスの上げた言葉に、涼二は顔を上げて視線を向ける。

彼女は先ほどまでの弛んだ表情を引き締め、眉根を寄せながら声を上げた。

「かかってきた番号は特定できたけど、そこから先が調べられないようになってる。最新のプロテクトだよ、これ」

「探知不能な番号からかかってきた電話……？」

「それに、本人も衛星探知システムは切ってるみたいだよ。ちょっとした臭いと思わない？」

「……ふむ」

スリスの言葉に、涼二とガルムは思考を巡らせる。

息を飲んでいるシアと状況を理解していない雨音を含め、部屋の中には一時だけの沈黙が降りた。

そして——涼二は、声を上げる。

「スリス、場所の探知は出来るか？」

「相手と本人ね……両方、ちょっと時間はかかるけど可能だよ。どっちかっていうと本人を探す方が素早く出来る」

「分かった。なら、そちらを優先してくれ」

スリスにそう指示を出し、涼二は立ち上がる。

夜とは言え、相手の位置さえ分かればある程度の目算をつけて探す事は出来る。

スリスならば、数分ほどでそれを完了させる事が出来るだろう。

ならばやる事は決まっていると、涼二は小さく笑みを浮かべてガラムへ、そしてシアへと視線を向けた。

「俺達に指示を出せ、依頼主殿。そうすれば、俺達はアンタの命令通りに動こう」

「……！」

そんな涼二の言葉に、シアは大きく目を見開く。

しかし彼女はそんな驚愕を一瞬で納め、そして凜とした視線を涼二へと向けた。

「では、ニヴル Heim に依頼です。我が従者、嵐山果須の搜索をなさい」

「……了解した。一応緊急性があるかもしれないから、値段交渉とかは後にしといてやるさ。ガラム、行くぞ」

「ああ」

「雨音、お前はこっちでスリスの手伝いを頼む。飲み物を運ぶ程度で構わないから」

「分かりました、涼二様。お気をつけて」

自分が行っても役には立てないという事を理解しているのだろう、

雨音は若干申し訳なさそうな笑みを浮かべ、そう頷いた。

自分自身の実力を弁えたその姿勢は涼二にとっても好ましい物であり、小さく頷き返す。

ガラムもまた涼二に続くように立ち上がり、スリスは画面にその顔を向けたままひらひらと手を振った。

「じゃあ、行ってくる。連絡を頼んだぞ」

「はいはい、じゃあ気を付けてね……あ、シアちゃんちよっとお願いがあるんだけど」

仕事に関しては真面目なスリスに苦笑し――残る三人の言葉に耳を傾けながら、涼二はガラムを連れ立って与えられた部屋を出て行った。

*
*
*
*
*

「嵐山の部屋、ですか」

シアの言葉に頷きながら、スリスは雨音を連れ立って廊下を歩く。先導するシアの案内の元向かっているのは、失踪したと言う件の従者、嵐山に与えられていると言う部屋だった。

歩きながら両手で持ったノートパソコンは、スリスの能力による干渉で自動的にいくつもの画面を展開していた。

ファーフラ アンサズ マルチタスク
神話級のA能力者として持つ大量の《並列思考》の半分以上をパソコンでの作業に傾けながらも、スリスはシアへと語りかける。

「流石に、携帯から分かる資料程度じゃ何も分からないからね。彼が個人行動を取るに至った理由を調べるには、やっぱり本人の部屋を調べた方がいいだろうし」

「そうですね……と言っても、わたくしも何があったか気づく事は出来なかったのですが」

「おっちゃんと同種の間人っぽいからねえ、あの人。自分の感情を隠すのは得意そうだし、無理も無いと思うよ」

肩を竦めつつ、スリスは嵐山のいる場所を調べ、それと同時に通話記録にあった相手のプロテクトをゆっくりと慎重に突破してゆく。まだまだ時間のかかりそうな作業に辟易しつつも、スリスはシアへ

と向けて続けた。

「でも、そういう人間だからこそ、こういう感情的な行動に出るにはそれなりの理由があると思う……って言うのはまあ、おっちゃんと言ってた事だけど」

「理由、ですか……」

「想像は出来ませんが、大切な事だったのでしょね」

目を閉じ、雨音がそう口にする。

大切と呼べるものが少ない雨音にとっては実感がたい事なのか、あるいは少ないからこそ共感できるのか——能力によって得ている視界に僅かながら映る雨音の姿を見つめ、スリスは肉体の目を閉じる。

「……ここですわ」

「つと……じゃ、お邪魔します」

いつの間にか到着していた事に気付き、開けて貰った扉をくぐって、スリス達はその部屋の中へと足を踏み入れる。

嵐山に与えられている部屋は使用人の物とはいえ非常に大きく、しかし部屋の広さに比して私物と思われる物は非常に少なかった。

「おっちゃんの部屋に似てるなあ」

それを眺め、スリスは苦笑交じりにそう口にする。

この部屋の持ち主の私物と思われる物は棚の上に置かれた本と、所々に置かれているトレーニング器具のみである。

そんな中、スリスは部屋の片隅に置かれたパソコンを発見し、小さく笑みを浮かべた。

彼女はすぐさまそれへと歩み寄り、電源を入れる。

「……勝手に見るつもりですか？」

「ボクとしては、こっちを探す方が速いからね。必要のないデータは見ないよ」

——まあ、一通り目は通すけど。

胸中でそう呟き、スリスは三つのルーンを再び発動させた。

残る半分の《並列思考》マルチタスクをそちらへと傾け、張られていたパスワードをあっという間に突破する。

流石にほぼ全ての意識を傾けている状態では外の話に耳を傾ける余裕は無く、スリスは無言でその無数のデータへと目を通し始めた。

（……予想通りと言えば予想通りだけど、やっぱり筋トレ関連ばかりだなあ）

隠しファイルの類まで全て探し出しながらも、スリスは小さく苦笑を浮かべていた。

食事法やそれに伴うメニュー、シアの予定表と、それに伴う自身自身の行動。

さらに——

「……っと」

ノートパソコンの方で行っていた作業の内の一つ、嵐山的位置特定に関して作業を終え、スリスは一旦意識の一部を二つの画面から離れた。

その作業に割り当てていた意識を離れただけなので、特に作業効率が悪くなる訳ではない。

小さく頷き、スリスは携帯電話を取り出した。

指で操作するのも面倒臭く、能力で干渉して通話記録を呼び出してコールを開始する。

「……あ、涼二？」

『ああ、位置が分かったか？』

数コールの内に戻ってきた返事に小さく笑み、スリスは頷く。

小さく笑みを浮かべ、その向こうにいる姿を想像し、声を上げた。

「そっちにデータを送る。場所的には繁華街からちょっと外れた所みたい。何をするつもりなのかは知らないけど、今はとりあえず動いてないよ」

『了解した。今からガラムと二手に分かれながらそっちへ向かう』

「うん、分かった。地図データを二人の携帯に送るから、それを頼りに向かって」

『感謝する。何か分かったら連絡してくれ。こっちも追って連絡を

入れる』

「オッケー。じゃ、頑張つて！」

通話を切り、スリスは息を吐く。

そして電話へと傾けていた意識を戻し、余った《並列思考^{マルチタスク}》を残った作業へと割り振った。

嵐山に電話をかけてきた存在のプロテクトを破るにはまだ時間がかかりそうではあるが、もう一つの作業は大半が終了している。
が――

（何も見つからない……何も無いの？ いや、もしかして――）

先日の事件での事を思い出し、スリスはこのパソコンでの削除ログを検索した。

その上部、ゴミ箱の中からも念入りに消されているデータの中に、文章データを発見する。

ファイルの名前は単純に『調査』。

これだけでは今回の件に関係しているとは限らないが――

「他に思い当たる物もなし……やってみるか」

頷き、スリスはデータの復元を開始する。

しかしやろうと思ってすぐに終わるような作業ではない。

分割した意識を集中させながらも、スリスは後ろにいる二人へと声をかけた。

「雨音ちゃん、シアちゃん！」

「はい、何かお手伝いする事がありますか、スリスさん？」

「うん。ちよっと、この部屋を探ってみて。日記とかがあったら尚いいんだけど……メモ書きとかでも何かヒントになるかもしれない」
「いいのかしら……？」

若干遠慮がちな様子のシアではあったが、躊躇う事無く行動を開始する雨音に続き、部屋を見て回り始めた。

そんな二人の様子を確認してから、スリスは再び意識をパソコンの方へと集中させる。

消されたデータを小さなものから手当たり次第復元しつつ、ただ淡々と作業を進めてゆく。

一応《マルチタスク並列思考》の内のいくつかを二人の方へと向けながら、スリスは復元したデータを次々と再生していていた。
と――

「……あら？」

「ん、どーしたの雨音ちゃん？ 何か見つけた？」

「ごそごそとゴミ箱を漁っていた雨音が、何かを発見して首を傾げている。」

一応お嬢様出身の彼女があのような行動をしていることに若干の違和感を覚えていたものの、しっかりと働いてくれているので文句も言えず、スリスはその考えを意識から放り出しつつ声を上げた。

雨音がその中から見つけ出したのは、何やら紙を丸めた物。

どうやらメモ用紙の切れ端のようだ。

「えっと……走り書きのメモを破り捨てて、若干残っていた部分みたいな感じです」

「ちょっと見せなさい……確かに、嵐山の筆跡ですわね。けど、グレイプ……？」

「グレイプ？　葡萄がどうかした？」

「いえ、葡萄ではないと思いますけど……何かしら、これは」

ゴミ箱に捨てられていたのは、『グレイプ』までで途切れてしまったメモ書きの一部。

そこまででは意味を成さない単語に、スリスは思わず首を捻っていた。

が、それでもヒントには変わらない。

その単語に関して、パソコンの中を検索する――

「……！」

――そこに、一つだけヒットする内容が存在していた。

02-6：路地裏の世界

ぱちんと携帯を閉じ、涼二はその視線を繁華街の外へと向ける。
状況はあまり好転したと言う訳でもないが、それでも進展した事に
変わりはない。

涼二はメールと共に地図データが送られてくるのを待ち、ガルムへ
と電話をかけた。

「……もしもし、聞こえるかガルム？」

『ああ、大丈夫だ』

2コールで繋がったガルムに小さく頷き、通行の邪魔にならぬよ
う道の脇に立ちながら涼二は声を上げる。

その視線の中には、普段と違う鋭利な色が浮かんでいた。

「標的のGPS反応をスリスが強制起動して掴んだ。そっちにもデータが行っていると思うが」

『うむ、来ているぞ。さて、どう追う？』

「反応が移動していないのが気になる。ただ止まっているだけならいいんだが、もしかしたら携帯を落としているのかもしれない。」

その場合を考えて、二手に分かれた方が得策だろう」

『そうだな……ではそうしよう。今の位置からではお前の方が近そうだ、先に目標地点へと向かってくれ』

「ああ、了解した」

通信を切り、涼二は小さく息を吐く。

地図に記された地点は今いる場所から北西へと向かった地点——確かにあまり遠いと言う訳ではないが、未だに反応は動こうとしていない。

一応手がかりにはなるだろうが——と嘆息し、涼二はその方向へと向けて走り出した。

（飯を喰ってるだけならいいんだが……ああ、そういや腹減ったな）

何だかんだで夕食を食べそびれていた事を思い出し、若干憂鬱な気分になりながらも、涼二は目的の方向へと向けて真っ直ぐに進んでゆく。

携帯に表示されている地図を拡大し、路地裏の行き止まりなどを確認してから、涼二はその細い道へと飛び込んだ。

道なりに行くには少々遠回りなので、若干狭いがこのような道を選んだのだ。

角は多いものの、一度地図を見ているので何処をどう曲がればいいのかは覚えている。その記憶の通りに、涼二は路地裏を進んでいった。
と――

「ん……？」

ふと気配を感じて、涼二は立ち止まる。
自身の方へと向かってくる気配と言う訳では無いが、何か複数の存在が動き回っている気配。
そして、響くのは肉を打つような鈍い音だ。

「これは……」

あまり係わり合いになりたくない部類の騒動。
けれど道は一つしかなく、今から戻って回り道をするよりは無理矢理突っ切ったほうが良いと判断し、涼二はその音がする方へと向かって飛び出していった。
見えてきたのは、建物の立地の関係上出来上がったと思われる小さな広場。
そして、そこで戦闘――というよりはケンカ――を繰り広げる数人の男達だった。
数人の男達だった。
思わず顔を顰め、Lのルー^{ラグズ}ンを使って飛び越えようと――した、次の瞬間。

「おう、涼二じゃねえか。奇遇だな、こんな所で」

「な……そ、双雅!？」

唐突にかけられた言葉に動揺し、涼二は思わず発生させようとしていた水を霧散させてしまっていた。

そしてそれと同時に、双雅を囲っていた男達の視線が一斉に涼二の方へと向けられる。

状況としては、双雅一人に対して不良と思わしき男達が十人ほど。一応ルーンは使っていないものの、状況としてはかなり不利である。だと言うのに、双雅についているのは僅かな掠り傷程度で、その脇には倒れている不良たちが四人ほど折り重なっていた。

そんな厄介事を絵に書いたような状況の中心で、不敵な笑みを浮かべた双雅は涼二へと向けて声を掛ける。

「ちょうど良かったぜ、涼二。ちょっと手伝ってくんね？」

「……俺は今急いでるんだが、何でこんなアホな状況になってるんだ」

「ああ!？　ンだテメエ、上狼塚の仲間か!？」

「……」

何かするまでも無く巻き込まれた現状に、発する声すら見つからず涼二は深々と嘆息する。

とりあえず——双雅を含めて——掃討すべきか、それとも無視して進むべきかを悩む。

涼二は双雅のケンカの実力を知っている。彼ならば、この程度の数に囲まれても問題は無いだろう。

ただし、それはこの人間たちが能力を使わなかった場合の話だ。

双雅自身はJジュラを持っているだけの巨人級能力者ティターンだ。

決して弱いと言える能力ではないが、それでも多人数の能力者を相手にするには少々弱い。

それを補って余りあるだけの野性的な勘とケンカ殺法を持っているのは確かだが——それでも、気になってしまった事に涼二は嘆息を漏らしていた。

（俺って奴は、どうしてこう……）

自覚している『身内に甘い』と言う性質。

これだけはどこまで行っても変えられないのかと自嘲を零し、のろのろと構えようとした——ちょうど、その瞬間だった。

しばし黙って思考していた涼二へと、不良たちの怒鳴り声が投げ掛けられる。

「おいコラ、シカトこいてんじゃねエぞこのチビが！」

「……あ？」

「あーあ」

顔を俯かせたまま硬直した涼二の口から漏れた声、そして呆れたような表情で呟いた双雅の声は、周囲に響き渡る事も無く、怒鳴り散らす不良たちの声にかき消される。

故に、彼らは気付けなかった。

「ハッ、女みてえな面しやがって！ 上狼塚もろとも殺して——」

「……おい、テメエ等」

——氷室涼二と言う男の、逆鱗に触れてしまった事に。

涼二は瞳の奥に秘められた二つのルーンが反応するのを何とか抑えながらも、その怒りだけは抑えようとせず、殺意の籠った視線を上げる。

その圧倒するような気配は、すぐさまこのあまり広いとはいえない空間を支配した。

そんな肌で感じるような気配を受け、双雅は楽しそうに笑みを浮かべる。

「おーおー、流石は元ムスペルヘイム」

「な……ッ!？」

「茶化すな、双雅……ま、今回は手伝ってやるさ。礼は要らん。こいつ等から貰うからな」

歪な笑みを浮かべ、涼二は一步前へと踏み出す。

それに気圧されたかのように住人の男達は思わず後退し、そんな己の行為に驚愕したかのように目を見開いた。

そしてそんな中、前列にいた男の一人が、歯を食いしばって叫び声を上げる。

「なッ、舐めんじゃねええあああああッ!」

繰り出されたのは右の拳。

涼二はそれに対し、身体を半身にしながら左手を添え、拳をわずか

に逸らしながらカウンター気味に相手の顔面へと右の拳を叩き込んだ。

もんどりうって吹き飛ばされる男に、しかし周囲の不良たちは束縛から抜け出そうとするかのように叫び、そして涼二へと殺到した。

が——その背中の中の一つを、容赦の無い蹴りが打ち抜く。

勢い良く前へとけり出されバランスを崩した男は、それと共に正面から繰り出された鞭のようにしなる蹴りによって側頭部を抉られ、

錐揉み回転しながら他の男を巻き込んで昏倒する。

遠慮など欠片として存在しない跳び蹴りを放った張本人は、その口元に皮肉気な笑みを浮かべて声を上げた。

「おいおい、俺を忘れてんじゃねえぞ？」

「上狼塚、テメエッ！」

「そういきり立つなって。楽しく喧嘩しようじゃねえか、なア？」

そう口にし、双雅は駆ける。

いきなり倒れるような前傾姿勢になったかと思うと、その身体は爆ぜるように地面を蹴り、握り締められた拳が先ほど巻き込まれて起き上がるうとしていた男の頬を打ち抜く。

そしてそんな拳を振り切った姿勢の双雅の肩をいつの間にか接近していた涼二が蹴りながら跳躍し、呆気にとられた表情をして棒立ちになっていた男の顎を蹴り上げる。

そのまま着地した涼二は、体を起こした双雅と共に背中合わせの体勢で立つ。

「そォいや、こういうのは久しぶりだったな、涼二」

「そうだな……ったく、忙しい時に面倒に巻き込んでくれやがって」

「わりいわりい、今度何か奢るって」

「別にいいさ、こいつ等から貰うって言ってるだろ」

互いに軽口を叩き合い――二人は、駆けた。

「ふ……ッ！」

自身を弾丸と化すかのように、涼二は鋭い呼気を発しながら駆ける。

二人へと襲い掛かってこようとしていた男達の出鼻を挫くかのように、涼二は一步で前方にいた男の懷まで肉薄していた。

そして男としては小柄なその身体で潜り込むように身体を沈ませ、さらに相手の足の間へと己の右足を差し込んで退路を断ち、その肩と左手を当てるように体当たりを放つ。

威力を存分に伝え、60kg強の弾丸となったその一撃は、男を容赦なく吹き飛ばす。

「デメエッ！」

刹那、左側から拳が迫る。

それをしっかりと目で捉えていた涼二は、身体を横向きに沈み込ませるようにしながら左手を振り上げ、放たれた拳を受け流しながら相手の胴を打ち上げるようにアッパーを放った。

そして僅かにプラーナを使って腕力を強化し、吐瀉物を吐き出そうとしている男を投げ飛ばすように拳を振り抜く。

放物線を描きながら吹き飛ばされる男は、その拳が触れた時点で意識を消し飛ばされていた。

己自身の体格や体重、そして相手の力までも利用して戦うその技は、正しく武術のもの。

ムスperlヘイムの時代に長年かけて身につけ、さらにガルの指導によってより洗練させている力。

能力の強大さだけに留まらず、己自身すらも洗練させていたからこそ、涼二はムスperlヘイムの隊長として選ばれていたのだ。

対し――

「ハッハア！」

コンパクトなフックで近場にいた男のこめかみを抉り、さらにその襟首を掴んで頭突きを繰り出した双雅は、昏倒した男を放り投げながら横へと向けて鋭い蹴りを放った。

近場にいた相手の腹部を撃ちぬくその動きには、涼二のように洗練された動作は存在しない。

が、双雅の繰り出す攻撃には、全て避けようが無いほどのスピードが存在していた。

「オラオラどうしたア!？」

突き出される拳の一撃が、右側から迫ってきていた男の身体を吹き飛ばし、壁に叩きつける。

鼻が折れて血が噴出していたが、まるでその臭いに酔うかのように

凶暴な笑みを浮かべ、牙を剥き出しにしながら双雅は嗤う。

その姿は、正しく獣のそれだった。

粗暴で、洗練された部分など欠片も無く、まるで本能のままに戦う姿。

けれどそれはただ力強く、ただ素早い。

それが、上狼塚双雅と言う男の戦い方。

振り払った腕が人を吹き飛ばし、放たれた蹴りが相手を地面に沈める。

嵐のような動きの双雅と、疾風のような動きの涼二。その二つの暴風に、ついに一人の男が一線を越えてしまった。

「クソッ、クソッ……これでも喰らえッ、^{イサ}I！」

『———！』

放たれたのは、氷柱のような水の弾丸。

当たれば怪我だけで済むとも限らない、凶器となりうる攻撃。それが向けられた事に対し、二人の目の色が一瞬で変化した。

ラグズ

「———L！」

ジュラ

「———J！」

その言葉と共に生み出されたのは、片や水を収束させて作り上げた、鞭のようにしなる剣。

そして、もう一方は肘から先を覆い尽くすような金属の膜、そしてその指を覆う鉤爪だった。

涼二の繰り出した水の鞭は神速で宙を駆け、己へと向かってきてい

た氷の棘を全て叩き落した。

そしてその脇で、鋼鉄と化した両腕を振り翳しながら突撃した双雅が、己に命中しそうな氷を左手で碎きながら右の拳を握る。

ただのケンカならば、そこまでする理由はない。

あくまでも人間同士、己の肉体のみを使って相手を征しようという暗黙のルールの上での戦いだ。

けれど、男はそれを破ってしまった。故に――

「出直して来なッ！」

鋼の鉄槌と化したその拳は、男の顔面へと向けて容赦なく打ち放たれた。

容赦なく顎や歯を碎いた一撃は男の意識など容赦なく消し飛ばし、地面へと落ちた相手へと向けて双雅は侮蔑の視線を向ける。

「まったく、ガキが玩具振り回してんじゃねえぞ」

ばきん、と碎け散るような音を立てながら、双雅の腕を覆っていた金属が消滅する。

それを眺めつつ、涼二もまたその手にあった水の剣を手放した。

地面に倒れる男は白目を向き、殴られた部分が裂けたのか、緩やかに血を流している。

その凄惨な状況に怖気づき、男達は息を詰まらせながらその足を後退させて行った。

そして――

「う……うあああああああああ！」

「お、おいッ!？」

一人が逃げ出し、その直後、堰を切ったかのように残っていた男達が敗走を始めた。

追うような真似はせずにそれを眺め、涼二と双雅は互いに視線を合わせて苦笑する。

「サンキュ、助かったぜ涼二」

「別に、俺がいなくてもお前なら何とかしそうだったがな……」

「まあな。ほれ、報酬だ」

倒れている男から抜き取った財布をヒラヒラと揺らす双雅に、涼二は一瞬口元に手を当て……苦笑を漏らす。

よくよく考えてみれば、わざわざそんな事をせずとも、金に困るような生活はしていなかったのだ。

「いや、いい。感謝してるんだったら、ソイツで飯でも奢ってくれ。今は急いでるんでな」

「お、そうか？ そいつは悪かったな……ま、それならまた今度って事で」

「ああ。じゃ、俺は行く……またな、双雅」

「おう、頑張って来いよ」

互いにサムズアップを交わし、涼二は目的の道へと走り抜けてゆく。

その背中を見送り——双雅は、小さく息を吐き出した。

涼二とは反対の方向へと歩き出しつつ、暗闇に包まれた別の路地へと向かって声を掛ける。

「おい、終わったぜオッサン」

「ああ……感謝するよ」

表通りの電灯の光は届かず、建物の影で漆黒の暗闇となったその場所。

そこから現れたのは、筋骨隆々とした角刈りの男——嵐山果須だった。

ズボンのポケットから取り出した煙草に火をつけながら、双雅は横目で彼の事を観察する。

（随分と、思いつめた様子だねえ）

肺を満たす紫煙を吐き出し、双雅はそう胸中で評する。

その体格ゆえに、大柄な双雅から見ても一回り以上巨大に見えるその男からは、それでもどこか萎んだように憔悴した印象を受けた。そんな考えはしかし口には出さず、一度涼二が去っていった方向へと視線を向け、双雅はニヒルな表情で声を上げる。

「言葉での感謝なんかいらねえよ。俺が欲しいのは、アンタの持つ

てるその情報さ。ま、これから手に入れる情報って言うてもいいかもしれないがなあ」

「それは……構わないが。しかし、何故君があんなものの情報を気にするのだ？」

「別に、答えるほどのことじゃねえさ」

「……そうか」

言葉こそ軽いものの、その声の中に含まれた強い拒絶の意志を読み取り、嵐山はそれきり押し黙る。

そんな様子に苦笑しつつも、双雅は再び煙草を啜えてその煙で肺を満たしていた。

黒い闇を白く染め上げるように空中へと煙を吐き出し——そして、双雅は声を上げる。

「さ、て……そんじゃ、教えて貰おうかあ」

その瞳に映るのは、先ほどのような荒々しい色ではなく、もっと冷たく鋭利な輝き。

まるで刃物のように、触れるものを全て傷つける刃のように。

かすかに漏れ出る憎悪を滲ませ、上狼塚双雅はその名前を口にする。

「——『グレイプニル』の情報を、な」

02-7: 執事の手記

涼二が戦闘を終え、目的の地点へと進み始めてからちょうど一時間後辺り。

尚も嵐山のパソコンを調べ続けていたスリスは、そこから拾い上げた一つの単語に関して調査を進めていた。

「……『グレイプニル』」

「先ほどから何か見当を付けたようですが……それは一体何なのかしら？」

「ちよっと待って……大体、分かりそうな感じなんだけど――」

嵐山のパソコンの中、既に削除されたはずのデータの中には、その単語に関する資料がいくつも残っていた。

そしてそれら一つ一つに目を通してゆく度に、スリスの表情は硬く強張ってゆく。

出てきたのはいくつかの研究資料や論文。ある研究者が考案した、

『グレイプニル』という道具に関する話。

「……内容は、単純だ。静崎製薬が表向きに発表していた事と同じ。高位の能力犯罪者を抑えるため、能力を低下、或いは使えなくする方法が無いかって言う研究だ」

「それは確かに、様々な所で研究されている内容ですわね。けれど、何故それが嵐山のパソコンに？」

「それは……まだ、分からないけど」

キーボードを操作しながら、スリスは後ろから話しかけてくるシアの言葉に首を振る。

その隣に並ぶ雨音は良く分かっていないようではあったが、『静崎製薬』という単語に対して少し表情を曇らせている。

しかしそれには気付かず、スリスは読み取った資料の内容を話し始めた。

「これは投薬ではなく、外側から装着する道具によって能力を抑えようとする研究だ」

「そんな事が可能なんですか？」

「可能、なんだろうね。僕だってそっち方面の知識が深い訳でもなし、実現可能なのかどうかは理論を読んだだけじゃ分からない。

けど……君の執事はわざわざこんな資料を探し出して、その上で動いてるんだ。これに関する何らかの事件に巻き込まれた、と考えた方がいいのかもしれない」

能力抑制に関する研究は様々な場所で行われている。

それに関しては別段疑問と言う訳ではなく、ごく自然な流れであるとスリスは理解している。

けれど、このパソコンに残された資料を読み解いてゆくほどに、その研究の危険性——否、非道さを理解できてしまったのだ。

「能力を拘束、抑制する為に別の能力を使う理論……」

能力に対抗する為に能力を使う。

それは人間同士でも言える事であり、そんな考えに至る事に関しては否定できない事でもある。

もしも相手の力を遮るのなら何を使うのか。防御のルーンである
Eエイワズか、或いは束縛のルーンであるThスリサズか。

しかし、どちらにした所で、そんなものに実用性などというものは存在しない。何故なら——

（ルーンは、生物にしか刻まれない）

魂の輝きたるプラーナを燃料とするルーン能力は、魂を持たない存在に刻まれる事は無い。

それ故、ルーンを用いた道具と言うのは、どうした所で大量生産をする事は不可能となってしまう。

目的のルーンが刻まれた刻印獣を探し出し、それを捕獲し、さらにルーンを使用可能なまま摘出する方法——確かにそんな技術の研究も行われていたが、犯罪者の拘束に使うといった目的で作るには、どうした所で数が足りなくなってしまう。

（だから、違う。これは犯罪者の拘束なんていう目的で始められた研究じゃない——）

これには、別の目的が存在する。

能力の抑制と言うのは確かにその通り。しかし、それは広く存在する犯罪者ではなく、僅かな数だけ存在する巨大な脅威の相手をする事を想定している。

強大な能力を持つ存在——例えば、始祖ルーン能力者。

（……これは、敵対する始祖ルーン能力者を生きたまま拘束する事を目的に研究されている道具だ。間違いない、この研究を始めたのはユグドラシル……あいつ等、始祖ルーンを全て手に入れるつもりだって言う事？）

それは、決して他人事と言える事態ではない。

スリスたちのリーダーである涼二は、まさに敵対する始祖ルーン能力者なのだから。

この『グレイプニル』と言う道具が、自分達に牙を剥かないとは思えないのだ。

始祖ルーン能力者の相手を想定したこの道具の拘束力は非常に高い。決して軽視出来る存在ではなかった。

———そこまで考え、スリスは小さく息を吐き出す。

（……むしろ、重畳だったね。今回の件があったおかげで、こんな厄介な道具の存在を知る事が出来た。知らないまんまだったら、ど

んな事になっていたか)

思わず冷や汗を拭いながらも、スリスは口元に小さく笑みを浮かべていた。

確かに強力な道具ではあるが、その性質さえ知っていれば決して対抗策を取れない訳ではない。

この道具に関する情報をさらに集めようと、スリスは検索のスピードを上げ――

「な――ッ!？」

――そこに現れた情報に、思わず目を剥いていた。

唐突に驚愕の声を上げて身体を奮わせたスリスに、後ろにいた二人が疑問の声を上げる。

「スリスさん、どうかしたんですか？」

「何か厄介な情報でも？」

「ッ……厄介って言うか、何だよ、この研究……!」

ぎり、と齒軋りを鳴らし、スリスは現れた情報を睨むように凝視する。

そこに書かれていたのは、件の『グレイプニル』を製造する為の方法。

必要となるのはThスリサズのルーンと、その力を発動させる為のプラーナ。そこまではいいのだ。その道具の性質上、ルーンの力を発動させる

為に生物から剥ぎ取ったルーンとプラーナが必要となる。
だが、この道具は――

「人間のルーンとプラーナを使う……そんな研究、あっていい筈がない！」

「な……！？」

「……スリスさん、それって――」

「必要とするのは、人間の持つThのルーンと人間二人分……って言うより、巨人級ティターン二人分のプラーナだ。どんなに少なくとも、二人以上の人間を殺さなきゃ、こんなモノは作れない！」

ガン、と机に拳を叩きつけ、スリスは怒りを露に叫ぶ。

彼女は、決して犠牲になってしまった人間の事に関して怒りを抱いているのではない。

ただ、人間を使った実験そのものが許せないのだ。

盲目でも周囲の情報を取得するにはどうしたらよいか――そんな研究の為に全ての光を失った。

故に、スリスは赦せない。この実験も、この実験を行っている人物も。

「詳しい作り方までは分からないけど……こんなの、存在する事自体が赦せない！　こんなの――」

「スリスさん」

と――怒鳴り散らすスリスのその頬に、そっと雨音の手が触れた。

今は能力が反転した状態ではなく、純粹なSソウイルの力を宿したその暖かな手。

そこに、僅かな光が灯った。

「ソウイルS——」

「え、あ……」

その光はスリスの身体に触れると共に吸収され、淡い燐光と共に消えてゆく。

そしてそれと同時に、スリスの荒れ狂っていた感情はゆっくりと沈静して行った。

ゆっくりと離れて行ったその手を追うようにスリスが振り返れば、そこには淡い笑みを浮かべている雨音の姿。

彼女はスリスの表情に対し、柔らかに笑いながら声を上げた。

「鎮静効果のある能力の使い方……覚えてたんですけど、効果があってよかったです」

「雨音ちゃん……」

「冷静に。落ち着いてゆっくりと……憤っているのは貴方だけじゃないんです、それを忘れないで」

「あ……うん、ありがとう」

落ち着いた心を抱えて小さく息を吐き、スリスはゆっくりと深呼吸して——雨音へと向けて笑みを浮かべた。

そして感謝の言葉を口にしながら頷き合い、やれやれと肩を疎めるシアに苦笑しながら、パソコンの画面へと向き直る。

(……よし)

両手で自分の頬を叩きつつ気合を入れ直し、スリスは検索を再開する。

復元されたファイルの中からいくつかをピックアップし、そこから情報を引き出そうとした――ちょうど、その時。

ジャージのポケットに入れていた携帯が、唐突に着信音を響かせ始めた。

その画面に映っていた名前は、先程と同じく涼二のもの。

時間的にはそろそろ到着する頃だったかと頷き、スリスは通話ボタンを押した。

「……もしもし、涼二？　どうかした？」

『ああ、ちよつとな。お前が割り出してくれた場所に向かってみたんだが、執事本人はいなかった』

「あれ？　場所は確かにそこだったんだけど……」

『それに関しちゃう間違いじゃないだろうな。ここには携帯だけが落ちていた。GPSを追ったんだろ？』

「あー……そっか、ごめん、僕の配慮が不足してた」

頭を掻きながら嘆息し、電話へと向けてスリスはそう呟く。

それに対し、涼二からは何処か苦笑するような反応が戻ってきた。

『いや、いつまで経っても動かなかった事に疑問を抱いていたから

な。この事態も予測していた。とりあえず携帯の中にあるデータを送るから、そっちで解析して貰えるか？」

「あ、うん。了解」

涼二の言葉に頷き、携帯とパソコンを繋ぐためのケーブルを左手で探し始める。

無論、作業中とはいえ《マルチタスク並列思考》を持つスリスがどちらかに意識を奪われるという事は無い。

道具を探すのと並行して会話にも集中しながら、スリスは涼二の言葉を待った。

涼二もそれが分かっていたのか、僅かな間を置く事なく声を上げる。

『それで、そっちでは何か分かったか？』

「あ、うん。まだ標的の場所に関しては分からないけど……うん、ちょっと関係のありそうな道具は出てきた」

『道具？』

「そう。『グレイプニル』って言うんだけど……」

肩で携帯を押さえつつ、スリスは両手でパソコンを操作する。

その画面に表示されているのは、これまでに出てきた資料の大まかなまとめ。

強大な能力者を対象に絞って作り上げられた拘束具。

「とんでもなくふざけた代物だよ、コレ。用途は対象の拘束と能力の抑制。その完成度によっては、始祖ルーンの保持者ですら能力を押さえつけられる」

『何……？』

「今の所分かってるのは、コレが人間の持っているルーンとプラナーを基に作られる物だって言う事だけ……人間を殺して作り上げられる道具だよ、コレ」

『ッ……！』

電話の向こう側で、涼二が息を飲む声が響く。

雨音によって鎮静化させられたとは言え、それでも尚怒りの収まらないスリスは、見えないように歯を食いしばってから声を上げる。

「多分って言うか、こんな事をする奴等は他にいないだろうけど……恐らく、ユグドラシルの行ってる研究だと思う」

『……ああ、そうだな。それに関しては俺も賛成だ。技術の倫理性はともかく、そんな強力なアイテムを求めるのはユグドラシル程度だろう』

どこか苦い口調で、涼二はそう口にした。

そこに含まれているのは、かつてそこに所属していたからこそその己を責めるような感情。

そして、そんなユグドラシルを憎んでいるからこそ、決して赦せないと牙を剥くその怒り。

それを電話越しに感じながら、スリスはその感情に引き摺られぬよう心を落ち着かせながら声を上げる。

「……多分、だけど、路野沢さんなら何か知ってるんじゃないかな？」

『ああ、そうだな……その可能性はある。分かった、こっちの方で向こうに問い合わせよう』

「うん、こっちも引き続き調べる……お互い、何か分かったら連絡しよう」

『ああ、じゃあ頼んだぞ』

どこか感情を抑えたような無機質な声音に小さく苦笑を浮かべつつも、スリスは頷いて通話を終了させた。

そして探し当てたコードを携帯とパソコンに接続し、涼二から送られてくるデータをパソコンの中へと移動させる。

現れたのは通話やメールの記録。番号などは全てプロテクト突破を狙っているノートパソコンの方へと移し、それらの情報を含めて発信者の位置特定を急ぐ。

そしてデスクトップパソコンの方では、尚も削除データの復元を行い――

「……ん？」

復元と共に現れた『D i a r y』というファイルに、スリスは思わず首を傾げていた。

良く携帯端末に利用される日記ソフトの形式ファイルであり、パソコンでも使用できるソフトとして普及しているもの。

尤も、日記をつける人間などそう多い訳でもなく、とりわけ人気が高いと言うほどのものでもないのだが――

「とりあえず、見てみるかな」

ファイルを起動し、画面を展開する。

そこにあったのは、カレンダーのように日付ごとに組み分けされた画面であり、その日付けをクリックすればその日付けで書かれた日記の内容が表示される。

そこでは規則正しく毎日内容が書かれており、適当に開いた場所にはその日に行ったトレーニングのメニューなどが記録されていた。ガラムと同じく人間とは思えないほどの内容に軽く頬を引き攣らせながらも、スリスはいくつかのページを閲覧してゆく。

と――

「……！」

思わず声を上げそうになり、スリスはそれを咄嗟に抑えた。

後ろの二人に感づかれないようにウィンドウを隠しながらも、その内容を読み取ってゆく。

（『妹の佳奈美^{かなみ}が連れ去られた。相手は技藤翔^{ぎとうしょう}という男。かつて、ユグドラシルの研究機関である《ドヴェルク》に所属していた者だ』）

ドヴェルクと言う名に、スリスの肩が一瞬跳ねる。

それは、かつてスリスから光を奪った研究者達が所属していた所と同じだったからだ。

何とか身体を震わせる怒りを抑えつつ、スリスは冷静さを保つよう

意識しながら別の日付の内容を読み取ってゆく。

（『技藤から連絡があった。数日後、指定の場所に来るようにと。私に選択肢など存在しない……忌々しい男だ』）

人質に取られているのと同じ状況。

その内容を読み取りながらも、スリスは嵐山佳奈美という人物に関して検索を行っていた。

余計な情報は必要無い——探すべきは、彼女の持っているルーンの情報のみ。

この国ではルーン能力者の場合、刻まれているルーンとその人物の持つ能力の位階が個人情報として記録されている。

違法なクラッキングではあるが、スリスにとっては今更な事だ。

（……見つけた。やっぱり、スリスThを持つてる……しかも、ディザスター災害級か。

良くこんな人を捕まえられたなあ、その技藤とか言う奴）

嵐山佳奈美は、ベルカナ スリスBとThのルーンを持つディザスター災害級能力者。

あまり戦闘向けといった能力ではないが、ディザスター災害級のThが持つ拘束力は大型トラックを難無く動けなくしてしまうほどのものだ。
ルーンが強ければ、それだけグレイプニルの強度も強くなる。

（『技藤という男に関して調べてみた。奴はグレイプニルという道具を作ろうとしている……それは、スリスThのルーンを使う事によって作られる道具だ。奴は、私と佳奈美を使ってその道具を作ろうとし

ているのだろう。

決して許す訳にはいかない。けれど、会長に迷惑を掛ける訳にも行かない。私一人で解決せねば』)

——スリスは、小さく息を吐き出す。

責任感が強すぎるためか、或いは自分達を信用していなかったのか。恐らくはその両方なのだろう、とスリスは思わず嘆息を漏らしていた。

会長であるシアを護る人間としてはその選択は正しいのかもしれないが、やはりスリスは最初から話してくれていた方が助かったのに、
と思ってしまう。

依頼をされればどのような仕事でも請け負う傭兵——それが、ニ
ヴルヘイムなのだから。

(……けど、大体分かった。標的は技藤翔、その目的は対能力者用拘束具グレイプニルの作成と完成。その材料とするため、嵐山果須と嵐山佳奈美に目を付けた。

標的は嵐山佳奈美を誘拐、それを餌に嵐山果須を呼び出し、二人を捕らえようと画策している。

それに対し、嵐山果須は独自に行動を開始。恐らく、嵐山佳奈美の奪還を目的としているものと考えられる——)

後ろの二人に見られぬよう気をつけながら、スリスは涼二へと送る資料を作成してゆく。

シアはこういった自体にも慣れているかもしれないが、スリスとしては出来る限り大事にしたくはない。

ニヴルヘイムという存在を、あまり人目の付く形にしたくないのだ。

それに――

（この人の状況、それにこの道具……もしかしたらだけど、おっちゃんも――）

かつて聞いた話を思い返し、スリスは苦い表情で顔を顰める。
この話を聞けば、あの冷静沈着なガラムとて冷静ではいられないだろう。

普段こそ思慮深く優しいが、一度怒り狂えば例え涼二であっても手に負えないほどの激情を持った男。
あまりその姿を見られたくないであろうから、とスリスは小さく息を吐き出す。

イラスト・ベステイア
（《血染めの狼》……本当に、そのままにならなきゃいいんだけどね）

半ば祈るように――スリスは、胸中でそう口にしていた。

02-8: グレイプニル

「……『グレイプニル』、か」

データ送信終了のボタンを押し、涼二は小さくそう口にする。
聞かされた内容は何処までも不快で、それでいてスリスに対して申し訳なく感じるものでもあった。

かつての涼二はユグドラシルの行いを知らず、ただ利用されるがままに戦っているだけだった。

己の全てを奪ったのが、その組織の長である事を知らないままに。

「しかし、強大な能力者を押さえ込むための道具か……悠に聞けば何でも分かるんだろうが、贅沢は言ってられないか」

頭をかきながら独りごち、涼二は再び携帯電話を操作し始めた。

探し当てるのは、かつて涼二の命を救い、涼二に真実を教えた人物。そして、涼二がリーダーを務めるニヴルヘイム設立の立役者——路野沢一樹。

通話記録の中からその番号を呼び出し、涼二は発信を開始した。

（……しかし、人間の持つルーンとプラーナを使って作り上げる道具……まさかとは思うが、ガラムの言っていたアレは——）
『——ふむ、涼二君か？　こんな時間に、私に何か用かな？』

思考を巡らせようとしたその瞬間、携帯電話から声が発せられた。こんな時間と言っても、日が暮れるのが早くなり始めた為の暗さであり、まだまだ遅い時間と言う訳ではない。

周囲を見渡して小さく苦笑を浮かべながら、涼二は声を上げた。

「夜分遅くに申し訳ありません、路野沢さん。少し、お尋ねしたい事があります」

『ふむ。君の方から私に以来とは、中々珍しい事もあったものだ。まあ、親心としては中々に嬉しい事だが』

何心にもない事を言ってるんだか、と胸中で呟き、涼二は再び苦笑する。

涼二は決して、この路野沢と言う男を信用していない。

その実力に対する信頼はあるものの、決して信用してはならないと言うのが、ニヴルヘイムの共通見解である。

そして、路野沢自身もまるで警告するかのように涼二達へと口にした言葉でもあった。

どういふつもりなのか、と疑問にも思ったものではあるが、結局はその言葉に従う事となっている。

「『グレイプニル』という道具の研究に関して、何か知っている事はありますか」

『ほう、あのベルトの事か……今更と言えば今更だが、あんなものを調べてどうするつもりかな？』

「今更……？ 済みません、今はかなり情報が不足してまして。その道具が能力を押さえつける効果があるって事ぐらいしか分かっていないんです」

その他の情報も無い訳では無いが、今の所確実性に欠ける情報ばかりだ。

涼二は路野沢のもたらす情報も含めた上で総合的に判断し、それがどのようなものなのか見極めようと頷いた。

そして電話の向こう側にいる路野沢は、そんな涼二の様子に気付いているのかいないのか、いつも通りの調子を崩さぬまま声を上げる。

『ふむ……まあ良いだろう。しかし『グレイプニル』とは、また随分と前のものを持ち出してきたものだ』

「……そんなに昔の研究なんですか？」

『昔といえば昔だね。十年以上前からその研究は存在していたのだから』

そんな路野沢の言葉に、涼二は小さく目を細めた。

その頃は、涼二達が孤児院で世話になっていた時期である。

そんな昔から続けられている研究だとは思ってもよらず、半ば呆れと感心を含め、涼二は肩を竦めた。

涼二の姿に気付いているのかいないのか、調子を変える事無く路野沢は続ける。

『対能力者用拘束具、通称『グレイプニル』。《ドヴェルク》にて研究、開発された道具だ』

「……あの研究所で」

『気に入りはしないだろうが、話は進めさせてもらっても良いかな？』

「あ、はい。済みません」

声の中に低い怒りの音が混じったのを聞き取り、路野沢は溜め息交じりにそう口にする。

その指摘に目を見開きつつ、涼二は深呼吸して荒ぶりかけていた感情を鎮めた。

涼二は己の未熟さを嫌う。故に、精神制御の方法もしっかりと心得ていた。

呼吸から涼二が落ち着いたのを感じ取ったのか、小さく笑いの混じった声音で路野沢は続ける。

『ふむ、では続けよう……『グレイプニル』が製作された元々の目的は、高位の能力者の力を封印する事。

敵ならばその力の通り、位階を二つほど減退させるほどの封印能力を持って相手の力を押し留めてしまう』

「……敵ならば？」

『その通り。アレは、味方に使う事も想定したものであったのだ

よ』

その言葉に、涼二は思わず眉根を寄せる。

力を封印する……一つ位階が違えばそこには圧倒的な差が存在する
とまで言われる能力を、二位階分も減少させてしまうその道具――
―それを、味方に使うというのは一体どういう事なのか、と。

そんな涼二の疑問を感じ取ったのか、路野沢はゆっくりとした声音
を崩さずに声を上げる。

『力を抑える――否、力を悟らせなくする。そのメリットは、君
ならば十分に理解できると思うが?』

「……! 成程、そういう事か」

反射的に顔を左手で押さえ、涼二はそう呟く。

その目に宿しているのは、絶対に隠さなくてはならない二つのル
ン。

かつて姉の持っていた、ハガラス スリサズHとThの始祖ルンだった。

ルン能力者にとって、力を悟らせない事は非常に重要な要素とな
る。

ファンクションもそうではあるが、どのような力を持っているかど
うか、それを知らない事は即ちどのような攻撃を受けるか分からな
い事にも等しい。

涼二が力を隠すのはそれ以外の理由もあるが、基本的にルン能力
は大っぴらにするべきものではないのだ。

それに対し、『グレイプニル』の持つ性質は――

「能力を強制的に押さえ込み、プラーナ量からも相手に力量を悟らせないようにする……そして必要に応じて拘束を解除し、力を解放すれば——」

『そう、これ以上ない奇襲になるだろう……まあ、そういった理論の元作られた訳なのだが、いささか問題があつてね』

「問題？」

路野沢の言葉に、涼二は首を傾げる。

話を聞く限りでは、問題点と言うべきものは存在しないように思えたのだが——

『——この道具は、一度装着すると破壊するまで外れなくなってしまうのだよ』

「……拘束用なら、まだしも」

『そう、自身の能力抑制と言う点ではほぼ利用価値が無いものとなつてしまった』

あまりといえばあまりな事実、涼二は思わず呆れの籠った表情を浮かべる。

それでは、能力抑制と言う点に関する価値は全く存在しないものとなつてしまうだろう。

路野沢も同じような考えなのか、苦笑のような吐息を吐きつつ声を上げる。

『いやはや、世の中上手くは行かないものだね。もしもその研究が成功していたら、君の能力を隠すのに役立っていただろうに』

「……仮にそうだとしても、人間を素材に作られた道具なんてゴメンですがね」

『おや、そうか』

路野沢の言葉に、何らかの感情を読む事は出来ない。

ただ単純に、事実を受け止めている——それだけの様子しか見せない相手に、涼二は思わず顔を顰めていた。
けれどそれを声には出さず、続けて尋ねる。

「それで、『グレイプニル』の拘束を解除する方法はなかったんですか？」

『あるといえはあるのだが……実用には少々面倒でね』
「と言うと？」

『素体となった能力者以上の力を持つ^{スリサズ}Thの使い手が、能力を無効化する事……それが、『グレイプニル』の拘束を解く方法だ。つまり——』

「……その道具では、俺を拘束する事は出来ない」と

己の右目を目蓋の上からそつと抑え、涼二はそう口にする。

その瞳に宿しているのは^{スリサズ}Thの始祖ルーン。それは即ち、^{スリサズ}Thにおける最高位の力を持っている事に等しい。

つまりどのような能力者を使って『グレイプニル』を作り上げたとしても、涼二ならば確実にその拘束を解除できてしまうのだ。

その事実を認識した涼二の言葉に、路野沢は肯定の言葉を発する。

『そういう事だ。君にとっては、あまり価値のある物では無いだろ

う……それで、それがどうかしたのかね？」

「ああ、いや……ちょっとした事件で関係してきたもので。それと、もう一つ聞きたいのですが」

『ふむ、何かな？』

路野沢の言葉に、涼二は思わず顔を顰める。

彼は問い掛けようとしている事が一体何なのか、とっくの昔に気づいている事だろう。

それでもあえて聞いてくるのだから、やはり底意地の悪いところがある——しかしそれをおくびにも出さず、涼二は声を上げた。

「その『グレイプニル』とか言う道具……まさかとは思いますが、ガルムの——」

『君ならば確信を得ていると思っていたのだがね』

その言葉は、決してはっきりとしたものではない。

けれど、その言葉の中に込められた肯定の意味に否応無しに気付かされ、涼二は深々と溜め息を零していた。

意地の悪い言い方ではあるが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

知ってしまったこの事実、それをガルムに伝えるか否か——

(……あいつ相手じゃ、どうした所で気づかれちまうか)

ニヴルヘイムは構成人数が少なく、それだけ個人の秘密以外の話

は筒抜けになってしまいう事が多々あった。

そして今回、仕事と言う形で一緒に動いているガラムには、情報を隠す事などは不可能となってしまう。

だが、この話を聞けば、冷静沈着なガラム・グレイスフィーンとて、怒りを抑える事は不可能だろう。

何故なら、それこそがガラムの抱くユグドラシルに対する恨みなのだから。

――深々と、涼二は嘆息を漏らす。

「……とりあえず、了解しました。解除できると言うのなら、問題はありません」

『そうか。まあ、そのルーンを使う所を見られる訳には行かないのだし、気をつけるに越した事は無いだろう』

「……はい、分かりました。それでは」

『ふふ。では、頑張る事だ』

通信が途絶え――涼二は、深く息を吐き出す。

話したただけにも関わらず若干の疲労を感じ、涼二はゆっくりと背筋を伸ばしながら携帯を閉じる。

やはり路野沢への苦手意識を拭えない事に苦笑をもらし、涼二は近くにあった建物の壁へと背を預けた。

溜め息じみた吐息を漏らしつつも、閉じた携帯を見つめながらただゆっくりと待つ。

「あの時、声をかけとけば良かったな……思った以上に厄介な事になったもんだ」

ショッピングモールで見かけた姿を思い返し、苦笑を浮かべる。
あの時は知らなかったのだから仕方の無い話ではあるが、ここまで大事になるとは涼二も思っていなかったのだ。

今は行方の知れないあの執事の姿——何をそこまで急いでいたのか、と涼二は胸中で呟く。

と——その瞬間、涼二の携帯が鳴り響き始めた。

「つと」

一瞬通話かと思いボタンを押しかけるが、着信メロディの違いからメールである事に気づく。

妙に重いそのメールに、添付ファイルが付属されていることを確認し、涼二は納得したように肩を竦めた。

メールに添付されていたのは、先ほど路野沢と話した『グレイプニル』に関する詳細なデータと、それを研究していた技藤翔という人物について。

そして、電話番号からの逆探知プロテクトを破る事によって発見した技藤がいると思われる場所の地図。

それらの情報に一通り目を通した所で、今度は通話の着信音が鳴り響いた。

集中していた所に突然であった為、思わずびくりと反応して携帯を取り落としかけながらも、何とか涼二は通話ボタンをプッシュする。相手をマトモにチェックしていなかったが、聞こえてきたのはスリスの声だった。

『涼二、資料は読んでくれた？』

「ああ、かなりの量をまとめてくれたな、感謝する」

『むしろ、それぐらいしかなかったんだけどね。とりあえず、さつさと向かったほうがいいかもしれない……あの執事さんが既に場所を把握しているんだとしたら、手遅れになる可能性もある』

「……そうだな」

頷きながらも、涼二はL^{ラクス}を使って水のロープを作り出し、目の前に立っているビルの屋上へと巻きつける。

そのまま勢い良く上昇しつつも、電話越しにスリスへと語りかけていた。

「ガルスにも地図のデータは送っておいてくれ。ただし、『グレイプニル』の事はまだ伝えるな」

『うん、それは分かってる。おっちゃんなら大丈夫だとは思うんだけど……』

「それは俺もそう思うが、万が一の事があると困るからな。一応、同時に行動したい」

『ん、そうだね……了解』

頷く気配に頷き返し、じゃあな、と声をかけて涼二は通話を終了させる。

そして再び地図データを起動、自分自身の現在位置と、目的地となる技藤の研究所までの道のりを計算した。

場所は少々は慣れていて、普通に向かうにしてもバイクを使うにしても多少の時間はかかってしまう。

けれど、間の建物を無視して直線で移動できれば――――

「……かなり、短縮は出来るな。よし」

ラグズ ハガラズ

LかH、使用するルーンを考え、わざわざ移動の為だけにそんなリスクを冒す必要もないかと苦笑する。

そして涼二は左肩のルーンを発動させ、左腕から延びる水のロープを使って勢い良く空中へと飛び出した。

パチンコで放たれるパチンコ玉のように強く空中へと投げ出され、ゆったりとした滞空時間の後に落下しようとする身体を、再び引っぱりあげるように水のロープで打ち出す。

昔のリメイク映画にこんな動きをする外国ヒーローがいたような気がするが、あまり気にしないようにしながら涼二は集中を崩さぬように目的地への道を進んで行った。

(こういうとき、バイザーが無いのは不便だな……)

見通しの甘かった自分自身へと苦笑し、涼二はそう胸中で呟く。出てくる前に考えていたのは単なる人探しであり、このような誘拐事件に繋がるとは露ほどにも思っていなかったのだ。

一度身軽な動作でビルの上へと着地しつつ、方向を確かめながら水を伸ばす——刹那、涼二は“カシュン”という音と、何者かの呻き声のようなものを聞いた。

「——！」

下手をすれば聞き逃してしまったであろう程の小さな音。けれど、涼二はその炭酸飲料の缶を開けるような音に聞き覚えがあった。

（消音銃……！）

弾丸が発射される音を極限まで押さえ込む事を目的として作られた拳銃。

採算が合わず、サイレンサーのほうが性能が高いと言う事で殆ど出回ってはいなかったが、涼二はかつてムスperlヘイムに所属していた時代にこの音を聞いた事があった。

身を乗り出しながら音が聞こえた方向——ビルの裏にある細い路地を見下ろす。

そこに、二人の男が対峙していた。

一人は筋骨隆々とした男で、もう一人は白衣を纏った学者風の男。そして、その学者風の男の手には、一丁の拳銃が握られていた。

「I^{イサ}！」

咄嗟に作り上げた氷の弾丸で、男の持つ銃を弾き飛ばす。

そのまま涼二は男を捉えようと飛び降りたが、思った以上に相手は冷静だった。

武器を失ったと見るや、男はすぐさま踵を返して表通りへと逃げ込んでゆく。

その背中を舌打ちしながら見送りつつ、L^{ラクス}の力を使って安全に着地しながら、涼二はもう一人の男——嵐山へと駆け寄った。

「おい、大丈夫か!？」

「君、は……ぐッ!」

「……拙いな」

嵐山の身体には、いくつかの弾痕が刻まれていた。

その位置はすぐさま死に至るようなものではないものの、出血量が多い。

舌打ちしながら、涼二は携帯を取り出し、すぐさまガラムへと向けて発信を開始した。

そして数コールのうちに、コール音が鳴り止む。

『涼二、何か――』

「ガラム、急いで戻って雨音を連れて来い! 俺のいる位置はスリスから聞け!」

『雨音君? ……怪我人か!』

「ああ、急げ!」

『了解した!』

通話を切り、携帯をポケットの中に仕舞う。

出欠で意識が朦朧としているのか、呻き声を上げている嵐山を地面に寝かせ、涼二はすぐさま応急処置を開始した。

その顔に、しかめっ面を浮かべながら。

「面倒な事になってきたな、本当に……!」

02-9: 怒れる獣

周囲の警戒を続けながら、涼二は路地裏で静かに仲間の到着を待ち続けていた。

地面に横たわる嵐山の身体に左手を触れさせ、涼二は己の左肩に刻まれたルーンを発動し続ける。

水を操るルーンであるL、^{ラグズ}その力を使って、嵐山から流れ出る血を塞ぎ止めていたのだ。

氷を使った止血と言う手段もあったのだが、血を失い体力を消耗した状態では危険を伴ってしまう。

「……はあ」

小さく、息を吐き出す。

前回の事件からプラーナは回復し切っている為、特に問題なく能力を発動する事は出来ているが、どのような能力でも長時間発動し続

けると言うのは中々に難易度の高い行為なのだ。

スリスはそれ専用能力を鍛えているからこそ簡単に能力を使えるものの、涼二はそう簡単には行かない。

目を閉じ、周囲の気配に気を配りながらも能力を使ってこれ以上の出血を防ぐ。

(ま、コレも練習か……)

嵐山の様子を確かめても、すぐさま命を落としてしまうような状態ではない。

自分自身にも施した事のある血流操作ではあるが、ここまで深手を負う事も少ないので、あまり使う機会の無い能力を鍛える事が出来る絶好のチャンスとも言える。

いずれ、自分が使うかもしれないこの技の――

(……いや、今はいい)

軽く頭を振り、涼二は思考を切り替える。

その思考の中に浮かべているのは、先ほどから得ていた『グレイプニル』という道具に関する情報だ。

曰く、能力を抑制する事の出来る拘束具。

曰く、人間のルーンとプラーナを用いて作り出される禁忌の道具。

この嵐山と言う男が襲われていた理由は、その道具に関係している事なのだろう。

技藤翔という研究者は、嵐山の妹を連れ去って、それを出汁に彼の事を呼び出した。

そしてそのプラーナを奪い、グレイプニルを完成させるつもりだったのだろう。

（嵐山佳奈美……生きてるか生きてないかは微妙な所だな）

ある程度の資料を手に入れることが出来たとはいえ、具体的な作成手順まで判明した訳ではない。

現時点で彼女が生存しているか否かは、例え涼二でも分からない事だった。

可能な限り助けたい所ではあるが、どちらにしても今ここを離れる訳には行かない。

能力によって嵐山の出血を止めていなければ、あまり長くは持たないような状況なのだ。

とは言え、もうそろそろ――

「――涼二様！」

『涼二、ここにいたか！』

「！ ああ、二人とも早く！」

響いた声に顔を上げ、涼二はそう声を発する。

それと共に、路地の奥から金色の獣がその姿を表した。

獣――ルーンの力によってその姿を変えたガラムは、背中に雨音を乗せながら出来るだけ揺らさないようにしつつ涼二の方へと駆け寄ってくる。

「雨音、仕事だ……出来るな？」

「はい、涼二様。この方を癒せばよいのですね？」

「ああ。今の出力だとしても、お前の力なら癒す事は可能なはずだ」
「……はい」

ガルムの背中から降りつつ、雨音はゆっくりとその手袋を外しながら意識を集中させる。

その後ろで、Eh^{エフズ}の力を使って元の姿に戻ったガルムは、何かあった時の為にかいつでも動けるようにじっと待機していた。

——そして、雨音の着物の下、腹部の辺りが淡い光を放ち始める。出力こそ落ちてはいるものの、その身に宿す強大なプラーナは変わらず。以前戦った時の重い圧迫感を思い出し、涼二は思わずぴくりと肩を跳ねさせていた。

雨音は静かに目を閉じ、大きく深呼吸をする。

それは己の体内——否、魂から放たれるプラーナを強く認識する為の集中法。

体内を循環するプラーナの流れを理解し、それを己の持つルーンへと集中させる。

そして、ゆっくりとその手を前へ。掲げられた二つの掌は交差するように重なり、その手には柔らかな青紫の輝きが宿り始める。

「——S」
ソウイル

その言葉と共に、雨音の両手に宿っていた光は粒子となって嵐山へと降り注ぎ始めた。

それと同時に彼の体も同じ輝きに包まれ始め、彼の体に刻まれてい

た銃痕が内側からゆっくりと癒されてゆく。
その体内に残っていた銃弾は押し出されるように零れ落ち、まるで
逆再生するかのごとく傷は消え去って行く。
僅か数秒——その間に、嵐山の傷は完全に消え去っていた。
すっかりとした手応えを感じたのか、安堵したように息を吐き出す
と、雨音はゆっくりとその目を開く。

「ふう……これで、どうでしょうか？」

「ああ、大丈夫そうだ。流石だな、雨音」

「力の扱いにも慣れてきたようだね、雨音君」

「はい、皆様のご指導と、涼二様を買っていただいた本のおかげで
す」

「あれからずっと読んでたのか？」

買ってからあまり時間は経っていない筈なのだが、と涼二は小さ
く肩を竦める。

しかし彼女の力のおかげで嵐山が助かった事に変わりはなく、特に
何かを言うつもりはなかった。

とりあえず、涼二は一応ながら倒れている嵐山の傷を確認し、完全
に傷が癒えている事を確かめて小さく頷く。

出力が落ちている事もこれだけの傷を短時間で癒せるその力は、流石
と言うべきなのだろう。

「大丈夫そうだ。さっさと起こして情報を手に入りたい所だが……」

ちらりと、涼二はガルムの方へと視線を向ける。

プラーナを流し込む事による気付けという方法があるので、傷が癒えた今ならば起こす事は難しくない。

が、今完全には現状を把握していないガルムに、突然あの話を聞かせるのは危険ではないか、と涼二は危惧しているのだ。

涼二の視線に気付いたガルムが小さく目を細め、真意を問うように首を傾げる――その姿に、涼二は小さく嘆息していた。

話さない訳には、行かないだろう。

「……ガルム、この人を起こす前に一ついいか？」

「何だ、涼二？」

「今回の件、路野沢さんにも確認したが……どうやら、アンタに係のある事らしい」

その言葉に――ガルムは、大きく目を見開いた。

そしてそれと共に、思わず総毛立つ程の強い感情がプラーナの波動となってガルムの体から放たれる。

直接目を見なかったとは言え、その強い感情を受けた雨音がふらりと身体を揺らすのを見て、涼二はガルムへと向けて強く言葉を発した。

「ガルム、落ち着け！」

「ツ……済まない、取り乱してしまった。雨音君も、大丈夫か？」

「は、はい」

傾ぎそうになる身体を何とか支え、雨音は小さく頷く。

二人の様子に小さく安堵の息を吐き、涼二はガルムへと声をかけた。その視線は先程よりも強く、咎めるような色が含まれている。

「ガルム、アンタの気持ちも分からない訳じゃない……俺達は全員、同じ穴の貉だからな。けど、だからこそあまり取り乱さないでくれ。アンタに暴走されたら、どうしようもない」

「ああ……済まない、分かっている。が……何処まで抑えられるかは、私にも分からないな」

どこか苦笑じみた表情を見せ、ガルムは告げる。その感情を理解できてしまうからこそ、涼二は小さく嘆息を零していた。

彼自身、もしも仇を目の前にしたとすれば、自制出来る自信が無かったのだ。

「……戦うなどは言わないさ。だが、せめて俺達がフォローできる範囲にしてくれよ？」

「ああ、分かっている。苦勞をかけるな」

「お互い様だ……よし、起こすぞ。雨音、手伝ってくれ」

「はい、分かりました」

雨音を呼び寄せ、重い嵐山の上半身をゆっくりと起こす。

そして涼二はその両肩へと手を当て、自分自身のプラーナをゆっくり彼の体へと流し込んでいった。

涼二のプラーナに刺激される形で嵐山のプラーナの巡りが高まり、彼の意識、身体を急速に覚醒させてゆく。

そして――嵐山は、びくりと身体を震わせると共に目を覚ました。

「ッ、く……ここ、は」

「気が付いたか。どこか身体に異常は――」

「ッ！ 佳奈美、佳奈美は！？ 奴はどこに――」

「おい、落ち着け！」

目を覚ますなり狼狽を始めた嵐山に対して眉根を寄せ、涼二はプラーナを発しながらそう強く語りかける。

今は取り乱しているとは言え、元々は冷静で思慮深い人物。

己を取り戻す事さえ出来れば、冷静な判断をする事も可能だ。

そんな涼二の読みどおり、強いプラーナの波動に縛り付けられた嵐山は、焦りに支配されていたその瞳に理性の光を取り戻していた。

「き、君たちは……」

「アンタの主の依頼で、アンタの事を探しに来た。どこか身体に異常は無いか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

嵐山の言葉に頷き、涼二は彼の肩から手を離す。

雨音の力は寸分の狂いなく発動していたようで、嵐山の身体は完全な状態にまで修復されていた。

とは言え、流れた血が戻った訳では無いので、若干貧血気味となっ
てしまっているのだが。

それを理解しているからこそあまり無理に動かすような真似はせず、
涼二はその座り込んだ姿勢を維持させたまま声を上げた。

「状況は理解しているか？」

「……ああ。私の力が及ばなかったばかりに……！」

「そう思うんだったら、最初から俺達に声をかけて欲しかった所なんだがな。そうすりゃ、こんな面倒事にはならなかっただろうに」

スリスが敵の居場所を探り出し、涼二とガラムが突入して人質を連れ戻し、敵を捕縛する。

ニヴルヘイムからしてみれば、たったそれだけの仕事でしかないのだ。

今回涼二達がここまで走り回る事となったのは、偏にこの執事の独断専行が原因である。

が――

「君達の扱いは会長の私兵……私の独断で動かす事も、会長の手を借りる訳にも行かぬからな」

「融通が利かない男だな……まあ、いい。それで状況は……アンタの妹が、『グレイプニル』の材料にだか何だかの為に連れ去られ、アンタはそれを取り戻しに動いていた訳だ」

「ッ……！」

涼二の言葉に、ガラムはびくりと肩を震わせる。

そんな様子を視界の端に捉えながら、涼二は頭の中で現在の状況を整理していた。

攫われたのは嵐山の妹。そして、その犯人は元ユグドラシルの研究者。その研究は――

「涼二、現在の状況を詳しく説明して貰っても構わないか？」

「……ああ、だが、さっきも言ったが暴走しないでくれよ？」

「分かっている」

大きく深呼吸しながら、ガルムは涼二へと向けて問いかける。

そんな彼がきっちり冷静さを保っている事を確かめて、涼二は首を縦に振った。

携帯電話を取り出してスリスへ連絡する準備をしながら、現在の状況を説明し始める。

「今回、この執事の妹——嵐山佳奈美が何者かによって誘拐された。犯人は技藤翔という名の研究者。コイツは元ユグドラシル、《ドヴェルク》に所属していた人間だ」

「……あの研究機関に、か」

ガルムの声音が、低く唸るようなものに変化する。

纏う空気が猛獣のそれへと変化しつつある中、しかしその激情を制御しつつ、ガルムはその言葉を吟味する。

彼とスリスにとって、《ドヴェルク》と言う名は鬼門と言っても過言では無い。

スリスに関して言えば、物心ついた頃からその研究施設で実験体として扱われてきており、ガルムに関しては別の研究によって妻子を奪われてしまった。

今回の相手が既にユグドラシルから離れているとは言っても——否、手の届きやすい範囲に出てきているからこそ、二人の自制が効

くかどうか分からない。
けれど、ここまで来て話さない訳にも行かない。

「技藤の作ろうとしているものは、『グレイプニル』と呼ばれる拘束具。これは、拘束した者のルーンを弱体化させる力を持つベルト状の道具だそう。そして……これを作るには、人間のルーンとプラーナが必要になる」

「それは……ッ！」

「奴の目的は、嵐山佳奈美のルーンと嵐山果須のプラーナを使って『グレイプニル』を作り上げる事……間違い無いか？」

「……ああ、その通りだ。しかし、良くこの短時間にそれだけの事を……」

「伊達に少数精鋭はやってない。さて――」

立ち上がり、涼二は携帯電話を操作した。

繋ぐのはスリス。彼女はあらかじめこちらの様子を監視していたのか、2コールもしないうちに通話は繋がった。

相変わらず心配性な様子の彼女に対し小さく苦笑しつつ、涼二は声を上げる。

「スリス、ガルの端末にデータの転送を頼む」

『それは大丈夫だけど……いいの？』

「ああ。ここまで来て、行くなどと言わないさ……ガラム」

「ああ……私に先に行けと、そういう事かな？」

涼二の言葉に顔を上げ、ガラムは頷きながらそう口にする。

表情は冷静さを保ってはいるものの、やはりその中の激情を隠しきれてはいない。

故に——これ以上、隠させる事は危険だと、そう判断したのだ。涼二はガルムの言葉に頷き、声を上げる。

「俺達の目標は、嵐山佳奈美の確保、および技藤の拘束。そして、奴の研究資料の完全破棄だ」

「了解した……が、二つ目は保障出来ぬな」

「分かってるさ。俺だって、目の前にして抑え切れるかどうか分からないからな」

そう——だからこそ、生死は問わない。

それを言外に確認し、二人は互いに頷き合った。

流石に、このような会話を雨音の前で堂々と言う事は憚られたのだ。

ガルムの持つ携帯が鳴り響き、そこにスリスの送ったデータが届く。

それを確認し、ガルムは踵を返した。

「では、先に行く」

「ああ、頼んだぞガルム。こちらも、後から行く」

「ガルム殿……妹を、頼みます」

「どうか、お気をつけて」

三人の言葉を受け、ガルムは背中越しに首を縦に振る。

その背中に込められた強い思いを隠すようにしながら、彼はゆっく

りと目的地へと向かって歩き出した。

——その姿が、金色のプラーナによって覆い尽くされる。

「Eh——！」
エフズ

そのルーンによって変化するのは黄金の狼。

獣の姿へと変化したガルムは、さらにRラドのルーンを使って加速し、瞬く間に狭い路地裏を駆け抜け、高いビルの壁を駆け上って姿を消していった。

その背中を見送り、涼二は嵐山へと視線を向ける。

「では、俺もガルムを追いかける。雨音の事を任せても？」

「ああ……その位はやらせてくれ。私では、何の役にも立てないからな」

その言葉には頷くだけに留め、涼二はガルムが去っていった方向へと向けて左手を向ける。

そこから現れるのは、Lラクスのルーンによって精製された水のロープ。それは一直線にビルの屋上まで伸びると、涼二の体を撃ち出すかのごとく引き上げていった。

空高く飛び上がった涼二は、目的の方向へと向けて再び水のロープを撃ち出す。

勢い良く空を駆けながら、涼二は雨音たちの元から去って行った。

「へえ……こいつぁ、面白い事になってんな」

——獣のように気配を殺し、その様子を眺めていた一人の男の存在に気付かずに。

彼は首筋を掻きつつ、雨音たちから離れるようにしながら路地裏を進んでゆく。

その目の中に、面白がるような色と、隠された深い憎しみを宿しつつ。

「さあて、と。何もかも終わらせられちまう前に……俺も、動かねえといけねえな」

ポツリと、そう呟き——男は、夜の闇へと姿を消していった。

02-10: 駆ける狼

仲間達が出動し、シアも会議で席を外した部屋の中。
一人部屋に残ってパソコンの画面と向かい合っていたスリスは、そこに映し出される情報に対して深々と嘆息を吐き出していた。

「ここまで来るともう呆れるよ……ホント、性根の腐った奴ってどこにでもあるもんだね」

その画面に映し出されているのは、技藤が強固なプロテクトを掛けてまで隠していた研究所、その内部のデータだった。

《ドヴェルク》時代に作られた資料——その時に作られた『グレイプニル』に関する報告。

ルーンクリーチャー

最初の頃は刻印獣のルーンを使って作られていた筈の『グレイプニル』が、何処で足を踏み外したのか、人体を使った実験を行うようになってしまった事に関して。

そして、それがついに禁止されてしまった事。
その原因は――

「あの時は派手にやったからなあ……あはは」

降霧スリスが実験施設を出奔する時に、最後に行ったクラッキン
グである。

《ドヴェルク》に蓄積されていた無数のデータを各所へと送信し、
その違法な研究を白昼の下に曝そうとした事。

最終的には全ての情報が流れ切る前に遮断されてしまったのだが、
それでも《ドヴェルク》には捜査のメスが入る事となった。

『グレイプニル』を初めとした違法研究は断念を余儀なくされ、結
果として技藤はユグドラシルから放逐されたのだろう。

尤も、ユグドラシルは失墜しない程度に危険な研究を隠蔽してしま
ったので、組織を潰すほどにダメージを与える事はできなかったの
だが。

そして、《ドヴェルク》の断罪をユグドラシルのトップである大神
槍悟そいつが行ったのも、周囲の心象を良くしてしまったのだ。

「トカゲの尻尾切りだ……《ドヴェルク》のトップは追及を免れて
る。そいつを探し出す事が出来れば――」

――それが、スリスとガラムにとっての復讐の対象となる。

実験と言う名の下に二人の全てを奪った存在。その全てを取りまと
めていた人物こそ、二人が強く憎む相手だった。

しかし今までその存在の足取りを掴む事は出来ず、巧妙に隠された

情報はその尻尾の陰すらも見る事は叶わなかった。
けれど――

「『グレイプニル』……違法研究に直接関わっていた人物なら、何かの情報を持っている可能性は十分にある。これ以上無いチャンス……逃す訳にはいかないよ、おっちゃん」

口元に小さく笑みを浮かべ、スリスはそう口にする。
降って湧いた好機――これを逃す訳には行かないと。
その相手を探し出して殺す――それこそが、ニヴルヘイムの存在
異議なのだから。

「しかし、今回は思わぬ展開だね……しっかりした準備が出来なかったのが本当に惜しい。変身してると、おっちゃんには通信が届かないからなあ」

画面の中に映るモニターの一つには、高速で街を駆け抜けるガルのマークが映し出されていた。
道を違える事無く一直線に進んで行く彼は、もう数分のうちに目的地へと到着する事だろう。

そんな彼へと通信を行えない事を歯がゆく感じながら――バイザーを装備していない涼二ともリアルタイム通信は出来ないのだが――スリスは小さく嘆息を零していた。

一応涼二にはこのことを伝えているし、聡明なガルムならば言わずとも気づく事が出来るだろう。
だが、怒り狂う獣と化した彼に、果たして時勢が聞くのかどうかは

スリスとしても疑問な所ではあった。

その為、出来れば話しておきたかったのだが、生憎と今はデータを
探る程度しか出来る事がないのだ。

「はあ……ままならないなあ、どうにも……ん？」

と、データの中にふと見慣れない単語を発見し、スリスは思わず
首を傾げていた。

それはどこか走り書きのようなテキストデータ。
拾い上げた単語は『グレイプニル』、『逆手に取った』、『隠蔽』、
そして――

「フロースヴァイトニル《悪名高き狼》……？」

物々しいその名称――まるでユグドラシルで与えられるコード
ネームのような名前に、スリスは眉根を寄せる。

何やら危険視するような形で記されているその名前は、スリスでも
聞いた事の無いものだっただ。

危険視されるほどに高位の能力者に関しては、スリスがその情報を
集めている――《災いの枝》レーヴァテイン磨戸緋織、《雷神の槌》ミヨルニル大神徹、《

光輝なる英雄譚》ヴォルスング・サガ大神美汐などもその一例だ。

しかし、その《悪名高き狼》フロースヴァイトニルと言う名に関しては、情報に特化した
スリスでさえ今まで耳にした事のない単語だった。

「ユグドラシルの人間が危険視する能力者……『グレイプニル』の

資料の中で出てくるって事は、それを使わなければならないほど危険な相手だったって事？

なら、その能力者を味方にする事が出来れば――」

貴重な戦力になるのかもしれない、と――獲らぬ狸の皮算用と言う言葉を脳裏に浮かべつつも、スリスは小さく呟いていた。

その名前に関し、更なる検索を開始する――そんなスリスの《並^{マルチタスク}思考》の一角が、画面の端に映る地図、そこに映るガラムが目的地へと到達した瞬間を捉えていた。

「さあ……始まりだよ」

不敵な笑みは己へと向けてか、或いは戦場に立つガラムへのものか。

何処までも自信に満ち溢れた笑みを浮かべながら、スリスは自分自身の戦場へと繰り出して行った。

*
*
*
*
*

金色の毛並みが夜の街に光の軌跡を描き、その巨体は人の目に止まる間もなく通り過ぎてゆく。

強く地を蹴り、一つの跳躍で一軒家を跳び越え、ガルムはただただ真っ直ぐに目的の場所へと向かっていた。

その視線は余計なものを映さず、その先にいるであろう敵を見つめている。

怒りに毛を逆立てながら、溶ける周囲の景色には目もくれず、ガルムはさらに速度を上げた。

『『グレイプニル』……！』

その名には、確かに聞き覚えがあった。

かつて、ガルム・グレイスフィーンが愛する家族を失った日の事。住み辛くなった祖国を捨てて日本へと渡り、慌しいながらも平穏な日々を送っていたあの頃の事。

彼の家族は、唐突に奪われてしまった。

『許さん……永遠に、許しはしない……ッ!』

娘のハティはそのルーンを奪われ、妻のイアールは娘と共にプラーナを奪われた。

傷付き、絶望の内に死んでゆく筈だったガラム——そんな彼を救ったのは、他でもない涼二と路野沢の二人だったのだ。

涼二はいずれユグドラシルから離れて復讐の道に走る事をガラムへと告げ、ガラムもまたそれに賛同した。

全てを奪われた者が身を寄せ合い、足りない力を補って復讐へと走る——それが、ニヴルヘイムの始まり。

その復讐心こそが、彼等にとって何よりの燃料なのだ。

故に——例え暴走している事を自覚していたとしても、ガラムはその歩みを止める事ができなかった。

『もう少し、もう少しだ……!』

強く足元をけり、ガラムはビルの上から跳躍する。

例えどれほどの高さから飛び降りようと、ガラムの強靱な肉体は小揺るぎもしない。

その怒りを燃料として燃やしながら走る暴走特急——その憎悪は全て、家族を奪った者達へと向けられていた。

生きたままルーンを剥がされ、苦痛の内に死んで行った娘の最期も。娘を奪われ、絶望に泣き叫びながらプラーナを奪われてしまった妻の最期も。

全てを奪われたあの光景は、今も変わらずその脳裏に焼きついている。

『Eh、T、R——！』
エフズ ティフズ ラド

見えてきたのは、建築資材を置く為に建てられた倉庫のような場所。

その前方に、人狼の姿へと変化したガルムが地響きを上げながら降り立った。

鋭く細められた彼の瞳は、ただただ一直線に目の前の扉——嚴重に閉ざされた合金製のそれを見据える。

人の気配など皆無なこの場所ではあったが、しかしガルムの持つ強靱な感覚はそれを確かに捉えていた。

『人間の臭い……少なくとも、誰かがいるのは確かなようだな』

ならば、とガルムは拳を構え——握り締めたその拳を、硬く閉ざされた金属の扉へと向けて一直線に突き出した。

空を斬り、甲高い音すら立てて突き出されたその一撃は、その威力を余す事無く対象へと伝え——頑丈極まりないそれを、飴細工か何かのように折り曲げて吹き飛ばす。

無論の事、そのあまりの破壊力に巨大な轟音が響き渡るが、ガルムには最早姿を隠す意思など微塵も存在していなかった。

ガルムは消し飛んだ扉の奥へとその足を踏み入れ——同時に、悪寒を感じて身をよじる。

刹那、一瞬前までガルムの体があった場所に、一筋の熱線が閃いていた。

背後にあった木材をその熱量で焼き斬ったそれは、入り口から見え

ない位置に隠された装置から発射されている。

暗闇に隠れてはいるが、獣化して夜目が利くようになったガルムにはその姿がはっきりと見える。

そしてそれを確認した直後、ガルムの姿は一瞬でぶれて消えていた。同時、鋭い爪が空を裂く音と、仕掛けられていた装置が破壊される音が響き渡る。

（当たり前だ——！）

湧き上がる暗い歓喜に、ガルムは獰猛に牙を剥いた。

それは威嚇のようであり、笑みを浮かべたようでもあり——ガルムも、その感情を抑える心算は欠片として存在していなかった。そして、ガルムは暗闇の中を駆け始める。

途端に動き始める無数のセキュリティ。以前の静崎製薬と違い、こちらでは攻撃目的に作られた装置や警備ロボットなどが多数配置されていた。

サイレンサー機構のついた銃撃装置から放たれる弾丸を躲し、振り抜いた爪の一閃が離れた場所の装置を破壊する。

Rによる超高速の攻撃によるカマイタチの発生。これもまた、一つのファンクションであった。

『オオオオオッ！』

隣から突撃してきた四つ足の警備ロボットの攻撃を躲し、打ち下ろすような拳の一撃がそのボディを粉々に打ち砕く。

砕け散った部品は、打ち据えられたガルムの拳によって一直線に飛

び、その正面にあった機械と共に粉碎した。

強靱な肉体と精神を手に入れるT、^{ディウス}獣のごとき強大な性能を得るE^エh、そして何者にも捉えられない速さを手に入れるR。^{ラド}

純粋な戦闘の為のルーン三種。それらを持つ神話級の能力者とは、即ち神話に名を残す英雄と等しい。

例えばどんな数の機械が襲ってこようとも――

（邪魔だ、木偶が！）

ただの、障害物でしかない。

振り払う腕が当たったものは弾けとび、その破片も弾丸と化して周囲を破壊してゆく。

それはまさに暴風。触れたものを飲み込み、破壊する竜巻のような存在。

怪物と化したガラムがたったの数秒暴れただけ――それだけで、廃倉庫に偽装されたこの場所は本物の廃墟と化していた。

そして――

『見つけたぞ……ッ！』

その強力無比な拳が、地面へと向かって振り下ろされる。

岩盤すら貫き砕くその拳は、土で覆って隠されていた隠し扉を暴き、それを容赦なく貫いていた。

そして内側からその扉を掴み、力づくで引っこ抜くように扉を外す。ぶちぶちと千切れる金属には目も向けず、ガラムはただその下に続く長い階段を見下ろしていた。

暗い洞うろのような地下への道——ガルムはそこへ、躊躇う事無く飛び込んでいった。

身体を覆う浮遊感と、吐き気を催すような墜落感。

落下する夢を見ているようで、酷く気分の悪い感覚を味わいながら、ガルムはその最深部に着地した。

『ここ、か……』

湧き上がる怒りに身を任せる。

止まるつもりなどない——ギリギリの所で目的を忘れぬよう自制しながらも、ガルムは目の前にある扉へと拳を放っていた。

*
*
*
*
*

物の少ない執務室。

整然と並べられた本にはあまり手をつけられた気配はなく、どこか現実味のない空間を作り出している。

そんな場所で、窓の外へと視線を向けていた路野沢一樹は、ふとかがってきた通信に右の眉を跳ねさせた。

その相手は、彼にとって少々珍しい相手だったのだ。

「……変わった事もあったものだ。君の方から連絡をしてくるとはね」

『まア、俺としても変わったモンだとは思うけどなあ』

どこか自分自身に呆れたような声が、携帯電話の向こう側から響く。

そんな声にくつくつと笑みを浮かべ、路野沢は愉快そうに声を上げた。

「いやはや、僕としては頼られる事は好ましいものなのだよ。もっと頼ってくれても構わないのだがね」

『見返りが恐いからなあ。遠慮しとくさ。それに、アンタは俺の性は知ってるんだろお?』

「ははは、一匹狼とは何とも皮肉な事だ」

その言葉に込められていたのは皮肉か、或いは単なる事実を淡々と述べているだけなのか。

どちらにしろ、その通話相手はその言葉を軽く流す程度にしか受け止めていなかったようだったが。

しかしそれにもまるで堪えた様子を見せず、路野沢は変わらぬ調子で声を上げる。

「さて……君がかけてきたと言う事は、やはり『グレイプニル』の話かね？」

『まあな』

「充電期間はもう十分だと、そういう事かな？」

『いいだろオよ、いい加減飽きてきた所なんだ』

「ふむ……成程」

『彼』の氣質を理解しているからこそ、路野沢は愉快そうに笑みを浮かべる。

何処までも楽しそうにしている——しかし、それすらもどこか芝居じみたものに見える、現実感の無い表情だった。

部屋の中の生活感のなさ、そして彼自身。全てが、作り物じみた違和感を空間に投影する。

——けれど、それを見咎める者は何処にもいない。

「安心するといい。そう待たずして、枷を解き放つ者は現れるよ」

『へえ、ソイツは重畳』

「その時が来たら、追って連絡するでしょう……君の望みも、叶えられるかもしれないからね」

『……言うじゃねえか』

路野沢は嗤う。

誰もいないその場所で、人形じみた笑みを浮かべながら。それは美しく、それ故に醜い。無貌に等しいそのカタチは、酷くイビツだった。

「望みは叶えよう。戦う限り、機会を与えるさ。それが、僕の仕事だからね」

『ソイツはまた、大層なこって』

カキン、と電話の向こうで小さな音が鳴る。

何か、金属同士がぶつかるような音——或いは、爪で金属を弾いたような音だった。

その響きは、どこか呪わしい。鎖に繋がれた獣が、外の世界を望んで唸るように。

解き放たれ、血肉を貪る事を願うかのように。

『さて、それじゃあそろそろ行くとしようかね』

「ふむ。君も行くのかい？」

『まあ、な。お礼参りはしておきたいところだろオよ』

カキン、と再び音が鳴る。

その音はどこか、歯と歯がぶつかり合う音にも似ていた。繋がれた獣は、静かに息を潜める。繋いだ相手が油断するのを待ち、その喉笛を喰い千切る為に。

その音を心地良さそうに聞きながら——路野沢は、ただただ楽しそうに声を上げた。

「君の行動には意志がない。ただ、己の本能のままに生きる獣——故に道理は通じず、力づくで叩き潰す他ない。一応の理由はあるが、それも口実に過ぎぬのだろうか？」

『よく分かってるこって……ま、そーゆー事だ』

「ああ、全く……君達に対する興味は尽きないよ」

それは皮肉だろうか。それとも、純粹なる賞賛だろうか。

その声から判別する事が出来るものは、この世の何処にも存在しないだろう。

そして、路野沢は告げる。電話の向こうにいる、その獣へと向けて。

「では、僕から言う事は何も無い……本能に従いたまえ、フロース《悪名高イットニルき狼》」

——その言葉は、どこか言霊のように響き渡っていた。

02-11: 赦せないもの (前書き)

今回の能力者の案はRAYさんより頂きました。

02-11：赦せないもの

地下深く隠されたその場所は、外の様相とは違い最新の研究施設の設備を整えていた。

先程の光景とはあまりにも場違いなそれを見て、ガルムは一瞬だけ目を見開く。

が——飛んできた弾丸に対して即座に反応して身を躲していた。その先にいるのは、幾人かの男たち。

「来たぞ！」

「殺すなよ、生かして捕えろ！」

その言葉に、ガルムは小さく口元を歪める。

どうやら、彼らは分かっているようだ、と。

まるで自分達が狩る側であると勘違いしているようなその言葉——
——即座に後悔させてやる、そう誓うように。

そしてそのまま、ガルムはRのルー^{ラド}ンへと回すプラーナ量を増加させた。

ギャリ、と——鋭い脚の爪が、金属質な床を擦る音が響く。そして次の瞬間、ガルムの体は弾丸のように飛び出していた。

『——ッ!!』

空気摩擦の熱を感じながらも、その身は刹那の内に彼らを容赦なく蹴散らし、破片となったその体を散らす。

しかし油断はせぬまま、ガルムはさらに通路の奥へと向けて駆けだした。

放たれる警備ロボットの攻撃を躲してその鋼鉄の体を鉤爪で引き裂き、雇われたと思われる能力者を攻撃の前に加速して打ち砕く。一步も止まる事無く進み、周囲に破滅を振りまき続けるその姿は、紛れも無い災厄そのものだった。

と、次の瞬間——

「———《猪突猛进な振る舞い》!」
『ぬッ!?!』

高速で宙を駆け抜けてきたその一撃を紙一重で躲し、ガルムは思わず足を止めていた。

その攻撃は非常に早く、目視してから躲すまでほとんどタイムラグが存在していなかったのだ。

無論、ガルムが加速しながら直進していたのも相まっているのだろうが———

(R^{ラド}の能力者か……！)

獣としての姿を崩さず、声を出さぬままにガルムは胸中でそう叫ぶ。

互いに向かい合いながら加速していた事によって衝突しかけた――が、どうやら相手はそれが目的であつたらしい。

主に拳や爪と言ったインパクトの瞬間を狙うような攻撃法を取るガルムと違い、今回の相手が行った攻撃は体当たりによるもの。

(ただの自爆特攻とは違う……強化した上での加速突進か)

だが、それにしても――と、ガルムは若干の疑問を吐き出す。

加速の際に殆ど風圧を感じなかった事に、ガルムは違和感を感じていたのだ。

別の能力が干渉している可能性もあると、油断せぬままにガルムは構える。

同じくR^{ラド}の能力者であるガルムならば逃げる事も不可能ではないだろう。

だが、追いつかれぬようスピードを落とさぬまま進むのはいかな高い技量を持つ彼とは言えども不可能だ。

ここで迎撃せねばならない。周囲に注意を払いつつも、ガルムは相手へと向けて駆けた。が――

(体が重い……！？　O^{オセル}の重力操作……いや、I^{イサ}の停止減速か！)

舌打ちしつつ、ガルムはプラーナの出力を上げる。

能力による直接干渉は、それ以上のプラーナを叩き付ける事で解除する事が可能だ。

だが、一瞬でも動きを止めてしまったガルムの身体は、単なる的ではない。

「^{ティフズ}T、^{ラド}R、^{イサ}I——」

前方にいる男は、地を蹴る体勢を作りながら再びルーンを発動させる。

この距離、この体勢では躲す事は不可能。怒り狂っていても戦闘では冷静な部分を残しているガルムの思考は、客観的にそう判断する。そして即座に、ガルムは新たな形でルーンを発動させた。

（———^{ハイ・ビート}《神速の律動》！）

^{ラド}Rによる思考加速——それは、感覚の延長に他ならない。

^{アンサズ}Aの持つ高速思考と違う点は、理路整然とした思考回路を作り出せる訳ではないという事。

しかし、神話級の能力者にして深い知識と聡明さを持ち合わせるガルムは、それに準ずるほどの力を発揮する。

相手が飛び出してくるまでの一瞬で思考を完了させたガルムは、更なるファンクションを発動した。

（―――
《冥府の門番》！）
オフティームス・ハウンド

発動させたのは、ティワズ エワズTとEhを組み合わせた強化のファンクション。加速を捨て、純粹に力と強靱さを求めたその姿は、先ほどのしなやかな――十二分に大柄ではあったが――人狼よりもさらに一回りほど大きい。

肥大化した筋肉の鎧は、銃弾も生半可な能力も通じないほどに強力な防具となる。

そしてその状態で防御の為に腕を交差させ、ガルムは突っ込んでくるその神速の突進を待ち受けた。

一瞬の空白――そして、衝突。

『ぬう……ッ！』

強烈な威力を受け止め、ガルムはその足の爪を地面に突き立てながら、その衝撃を必死にこらえていた。

重圧は一瞬――その強大な力を、ガルムは一人で受け切る事に成功する。

目の前にあるのは、驚愕に目を見開いた男の姿。

まだ地面に降りる前のその身体を、ガルムは両腕を振り払うようにしながら地面へと叩きつけた。

「が……ッ!？」

普通の人間ならばそれだけで碎け散るほどの腕力。

けれど、^{ティフズ}Tを持っていたその男の身体は、生憎とその一撃だけでは致命傷たりえなかった。

故に、ガルムは腕を振り上げながら小さく告げる。

『敬意を表しよう——』

静かに告げる、その言葉。

獣と思っていたものが声を上げた事に、男は大きく目を見開く。

しかしそれを意に介さず、ガルムは男にのみ聞こえる程度の小さな声で告げる。

『私に攻撃を全力で『受け止め』させた男は久方ぶりだ』

そして——その巨大な拳が、地面へと向けて打ち下ろされた。^{ラド}

Rの加速など存在しないにもかかわらず、目にも留まらぬほどの速さで放たれたその拳は、容赦なく倒れた男の背中を打ち貫き、この施設全体を大きく揺らした。

轟音と鳴動、そして金色の毛並みを赤く染めた獣は、その破滅の中で尚も立ち上がる。

鋭敏になった嗅覚は、その血の臭気の中でも尚、どこか覚えのある臭いを感じ取っていたのだ。

そちらの方へと向かって、ガルムはその強靱な肉体を解除しないまま歩き出す。

『こちらか……』

先ほどまでのような速さはない、だが進行を止める事も無く、ガルムは一步一步目的の方向へと進んでゆく。

放たれる銃弾も、人体を砕け散らせるような爆発物も、鎧と化したガルムの肉体を傷つける事は叶わない。

速さを捨て、防御と攻撃に偏重した戦闘形態——それが、オフティ《冥府の門番》イラトス・バステイアだった。

《血染めの狼》ほどのバランスの良さは存在していなかったが、それでも戦闘を行うには十分すぎるほどの能力である。

能力を使って姿を変化させるにはそれ相応のプラナが必要であり、状況に合わせて一々変化するのは、フェアブラ神話級のガルムですら少々厳しいものがある。

それ故、元の姿に戻るのはあまり合理的とは言えないのだ。

（あまり時間は無い、が——）

繰り返す戦闘での冷静な思考によって、ガルムの意識は少しだけ冷静さを取り戻していた。

感じ取っている臭い——少し、あの執事に似た感じのするそれは、もうあまり遠い場所ではない。

放たれる攻撃や向かってきた能力者などを羽虫の如く振り払いながら、ガルムはそちらの方向へと進んで行った。

振るった拳が当たった壁が砕け散り、進む道は血に染まる。胸元を血に染めたその姿は、凄惨なまでに恐ろしい様相を成していた。

けれど、止まらない。ガルムを止められる者が存在しない。

降りてくる分厚い隔壁も、手刀を刺し込んで貫通し、無理矢理に二つに裂いてしまう。

弾丸を放ってくる大型の警備ロボットは、それらを意にも介さぬまま進み、無理矢理に踏み潰す。

暴虐を振り撒きながら進んだ先は……一つの、金属製の扉だった。ガルムは、その扉を引き剥がすように破壊する。

「ひっ……!？」

そこにいたのは、一人の女性だった。

病人用の簡易服のようなものを纏い寝台に寝かされていた彼女は、ガルムのその姿を見て恐怖に表情を引き攣らせている。

少しだけ感じ取る事の出来るあの執事の面影に、ガルムはどこか苦笑じみた吐息を吐き出した。

本当に、配慮が足りなかったと。今の自分の姿は、少なくとも助けに來た人間のものでは無い。

けれどこのままでは埒が明かないと、ガルムは彼女——嵐山佳奈美へと向けて声を上げた。

『私は、君の兄上から依頼を受けて君を助けに來た者だ』

「……え……?」

『信じられないのも無理は無いし、君を実験台にしようとした者達への個人的な恨みからの行動でもある。だが——』

呟き、ガルムは腕を振るう。

その爪の一閃が、佳奈美を拘束していたベルトを切り裂いていた。

自由になった彼女は、驚いた表情を浮かべながら己の両手を見つめている。

そんな彼女へと向けて、ガルムは続けた。

『部屋の隅に行って、隠れていて貰いたい。私の力は、護衛には少々不向きだ』

「は、はい……」

恐る恐る、警戒しながら距離を取るように離れてゆく佳奈美の姿に、ガルムは再び苦笑を漏らす。
そして彼女が部屋の隅まで避難したのを確認すると、握り締めた拳を部屋の壁へと向けて叩き付けた。

「ひっ……きゃあ!？」

引き攣ったような悲鳴は黙殺し、腕を振り払うように壁を破壊する。

その向こうにいたのは、複数の研究者の姿だった。

気付かれないかと思っていたのだろう、戦闘者でもない彼等は、ガルムを前にして恐怖に表情を引き攣らせている。

ガチン、とガルムの鋭い牙が鳴る——黄金の体毛を逆立てながら、その見た目を更に一回りほど大きくして、ガルムは怒りの唸り声を上げた。

「ひ、ッ……け、警備員は何をしている!? 早くコイツを——」

ガルムの振るった腕が、甲高い音を立てて霞む。

そしてその瞬間、叫び声を上げていた男の頭部が弾けとんだ。

夥しい血を噴水のように吹き上げながら事切れる男を見据え、ガルムはつまらなそうに息を吐き出しながら声を上げた。

『技藤とやらは何処にいる』

唸る、怨嗟のような声。

そこに籠る巨大な憎しみに、研究者達は縛り付けられたように動きを止めていた。

だが、その視線だけは全てある方向——そこに立つ一人の男へと向けられている。

黒縁の眼鏡をかけた茶髪の男。うろたえてばかりの研究者達の中で、たった一人だけ冷静さを保っていた存在に、ガルムはその視線を向ける。

『貴様か』

「……はあ、ついていない。折角ここまで漕ぎ着けたと言うのに」

死を目の前にして態度を崩さぬその余裕に、ガルムは訝しげに眉根を寄せる。

技藤はそんな彼の困惑を理解しているかのように、口元に笑みを浮かべながら声を上げた。

「だが、これも正当な使い道と言えるか——」
『何を言って……ッ!？』

刹那、ガルムの周囲から紐状の物が飛び出し、その巨体へと向かってゆく。

ガルムは反射的にそれを爪で薙ぎ払ったが——そのベルトは、鋼鉄すら斬り裂く爪を受けてもビクともしなかった。

その事実には驚愕する間もなく、ベルトはガルムへと向けて襲い掛かる。

『これは、まさか『グレイプニル』——!？』

ラド
Rを交えた状態、イラスト・ベステイア
《血染めの狼》ならば躲す事も可能だっただろう。

けれど、今のガルムはスピードではなくパワーとディフェンスに偏重した姿。

その姿では——それを躲す事など、叶わなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「やっぱ、コレは必要か……」

密都内に点在する隠し場所の一つから持ち出したコートとバイザーを纏い、涼二は夜の街の上空を駆ける。

その身に水のロープを纏い、様々な建物に繋ぎながら飛び回るその姿は、さながら蜘蛛のようだった。

僅かに赤く光るバイザーは、さながら複眼と言った所か。

自分自身の皮肉に苦笑しながらも、涼二はようやく目的地の姿を視していた。

「ようやく着いたか……って言うか」

地面に降り立ち、その建物の状況を眺めながら、涼二は思わず頬を引き攣らせる。

それほどまでに酷い状況だったのだ。壊滅しているといっても過言

ではない。

本気で暴れたらしいガルの爪痕を眺めながらも、涼二はその廃工場を装った施設の中へと足を踏み入れてゆく。

「……こりやまた、随分と猛ってるな、あいつ」

無数に刻まれた爪痕、砕け散った機械、地面に開いた大穴。

どれもこれも人間業では無い破壊力——その痕跡を目の当たりにして、涼二は小さく苦笑を零す。

見事なまでに破壊し尽くされたその場所は、彼が向かって行った何よりの証拠でもあった。

（今は戦闘音が聞こえない……暴れるまでも無い状況か、或いは暴れられなくなっているか……一応、考えておいた方がいいか）

胸中で呟き、涼二はバイザーの上からその右目を押さえる。

その瞳に刻まれた、スリサズThの始祖ルーンを。

出来ればそれが活躍する機会が存在しないことを望みながら、涼二はLのルーンラグズを発動させて地下へと降りていった。

「——スリス」

『はいはい、調査完了。バイザーに表示するよ』

スリスの明るい声と共に、涼二の司会に施設の地図が表示される。

相変わらず完璧なまでの調査結果に、涼二は思わず苦笑を浮かべていた。

地下深くの地面に降り立ち、その画面を身ながら涼二は暗がりになを隠す。

どうやら、ガルムはゆつくりと道を進んでいる所ようだった。

（アレをやったのか……となると、本格的に警戒が必要になるかな）

胸中で嘆息しつつも、人の目がなくなる瞬間を捉えて涼二は施設の中へと侵入してゆく。

涼二の目的はただ一つ——ある意味では、いつも通りの行動だった。

即ち、ガルムが視線を集めている間に、涼二が目的となるもの手に入れる。

今回の目的は、依頼内容である嵐山佳奈美、そして『グレイプニル』とユグドラシルに関する資料。

スリスの手によって監視カメラの映像が偽装された通路を走り抜けつつ、涼二は小さく笑みを浮かべていた。

（尻尾は必ず掴んでやる……待っている、ユグドラシル）

その瞳に映るのは、ガルムとは違い——しかし、同じものでもある憎しみの炎。

冷たく燃え上がる青い炎のようなそれは、涼二の感覚を先にいる敵へとより鋭く尖らせて行っていた。

向かうべき場所は実験室、そして資料やデータが収められた場所。

『これだけ大規模な実験施設を作っていたんだ、ユグドラシルの手が入っているのは確実だよ。』

けど、問題はトカゲの尻尾切りぐらいは簡単に行えるって言う事。あいつらは、ここを切り捨てるぐらいは簡単にする』

「ああ、それは俺が一番良く知ってるさ」

元々ユグドラシルに所属していたからこそ、涼二は強い実感を持つてそう口にする。

そしてそれに対し、どこか頷くような気配を見せながら、スリスが声を上げる。

『実際、もう向こうから干渉を受けてる可能性はある。気をつけてね、涼二』

「分かってるさ……だが、この混乱状況だからこそ——」

『セキユリティが解除しやすい、ってね。データロックさえ解除してもらえれば、ボクがいくらでも情報を奪ってこれる。頼んだよ、涼二』

「ああ、任せろ」

頷き、涼二は駆ける。

冷静さを保ちつつも、どこか急ぎながら。

——それ故、涼二は気付かなかった。

「……」

彼の後を追い、一人の人影が内部へと侵入していた事を。

02-12：暗躍と真実

「……本格的にこんな真似をする事になるとはな」

換気ダクトの中に氷を張って滑りながら進みつつ、涼二は小さく嘆息を漏らす。

狭苦しい場所ではあるが、能力を使えば音を立てずに進む事は可能だった。

流石にこの施設内に配置された人員を全て把握し切る事までは流石のスリスでも出来ず、涼二はこのような安全策を取って進んでいたのだ。

いかなスリスとは言えど、強固なプロテクトに護られた施設内を短時間で調べ切る事は不可能だったのだ。

だが――

（必要な情報は出揃ってる。ならば――）

——後は、己の腕次第でどうしても出来る。

そう胸中で呟き、涼二はバイザーに映し出された己の位置と、内部の地図を照らし合わせた。

己の位置や把握できた警備員の位置、そして目的地の場所などの位置関係を確認しつつ、目的のデータベースへアクセスできる場所へと向かう。

流石にこの狭い空間で戦うのは不可能であると分かりきっているのに、涼二は無駄な寄り道をせずに一直線にそちらへと向かっていた。時折見える部屋や廊下の状況を確認めつつ、音を立てないようにただ前へ。

(……ガルの奴、本気でやったみたいだな)

僅かに見えた、盛大に血の飛び散っている廊下を眺め、涼二は小さく嘆息を漏らした。

パワー偏重型のファンクションである《冥府の門番》オブティーマス・ハウンド。あのパワーは涼二の力でも防衛し切れないほどに強力なものだ。

分厚い氷の壁も、まるで薄皮のように容易く引き裂いてしまう。だからこそ、それほど心配していると言うわけではないのだが——

「……まあ、あいつでも万が一はあるか」

思わず声に出してしまったことに気付き、涼二は口を噤む。そして小さく肩を竦め、緩やかに滑る身体を停止させた。

現在の場所は資料室の上部——僅かに霧を放ち、涼二は内部の状況を確かめた。

今の所、内部に人はいないようだ。

「よし、っと」

換気口を蹴破り、涼二は資料室の内部へと侵入する。

若干薄暗いその部屋はあまり広いわけではなく、多くの棚が圧迫するように並んでいた。

そしてその奥に、検索用のパソコンが備え付けられている。

笑みを浮かべながら頷き、涼二はそのパソコンを起動させた。

「さて……と」

懐から取り出したのは、ケーブルのついた黒いカード状の装置。

これは涼二のコートの中に常備されている装備の一つであり、スリスが自作したクラッキングツールであった。

接続したパソコンに対する侵入を容易にする、スリルの波長に合わせた道具。

涼二はそれをパソコンに接続し、装置を起動させる。

「……繋いだぞ、スリス。どうだ？」

『ん……大丈夫だよ。ちょっと待ってて、調べてみるから』

通信機の向こうからは、カタカタと高速でキーボードを打つ音が聞こえてくる。

かなりの集中をしているらしい彼女に小さく苦笑しつつも、涼二はその掌をこの部屋の入り口の方へと向けた。

途端、Lのルーンによって現れた水が、Iの力によって凍結する。^{ラクス}

巨大な氷によって塞がった入り口を眺めて満足しつつ、涼二は周囲の棚に収められた資料達へと視線を向けた。

大半は書類を納めたファイルであり、背表紙の所には簡単なタイトルらしきものが記されている。

が、専門の知識を持たぬ門外漢の涼二には理解の及ばない内容ではあった。

「さてと、どうしたもんかね……」

これらを全て運び出すほどの人手は無く、そして内容を理解するだけの知識もない。

挙句の果に、情報の取捨選択をする時間すらも限られている。

よい状況とは到底思えない今現在の状態に、涼二は思わず嘆息を漏らしていた。

そして、バイザー視界に映るマップへと視線を向ける。

「……何人か、こちらに向かってきてるな」

舌打ち混じりに、そう呟く。

今更自分達の存在に気づかれた所で大した差があると言う訳ではないのだが、ピンポイントに情報封鎖が掛けられて、スリスの作業が

妨害されるのは防がなければならない。

余り時間を掛けている暇は無いのだ。

じっと息を殺し、涼二は氷に包まれた扉の奥へと注目する。

マップ上の反応は、真っ直ぐに廊下を進み——資料室の前で、止まった。

「……はあ」

涼二は、思わず深々と嘆息を吐き出す。

静かな部屋の中に響くのはパソコンの駆動音と、開かない部屋の扉を叩く外の人間達の声だ。

ただ扉を破ろうとしているだけならば問題はないのだが、コレでネットワークの封鎖を行おうとするような人間に情報が行き渡っては堪らない。

厄介な状況に辟易しつつも、涼二はその手を凍りついた扉へと触れさせた。

『おい、どうなってる!?!』

『早く開けろ、鍵がかかっているのか!?!』

断続的に響く扉を叩く音、そしてそれと共に聞こえてくる喚き声。ガルの襲撃によって冷静さを失っているおかげか、まだ他方に連絡すると言った事は行っていないようだが、それも時間の問題だ。故に、涼二はその両肩に刻まれた二つのルーンを発動させた。

「―――
フロステイレイン
《氷雨》」

その言葉と共に、扉の向こう側で涼二の力が吹き荒れる。

顕現するのは冷たい雨―――しかしそれは、触れたものを全て凍りつかせてしまう死の雨だ。

一滴でも触れれば、当たり所によっては死に至る強力凶悪なファンクション。

かつて《氷獄》^{ニサルヘイム}のコードネームを得る前は、この《氷雨》^{フロステイレイン}こそが氷室涼二の二つ名だった。

その力は、神話級の能力者ですら防ぎ切る事も避ける事も難しい――

――降り注ぐ雨を躲せる者などいないのだから。

そんな強大な力に曝された三人ほどの男達は、冷たい雨に包まれて、一瞬で物言わぬ氷像と化していた。

その姿を確かめる事は出来ないが、反応が途絶えた事を確認して涼二は小さく頷く。

「よし……とりあえずは、大丈夫か」

扉付近から手を離し、涼二は安堵の息を吐き出す。

しかし状況が好転したと言う訳でもなく、早急にここの探索を終える必要があるのも事実だった。

後頭部を掻きながら、涼二はバイザーのマイク―――その向こうのスリスへと向けて声を上げる。

「スリス、どの資料が必要になるのか早く教えてくれ」

『はいはいちょっと待って、もうすぐ出るから……っ』

タン、とスピーカーから音が響く。

どうやら、エンターキーを押した音らしい。

そしてその直後、スリスは読み上げるように声を上げた。

『必要なのはA－6の棚にある研究報告、B－2の棚にある実験記録、D－8の棚にある資料。最初の二つは『グレイプニル』に関する情報で、最後のは研究に協力した人員について書かれてる。棚のロックは外しておいたよ』

「了解した。探しておくから、次の道筋を検索しておいてくれ」
『りょーかい』

スリスの言葉に頷きながら、涼二は並ぶ棚に刻まれた文字列を探してゆく。

本来ロックが掛けられている筈の棚は、スリスが設定を弄った為に必要な部分のみが開かれていた。

『グレイプニル』に関する研究報告と実験記録、そして協力者の名簿――たった三つではあるが、それだけでも持ち運んで邪魔にならないと言うにはぎりぎりのレベルであった。

「戦闘には流石に邪魔だな、こりゃ……」

内容を確認しつつ、パソコンを停止させる。

そしてクラッキングツールを取り外し、コートの中のケースに資料を納め、涼二は再び天井にある換気ダクトの方へと跳躍した。

一度だけ、部屋の中を眺める。
そして小さく嘆息し——涼二は、ダクトの中へと姿を消していった。

「さて、ガルムの援護と人質の救出と行きますかね」

——そう、小さく言い残して。

*
*
*
*
*

『ぐ、く……！』

両腕と両足、そして胴と肩を壁から伸びたベルトによって押さえつけられたガルムは、思わずそう呻き声を上げていた。

力が減衰しているのだ。身体を拘束する『グレイプニル』という名のベルト——その力は、神話級フアーブラの力を持つガルムに対しても存分に発揮されていた。

岩を容易く打ち砕くその膂力すらも、『グレイプニル』は完全な形で押さえ込んでいたのだ。

「やれやれ……研究のしづらい世の中になってしまったものだ。身を隠してまで研究を続けていたと言うのに……」

ガルムの隣を歩きぬけながら、男——技藤翔はそう口にする。

それはガルムに対して語りかけていると言うより、独り言に近いようなものだった。

技藤は、目の前のガルムに恐怖を覚えるでもなく、ただ淡々とそんな言葉を口に出している。

「すっかりと能力者の権利が整備されてしまった。化物扱いされていた昔の状況だったなら、こうも面倒な方法を取らずに済んだものを」

『貴様……ッ！』

技藤の言葉に、ガルムは激昂するように声を上げる。

しかしながら、技藤の口に出ている言葉は紛れも無い事実だった。

十五年前、能力者という存在はただの異端でしかなかったのだ。隕石の飛来も能力者によるものであるという根も葉もない噂が流され、その次の日には迫害していた当人が能力者へと変わる。

正しく地獄だったと——当時を経験しているガルムには、それが実感として感じられる。

ユグドラシルという法の執行者が現れるまでは、この国でも混乱が絶えなかったのだ。

それでも、ほぼ壊滅した故国よりはマシだったと、ガルムは思う。けれど——

「こんな所にまで邪魔が入られたら、何処で研究をすればいいのやら」

『このような研究など……ッ!!』

「何をそう毛嫌にする。今の世の中は、我々の研究によって成り立っていると言うのに」

呆れたような表情で、技藤はガルムの方へと振り返る。

その瞳の中にあるのは、何処までも淡々とした、無感動な感情。ただ事実を語っているだけだと言う自負が、そこにはあった。

そして——それが事実である事も、ガルムは知っていた。

「我々の研究が無ければどうなっていた？ この国は本当に秩序を取り戻す事が出来たのか？」

『……』

そう、それは紛れもない事実だ。

ユグドラシルが裏で無数の屍を積み上げたからこそ、今日の平穏な日常がある。

世界中がいまだ苦しみに喘いでいる中、この国の人々が真っ当な生活を送れるのは、他でもないその犠牲のおかげなのだ。

だが――

『関係、無い……ッ！』

「……ほう？」

唸るような怨嗟の声。その言葉に、技藤は小さく目を見開いた。ぎしぎしと軋む『グレイプニル』。その強靱な肉体に強く食い込む事すら気にせず、ガルムは巨大な咆哮を上げた。

『貴様等がどれだけの人間を救い、その影でどれだけの人間を殺しているのが知った事ではない！』

貴様等は、全てを奪った……私から、妻と娘を奪ったのだ！
例えどのような大義名分があろうと、私は未来永劫、貴様等を赦す事など無いッ！』

繋がれた床が、ベルトが、そしてその肉体そのものまでもが軋みを上げる。

けれど、その校則は決して外れる事は無い。

何処までも効率的に力を分散し、決して外れる事のない束縛を作り出す。

それ故、技藤はガルムに対し何ら脅威を覚えていなかった。

「妻と娘……ああ、成程。君はあの時の実験体の関係者か」
『……ッ!?!』

技藤の言葉に、ガルムは大きく目を見開く。
そして、次の瞬間に湧き上がっていたのは、大気を震わせんばかりの巨大な殺意の塊だった。
それを涼しげに受け止めながら、技藤はただ淡々と語る。

「アレの事は覚えているよ。期待していたのだが、結局失敗してしまったからね。私としても、数少ない失敗例の一つだ」
『——』

失敗と言う言葉に、ガルムは言葉を失う。
失敗した、つまり彼女達によって『グレイプニル』が作り出される事は無かった。

ならば一体、彼女達の死は何だったと言うのか。
ただ、無意味に失われただけだと、そう言うのか——そう、ガルムは愕然と己に問いかける。

「今回は失敗する訳には行かない。ディザスター災害級の能力者を使って実験を行うのだから。それに、フアーブラ注ぎ込むプラーナは神話級が飛び込んできてくれた……最高の『グレイプニル』を作れるだろう。感謝するよ」

その言葉の中で、ガルムの鼻はある臭いを感じ取っていた。

怒りに塗り潰されそうな意識の中、僅かに残った理性が感じ取ったもの——それは、涼二の臭いだった。
僅かに、視線を上げる。

「さて、では実験を——何!？」

その場所に、嵐山佳奈美の姿は無かった。

ガラムが一瞬だけ見る事が出来たのは、天井の通気候から伸びた水のロープが、彼女の体を絡め取って攫っていった事。

そして、周囲へと、馴染みのあるプラーナの気配が広がった事だった。

姿を見せぬ涼二の、その右目に刻まれているはずのルーン——^{スリ}T^{サズ}hの力。

——それと共に、減衰していた力が元に戻る。それを自覚し、ガラムは最後のファンクションを発動させた。

『———^{ベルセルク}《完全獣化》』

ガラムの瞳から、理性の色が消える。

獣としての闘争本能で意識を塗り潰し、力を失った——涼二の力によって上書きされた『グレイプニル』を力任せに引き千切る。
そして自由になったその身で、ガラムは巨大な咆哮を上げた。



———オッ!!』

技藤が驚愕と共に振り返った、その瞬間。

ガルの拳は、一瞬の内に敵の顔面へと突き刺さり、周囲の部屋ごと男の身体を完全に打ち砕いていた。

*
*
*
*
*

「ハアッ、ハアッ……ここ、コレさえ持ち出せば……!」

白衣を纏った一人の男が、ある資料を持って壊滅しかけた施設の通路を走っていた。

目指す場所は緊急用の脱出口。その手に『グレイプニル』に関する最新資料を持ち、男はただただ逃げる為に走り続けていた。

「これさえあれば、研究は続けられる。これさえ――」

うわごとのように呟きながら、男は目的の場所へと到着する。

緊急用脱出口は外から入って来れぬよう、基本的にセキュリティロックが掛けられていた。

横にある端末へと解除用パスワードを入力し、そこから外へと脱出しようとドアに手を触れる――瞬間。

「――ゴア、ッ!？」

唐突に走った衝撃に、男は横へと吹き飛ばされていた。

吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、痛みに喘ぎながら男は目を白黒させて起き上がる。

――そこに立っていたのは、一人の青年だった。

「おーおー、出口までの案内ご苦労さん。ってな訳で、コイツは貰っていくぜ」

「な、何だ、お前は!？」

床に落ちた紙の束を拾い上げ、皮肉な表情で嗤う青年に、男はそう叫ぶ。

しかし相手は、ヘラヘラと笑みを浮かべているだけだ。そしてそのまま彼の事を無視し、青年は扉を開けて外へと出てゆく。

「ま、待て——」

咄嗟にそれを追うように扉を開けて——男の体が、一瞬だけ揺れた。

扉の影から伸びたのは、外に出ていた青年の腕。

銀色に染まったそれは真っ直ぐに男の胸へと伸ばされ、それを貫いていた。

「な、あ……」

「じゃあな」

——血に染まった腕を引き抜き、青年は歩き出す。そこに残っていたのは、たった一人の死体だけだった。

02-13 :: エピローグ (前書き)

中間発表があるため、次回更新は10/10になります

「うーん……」

戻ってきた森崎グループの本社ビル。

事後処理に追われ、疲労困憊の状態で椅子に腰を降ろした時には、既に朝日が登りきっている時間帯だった。

そして現在、ニヴルヘイムに宛がわれた部屋の中で、涼二の持ち帰った書類を見ながらスリスは眉根を寄せていた。

周囲にいる他の三人は、ガラムを除き若干眠そうな表情でその様子を眺めている。

結局、徹夜する事となってしまうたからだ。

しかしそんな状況でもすぐに休むと言う訳には行かず、シアを待つ間こうして持ち帰った情報を確かめる事となったのだ。

「確かに、いい情報ではあるんだけど……」

資料を机の上に降ろし、スリスは小さく肩を竦める。
そこには、どこか失望のようなものが込められていた。

「最新の情報って訳じゃないね……ここにある情報も確かに有用だけど、出来れば新しいものが欲しかったかな」

「だが、流石にもうあの施設からは手には入らないぞ？」

「分かってるよ……だから、今ある情報から辿っていくしかない。けど、大きな進歩なのは確かだよ。流石、涼二だね」

「まあ、怪我の功名みたいなもんだがな」

スリスの言葉に苦笑しつつ、涼二はそう口にする。

今回の事件は、殆ど突発的に起こったものであり、それが自分達に関連する出来事であるとは思っていなかったのだ。

思った以上に厄介な出来事になってしまったものではあったが、予想外の自体としてはそれなりにいい結果を残せた。

尤も―――若干一名、納得し切れていない人物はいたのだが。

「まー、そーゆー訳だからさ……あんまり責任感じすぎるもんじゃないって、おっちゃん」

「……醜態を曝したのは事実だからな。反省せねばなるまい」

手を組み、その上に額を乗せた体勢で項垂れるガルムに、涼二とスリスは視線を合わせて嘆息した。

確かに、ガルムが己にとっての仇を相手に暴走していたのは事実だ

ろう。

けれど、涼二やスリスはそれを計算に入れた上で行動していたのだ。その為、結果的に言えば、ガラムが敵を陽動してその間に涼二が侵入すると言ういつものパターンに収まっていたのだ。

結局の所、何か問題があったと言う訳ではない。この世界は、結果が全てなのだから。

「……まあ、次に冷静でいてくれればいいって。一応、直接の仇的な奴は倒せたんだろ？」

「ああ……だが、『ドヴェルク』に指示を出していた存在には辿り着いていない」

「その辺りを調べる為に協力者の名簿とかを取ってきたんだけど……ま、これからってトコだね」

スリスの言葉に、涼二はコクリと頷く。

裏側にいる存在が一体何者なのか。それはまだ分からないが、そこに辿り着かなくてはスリスとガラム二人の復讐は完了しない。

（……そう考えると、相手が分かってる俺はまだ楽なのかもしれない）

とは云え、相手は同時に最も倒す事が難しい位置にいる存在なのだ。

その事を思い出し、涼二は感じた憂鬱に対して小さく嘆息を吐き出していた。

だが、それでも諦めるつもりは無い。徹夜に慣れておらず、尚且つ

慣れない力を使った雨音が舟をこぎ始めているのを視界の端で確認し、他の仲間に見えぬように肩を疎める。
と――その時、部屋の扉がノックされた。

「どうぞー」

「失礼しますわ」

部屋の中に入ってきたのは、嵐山によって扉を開けてもらったシアだった。

彼女は執事と、そしてその後ろに続く少女を引き連れ、徹夜明けの疲れた様子すら見せずいつも通りの様子で自分用に置いてある席に着いた。

涼二はちらりと彼女の後ろ――あの時助け出した女性へとその視線を向け、小さく肩を疎める。

そんな涼二の様子には気付かず、シアは声を上げた。

「この度は良くぞ依頼を完遂してくれました。あなた達の働きに感謝しますわ」

「どうも」

徹夜明けでは皮肉を挟めるほど頭が回るわけでもなく、涼二は低い声で簡単にその言葉を受け取る。

シアもそんな涼二達の様子を理解しているのか、特に気にした様子も無く続けた。

「依頼は完遂、さらに我が執事の個人的な問題まで解決して頂きました。報酬には上乘せさせて頂きますわ」

「まあ、個人的な目的の一部だったので」

「ええ、存じております。ですが、これは個人的な感謝ですので、素直に受け取って頂けるとありがたいのですが？」

「……了解」

要するに、余分な借りは作りたくないという事なのだろう——
そう判断し、涼二は小さく嘆息を零していた。

普通に考えれば失礼極まりない態度だろうが、シアが気にした様子は無い。

対等な立場を望んだからこそ、彼女はそれを平然と受け止める事が出来るのだ。

「まあお疲れでしょうし、長々と話すのも邪魔でしょう。わたくしは早めに退散するとしますわ」

「助かる。正直、結構疲れてるんだ」

何せ、一晩かけて足と能力を使いながら街を駆け抜け、そして能力を使った戦闘もこなしたのだ。

いくら戦闘訓練を重ねた一流の能力者とは言えど、きついものはきつい。

一応、まだしばらく活動する事も可能ではあるのだが、必要も無いのにそのような事をするほど、涼二は酔狂な人間ではなかった。

疲労を溜め息と共に吐き出し、涼二は頷く。

「では、わたくしのお礼はこの程度で……話す事があるなら、話して行きなさい」

立ち上がり、振り返りながらシアが告げたのは、嵐山の後ろに控えていた佳奈美に対して。

その言葉に彼女は肩を跳ねさせながら驚いていたが、少しの間言葉を吟味して、覚悟を決めたように涼二達の方へと視線を向けた。

『グレイプニル』の材料として捕らえられていた彼女——嵐山佳奈美は、ガルムが捕らえられているちょうどその間に涼二によって救出されていた。

涼二としては、解放された瞬間暴れ出したガルムの攻撃に巻き込まれかけた事に対して若干の文句があったが、とりあえず大事には至らなかった。で、ディザスターにしない事になっている。

一応は災害級の能力者とはいえ、戦闘に関してはずぶの素人。周囲の状況に騒ぎまくる彼女を連れ帰るのは、中々に骨が折れる行為だった。

そんな佳奈美は、涼二達へ——主に涼二へと向けて、深々と頭を下げる。

「この度は助けて頂き、本当にありがとうございました。私だけじゃなく、兄さんまで——」

「そっちはその依頼主から命じられた仕事の範囲だ。礼を言うんだったら姫さんに言っておいてくれ」

「……何ですの、その呼び方？」

「眠いんで適当だ、気にすんな」

欠伸を噛み殺し、涼二はそう口にする。

そしてどこか納得いかなそうな表情をしながらも、シアは彼の様子に肩を竦めていた。

しかし頭を下げているか並は二人の様子に気付かず、後ろで見守る嵐山だけが苦笑じみた表情を浮かべていた。

「あの、お礼を……」

「アンタを助けたのはついでだから、気にしないでくれ」

「で、ですけど……」

顔を上げ、尚も食い下がる彼女に対し、涼二は小さく嘆息する。

実際の所、涼二も彼女が生きている可能性は半々程度に考えていたのだし、さらに自分達が必要とする資料を奪取する事を優先していたので、あまり感謝されると居心地が悪いのだ。

しかしそんな涼二の心境は知らず、佳奈美は尚も食い下がる。

「このまま何もお返しできないのは、私としても納得できません！」
「うあー……」

眠気で思考能力が低下している中、がんがん響く声に頭を抱えつつも、涼二は遅くなった頭を必死に回転させる。

ちらりと見た佳奈美の顔は、本気の熱意に燃えていた。一応年上の筈なのだが、その表情のおかげか随分と若々しく見える。

そんな彼女へと向け、涼二は問いかけた。

「……アンタ、仕事何してんだ？」

「はい？ ええと、私は兄さんと一緒に鉄森家の使用人を——」
「ああ、じゃあこの手伝いをしてくれ。見られちゃ拙い資料があるが、アンタならもうそれなりに知ってるから大丈夫だろう」
「え……あ、は、はい！」

無論、その辺りの配置はシアが決定しているのだろうか——と涼二は隣に立つシアへと視線を向ける。

彼女は何処と無く呆れたような表情を浮かべていたが、一度目を閉じて嘆息すると諦めたように苦笑を浮かべた。

「好きにするといいですわ。彼女一人抜けた程度で回らなくなるほど、仕事が立て込んでいる訳ではありませんもの」

「そうかい……じゃ、借りる」

「よ、よろしくおねがいします！」

微妙に囁んでいる佳奈美へと嘆息しつつ——涼二は、その身を深くソファへと沈めていた。
身体を包む倦怠感がじんわりと癒えて行く感覚に、そっと目を閉じる。

（今日は一日寝るとするか）

結局自宅に戻る事が出来なかった事を考えつつも、涼二はゆっくりとその睡魔へ身を委ねて行ったのだった。

*
*
*
*
*

「……参ったなあ、これは」

資料を眺めつつ紅茶を口に運び、悠は嘆息交じりの息を吐き出す。
そこに記されていたのは、ユグドラシルが秘密裏に保有していた研究施設が壊滅したとの知らせだった。

そこは主に『グレイプニル』を研究、開発する為の施設であり、今
となってはそれほど重要度の高い施設と言う訳ではなかったのだが

「救いと言えば、コレが一般や司法局には公表できない内容だって事ぐらいか……」

『グレイプニル』の研究は完全に違法であり、これを周囲の人間に知られる訳には行かない。

その為、研究施設の内容を知っているのは上位の幹部クラスと、全ての情報を統括するミーミルの室長、詩樹悠程度なのだ。

空になったティーカップを置き、読み終わった資料から視線を外して深々と息を吐く――凝った肩を解しつつ、悠は小さく苦笑を浮かべていた。

実際の所、ミーミルでこの事を知っているのは一人ではないのだ。

「それで、涼二君は大丈夫そうなの？」

「まあ、ね。一応涼二も、出力はそれなりに抑えていたみたいだし」

悠の副官である怜は、今回の事件に関する概要を知っていた。

元より、誰よりもこのユグドラシルという組織の闇に精通している二人なのだから。

資料の中には、IとLの使われた形跡に関して語られている。
イサ ラグズ デイザスター

一応、出力としては災害級程度に抑えられているようだが――

「ムスperlヘイムの人達が動く事にならなくてよかった、って所かな……現場を見たら、間違いなく《氷雨》フロステイレインが使われたって確信するだろうし」

「涼二君がいた頃からの隊員さんだったら、確かにそうかな」

小さく苦笑気味に、怜はそう口にする。
恐らく、緋織だったら黙ってはいなかっただろう、と。
それには全面的に同意せざるを得ないので、悠もまた苦笑を浮かべて新たに注がれた紅茶へと手を伸ばした。

「涼二達も今回はちょっと無用心な感じがしたけど……突発的な事態だったって事かな」

「突発的にあんな場所見つけちゃうかな……？」

「まあ、涼二だからね……変に運がいいのか悪いのか」

やれやれと肩を竦め、悠は苦笑を漏らす。

いつも何かと厄介事に巻き込まれていた涼二の姿を思い出し、彼ならばありえなくもないと納得してしまったのだ。

その隣で怜は軽く資料を眺め、小さく首を傾げる。

「この『グレイプニル』って……どうしてまだ研究が続けられてたの？」

「ああ……不安が尽きなかったからだろうね」

「不安？」

悠の言葉に、怜は再び疑問符を浮かべる。

そんな彼女の様子に小さく笑いつつ、悠は己のルーンを発動させてその記憶を辿った。

そのルーンの一つが刻まれているのは、彼の舌の上――傷痕のよ

うなAのルーンが力を放つを感じつつ、悠はゆっくりと声を上げた。
アンサズ

「『グレイプニル』はね……元々、一人の能力者の力を抑える為に作られたものなんだ」

「一人？ それって？」

「『《予言の巫女》ヴォルヴァ」がその存在を示唆した、大いなる破滅の引き金となる能力者。その能力者の力を封じ、そして確実に殺す為に『グレイプニル』は作られた」

能力を使うと喉が渇く——そう呟き、悠は紅茶を口にする。

その眼鏡の下での視線は、先ほどとは違い鋭く細められていた。まるで、その先に敵がいるかのように。

「けれど、『グレイプニル』の研究は何者かの手によって逆手に取られてしまった」

「逆手？ それって、どういう事なの？」

「何者かが『グレイプニル』を使い、その人物を逃がしてしまったんだ。強力な能力とプラーナゆえに非常に目立っていた彼も、その両方を抑えられては探し出す事も難しい。

いつ爆発するかも分からない爆弾が、行方知れずのままになっているようなものだ」

そんな悠の言葉に、怜は大きく目を見開く。

この組織が危険視するような相手が行方知れず——それがどれほど危険な事なのか、良く理解しているからだ。

けれど――

「力が封じられてるんだったら、一応は大丈夫なんじゃ……？」

「『グレイプニル』は、高位の力を持つThスリサズのルーンによって解除する事が出来る。そして、それを持つ者は今やユグドラシルの敵なんだよ、怜？」

「あ……！」

怜の顔に理解の色が広がるのを見て、悠は小さく頷いて見せた。先にあるかもしれない脅威。いつ来るかも分からないからこそ、その力は恐ろしいものだ。

そして――今回の件で、その脅威が現れる工程に一步足を踏み込んでしまった。

「もしも『グレイプニル』に対する対処法を心得てしまった涼二が彼に出会えば、彼は間違いなく解き放たれてしまうだろう。涼二だけだって十分に脅威だったのに、そんな存在まで加われれば――」
「氣をつけないといけないの……かな」

不安そうに、怜はそう口にする。

それに対して一度目を閉じ、悠は小さく声を上げた。

そこに、僅かな不安と――そして、笑みを浮かべながら。

「尤も、それぐらいの方が戦い甲斐があるってものだとは思うけどね」

「……もう、悠君ってば」

呆れたような表情で、怜はそう口にする。

そんな彼女の様子に小さく苦笑を浮かべ、悠は声を上げた。

それでも、どこか楽しそうな様子は消さないままに。

「緋織だけじゃ、涼二とその人物には届かないかもしれない。それを何とかするのが僕の仕事だと思ってるからね」

「うーん……まあ、涼二君が出てくるとなったら緋織ちゃんも美汐ちゃんも黙ってはいないと思うけど」

「美汐はまだまだ経験不足だからね……勉強だけはしっかりしてるけどさ」

もう一人の友人の姿を思い出し、悠は小さく笑う。

誰よりも優しく、誰よりも愛され、誰よりも友人想いな彼女なら——きつと、何が何でも涼二の事を連れ戻そうとするだろう。

果たして仲間に甘い涼二が、彼女に対して強く出る事が出来るのかどうか。

少しだけ意地悪な事を考えながら、悠は最高のAの力を使って無数の思考を張り巡らせる。アシサズ

手加減はしない。それが、彼に対する礼儀なのだから。

「まあ、美汐はいい意味で思い切りがいいから、涼二が相手でも迷ったりはしないだろうけど。ただ、彼が出てくるとなると……」

「さっきから言ってる『彼』って、『グレイプニル』の力で逃げちゃった人の事だよね？ 悠君、知ってるの？」

「ん、まあ……名前までは伝わってないけど、こういう風に呼ばれていたかは知ってるよ」

災厄をもたらす能力者として、念入りに抹殺されようとしていた一人の少年の記録。

けれど彼はその姿を消し、依然としてその行方が知れないままとなっている。

そんな彼の、二つ名は――

「フロースヴァイトニル《悪名高き狼》……彼は、そう呼ばれていた」
「……フロースヴァイトニル《悪名高き狼》、か」

その名を吟味するように、怜は小さく呟く。

そんな彼女の様子を眺めていた悠は、一度視線を降ろし、それから虚空を見上げていた。

この先どうなってしまうのかは分からない。けれど――

（もう一度、あの頃のように戻ればいいと……そう思ってるよ、涼二）

ここにはいない相手に対し、悠はそう小さく呟いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8111v/>

Frosty Rain

2011年9月22日00時30分発行